

配したり、縄文を転がしているものがみられる。11・16・26は22・27のように胴部中位で屈曲し、口辺部に向けて開く鉢で、23・32は同じ器形の鉢の胴下半部である。14は1と同様の器形で、口辺部に窓枠状の区画文を太沈線で描き、区画外に列点を連ねている。21は直立する口縁に刻みのある深鉢で、25は肥厚させた口辺部に縄文を施している。29は頸部に刺突をもつ隆線を巡らせた壺、28・30は口辺部の刻み隆線以下条線を施した粗製深鉢である。

SB582 (図版104)

1はやや膨らんだ胴部から口縁に向かって内湾ぎみに立ち上がる深鉢で、口縁内面に張り出しがみられる。口辺部の沈線以下、縄文を斜めに転がして条を縦にしている。2・3は2本沈線による帯条部に縄文を転がしている(Ⅲ期)。4はSB581の7と、5は同じく11などと同類型に属す。

SB583 (図版75・83・105、PL44・45)

1は埋壺、3は炉内から出土している。1は直線的に立ち上がる深鉢で、胴下半部に大柄な逆「J」字の単位文をもつ(Ⅲ期)。3は長胴両耳壺である。4・5は内折する口辺部にのみ文様のある鉢で、4は「8」字浮文を起点にして左右に列点文を配し、5は刻み隆線で下端を区画したのち縄文を転がしている。口辺部が外反する7・14は、SB581の19と同類型、8・15は壺形を呈する。16は胴部が膨らむ深鉢で、胴下半部の区画線から上向きに小「J」字文が施される。十腰内系統であろうか。18(図版83)はP₂₆から出土している。やや膨らみのある胴部に、外反する口辺部がつく深鉢である。口辺部は、上下の沈線間に2本単位の沈線で、横位に三角文を連続させている。頸部のくびれには刺突列がみられ、以下縄文を斜めに転がして条を立てている。北陸岩峰野あるいは前田系統の土器であろう。

SB584 (図版105)

1～7は胴部がやや膨らんで内湾する口辺部をもつ深鉢である。隆線による区画内には綾杉文を充填させている(Ⅰ期)。8は波状口縁の深鉢で、9・10は口辺部の横位区画文内に縄文を充填させている。13はほぼ直線的に立ち上がる深鉢で、胴部には条線が密に引かれている。

SB588 (図版105・106)

1～7・10は胴部で緩やかにくびれたのち、口縁に向かってやや内湾ぎみに立ち上がる深鉢で、2本の沈線間に縄文を充填している(Ⅲ期)。8・9も深鉢だが、くびれずにほぼ直線的に立ち上がる。8は縦に分割した沈線間に疎らな綾杉文を施す。11も逆「U」字の区画がみえるが、区画内には8と同様な綾杉文が充填されているのであろう。13は釣り手付鉢の手部である。

SB590 (図版106)

1は口縁部に向けて内湾ぎみに立ち上がる深鉢、口辺部を巡る隆線から垂直に下りる隆線で縦に区画し、中を綾杉文で埋めている(Ⅰ期)。3も同様な器形だが、口辺部の隆線下には沈線区画文が付き、縄文が充填されている(Ⅰ期)。2は口縁に向かって単純に開く深鉢で、胴上部に同心円文が並ぶ(Ⅰ期)。4は両耳壺の口辺部である。隆線以下は条線が縦走する。

SB591 (図版75、PL44)

1は算盤玉状の胴部をもつ注口土器である。胴上部は沈線により三角文を重畳させているのであろう

(V期)。2は胴部中位で屈曲し、口縁に向かって開く小形の鉢である。口縁は4単位の小波状を呈し、頂部は穿孔されている。胴部中位の屈曲部には沈線が巡り刺突がある。胴下半部には沈線で山形文を描いている(V期)。

SB592 (図版75・106、PL44)

1は口縁に向かって内湾する鉢で、口辺部には凹点を起点として左右に沈線を引く。胴部は2本沈線で横「S」字の文様を描き、モチーフ外を縄文で充填している(IV期)。2は口縁に向かって外反する器形で、胴部は横方向の帯縄文が埋めている。3・4は縄文があるのみだが、3は縦位に間隔施文している。5・18は直線的に立ち上がる深鉢で、5は胴部横位の沈線間に上下の対弧文を施している。6・8～13は胴部で屈曲したのち口縁に向かって開く鉢である。9・10は同一個体で、渦巻き文を斜めの帯縄文が連結している。14は口辺部が内折し、15は口縁に向かって内湾する鉢である。16は胴部中位でくびれ、胴部には縦方向に帯縄文が施されている。17はやや膨らむ胴部で、SB583の16同様、十層内系統の特色をもつ。

SB594 (図版75・107)

1は深鉢、2は注口土器の底部であろう。底裏には経2本潜り1本越え左1本送りの網代がはっきり残っている。3～5・7・8・13・15は、口縁に向かって直線的に立ち上がる深鉢である。5は口辺部に2条の鎖状隆線をもち、3・4・7は胴上半部の沈線の間に三角文あるいは菱形文を描いている(V期)。13・15は帯縄文を縦の短沈線が階段状に区切っており、内面にも数条の沈線が巡っている(VI期)。6は口辺部が内湾する注口付きの鉢で、注口のまわりおよび左右に延びる線、更に注口の下につく紡錘文は隆線で表わされ、隆線脇を沈線でナゾっている(III期)。9も内湾する鉢である。16～18は浅鉢、10・11は注口土器の把手部であろう。

SB595 (図版107)

1は胴部中位で強くくびれ、口辺部に向けて開いたのち口縁部を内折させる深鉢で、4単位の突起がある。突起部に開いた孔のまわりには盲孔をもつ沈線が巡り、口辺の屈曲部には矩形の沈線区画内に刺突を並べている(III期)。2の口縁は広く面取りされている。帯状部に縄文はない。これに対して3・4は、縄文を交互に施文している。5は口辺部の2本沈線間に刺突を重ね、以下は縄文を斜めに転がし条を立てている。6は胴部に粗雑な条線のみ。9は胴下半部が丸く膨らみ、屈曲を境にほぼまっすぐに立ち上がる壺であろう。胴上半部に刺突ある隆線が垂下して、胴部中位を巡る隆線と連結している。

SB599 (図版76・107・108、PL44)

1は胴部が強く膨らむ両耳壺である。胴部は2本沈線による「U」字区画の内外を綾杉文で埋めている。2～5は胴部でくびれ、口縁部に向かって開く深鉢で、口縁には4単位の大突起がある。2～4の突起の形態はそれぞれ異なる。6～17はいずれも縄文を多用する土器群で、17の胴部には結節縄文がある。6～10は平口縁、12～14は波状口縁を呈する。6・9・11・13・14は口辺部文様帯に区画文や渦巻き文をもつ一方、口辺部文様帯のない7・12・16は「U」字あるいは逆「U」字の区画内に、8では内外ともに縄文を施している。さらに10は逆「U」字区画文が懸垂文化するなど、それぞれの土器の時期や系統に違いが感じられる。19・20は胴部に隆線モチーフを描き、綾杉文を充填している。19は鎖状隆線が垂下している。1～20ともにI期に属す。

ウ 墓坑出土の土器

SH500番代 (図版76・77・109, PL45)

SH507の1・2は、共に胴部中位でくびれ、口辺部に向かって直線的に開いたのち、口縁へ内折する深鉢の突起部である。内接した口辺部には、1のように刺突列が並ぶものが多い。突起部に盲孔を中心とした対弧文が、沈線または隆線で描かれている(Ⅲ期)。

SH508の1は、顔面に被せられていた大形破片である。器形は胴上半部で屈曲したのち、口辺部に向かって緩やかに開く大形の鉢である。屈曲部には刺突列を括る横長の楕円区画がみられる。胴下半部には、2ないし3本単位の沈線で渦巻き文およびこれを連結する斜線文を描いている。胴部の最大径付近から下が、二次的な焼成を受け暗褐色を呈している(Ⅳ期)。

SH515の1は埋土中に混在していた土器を接合したものである。胴部がやや張り、口辺部に向かって内湾する無文の深鉢で、最大径付近に煤が付着している(Ⅴ期)。

SH549の1・2は胴部中位でくびれ、口辺部に向かって開く深鉢である。内折した口辺部には太沈線を巡らせる。胴部は懸垂文で器面を縦に分割したのち、これを斜めに連結し縄文を充填している。3・4・6も胴部中位で屈曲する鉢だが、胴上半部は無文である。6の口辺部は強く内折し、楕円文を描いている。5は口縁に向かって内湾する鉢で、胴部に渦巻き文とこれを斜めに連結する斜線文を配し、縄文を充填している(Ⅳ期)。

SH555の1は人骨Aの頭部に被せられていた鉢である。口縁に3単位の突起がつき、突起間にも浮文がついている。この突起から時計回りに浮文までは口縁に刻みをもつ。また、内面にも5条の沈線が巡っている(Ⅳ期)。2は胴部に3本単位の沈線が垂下する深鉢で、懸垂文間にLR縄文が充填されている。本址の東側から出土したので、厳密には本址に伴うとは言えない。

SH573の1は胴部中位で屈曲する鉢で、胴上半部にミミズ腫れ状の微隆起線がある。2も胴部中位でくびれる深鉢で、内折する口辺部には太沈線が通り、胴部には3本単位の懸垂文が施されている(Ⅳ期)。

SH600番代 (図版77・78・109・110, PL46)

SH607の1は顔面に被せられていた深鉢の胴下半部である。胴部中位でくびれたのち、口辺部に向かって緩やかに開く器形を呈する。胴部には2本沈線による帯状部を描き、縄文を充填している。下端は開放している(Ⅲ期)。

SH613の1は算盤玉形の胴部形態の鉢である。下半部の横位沈線間に下向きの弧線文を描き、縄文を充填している。下端は3本沈線によって閉じている。2は口辺部に向けて単純に開く浅鉢で、口辺の屈曲部に沈線が巡るほか、内面にも4本以上の沈線がみられる。また口縁にも刺突が打たれている(Ⅵ期)。

SH639の1は胴部中位でややくびれたのち、口辺部に向かって内湾ぎみに開く深鉢で、口縁は波状になる例が多い。口辺部を巡る隆線から下方に「U」字文が下がり、この区画間には胴下半部から逆「U」字文が貫入している。区画内にはLR縄文が充填されている(Ⅲ期)。

SH644の1は墓坑底面のさらに下から出土しているため、本址に伴うものではない。胴部中位で緩やかにくびれたのち、口辺部に向かって開く深鉢である。胴部には2本単位の懸垂文で区画し、LR縄文を充填している。区画内には蛇行懸垂がみられる(Ⅰ期)。

SH648の1は埋土中から出土した注口土器の胴部破片である。胴上半部は巴文や渦巻き文を起点にして、対弧文や多条の沈線文が描かれている(Ⅵ期)。

SH658の1も墓坑底面下出土なので、本址に伴うものとはいえない。胴部中位で緩やかにくびれたのち、口辺部に向かって開く深鉢である。胴部には2本単位の懸垂が下り、その間を綾杉文が埋めている(Ⅰ

期)。

SH672の1は胴部中位で緩やかにくびれる深鉢、3は胴部中位で屈曲し口辺部に向かって開く鉢の胴下半部である。1の胴部は、縦長の対弧文に挟まれたワラビ手状の懸垂文で器面を分割し、縄文を充填している。2は注口土器の破片であろうか。

SH674の1は口縁が小波状を呈する深鉢で、波頂部の渦巻き文を中心に口辺部文様帯に区画文がある。3は平口縁の深鉢で、やはり口辺部文様帯がみられる。4は胴部がやや膨らみ、口縁に向かって内湾ぎみに立ち上がる深鉢である。胴部には隆線で唐草文を描き、綾杉文で埋めている(1期)。

SH684の1・2は胴部中位で屈曲し、口辺部に向かって開く鉢である。屈曲部には鎖状隆線があり、胴下半部は沈線による懸垂文や斜線文が施される。3は口縁に向かってほぼ直線的に立ち上がる深鉢で、口辺部に太沈線が巡り、以下全面が縄文となる(IV期)。

SH686では、埋土中から出土した大破片から3個体分の深鉢が復原された。1は口縁が小波状で、口縁の形態に沿って幅広い沈線が巡る。頂部の沈線下には渦巻き文を配し、以下は粗雑な条痕がみられる。2は口縁に向かって内湾ぎみに立ち上がる。胴部の沈線区画の上縁に沿って勾玉文が並び、区画内は整った綾杉文で埋められる。3は片側に橋状把手があり、胴部には弱い沈線で「J」字文や渦巻き文が描かれ、把手の下につく「U」字沈線内には刺突が充填されている。1・2はII期、3はIII期。

SH688の1は胴部中位で緩やかにくびれ、口辺部に向けて開く深鉢である。内折した口辺部には太沈線が巡り、胴部は3本単位の沈線で懸垂文や斜線文が描かれ、縄文はこの沈線部分に施されている(IV期)。

SH690の1は埋土中ではあるが人骨に近接して出土した。口辺部に向けて直線的に開く注口付き浅鉢である。口縁は4単位の波状で、頂部内面には隆線による渦巻文がみられ、穿孔を中心として盲孔をもつ沈線を配している。内折した口辺部には沈線による楕円区画文が並ぶ(III期)。

SH693の1は墓坑底面直上から出土した。口縁に向けて内湾ぎみに立ち上がる鉢で、無文だが内外面とも丁寧に磨かれている(VI期)。

SH698の1は球形胴の注口土器で、胴部は細かな平行沈線で円文や直曲線文が描かれている(VI期)。

SH700番代 (図版78・79・110, PL47)

SH700の1は注口土器の把手部、2・4は口縁に向けて直線的に開き、5は胴部中位で緩やかにくびれをもつ深鉢である(V期)。

SH714の1は埋土中から出土した注口土器で、口縁には環状の把手がつく。底部および注口部は欠損している。胴部は無文であるが、丁寧に研磨されている(VI期)。

SH730の1は胴部がやや張り、口縁に向けて内湾する大形の深鉢である。口辺部の隆線直下には勾玉文を配し、胴部には唐草文を描いて空白部を綾杉文で埋めている(1期)。

SH738の1は口縁に4単位の角状突起ある深鉢で、やや内折した口辺部に沈線文がみられる。2・3は隆線区画内に縄文が充填されている(1期)。

SH742の1は2本単位の沈線間に縄文を充填している深鉢である(III期)。2は内折した口辺部に刺突を並べている(IV期)。

SH772の1は深鉢の大破片。口縁直下に勾玉文を並べ、以下を整った綾杉文が埋めている(II期)。

SH778の1・2は同一個体で、2本単位の隆線による懸垂区画内に蛇行懸垂が下り、綾杉文が埋めている(1期)。

SH784の1は顔面に被せられていた深鉢の大破片である。内折した口辺部には、刺突と盲孔をもつ沈線が並ぶ。胴下半部は3本単位の沈線で大柄な渦巻文を描き、これを斜線文で連結し、下端も区画している。

縄文はこれらのモチーフの空白部に充満されている(IV期)。

SH785の1も顔面被覆の深鉢大破片である。胴部中位でくびれて口辺部に向かって開く。2は1の破片に混在して出土した。直立ぎみの口辺部には、半載竹管状施工具による2本沈線で挟まれた刺突文がみられる。SB560の13(図版97)と同類型で、胴部にはおそらくSB560の17のような文様が描かれるのであろう(IV期)。

SH791の1は口辺部文様帯に、横位連結渦巻き文と楕円区画文がある。2は口縁直下までせり上がってきた逆「U」字区画内に、RL縄文を充満している(1期)。

SH794の1は2条の隆線と刺突列が、口辺無文部と胴部とを分帯している。胴部は4本単位の懸垂文で縦に区画し、LR縄文を充満している(1期)。

SH799の1は深鉢の胴部破片である。1は2本単位の帯状部に列点が充満され、2は繊細な沈線区画内に縄文が施されている(III期)。

SH800番代 (図版78・79・110・111、PL46)

SH802の1は顔面に被せられていた鉢の大破片である。内湾する口辺部には楕円区画文と上下2段の凹点が交互に配され、区画内には刺突を並べている。胴部は3本単位の懸垂文で縦に区画される。懸垂文のほぼ中間に円形浮文が貼付され、そこから左右に弧状沈線が延びている。下端は横位連結渦巻き文によって閉じている。区画内には縄文が充満されている(IV期)。

SH813の1は両耳壺の胴部大破片である。胴上半部には隆線による区画がみられ、中に縄文が施されている。以下は、半載竹管状施工具による平行条線を無数に垂下させている(1期)。

SH824の1・2とも埋土中から出土している深鉢の底部である(1期)。

SH842の2は波状口縁の頂部で、隆線による対弧文の上に沈線を引いている(III期)。

SH852の1は橋状把手付き深鉢である。把手部および口縁に沿って巡る隆線の脇には刺突列がみられる。胴部には、隆線による逆「U」字文が描かれている(III期)。

SH860の1は環状突起をもつ深鉢の頂部、2・3は平口縁の深鉢である。どれも2本沈線によって帯状部を作出し、縄文を充満している(III期)。

SH873の1は胴部中位の屈曲部に2条の鎖状隆線を巡らせ、そこに貼付した「8」字浮文を起点に、胴部の磨り消し縄文が展開している(V期)。

SH874の1は胴部中位の屈曲から口縁に向けて直線的に開く鉢である。胴上半部には鎖状隆線が垂下し、屈曲部のそれに連結している(V期か)。

SH900番代 (図版79・80・111、PL46・47)

SH908の1は口縁に向かって直線的に開く深鉢の胴上半部で、帯縄文で菱形あるいは三角形のモチーフを描いているものと思われる(V期)。

SH952の1は口縁を下向きにして墓坑底面直上から出土し、2はこれと重なるような状態にあった。1は口縁直下に1条の沈線が巡るが、以下は丁寧な磨かれている。2は深鉢の胴下半部の割れ口を再生し、鉢形に仕上げたものである(1期か)。

SH979の1・2と2個体分の深鉢の大破片が、顔面に被せられていた。1は胴下半部に3本単位の斜線を配し、下端を閉じて縄文を充満している。2は口縁直下から櫛歯状施工具による蛇行条線が垂下している(IV期)。

SH1000番代 (図版79・80・111、PL47・48)

SH1006の1は口縁に向かって直線的に立ち上がる浅鉢で、内面に4条の沈線が回り、ところどころに「の」字文が配される。2は球形胴の壺ないし壺形の注口土器である。胴上部に帯縄文が回り、胴部は2本単位の蛇行沈線を垂下させて、内外に縄文を施している(V期)。

SH1007の1は口縁に向かって直線的に開く深鉢で、口辺部を巡る多条沈線文を縦短沈線が階段状に区切る。内面にも数条の沈線がある。2は浅鉢形、3は鉢形で、両者とも外面には文様がなない。(VI期)

SH1048の1は埋土中からほぼ完形で出土した。口縁に向かってやや外反しながら立ち上がる深鉢である。口辺部には刺突のある隆線を巡らし、「8」字浮文を貼付している。胴上半部は沈線で上下を区画したのち、横位に三角文を連続させて、その部分に縄文を施す(V期)。

SH1081の1は埋土中から、口縁を斜め下向きにして出土したほぼ完形の深鉢である。口縁には角状突起が1ヶ所付き、そこから口縁に沿って延びた隆線が胴部以下とを境する。口辺部は「8」字浮文で縦に区切り、「の」字文を施している。胴部には逆「U」字文が展開し、中に縄文が充填されている(I期)。

SH1082の1は口辺部がキャリパー形の深鉢である。口辺部文様帯には横位に連続する渦巻文と区画文を配し、縄文を充填している。胴部は2本単位の沈線が懸垂し、縄文が交互に施文されている(I期)。

SH1092の1は胴部中位で屈曲し、口辺部に向けて直線的に開く鉢である。口縁は波状を呈し、頂部に環状突起が付くとともに、内面には盲孔が穿たれている。また、胴上半の無文部には櫛状把手がつく。2も1と同じ器形である(IV期)。

SH1100番代 (図版80・81・111・112・113・114)

SH1144の1は縦方向の帯縄文が展開する器面に、刺突を有する隆線が垂下している(III期)。2は内折する口辺部に凹点を連続させている(IV期)。3は櫛歯状施文具の条線がみられる。

SH1155の1は直線的に開く胴部に「く」字に屈曲した口辺部がのる鉢である。口辺部の2本の沈線間には縄文と列点を充填している(III期)。

SH1156の1は2本沈線により帯状部を作出しているが、沈線間に縄文はみられない。2は櫛歯状施文具により蛇行条線を引いている(III期)。

SH1158の1は胴部中位で強くくびれる深鉢、2は口縁が大きな波状を呈する鉢である。2は注口が付く場合が多い。頂部の口縁と口辺部には「の」字浮文を貼付し、口縁に沿って2本の沈線に挟まれた刺突文を巡らせている(III期)。

SH1159の2は、ほぼ直立する口辺部に2条の沈線を巡らし、その間を刺突を有する短沈線で斜めに区切っている。北陸前田・岩崎野系統かと思われるが、器形その他で異なる点も多い(III期)。

SH1160の1は波状口縁の深鉢で、頂部に穿孔をもつ。口縁に沿って刺突ある隆線が回り、以下縄文が施されている。2はほぼ直線的に開く胴部に、内折した口辺部が付く鉢で、注口が付く可能性が高い。口辺部は脇に沈線をもつ隆線で区画され、縄文が充填される。4は口辺部に幅広い鎖状隆線が弧状に貼付されている(III期)。

SH1165の1は顔面に被せられていた深鉢の大破片である。外面には一切文様がなない(IV期か)。

SH1168の1は口辺部に向かって内湾ぎみに立ち上がる鉢で、胴部には大柄な帯状文が描かれている。2は口縁に「の」字浮文を貼付した突起をもつ(III期)。

SH1171の1は横位の沈線で口辺部と胴部とを画し、口辺部は縄文の回転方向を変化させて羽状の効果を出している。胴部には垂下する沈線がわずかにみえる。3は波状を呈する口縁に沿って、下に沈線を沿わせた隆線を巡らせ、以下に縄文を施している(I期)。

SH1172の1は内曲する口辺部に2条の沈線を巡らせ、2には歯齒状施工具による条線が垂下する(Ⅲ期)。3は内切した口辺部に円文と太沈線がみえる(Ⅳ期)。

SH1174の1～3は胴部でくびれたのち、口辺部に向かって開く深鉢である。1は内折した口辺部に盲孔をもつ沈線を巡らせ、胴部縦方向の沈線間を交互に縄文を充填している(Ⅴ期)。2は小波状を呈し、頂部口縁と内面に刺突がある。4は胴部全面を爪形の刺突で埋めている。三十稲場系統に属す(Ⅲ期)。

SH1176の1・2は胴部で緩やかにくびれ、口縁に向かって開く深鉢である。4・5は口縁に向かって直接的に開き、口辺部が内折する鉢で、注口が付く場合もある(Ⅲ期)。

SH1177の1は角状突起ある深鉢で、胴部には縦方向の楕円区画文が並び、縄文が充填される(Ⅰ期)。2は波状の口縁に沿って口辺部に隆線を巡らし、以下縄文を施している。3は先の尖った逆「U」文字の外側に縄文を施している(Ⅲ期)。

SH1179の1・4は胴部中位でくびれ、口辺部に向かって開く深鉢である。1・3は胴下半部、4は口辺部である。5は歯齒状施工具で条線を格子目状に施している(Ⅲ期)。

SH1180の1は胴部中位で屈曲する鉢の胴下半部、2は口辺部の沈線以下に蛇行状線を垂下させている(Ⅳ期)。

SH1182の1は内湾する口辺部に帯縄文があり、2はLR縄文を縦に間隔を開けて転がしている。3は波頂部に環状の突起がついている(Ⅲ期)。

SH1184の1は内折する口辺部に2列の刺突が並び、2は微隆起線以下に磨り消し縄文がみられる。4は胴部中位が屈曲する鉢で、胴下半部に縦ないし斜めの沈線区画がある。5は口縁に沿って巡る微隆起線を挟んで、胴部は縦方向の磨り消し縄文である(Ⅲ期)。

SH1185の4は胴部が張る深鉢で、両脇に沈線に沿わせた隆線でモチーフを描き、隆線の交点には円形浮文を貼付する。5はSH1092の1(図版111)と同類で、胴上半部の無文部に橋状把手をもつ(Ⅲ期)。

SH1186の1は縦方向に延びる帯縄文、2は胴上半部で三角形に垂下する区画内に縄文を施す(Ⅲ期)。

SH1187の1は小波状の口縁でその直下に沈線を巡らせ、胴部区画内には蛇行懸垂が下りる。2の隆線区画内には、雨垂状の刺突が充填されている(Ⅰ期)。

SH1188の2も小波状の口縁で、その頂部に凹点を配し、左右に沈線を巡らせている。3はSH852の1(図版110)のように、微隆起線に沿って刺突列が並ぶ(Ⅲ期)。

SH1189の1は顔面に被せられていた大形破片で、胴部が膨らみ、口縁に向かって内湾する(Ⅵ期)。

SH1190の1～3の帯状部には縄文がみられない。5は胴部に爪形刺突が施されている。三十稲場系統の土器であろう(Ⅲ期)。

SH1191の1・2は縦方向に帯縄文がみられ、3は歯齒状施工具による条線を垂下させている(Ⅲ期)。

SH1192の1は逆「U」字文内に、勾玉文の名残と思われる弧状沈線がある。2は振幅の大きい蛇行懸垂文が引かれている(Ⅲ期)。

SH1193の1は橋状把手ある深鉢で把手の下に注口がつく。2の口縁は内側に折れ曲がる(Ⅲ期)。

SH1195の5は深鉢形注口土器につく板状突起である。突起の中央および下端に穿孔をもち、内面は上下の穿孔の間にブリッジが付く(Ⅲ期)。

SH1200番代 (図版80・81・114・115、PL48)

SH1200の1は胴下半部が大きく張り出す深鉢で、屈曲部を巡る沈線から下方に3本単位の沈線による「J」字文が垂下している。「J」字の末端はやや隆起している。2は垂下する帯縄文の下端、3は歯齒状施工具による蛇行条線文である(Ⅲ期)。

SH1203の1は垂下する隆線で、胴部を縦区画し綾杉文で埋めている。3は口辺部を巡る隆線の直下に勾玉文を配し、胴部を隆線で区画している。5も同様だが勾玉文を欠く。2は口辺部の隆線以下縄文を施している（Ⅰ期）。

SH1204の1は、人骨の顔面に被せられていた深鉢の胴下半部である。3本単位の沈線で渦巻き文を描き、下端を閉じたうえ、縄文を充填している（Ⅳ期）。

SH1205の1は口辺部に隆線が走り、以下に縄文を施している深鉢である。2は口辺部がやや外反する両耳竇で、口辺を巡る隆線上に刺突がみられる（Ⅱ期）。

SH1206の1～9は、いずれも2本沈線によって帯状部を作成し、1・3・5・7は縄文を、9は刺突文を充填している。10は櫛歯状施工具による条線を格子目状に描いている（Ⅲ期）。

SH1208の1～3も2本沈線による帯状部に縄文ないしは列点を充填している。4は胴部中位のくびれを巡る沈線から小「J」字文が垂下している（Ⅲ期）。

SH1212の1、SH1213の1・2も、SH1206やSH1208と同様である。

SH1214の1は、胴部の逆「U」字区画文の上縁に沿って、勾玉文の変化した弧線文を配している。2は棒状の沈線区画内に縄文を充填している（Ⅲ期）。

SH1215の1は人骨の顔面に被せられていた深鉢の胴下半部で、さらに2が載せられていた。2は口縁が小波状を呈し、頂部に凹点ないしは盲孔を穿ち沈線で結ぶ。胴上半無文部を屈曲部で2本沈線が画し、胴下半部は山形沈線で下端区画したのち、渦巻き文を配して縄文を充填している（Ⅳ期）。

SH1217の1も人骨の顔面に被せられていた深鉢の胴下半部である。櫛歯状施工具による条線がみられる。2は口辺部の隆線直下に勾玉文を配す。胴部は3のように隆線による区画内に綾杉文が施される。5は区画内に縄文が充填されている（Ⅱ期）。

SH1228の1も人骨の顔面に被せられていた。深鉢の胴部大破片で、胴上半部は帯縄文によって「J」字文を描き、これを取り巻く無文部が胴下半部で「J」字文を作るなど、帯縄文が全体に縦方向に流れ、横への連続性は希薄である（Ⅲ期）。

SH1232の1は人骨の頭部に被せられていた。胴上部に向かって直線的に立ち上がり、口辺部は内折する鉢である。口縁は波状を呈し、頂部直下の口辺部には隆線による渦巻き文を配し、左右に区画文をもつ。区画内は上下に刺突を有する「C」字文あるいは「ノ」字文で区切られている（Ⅲ期）。

SH1233の1も人骨の顔面に被せられていた鉢の胴下半部である。この類は胴下半部の最大径以下に文様をもたないものが多い（Ⅴ期か）。

エ 配石遺構出土の土器（図版76・108・109、PL45）

SH17の1は、胴部から底部にかけての大部分が北側の礫下面から出土したが、SH18の礫間から出土した口辺部と接合した（図143）。ほぼ直線的に立ち上がる浅鉢で、口辺部が内折する。口縁に刻みがあり、内面には上から、刺突を有する沈線・4ヶ所で切れる沈線・隆線・6本単位の沈線が走る。隆線の上に走る沈線の切れ目に対応して、隆線と6本単位の沈線との間に「の」字文が配され、6本単位の沈線も階段状に折れている（Ⅵ期）。2の注口土器も、SH17の礫上面とSH18の礫間から別々に出土した胴部の破片が接合している（図143）。3もSH17の礫上面から出土した鉢で、口縁が小波状を呈する。

SH18の1は胴部中位でくびれる深鉢の胴下半部で、渦巻き文がみえる。2～7は礫間から出土している。7は浅鉢、それ以外は深鉢ないしは鉢の胴上半部から口縁部である（Ⅵ期）。8は胴部を刺突文で埋めた三十稻場系統の鉢である。紛れ込みであろう。

SH19の1は、口縁に沿って走る沈線以下、胴部に弱い沈線で帯状文を描いている（Ⅲ期）。

オ 土坑出土の土器・埋設土器 (図版82・83・115・116、PL49)

SK501の1は波状口縁の深鉢で、口辺部に3本単位の沈線で渦巻き文を描く。2は口辺部に横に展開していた窓枠状の区画の一端が途切れて、横「J」字のモチーフになったものである。3は逆「U」字文がひ弱な沈線で描かれている。4は口縁部を巡る帯縄文から「J」字文が垂下している。5は両耳壺の口辺部である。6は口縁が大波状の深鉢で、口縁の形態に沿って口辺部に隆線を巡らしている。胴下半部から延びる逆「U」字文が頂部にまで達し、しかも帯縄文の先端が切れている。1～6はいずれもⅢ期。

SK2018の1は正位に埋設されていた深鉢である。胴上半部は、一連の作業過程の間に紛失してしまった。底部中央は穿孔されていた。垂下する沈線間を綾杉文が埋めている(Ⅰ期)。

SK2020の1も正位に埋設されていた深鉢の胴下半部である。沈線がわずかにみえる。

SK2196の1は、胴上半部の「U」字文の間に下半部から逆「U」字文が延びている。2は疎らな綾杉文を施している(Ⅲ期)。

SK2232の1は正位に埋設されていた深鉢の胴下半部である。垂下する沈線は2～6本と一定しない。沈線の間に縄文を充填している(Ⅳ期)。

SK2419の1は土坑底面近く、押し潰された状態で出土した。胴部中位が大きく膨らみ、上部に向かって内湾するが、口辺部で外折する壺である。頸部には渦巻き文をもつ4単位の楕状把手がつく。胴部には、2本単位の隆線によって横「S」字状や「O」字状のモチーフを描いている。隆線の脇には沈線があり、隆線の交点や端部には円形浮文がつく(Ⅲ期)。

SK2696の1は隆線による逆「U」字文内に縄文を充填し、隆線の脇に沈線がみられる。2は釣り手付き鉢の釣り手形で、上下を刺突列で縁取り、沈線による横長の楕円区画内に縄文を施している。3は隆線の下に勾玉文を施し、以下を綾杉文が埋めている(Ⅱ期)。

SK2813の1は正位に埋設されていた深鉢である。胴下半部が大部分欠損している。胴上半部には大きな波状文を描き、波頂部には胴下半部から逆「U」字文が貫入している(Ⅰ期)。

SK2838の1・2は口縁に向け緩やかに内湾する深鉢で、口辺部には1ないし2本の隆線が巡り、これに沿って勾玉文を並べている。胴部には疎らな綾杉文がみられる(Ⅰ期)。

SK3050の1は角状突起ある深鉢で、突起の先端から内面に向けて貫通孔をもつ。口辺部には渦巻き文を取り込んだ楕円区画文がみられる(Ⅰ期)。

SK3071の1は正位に埋設されていた深鉢の胴下半部である。2本単位の沈線間に縄文が充填されたうえ、蛇行文を垂下させている(Ⅰ期)。

SK3114の1はほぼ直立する口辺部を巡る沈線から斜線が走っている。2は縦長の列点を間に挟んだ2本単位の垂下沈線が、縄文帯を挟んでいる。縄文帯内には振幅の小さな蛇行懸垂文ある(Ⅳ期)。

SK3126の1は口辺部直下に隆線を巡らし、上下に網目状突起糸文?が施されている。然り糸文は一部隆線上にまで及んでいる。また、隆線の端に把手が剥がれた跡がみられる(Ⅰ期)。

SK3142の1は正位に埋設されていた両耳壺の胴上半部である。胴上部に隆線を巡らし、胴部の逆「U」字文内にはLR縄文を充填している(Ⅱ期)。

カ 遺物集中区出土の土器

SQ1 (図版83～86、図145、PL50・51)

1・2・4・6・7は3単位の波状口縁をもつ深鉢である。1は口辺部に一条の沈線があり、胴上半部に二段の帯縄文を巡らせている。帯縄文内は縦短沈線で階段状に区切られる。2の波頂部には二山に分かれた小突起がある。胴上半部には二段の沈線帯が巡るが、「の」字文で区切られている。4は胴上半部に

縦短沈線で区切られた一段の沈線帯がみられる。口縁は刻まれ、内面にも4本の沈線が巡る。6の波頂部にも2と同様な小突起がつく。胴上半部の帯縄文は縦短沈線で階段状に区切られ、最上段のみ縦短沈線に対弧文がつく。口縁は刻まれ、内面にも5本の沈線が巡る。7の胴上半部にも二段の帯縄文があるが、縦短沈線を囲む対弧文がつながり「の」字状になっている。5・8は口縁が4単位の波状を呈する大形の深鉢である。5は胴上半部二段の帯縄文間を円形・「ノ」字・横「S」字文が繋いでいる。胴下半部は全面に縄文が施されている。8の胴上半部を巡る一段の帯縄文は、縦短沈線や弧線で区切られる。14の無文深鉢は胴部がやや張る。9・11は口縁に向けて内湾する鉢で、胴上半部に二段の沈線帯をもつ。10・12・13は口縁に向けてほぼ直線的に開く浅鉢で、10の口縁は3単位の波状を呈する。3は球形胴に直立する口辺部がの壺で、口縁は内折する。口辺部には、2孔一対の穿孔が外側から開いている。頸部に刺突をもつ隆線が巡り、胴上半部二段の帯縄文間には、人形風の文様を施している。1~14はすべてVI期に属する。

SQ 2 (図版86、図143、PL52)

1は口縁に向けてほぼ直線的に開く鉢である。口縁は4単位の波状を呈し、波状部には細かな刻みをもつ10数ヶの小波状文が施されている。内面には沈線帯が巡っている。胴部の縦の亀裂に応じて、一対の補修孔をあけて修復している(VI期)。2・6はほぼ直線的に開く浅鉢である。

SQ 5 (図版116・117)

1は胴上部に向かって内湾し口辺部がほぼ直立する鉢で、口辺部には上下に刺突をもつ橋状把手がつく。3も1とはほぼ同じ器形だが、把手部上には穿孔のまわりに円文を描いている。2・4・5・12・17~19・23は胴部中位でくびれたのち、口辺部に向かって開く深鉢である。また、7・9・14・15・20~22はほぼ同形態の鉢であろう。6は肥厚させた口辺部内面に渦巻き文を配している。11は口辺部が内湾する鉢あるいは深鉢で、13・16は口辺部に向かってほぼ直線的に開き、「く」字状に口辺部が屈曲する鉢である。いずれもIV期の特徴をもっている。

SQ501 (図版87、PL49)

1は口辺部に並ぶ勾玉文から沈線が垂下し、その間に疎かな綾杉文がみられる(II期)。2は無文の両耳壺である。口辺の無文部が幅広い。

SQ503 (図版87・117、PL49)

1は胴部の区画文内に唐草文を描き、空白部を綾杉文で埋めている(I期)。2~5は口縁が波状を呈する深鉢である。2・3は口辺部文様帯に渦巻き文と連続した楕円区画文がみられる。6は両耳壺、7は角状突起をもつ深鉢である。8・9は口縁に向かって内湾する深鉢で、口辺部の隆線下には勾玉文が並び胴部は綾杉文で埋めている。(I期)

キ 遺構外出土の土器 (図版87~90、PL52~54)

1は4単位波状を呈する深鉢で、口縁を肥厚させている。口辺部文様帯内には渦巻き文と連続した区画文を配し、胴部の垂下沈線間に縄文を充填している(I期)。2は4単位の角状突起をもつ深鉢で、胴部中位は強くくびれる。胴部には縦方向の楕円形区画文がみられる(I期)。3は沈線や綾杉文が簡略化されている。6の角状突起は1ヶ所につけられている(I期)。7は胴部がやや張り、口縁に向かって内湾する深鉢で、口辺部を巡る隆線から垂下隆線が延び、その間を交互に縄文が埋めている。縄文部と無文部

との幅はほぼ等しい(Ⅲ期)。1は胴部中位でくびれる深鉢の胴下半部で、直曲線の帯縄文がみられる(Ⅲ期)。15は櫛歯状施文具による条線を垂下させた深鉢である。16は大きな板状突起をもつ浅鉢で、突起部内面は円孔の周囲に沈線および円形浮文を配している。また、内折する口縁部に横長の楕円文がみられる(Ⅲ期)。12・13は胴上半部が内湾する鉢、17~21は胴部中位で屈曲したのち、口辺部に向けて開く鉢ないしは深鉢である。胴部の渦巻き文や「J」字文は、横方向へ弧線や斜線で連結されている(Ⅳ期・Ⅴ期)。14の口縁は小波状を呈する。頂部の口辺は隆線で区画され、胴部には平行沈線が巡る(Ⅵ期か)。22~26は口縁に向けてほぼ直線的に立ち上がる深鉢で、胴上半部に沈線帯ないしは帯縄文を持ち、内面にも沈線が巡る(Ⅵ期)。23・24の沈線帯内にみられる鎖状沈線は、一般に注口土器に多用される。27・28は注口土器、29・30は内面文様をもつ浅鉢である(Ⅵ期)。

(2) 石器

ア 概観 (表13)

石器に関連する資料は17,337点が出土し、器種ごとの内訳は表13に示す。時期的には土器同様縄文時代中期末葉から後期中葉にほぼ相当する。道具の種類では打製石斧・磨石など採集活動を担う石器が多数で、石鏃など狩猟を司る石器が、これに次ぐ。石器組成の文化的発展段階は、中期的石器と後期的なそれを明瞭に提示すべきものであるが、北村遺跡の場合、遺跡地に営まれた生活の継続性を重視し、遺跡総体の石器組成としてこれらを含括し、記述・報告する。

記述は器種が独立し得る最も主体的な用法について述べ、以下6つの項目につき行う。

	総数	母岩	石層		狩猟具		漁撈具		採集具		祭祀具	
名称		原石	石核	剥片ほか両類	石鏃	石鏃	土鏃	打製石斧	石剣	石棒	丸石	
数量	17,337	28	239	12669・152	685	2	(4)	671	4	24	26	

①材質、②製作法、③A分類(形態的類別)、

調理・加工具					加工具				加工痕・有	
磨石・凹石	多孔石	台石・石皿	石匙	刃器・使痕	砥石	磨製石斧	石鏃	砥石	大形	小形
488	11	59	14	720・一	19	86	68	10	1175	187

表13 石器組成

B観察(機能的類別)、

④法量(大きさ)、⑤遺存状態、⑥出土状況・出土地区(遺構)である。

①については益富壽之助『原色岩石図鑑』(保育社刊 1984年)を手に肉眼鑑定し、全体数内訳を示した。②については石材選定後、素材が形成されるまでの技術について簡単にふれ、③Aで遺物の形態的視点からの観察・類別を、③Bで機能的側面からの観察・類別を記す。③A・Bの詳細は下記の通りである。

③A. 分類法

- 記述1. 原材から製作用素材の獲得までを、その方法により区分。礫素材と剥片素材、または無加工と加工に基づき、アラビア数字で分類。
 ・例) 磨石・第1種、第2種～
2. 全資料が加工されている場合、形の整形加工法により区分。ローマ数字で分類。
 ・例) 石鏃・第I種、第II種～
3. 素材獲得時の踏属性について観察、表として掲載。礫と剥片、剥片はさらに横長と縦長に区分し、自然面は其の有無と位置(a-c、側面)について記載。
4. 形態的特徴により区分。分類は全体形を基本とし、形の構成要素に準じて細別。
 ・例) 打製石斧・全体形～、頭部～、刃部(平面形・断面形)～
5. 機能的特徴を機器観察に基づき計測、表として掲載。
 ・例) 打製石斧・機能部値(刃幅・刃角・刃部角)、使用痕跡(長さ・幅・痕跡の型)
6. 欠損状態について観察、表として掲載。欠損の部位は黒塗りを残存部とし、器種ごとにアルファベットで、状況(欠損断面)はカタカナで記載。

③B. 観察法

- 機器1. ルーベ(Vixen×3.5倍、コクヨメタルホルダー×20倍)・・・全資料
2. 顕微鏡(実体顕微鏡=Nicon SMZ 2×60倍まで)・・・打製石斧、磨製石斧、刃器
 (実体顕微鏡=Nicon SMZ10×160倍まで)・・・石鏃、石鏃、刃器
 (走査電子顕微鏡=JSM-5400LV×1000倍まで)・・・刃器
3. 拡大映像器(Microwatcher VS-30H×500倍まで)・・・石鏃、石鏃、刃器
- 図化1. ルーベで見取り図を作成・・・打製石斧、磨製石斧、刃器、磨石類、石皿類、砥石
2. 顕微鏡(Nicon SMZ10×40倍)で見取り図を作成・・・石鏃、刃器
3. 拡大映像器(Microwatcher VS-30H×100倍)で見取り図を作成・・・石鏃
- 写真1. Nicon FM1(Micro-Nikkor35mm、ExtensionRing PK-13、Bellows Focusing Attachment PB-6)を使用し撮影後、×3.3倍まで数段階の引き伸ばしを行う・・・打製石斧、磨石類、石皿類、他
2. Nicon SMZ10 撮影装置を使用し、×20・×40倍で撮影・・・石鏃、刃器

④・⑤については、類別ごとに全資料の属性平均値を表にした。⑥では資料の大部分が遺構確認面及び検出面であり、分布図は調査区ごとに出土数で示した。遺構内出土の資料については全体の概要を表25に示し、その内訳は遺構各説にて記述する。

イ 原 石 (図147・148)

剥片剥離に供される原材料で、一度も剥離作業の実施されていない資料。大半は自然面(風化面)に覆われた転石であり、総数28点を収集する。この内26点が黒曜石で、主体的な石核材であるチャートは僅かに2点である。法量は平均値でチャート3.1×4.0×1.5cm, 38.6g、黒曜石2.7×3.1×1.7cm, 12.8gを計測。出土は黒曜石材がL8・9に集中する。

ウ 石 核 (図版118・119、図147・148、PL42)

剥片の剥離生産を主目的とした個体群で、一回以上剥離作業が実施された資料。総数239点を収集。石質別内訳はチャート215点・黒曜石23点・頁岩1点である。法量は平均値でチャート4.3×5.5×2.4cm, 79.7g、黒曜石2.6×3.0×1.7cm, 10.1gを計測。頁岩は8.5×9.3×8.6cm, 820gである。剥片剥離は自然面または節理面を打面とし、直接的な打撃によって $\frac{1}{2}$ ないしは $\frac{1}{3}$ に分割された後、以下2種の方法に基づいて実施される。

第1種一原石または分割された石核から直接剥片剥離を行うもの(2~6)。

第2種一分割後の石核から予め大きな剥片を剥離し、これを石核として剥片剥離を行うもの(7~9)。

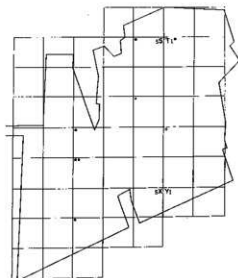
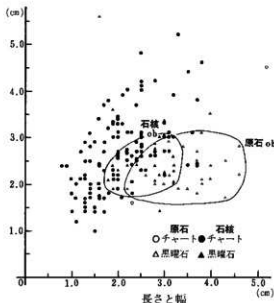
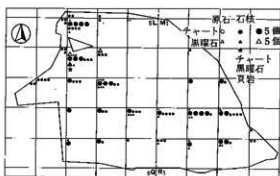
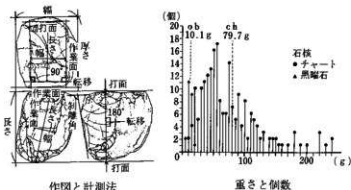


図147 原石・石核法量相関

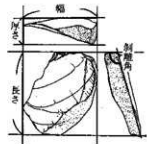
図148 原石・石核出土分布

打面は作業の進行に伴い転移し、1種で90度~180度、2種では得られた剥片の縁辺に沿って移動する。打面転移に伴う作業面の拡大は1種で複数面にわたり、2種で表裏2面に限定される。

出土は遺構確認面及び検出面で、製作場の特定には直接結びつかない。ただしL3・8、M17・18周辺に出土量の片寄りが認められる。

エ 剥片・碎片 (図版120・121、図149~151、表14・15、PL55)

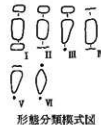
剥片剥離作業において加工の施される属性を担った対象を剥片とし、これが剥離される過程に産出された製作に不向きな資料を碎片とする。具体的には石鏃を第一義的な製作物とする目的的な素材剥片から、刃器そして石鏃にいたる道具類の生産に要する剥片までを包括し、製作途上での出現時期あるいは素材部位を考慮し2種4類に区分する。すなわち原石の表皮が片面以上認められる剥片を1種、表皮が1/2以下を2種とし、各々で両極剥離産を有する剥片をA類、石鏃製作に関する素材用剥片をB類として抽出する。剥片A類については石核ないし楔としての位置付けが可能であり、他と別出し分布図・グラフを作成する。



作図と計測法

A類総数は152点。石質別内訳はチャート115点・黒曜石31点・粘板岩6点である。黒曜石の原石・石核数49点に対する出現率は62%と高い。法量は平均値でチャート2.7×2.1×0.8cm、8.0g、黒曜石2.1×1.3

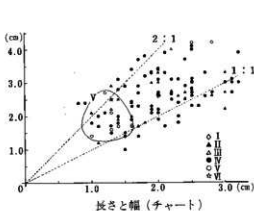
×0.8cm、2.4gを計測。使用に基づく形状変移は上下両端部形の組み合わせにより5種に類別。I類(面と面)・II類(面と線、1・3)・III類(面と点)・IV類(線と線、5・6・10~12)・V類(線と点、2・4・7~9)・VI類(点と点)である(表14)。法量はV類の黒曜石が最小で1.9×1.0×0.5cmの平均をとる。面・線を属性とするI・II類は幅



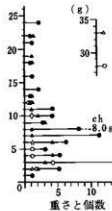
形状型	I	II	III	IV	V	VI
チャート	1	27	2	71	10	1
黒曜石	0	4	1	12	9	5

表14 剥片A類の形状別出土数

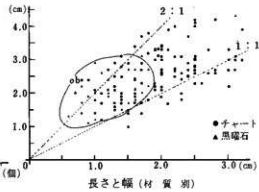
形態分類模式図



長さ×幅(チャート)



重さと個数



長さ×幅(材質別)

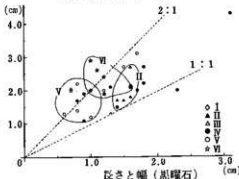
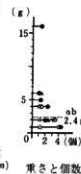


図149 剥片A類法量相関



重さと個数

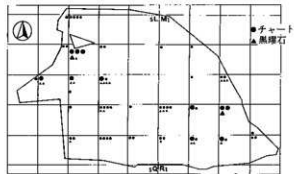


図150 剥片A類出土分布

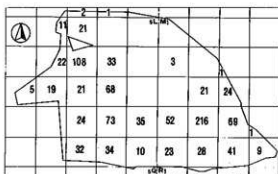
に、点を属性とするV・VI類は長さに対し優位に相関する(図149)。

出土は遺構確認面及び検出面で、特定施設との関連はつかめない。剥片1種(1465点、1)・剥片2種(733点、2)・剥片B類(1167点、3~6)・碎片(9304点、7・8)については、遺構と地区別の出土数表を作成。遺構別分布では住居(SB)と剥片B、遺構外と剥片1種・2種、墓坑(SH)と碎片の結び付きが強い。地区別分布ではチャートが山裾部を取り巻きながら広域な分布を示す。剥片1種はL8・14、M16・17・18に帯状に連なり、剥片2種はL8に局所的に集中する。剥片B類はL8・M17に集中が認められ、

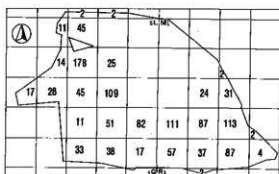
材質 出土地	剥片B類			剥片1種			剥片2種			碎片		
	ob	ch	sh	ob	ch	sh	ob	ch	sh	ob	ch	sh
S B	3 (4)	426 (4857)	20 (152)	23 (104)	382 (6791)	2 (41)	16 (85)	149 (2727)	2 (21)	122 (155)	2110 (6803)	25 (99)
S H	6 (13)	224 (2963)	10 (107)	53 (201)	436 (8055)	5 (133)	35 (239)	136 (2772)	4 (80)	549 (348)	4019 (8207)	37 (145)
S K	3 (7)	54 (665)	1 (12)	6 (25)	58 (648)	0	6 (36)	31 (556)	1 (35)	26 (10)	226 (1161)	5 (13)
S Q	1 (2)	38 (584)	1 (12)	7 (35)	35 (570)	1 (14)	2 (11)	26 (530)	0	13 (20)	155 (550)	1 (2)
遺構外	4 (12)	371 (4912)	5 (62)	16 (55)	439 (7106)	2 (22)	26 (139)	282 (4372)	7 (115)	144 (259)	1837 (6561)	35 (164)
合計	17 (38)	1113 (13981)	37 (345)	105 (420)	1350 (23170)	10 (210)	85 (510)	634 (10957)	14 (251)	854 (792)	8347 (23282)	103 (423)

表15 剥片・碎片遺構別出土数

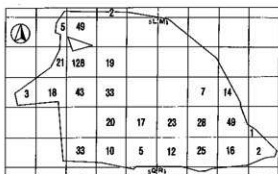
()は重量



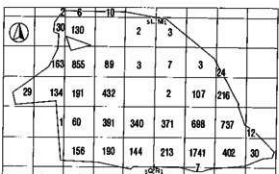
剥片B類・チャート



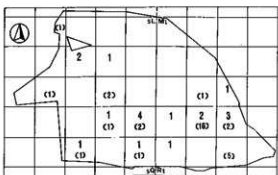
剥片1種・チャート



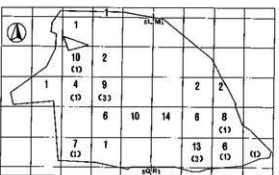
剥片2種・チャート



碎片・チャート

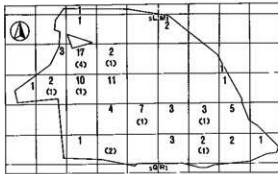


剥片B類・黒曜石(頁岩)

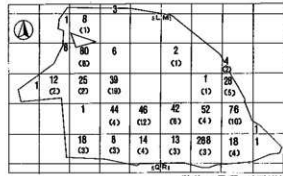


剥片1種・黒曜石(頁岩)

図151-1 剥片・碎片出土分布(その1)



剥片 2種・黒曜石(頁岩)



剥片・黒曜石(頁岩)

図151-2 剥片・碎片出土分布(その2)

M17直下のM22に碎片が多出している。黒曜石は散漫な分布を示し、1種でM16・22、2種でL 8・18付近に集中する。B類には特に集中区は認められず、碎片はM17・18・22に多出している。頁岩はいずれもL18~M18にかけて散漫な分布を示し、B類でM17に集中が認められる。

オ 石 鏝 (図版122~125、図152~154、表16、PL55・56)

刺突・殺傷が想定できる資料。製品195点・失敗品(未製品)452点・不明38点の計685点を収集。堆積岩を主体としチャート639点・黒曜石41点・頁岩5点である。小形剥片石器の中核で、1種・2種の剥離技術によって生産された素材剥片の目的一義的な器種。製作は押圧剥離を原則とし、全体の成形、細部調整加工に基づき形態を生成する。形態的視点から類別を行うと大別2種、基部が無茎のI種642点と有茎のII種5点である。細別は基部形状に基づき4類に区分。

I A類—平らで直線的な基部を呈するもの(45点、28-32)。側辺部形態はA類が主体。長幅比2:1をもつて幅広(28-30・32)と幅狭(31)に区別できる。

B類—基部が内湾し挟りが長さの1/2以下のもの(136点、33-70)。側辺部形態はC・A類が主体。挟りが浅く、開き角120度以上の資料をB1類とし、基部形が爪形を呈するa(33-40)・V字形のb(41-49-69)・C字形のc(50・51)・台形のd(62・63・68)に細別。挟りが深く、開き角120度以下の資料をB2類とし、基部形がC字形を呈するc(52-55・64・65)とU字形のe(56-61・66

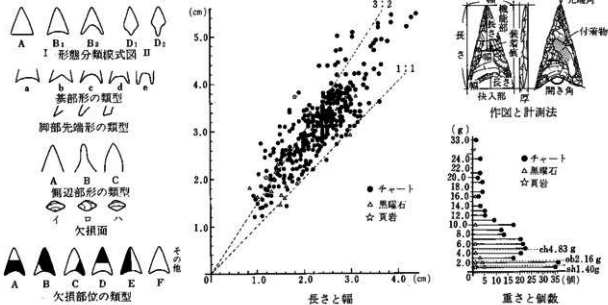


図152 石鏝法量相関(材質別)

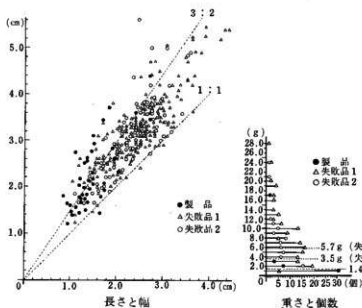


図153 石織法量相関（製品と失敗品）

全体長の $\frac{1}{3}$ 以下のものをD₁類（71・72）、それ以上をD₂類（73・74）とする。側面部形A類、底部は凸形を呈する。

この他II類中、基部欠損によって不明瞭な資料1点がある。

平均値 属性分類	法 量 (全体値)				計上 数	側 面 形			欠 損 状 況					欠損断面				総 数
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		A	B	C	A	B	C	D	E	他	イ	ロ	ハ	
I A	19.4	12.6	3.4	1.0	4	19	9	14	33	9	0	0	2	3	6	34	1	45
I B	21.7	13.9	3.4	0.9	23	43	39	52	65	60	1	1	3	3	10	97	9	136
I C	18.1	15.0	3.6	1.7	2	4	0	7	5	3	0	0	0	0	1	7	0	11
II	26.3	13.8	3.6	1.1	2	0	0	4	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4
失敗1	32.4	2.4	8.8	8.5	194	22	2	265	43	18	1	25	14	0	8	51	5	299
失敗2	30.8	23.0	8.4	6.9	94	9	3	138	32	20	2	3	7	1	11	47	2	153

表16 石織属性

上記類別を補佐する側面部の形状は直線的なA類（28・41・43・45・49・52・54・56・58・60・67・68・71・73）、内湾するB類（42・44・50・51・66・70）、外湾するC類（53・55・59・61・65・69・72・74）が区別でき、脚部先端形では三角（29・49・51・55・64・65・69・71・73）、円（28・50・56・63）、四角（66・68）を識別することができる。

機能的側面は使用による先端部の損傷・装着痕跡・付着物について観察。機器は実体顕微鏡（×160）・拡大映像器（×500）の各適応倍率を使用し、実測資料74点につき実施する。作図中スクリーン部分が痕跡の範囲に相当し、粗い編み掛けで装着痕跡・付着物を、濃い編み掛けで損傷を表現している。観察結果は製品47点中の42点（28・53・55・56・58・60・62・64・67・74）と失敗品27点中3点（11・13・14）に装着痕跡が確認でき、失敗品の2点（13・14）と製品7点（28・29・41・44・45・50・52）に油脂状の付着物が認められた。先端部の損傷はほとんど確認できず9点（34・37・41・42・51・56・59）の資料に微小な衝撃痕ないしはキズが観察できた。この他明瞭な欠損事例として11点の資料（28・29・32・33・37・38・43・49・53・54・61）が存在する。法量については類型別に表16に示す。

形態的類別から除外した資料に、製作が粗雑で整形されない一群（1～27）がある。法量上大小に2分され、両群共に製作途中形を示唆、装着などの使用痕跡がほとんど確認できない点を加味し、失敗品として類別する。細別は素材の全体成形時に留まる資料を失敗品1（299点、1～7・11・12・15～21）、成形後

・67・70）に細別可能。この内側面部形態が全体的に極度に外湾する資料（64・65）と脚部側面のみ外湾する資料（50・51・70）が、また脚部先端形で四角形を呈する資料（4点、66～68）などが抽出できる。

C類—外湾した基部を呈するもの（11点）。いずれも欠損資料で、全体をつかむことはできない。未製品の可能性もある。この他、I類中で類別不能な資料が38点ある。

II D類—基部を有するもので、それが

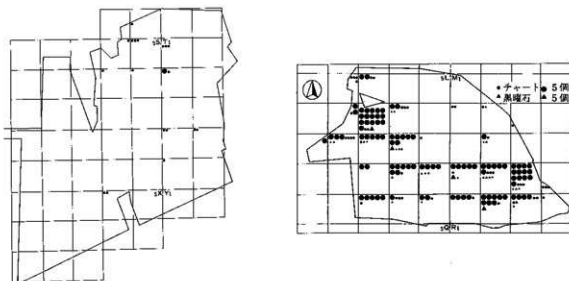


図154 石器出土分布

基部の意図的作出のある資料を失敗品2 (153点、8・10・13・14・22~27) とする。石材別の内訳はチャート製の1 (298点)・2 (144点)、黒曜石製の1 (8点)・2 (9点)である。法量ではチャートの1で3.2×2.4×0.9cm, 7.3g、2で3.0×2.3×0.8cm, 5.6g、黒曜石の1で2.4×2.1×0.9cm, 4.0g、2で2.0×1.6×0.5cm, 1.4gの平均をとる。

欠損は部位としてAが、状況で口が最も多い。失敗品の欠損率は低く、全体の37%に過ぎない(表16)。

出土は遺構確認面及び検出面からで、器種としてまとまりを示す地区はチャート材でL 8・14・19及びM18・22に、黒曜石材でL 8・19、M16・22に認められる。形態の類別では製品がL 8・14とM18・22周辺にまとまり、失敗品がL 8・14・19・23、M16~18・22・23に分布する。

カ 打製石斧 (図版126~133、図155・156、表17、PL57~59)

大形の打製石器で、主に掘削などの作業が想定できる資料。堆積岩を主体とし粘板岩441点・頁岩180点・砂岩32点・片岩17点・花崗岩1点、計671点を収集。製作法は2種認められ、河原石を直接敲打打削する第1種(2)と剥片を剥取し敲打成形する第2種(1)に大別できる。石器の形態の類別は、全体形とその構成要素(頭部・胴部・刃部)の形状に基づき実施する。

概括し全体形を類別すると、7類11細別となる。

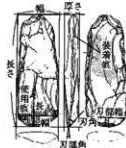
A類—全体の形状を長方形に整えるもの。頭部1類、刃部1・3類、断面形a類をそれぞれ主体とする。

自然面は資料中僅か1点である(9点、3~10)。

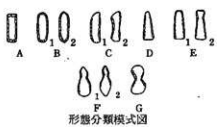
B類—全体を楕円形(B1類)に整えるもの。頭部及び刃部3・1類、断面形はa類を主体とする。類別中最多で自然面の残存率も高い(129点、11~20)。B1形態を基本とし両端のやや尖るものをB2類とする。刃部4類、自然面は刃部(c)に顕著(13点)。

C類—全体を半月形(C1類)に整えるもの。頭部4類、刃部2・3類、断面形a類を主とする。自然面は片面の大部分(a~c)を覆うことが多い(39点、25~35)。C1を基本形とし、1側面の抉りが強いものをC2類とする。頭部3類、刃部3・2類主体(9点)。

D類—全体を三角形に整えるもの。頭部2類、刃部3・2類、断面形a類を主体とする(36点)。



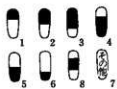
作図と計測法



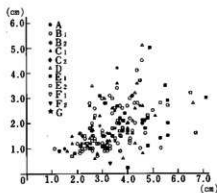
形態分類模式図



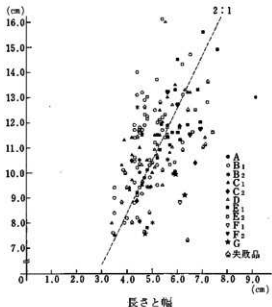
自然面の位置



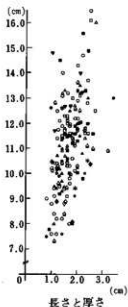
欠損部位の類型



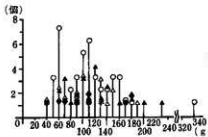
使用痕の長幅



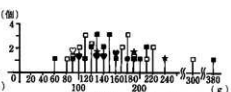
長さとの幅



長さとの厚さ



重さと個数 (A~D)



重さと個数 (E1~G)

図155 打製石斧量相関

平均値	質量 (全体値)			打製数	使用痕跡			刃部平面形				断面形			断面形								
	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		刃幅 (cm)	刃角 (度)	傾 (度)	刃角 (度)	形	種	1	2	3	4	a	b	c	1	2	3	4		
A	9.8	4.7	1.6	100	4	4.6	37.0	2.3	4.9	49.0	3	1	3	1	2	0	5	1	0	5	0	1	0
B 1	10.8	4.7	1.8	107	42	4.7	19.1	1.8	3.2	99.2	55	7	20	16	39	7	65	17	0	28	4	36	14
B 2	9.3	5.3	2.1	104	2	4.7	19.7	2.0	3.9	90.6	8	2	0	0	0	11	7	4	0	1	2	0	0
C 1	11.1	4.7	1.8	113	22	4.8	17.9	1.8	3.3	99.6	19	7	6	11	8	2	21	5	1	1	3	5	24
C 2	9.9	4.8	1.5	100	4	4.8	21.3	1.4	2.7	63.0	5	1	0	3	3	0	5	1	0	0	0	5	2
D	10.7	5.4	1.5	105	15	5.6	20.8	2.2	3.8	95.2	15	2	5	6	10	0	17	4	0	1	15	4	8
E 1	11.7	5.8	2.0	153	20	5.9	24.0	2.0	4.0	99.0	27	3	12	8	14	0	25	9	0	18	0	12	5
E 2	12.3	5.8	2.0	151	19	5.5	23.2	1.9	3.7	95.8	19	6	11	7	12	3	28	5	0	6	7	14	7
F 1	8.8	6.1	1.6	86	1	6.2	—	—	—	—	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	1
F 2	12.3	6.3	1.7	126	4	5.4	21.3	1.2	3.7	40.7	2	1	0	2	0	7	2	6	0	1	0	2	1
G	10.9	6.5	2.1	181	3	5.3	16.0	1.5	3.4	98.0	1	1	1	1	2	0	3	1	0	1	0	3	2

平均値	標性分類	層	厚	幅	自然面							欠損状況								総数		
					a	b	c	a	b	c	a	b	c	割	1	2	3	4	5		6	7
A	0	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	1	4	9
B 1	9	10	3	24	5	14	14	6	20	5	2	15	23	20	15	5	1	6	42	129		
B 2	2	9	8	1	2	4	1	1	2	0	0	0	1	4	4	1	1	0	2	13		
C 1	6	28	0	4	1	1	4	0	16	5	0	5	6	3	1	0	1	1	22	39		
C 2	1	7	1	2	0	1	0	0	4	0	0	2	1	2	0	0	0	0	4	9		
D	3	28	0	6	0	1	3	1	10	3	1	1	11	4	3	0	1	15	36			
E 1	6	38	1	12	2	11	3	1	11	3	2	5	8	9	5	0	0	20	49			
E 2	3	40	0	11	1	9	5	3	11	2	1	3	11	11	3	0	1	2	19	51		
F 1	1	3	0	1	0	1	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	1	1	4			
F 2	4	5	0	0	0	1	1	5	0	0	0	0	5	0	0	0	0	4	9			
G	0	7	0	3	1	0	0	1	2	0	0	3	1	0	0	0	0	3	7			

表17 打製石斧属性

E類—全体を台形(E1)に整えるもの。頭部1・3類、刃部3・1類、断面形a類を主とする(49点、21~24)。E1を基本形態とし、2側辺に抉りを強く入れるものをE2類とする。頭部3類、刃部3・1類が主体(51点、36~43)。自然面は片面a~cと頭部(a)に集中する。

F類—全体の形状を瓢形(F1)に整えるもの。刃部3類、断面形はb類。自然面は片面を覆うことが多い(4点、44・45)。F1類似の形態を呈し、端部の尖るものをF2類とする。頭部3類、刃部4類を主体。断面はb類が主(9点、46・47)。

G類—全体を8の字形に整えるもの。頭部・刃部3類、断面形a類を主体とし、自然面は全資料に存在する(7点、48~51)。

頭部の形態には、素材剥離時の縁辺をそのまま残すものと加工整形する2者があり、両者を区別することなく類型化すると4類。直頭状を呈する1類(63点、3・4・9・21・22・24・47・51)、尖頭状の2類(31点、12・44・46)、円頭状の3類(83点、5・6・11・13・14・16~20・27・36・40~43・45・48~50)、斜頭状の4類(64点、7・8・25・26・28~30・32~35・37~39)である。

刃部の形態は使用状況を反映し、類別は使用後の形状変化を示す。直刃の1類(58点、7・37・38・40)、斜刃の2類(55点、3・4・6・8・17・19・20・23・28~34・41・42)、円刃の3類(91点、5・10~16・21・22・24~27・35・36・43・44・48~50)、尖刃の4類(30点、18・47)に類別。刃部の作出は原則的に剥離時の片面・片刃(b類54点)を利用するが、鋭利な刃部を残すものが少なく、刃部再生に際し両面・両刃(a類178点)と化したものが大半である。以上各類別と全体形との相関は前項及び表17に負う。

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を、基部(胴部・頭部)に装着痕を確認する。観察はルーペを使用し全資料に対して実施。倍率は $\times 5 \cdot \times 20$ とし、結果刃部155点約66%の資料に摩耗痕が観察できた。作図中スクリーン部分が痕跡の範囲に相当し、実線は線状痕(作用)の方向を表現している。写真は $\times 0.4 \cdot \times 3.3$ で撮影(PL72)。摩耗・線状痕はいずれも土に対して使用されたものと推定され、形態的類別に相関するような使用痕差は認められない。ただし線状痕の入射角についてはC類の一部に60度前後とやや刃縁に対し傾くものがあり、90度付近を主体とする他類型とは異なっている。摩耗痕の範囲では長さでA・B2・D・E類がそれぞれ2.0cmを越え、C2・F2・G類が1.5cm以下と短い。幅に関してはB2・C2類で0.2~0.5cm程ほかより狭くなっている。

法量については表17に各形態別の平均値を提示した。従前の形態区分ではA・B類が短冊形に、D・E類が撥形、G類が分銅形に相当し、C類・F類はそれぞれの形態項に包括される。本表に照合すれば全体値(幅)の属性比較に関してA~C類、D・E類、F・G類が区別でき、3分類をほぼ旨肯することになる。

欠損状況では頭部付近(1~3)と刃部付近(4~6)に数量的な差異は確認できない。形態類別は残存部からの全体形推定ではあるが、B2類とF2類に刃部の残存率が高い。

出土は遺構確認面及び検出面である。全体形の類別ではB1類がL11・12に、C類がL8・14、D類が

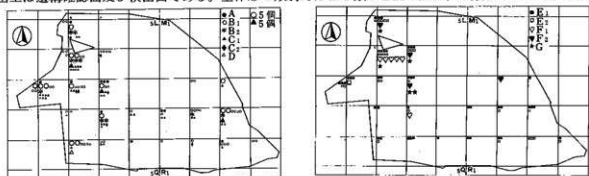
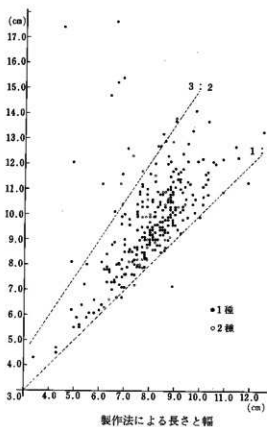


図156 打製石斧出土分布

L23、F類がL8、G類がL8・14にややまとまっている。図版掲載資料ではA類8点(L8=SB581・SH1111、L9=SB580、L19=SH506、M16=SH552、M24=SH698、ほか2)、B類10点(L3=SB599、L19=SB560、M18=SB574、M22=SH958、M23=SB559、ほか5)、C類11点(L14=SQ503、L23=SQ501、L25=SH738、M16=SH549、M22=SH813、ほか6)、E類12点(L7=SB584、L9=SB580、L23=SQ501、M18=SH808、M23=SH590・824、SK2043、ほか3)、F類4点(L9=SB580、L14=SQ503、ほか2)、G類4点(L14=SB566、L23=SQ501、ほか2)が各所より出土している。



キ 磨石・凹石・敲石

(図版134~138、図157~160、表18、PL60・61)

スル・タクなどの作業が想定できる資料。特徴的で最も頻繁な用法に基づき磨石・凹石・敲石を類別する。総数507点を収集。火成岩を主体とし、安山岩369点・砂岩74点・花崗岩57点・閃緑岩5点・粘板岩1点・角礫岩1点である。製作法は2種認められ、河原石をそのまま使用する第1種と素材の縁辺部に加工を施す第2種に大別できる。内訳は1種456点・2種51点と無加工が大半である。

形態的視点から類別を行うと、3類7細分となる。

A類—円形を基本とするもの。細別は扁平・球状の1種A類(260点、1~14・17~30)と車輪形を形成する2種A類(22点、50~54)。

B類—楕円形を基本とするもの。細別は扁平・球状の1種B類(164点、15~16・31~46)と石鹼形の2種B類(24点、55~62)。

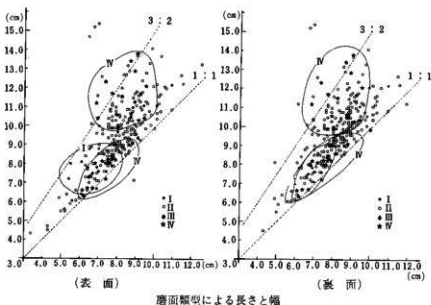
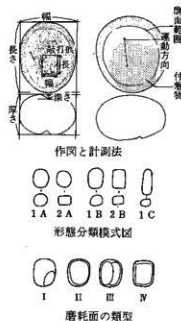


図157 磨石・凹石量相関

C類—長楕円あるいは長方形を基本とするもの。棒状(30点、47~49)。

その他形態不明のもの7点がある。

機能的視点からの類別は、スル・タタクの2大別9細分が可能である。観察は全てルーペを使用し、 5×20 とする。この段階で使用面の不確かなものは除外。作図中実線内が摩耗範囲に相当し、矢印は運動方向を、アバタは敲打範囲と形状を示す。写真は $\times 0.4$ 前後で撮影している(PL69)。

摩耗面

I類—使用面が部分的な1ヶ所に限られるものをまとめる。範囲は 172cm^2 で単純表面積の37%程度である。運動方向はほぼ単一で、面の転移は局所的に認められるが、全面に及ぶことはない(28点、1~5・32)。

II類—使用面が面全体に広がるもの。範囲は 231cm^2 で単純表面積の39%程度である。運動方向は長軸と $20 \sim 40$ 度前後の開きが主体。面の転移は表裏転換のかたちで行われる(表290点・裏242点、6~15・21~26・28・31・33・35・36・38・40・43~47・50~58・60~62)。

III類—使用面が面全体に広がるもの。2面構成の点でII類と区別される。範囲は 340cm^2 で単純表面積の59%である。運動方向は長軸と $20 \sim 30$ 度程度の開きが主体(表14点・裏7点、16~20・29・34・37・41・59)。

IV類—使用面が側面部に及ぶもの。単なる側面利用は含めず、意図的に側面部を形成し、使用したものである。運動方向は不明瞭で、頻度は表裏面に勝ることはない(38点、50~59・61)。



欠損部位の類型

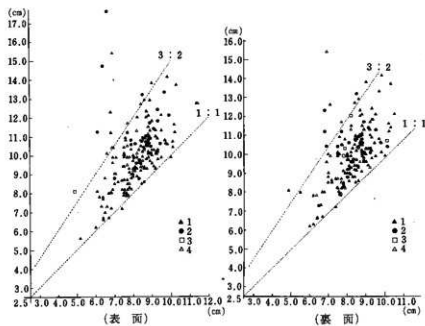


図148 敲打痕類型による長さ・幅

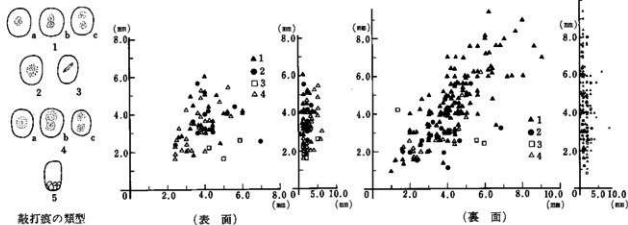


図149 敲打部の長さ・幅・深さ

敲打痕

- 1類—小さな粒状の凹み単位 (0.1~0.5cm) が集合し、凹部を形成するもの (表218点・裏169点)。花卉状に広がり、浅い 1 a (9・13~18・20~24・31~33・43・45・47・50・51) と 2ヶ所以上にわたり連結した 1 b (26~28・34~37)、独立した 1 c (29・48・55・56) がある。固定的な使用部はタタク・ワル作業の受け手が想定できる。
- 2類—アバタ状を呈するもの (表2点・裏6点、25・52・57~60・64~70、PL74-24・36・70)。乱雑な使用痕跡はタタク・ワル作業の持ち手が想定できる。
- 3類—細長い溝状のもの (表3点・裏4点、24・46)。タタク・ワル作業の受け手が想定できる。
- 4類—すり鉢状を呈し、単一の 4 a (22・30・45~47・54、PL74-54) と 2か所以上にわたり連結した 4 b (38・39・42・43・53・62)、独立した 4 c (40・41・44・49、PL74-41) がある (表51点・裏16点)。
- 5類—アバタ状のつぶれと小剝離痕を伴うもの (70・71、PL74-70)。タタク・ワル作業の持ち手が想定できる。

以上の属性および作業の想定は終始独立したのではなく、摩耗面のみ有するもの206点, 9.1×7.4×5.1 cm, 521 g、敲打面のみ27点, 10.0×6.3×4.8 cm, 510 g、両者複合した274点, 10.0×10.2×5.1 cm, 550 gと、大多数は併用あるいは転換した使用結果を示す。この内いわゆる磨石・凹石の類488点を除いた19点が本来の敲石に相当し、上記1種各々に属す。A類は7点、B類は3点 (64~69)、C類は7点 (70) である。タガネ状の挟み打ちが想定でき、形態の違う同法の資料 (71) も確認されている。

摩耗面では表のみの57点、裏のみの14点、両面の409点と大多数は表裏共用資料である。敲部は1類が全資料に対し広く認められ、2類は数値的に少ないものの1類に転化したと観察される資料も存在する。また、ひとつの面に他類をあわせもつ資料もある。

法量は平均値でA類8.5×7.8×5.3 cm, 437.7 g、B類10.7×8.0×5.3 cm, 600 g、C類13.0×6.2×4.4 cm, 521.7 g、敲石19点は10.4×6.1×4.8 cm, 532.8 gである。A・Bでは細別もあわせ厚さの属性が5.2~5.3 cmである点、使用後あるいは使用時の数値として特筆できる。

欠損状況では圧倒的に完形資料であり、これに $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ のものが若干存在する。

出土は遺構確認面及び検出面で、器種としての顕著な集中は認められない。図版掲載の類型ではA 1類28点 (L 2=SB597, L 3=SB590・591, SK3474, L 8=SH1210, L 14=SB566, SH1220, L 20=SB571, L 23=SQ501, M 12=SB570, M 17=SB555, SH578, ほか15)、A 2類・4点 (L 14=SB566, L 20=SB571, ほか2)、B 1類18点 (L 3=SB594, L 8=SB582, L 14=SB566, SK1222, L 19=SH1205, L 20=SH1067, L 23=SQ501, L 24=SB558, M 16=SH510, M 17=SB555, M 23=SB559, ほか4)、B 2類8点 (L 14=SB566, L 19=SH506, M 17=SB555, M 22=SB564, M 23=SB559, ほか1)、C類3点 (L 3=SB599, L 14=SB566, ほか1)、敲石8点 (L 3=SB599, L 8=SK1206, L 23=SQ501, M 16=SH510, M 17=SB555, M 17=SH558, ほか2) の出土である。L 8~20、M 17・18・20にかけて若干のまとまりが認められる。

平均値	法量 (全体積)			計上数	摩耗面 (表)			摩耗面 (裏)			敲部形状 (表)				敲部形状 (裏)				欠損状況	総数						
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		重さ (g)	I	II	III	I	II	III	1	2	3	4	1	2	3			4					
	10	12	14		16	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1			2	3	4			
1 A	9.0	8.0	5.2	431.7	236	15	225	3	10	211	1	85	5	2	10	89	2	2	12	108	10	12	0	1	226	249
2 A	8.0	7.6	5.3	445.6	18	0	17	5	0	18	4	15	0	0	3	12	0	0	3	9	1	3	0	0	18	22
1 B	10.2	7.9	5.3	673.0	159	4	168	4	1	144	0	84	1	1	17	72	2	1	11	83	9	4	0	0	150	164
2 B	11.1	8.1	5.2	673.0	17	0	21	2	0	19	2	12	0	0	8	14	0	0	4	15	3	3	1	0	17	24
C	13.9	6.2	4.4	521.7	14	1	19	0	0	11	0	11	0	0	6	4	1	0	5	13	4	3	2	0	14	22
敲石	10.4	6.1	4.8	532.8	16	0	2	0	0	2	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	0	1	0	16	19

表18 磨石・凹石・敲石属性

1 A~Cまでの内、敲石は外数

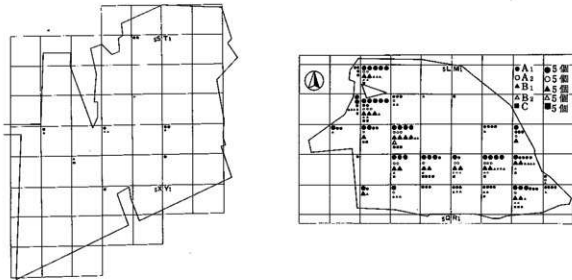


図160 磨石・凹石・敲石出土分布

ク 多孔石 (図版138-72~76、図161・162、PL62)

タタク・スルなどの作業が想定でき、置かれて使用されたと考えられる資料。器面に複数の凹部を有し縁の果縁を呈する。総数11点を収集。火成岩を主体とし安山岩9点・花崗岩2点である。製作は素材の縁辺部に加工を施し、形状を整えたものに限られる。

形態的視点から類別を行うと2類に分かれる。

A類一円形を基本とするもの。扁平球状を呈するA1(5点、73・74)と円柱状のA2(1点、72)。

B類一楕円形を基本とするもの(5点、75・76)。

機能的視点からの類別は、タタクとスルの2大別である。観察および作図・写真、分類については磨石に準ずる。摩耗面は面全体を使用するII類である(4点、73~76)。敲打は門部として認められる1・3・4類であるが、それ自体複合し外見的には4類となる。門部は表面で平均17個、大きさの平均 $1.6 \times 1.7 \times 0.6$ cm、裏面で平均13個、大きさ $1.6 \times 1.4 \times 0.5$ cmを計測する。門みの単位(4類)が互いに干渉しあうことはない(PL74-72)。

法量は全体の平均値で $16.5 \times 14.4 \times 9.8$ cm, 3.1kgである。

ケ 丸石 (図版151-13-16、図161・162、PL69)

実作業の想定はできないが、全面研磨され球状を呈した資料を一括する。総数26点を収集。火成岩およ

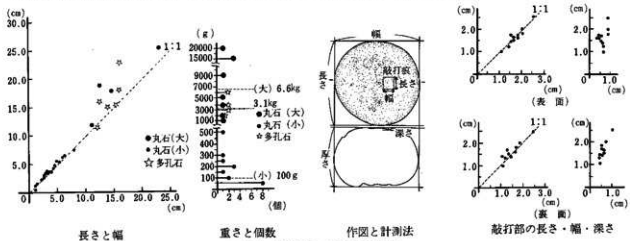


図161 多孔石・丸石法量相関

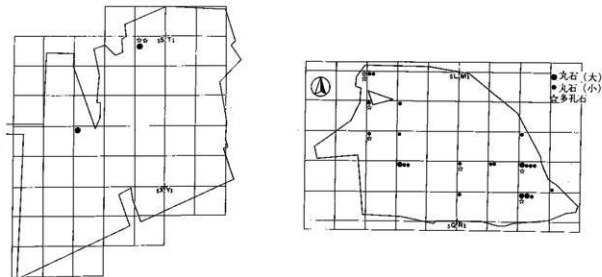


図162 多孔石・丸石出土分布

び堆積岩を主体とし安山岩15点・凝灰岩3点・砂岩8点である。製作は敲打・研磨により整形したと考えられるが、製作工程を裏付ける資料はない。形態上はほぼ球状に限定され、面は構成しない。法量上大小2種に類別でき、大きなもの(丸石大)で15.5×12.5×10.6cm、6.6kg、小さなもの(丸石小)で3.8×3.8×3.5cm、0.1kgの平均をとる。

機能的な側面から類別を行うと、スル・タタクなどの痕跡を示すもの(13・14)と想定不能な例(15・16)に区別できる。前者はこれまでに抽出してきた器種と同様な使用痕跡を伴うものであり、摩耗面では石皿と敲打痕では多孔石(敲打部4類)と同質である。観察・写真は磨石に準ずる。

出土は遺構確認面及び検出面で特にまとまりは認められない。多孔石A・B類11点(SB101・561・597, SH1・688, SK3366, ほか3)、丸石大8点(SH1・521・528・908・1032・1183, ほか2)、丸石小18点(SB555・561・577・580・590・594, SH506・632・766・956・1039・1183, ほか6)が出土している。

コ 台石・石皿 (図版139~141、図163・164、表19、PL62)

スル・タタク(ツブス)などの作業が想定でき、置かれて使用された資料。火成岩を主体とし安山岩44点・砂岩15点、総数59点を収集する。製作法は2種認められ、河原石をそのまま使用する第1種と素材に加工を施す第2種に区分できる。加工には全体の整形と、機能部の作出(皿部の形成・目たて)がある。

技術形態的視点から類別を行うと8類に分かれる。

- 1種A類—板状の素材を利用し、加工を施さないもの。機能部としての明瞭な皿部は形成しない。形状は方形を基本とするA1と円形のA2に区別できる(A1類5点、1・2、A2類3点、5)。
- 2種B類—板状の素材で、全体を整形、皿部は形成しない。形状は円形を呈する(2点、6)。
- C類—板状の素材で、全体を整形、皿部を形成するもの。方形を呈する(5点、3・4)。
- D類—肉厚の素材を利用し、全体を整形、皿部を形成するもの。楕円形を呈する(11点、7~10)。
- E類—やや肉厚の素材を利用し、全体を整形、皿部を形成するもの。ただし皿部縁辺が急斜度に立ち上がり、縁部が明瞭に形成される点においてD類と区別される。形状が楕円形を呈するE1と方形のE2に区分できる(E1類5点、11・13・14、E2類5点、12・15・16、不明5点)。
- F類—上記2種の内、裏面に脚部を付するものが5点(17~20)あり、別類として項を設ける。数の内訳はD類(1点、17)、E1類(1点、18)、E2類(2点、19・20)、E不明(1点)である。
- G類—河原石の片面に目たてと考えられる敲打痕を留め、僅かな皿部を形成するもの。形状は円形

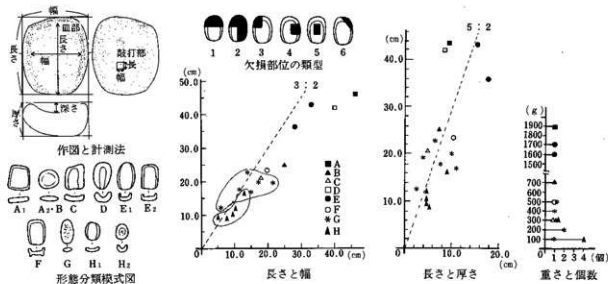


図163 台石・石皿重量相関

ないしは楕円形を呈する（8点、21~23）。

H類一磨石・凹石を転用し、皿部を形成するもの。転用には完形品の一面を皿部とするもの（4点、24・26~28）と欠損品の一面を皿部とする（1点、25）2者がある。形状では楕円形を呈し、浅い皿部を形成するH1（4点、24~27）と深い漏斗形のH2（1点、28）がある。

機能的視点からの類別は、ツブス・スルの2大別が想定できる。観察・作図・写真については磨石に準ずる。摩耗面にはA類からF類まで観察上の差異は認められない（PL75-16）。G類には敲打痕が観察されるが、使用結果としての状態よりも、むしろ整形時のものに類似している（PL75-23）。H類はG類とA~F類の中間的な摩耗面を形成する。

使用面はいずれもII類（2類）に相当、形態ごとの使用面積ではC類・D類・A1類が大きく、容量ではD類・E類が大きい。運動方向では回転度合いの大きなC類・A類と小さなD類・E類の2者があり、後者が過半数を占める。ただしH2類（1点、28）は他と区別されるべき使用面を形成し、外見上はすり鉢の形状に類似している（PL75-28）。

法量については大半の資料が欠損しており、平均化は難しい。概略は表19に示す。また他機能との併用は使用の同時性を問わねばならないが、敲打部（4類）の認められる5点と砥面（2類）の認められる2点がある。敲打部はB類と砥面はC類との結びつきが強い。

欠損部位は完形率の高いG・H類を除けば大半が欠損し、2・5の状況が高い（表19）。

平均値	法量(全体値)				(機能部値)		計上数	(機能部値)		兼用凹部	砥面	欠損部位						総数
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	皿長さ(cm)	皿幅(cm)		縁厚さ(cm)	皿厚さ(cm)			1	2	3	4	5	6	
A1	43.0	47.0	9.0	18.6	25.0	30.0	1	8.3	6.3	—	—	1	1	0	0	1	1	5
A2	19.5	21.5	3.8	1.7	19.5	21.5	1	—	—	1	—	0	1	0	0	0	1	1
B	23.0	21.5	6.0	4.8	20.5	18.5	2	—	—	2	—	0	0	0	0	0	0	2
C	42.0	40.0	8.3	9.6	41.0	32.0	1	7.5	4.5	1	2	0	0	0	1	2	1	5
D	39.5	30.5	16.3	16.1	27.5	28.5	2	10.1	5.9	—	—	0	3	2	1	3	0	2
E1	—	—	—	—	—	—	0	10.4	7.6	—	—	0	0	0	3	1	1	0
E2	23.3	19.7	10.3	5.0	20.0	15.0	1	8.6	4.9	1	—	0	2	0	0	0	2	1
F	—	—	—	—	—	—	0	7.6	5.1	—	—	0	1	0	2	2	0	0
G	18.2	12.6	7.5	2.6	—	—	5	—	—	—	—	0	2	0	0	0	1	5
H	11.4	9.1	5.6	0.8	8.6	6.2	5	5.5	3.8	—	—	0	0	0	0	0	0	5

表19 台石・石皿属性

E類で形態不明5点は除外

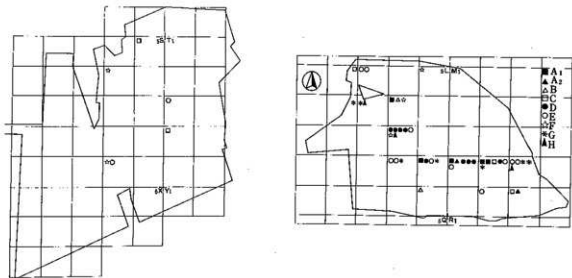


図164 台石・石皿出土分布

上記類別を、これまでの報告例に照合すればA・B類が台石に、C～F類が石皿に、G類は未製品、H 1類は砥石、H 2類が広義の凹石に該当する。あえて器種の項立ては実施しなかったが、G・H類の用途上の抽出は蓋然性が高いといえる。

出土は遺構確認面及び検出面で、極度な集中は認められない。A 1類5点 (L 9=SB580、L 20=SB517、M16=SH1009、M17=SB555)、A 2類3点 (M16=SH510、M23=SB559)、B類2点 (L 9=SB580、L 25=SK231 6)、C類5点 (L 2=SB597、M17=SB555、M23=SB684、S 5=SH05、T16=SB101)、D類11点 (L14=SB566、L20=SB571、M16=SH510・526・578、M17=SH578、ほか2)、E類15点 (L 3=SB591・594、L19=SH575、L20=SH1066、M16=SH510、M17=SB555、M18=SB562、SH1059、T11=SH33、S23=SQ5、ほか6)、F類5点 (L14=SB566、ほか4)、G類8点 (L 7=SB583、L 8=SB581、L19=SH519、L20=SB571、M17=SB555、ほか3)、H類5点 (L14=SB566、ほか3) が出土している。ただしF類はL 4～14、S 9～S24を結ぶライン沿いに分布している。

サ 石 錐 (図版142・143、図165・167、表20、PL67)

刺突・穿孔作業が想定できる資料。総数68点を収集。堆積岩を主体としチャート63点・黒曜石2点・頁岩・凝灰岩・珉瑤各1点である。製作は原則として石錐と同工程の剥片剥離および調整加工による。加工部位に基づき大別2種、機能部のみ加工する第I種、全体を加工する第II種に区別できる。

技術形態的視点から類別を行うと4類に分かれる。



作図と計測法

I種A類—素材の一部にのみ調整を施すもの (22点、27～31)。

B類—素材の長い2側辺にわたり押圧剥離を施すもの。素材の特徴を壊すことなく加工し、先端機能部と基部の区別が不明瞭なB 1 (6点、1～3)、これの明瞭なB 2 (13点、4・5・6)に区分できる。

II種C類—素材全体に加工を施し、先端機能部と基部の区別が明瞭なもの (8点、7～12)。

D類—先端と基部の区別がなく、両端の尖ったもの (19点、13～26)。

刃部の作出法は両面からの47点 (1・2・4～26・28) と片面からの21点 (3・27・29～31) がある。機能部断面形は円形a (21点、1・9・12・15・16)、菱形b (30点、2

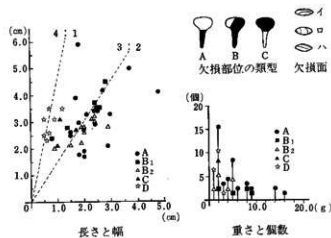


図165 石錐法量相関

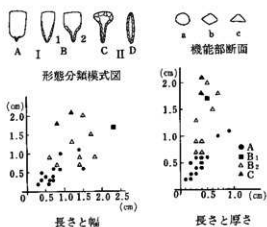


図166 錐部の法量相関

・4-8・10・11・13・14・17-26・28)、三角形c (17点、3・27・29-31)の3つがあり、D類はaとA類はcとの結びつきが強い。ただしaはbの使用経過上の形態であり、緻密にはbの範疇となる。

機能的視点からの類別は2類2細別である。観察は実体顕微鏡を使用し、図示した31点につき実施。倍率は×160までとし、31点中24点に使用痕跡が確認できた。作図中拡大部分が×40での見取り図に相当、スクリーン部分は痕跡の強弱を示す。写真は×3・×40で撮影(PL70)。

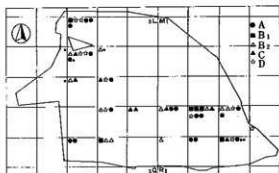


図167 石錐出土分布

- 1類一刃部表面の左よりに使用光沢が観察されるもの(15・16・28-31)。押圧・抉りの運動が推定でき、タイプはBとE(ツの小結ix)に類似する。対象物は木または皮を想定できる。D類(15・16)はいずれもBタイプで木の可能性が高い。
- 2類一刃部の表裏・側面部に使用光沢痕が観察されるもの(3-7・12-14・17・18)。片ないしは全周の回転・もみきり運動が推定でき、タイプはBとDに類似。対象物は木または骨が想定でき、特にB1類(4)がDで骨(PL70-4)、D類(17・18)がBで木(PL70-17)の可能性が高い。
- 1・2類とも刃部は片端に限定され、両端を使用したものは存在しない。使用痕は確認できなかったが、刃部と考えられる部位を複数備える資料(27)が1点収集されている。また装着痕に相当するキズ・付着物などは確認できなかった。

欠損は機能部(錐部)にて破損するものが大半で、Aが全体の58%を占める。形態別の状況ではC類とA、D類とBが密接な結び付きを示す。欠損断面は表裏面からの作用による事故(イ・ハ)が大半で、D

平均値 風性 分類	法 量 (全体俵)				(機能部俵)			計 上 数	断面形			欠損部位		欠損状況		素材判片		総 数			
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		a	b	c	A	B	イ	ロ	ハ	縦 横		不明		
A	3.2	2.3	0.7	5.4	0.4	0.6	0.3	20	3	7	12	2	0	20	1	0	1	6	14	2	22
B1	3.4	2.0	0.8	5.1	0.2	0.3	0.1	6	1	1	4	0	6	0	0	0	3	1	2	6	6
B2	2.6	2.0	0.6	2.9	1.2	1.2	0.5	9	3	9	1	3	1	9	2	1	1	5	8	0	13
C	2.6	1.2	0.4	1.4	1.3	0.6	0.2	3	4	4	0	5	0	3	2	0	3	1	3	4	8
D	2.9	0.7	0.4	1.0	—	—	—	7	10	9	0	4	9	7	3	6	4	1	2	16	19

表20 石錐属性

類と口の状況は特異である(表20)。

法量全体値では幅の属性でD類が1.0cmを下回り、厚さ・重さでA・B1類が0.7cm, 5.0g以上に平均値をとる。機能部値は刃部の、実際的には加工範囲を測定し、B1類で長さ0.2cm、B2類で幅1.2cmと他と突出した数値となる。

出土は遺構確認面及び検出面で、器種としての集中は認められない。全体形の類別ではB1類がM17にやまとまる以外は散漫な分布を示す。遺構内出土資料は48点で、A類18点(SB553・555・566、SH506・510・826・927・944・1111・1185、SQ2・501、SK3420・3490・3507)、B1類5点(SB555・558・559・627)、B2類6点(SB555・558・580、SH505・511・1144)、C類6点(SB559・571、SH510・578・627・1189)、D類12点(SB555・560・561・566・580・594・599、SH528・1111・1158、SK2459)が出土している。

シ 磨製石斧(図版144~147、図168・169、表21、PL65・66)

伐採・切断の作業が想定できる資料。総数86点を収集。火成岩を主体とし蛇紋岩53点・砂岩10点・角閃岩7点・斑岩6点・粘板岩4点・曹長岩2点・緑色片岩1点・凝灰岩2点・半花崗岩1点である。製作は河原石を粗く剝離、敲打成形・研磨の工程をとり、すべて定角式。形態の類別の視点は打製石斧に基づき、これに大きさの属性を要点として加える。法量区分値大・中・小に添い、全体形を類別すると3種9類となる。



大形A類—全体を台形状に整え、最大厚で3cmを越えるもの。頭部2類を主体とし刃部は3類に限定される(10点、5・6・10・11・15, 失敗品5点、1・2)。

頭部2類で三角形に近いものをA1(6点、5・11)、頭部3類でより長方形に近いものをA2(4点、6・10)とする。

B類—全体を台形状に整え、最大厚で2cmを下回るもの。頭部1類、刃部1類を主体とする(2点、17・18, 失敗品2点)。

中形C類—大形A類と同義で法量として一回り小振りなもの(11点、7・9・12~14・16, 失敗品2点、3・4)。各々C1(9点、7)、C2(1点、8)とする。頭部1類でより台形に近いものをC3(1点、9)とする。他にC類で類別不能なもの2点。

小形D類—中形C類と同義で法量として小振りなもの。本類から一段と小形化(23点、20~26・28~35, 失敗品8点、19・27)。各々D1(6点、20・26)、D2(9点、21~23)、D3(8点、28~35)とする。D類で類別不能なもの2点。

E類—中形C類と同義で法量が小形D類よりさらに小振りなもの(8点、37~42, 失敗品2点、36)。各々E1(7点、37・38~40)、E2(1点、42)とする。極小形。

以上の他、形態類別不可能な小破片9点が収集されている。

頭部の形態では3類。直頭状を呈する1類(16点、8・9・17・28・30~33・41・42)、円頭状の3類(14点、6・7・10・20~23・37~39)、やや尖り気味で1と2の中間の形態の2類(7点、5・11・25)である。刃部の形態は3類。直刃を呈する1類(12点、17・18・29・31・32・34・38・39・42)、斜刃の2類(1点、9)、円刃の3類(22点、5・7・15・16・21~23・26・30・33・37)である。刃部の作出は両刃を主体。以上各類別と全体形との相関は前項及び表21に負う。

機能的視点では刃部に摩耗・線状痕を、基部に装着痕を確認する。観察はルーペを使用し全資料に対して実施。倍率は $\times 5 \cdot \times 20$ とし、結果刃部35点中15点に、基部40点中5点に使用痕跡が観察できた。作図中スクリーン部分・実線(刃部のみ抽出し実測)の表現は打製石斧と同義である。写真は $\times 0.4 \sim 0.5 \cdot \times 3.3$

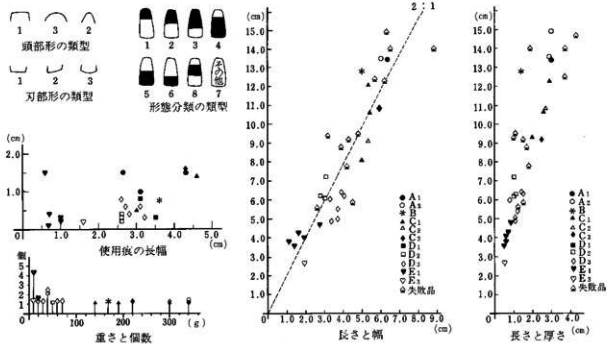


図168 磨製石斧量相関

で撮影 (PL73)。摩耗痕は特に深い線状痕が発達し、作用・衝撃の強さを示唆している。対象物の推定は比較用資料が準備されていないが、学史的見解によれば木である。形態的類別では小形なC・D類に顕著で、大形なものを程確認できない。線状痕の入射角は大部分が刃部と90度、C1類7では55度(±35度)に振れる。摩耗痕の範囲ではA1・C1・C3が長さ1.0cm×幅3.0cmを越え、D類以下の0.5cm×3.0cmの値と隔絶している。法量については表21に形態別の平均値を提示した。長さ12cm(3cm×4倍)を越えるものを大形、9.0cm(3cm×3倍)を越えるものを中形、6.0cm以上を小形(3cm×2倍)とし、それ以下3.0cm前後を極小形とする。大形A類が従来の伐採斧に、それ以外が加工斧に相当すると考えられる。

欠損状況では刃部を欠くもの15点、頭部を欠く13点と数値上は半々であり、頭部打撃による欠損例も多い(34・35)。完形は21点と高率である。

出土は遺構確認面及び検出面である。器種としての集中は認められないが、M17・18に若干のまとまりがある。形態的類別に基づく分布ではA1類(SB581、SH12・511・691・1005、SK2647)、A2類(SB566、SH510)、B類(SB101、SH967)、C1類(SB552・555・559、SH1067)、C2類(SK2006)、C3類(SH672)、C類(SB561・562・594)、D1類(SB555、SH503、SK3272)、D2類(SB555・570・594、SH510・511・612・873、SK2367)、D3類(SB555・558、SH959)、E1類(SB566・599、SH510・558・933)E3類(SB102・555)が出土している。

平均値	法量(全体値)				計上数	(機能形態)		使用痕跡		刃部平面形	頭部形			欠損状況								総数						
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		刃幅(cm)	刃角(度)	長さ(cm)	幅(cm)		1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8							
A 1	13.4	6.3	3.0	335	1	5.6	56	1.3	3.4	2	1	0	0	2	0	3	1	0	1	2	0	1	0	1	0	1	6	
A 2	(13.6)	(6.1)	(2.9)	(331)	1	(6.0)	(77)	—	—	1	—	0	0	2	0	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4	
B	12.8	5.0	1.4	165	1	4.8	40	0.5	3.6	3	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	9	
C 1	10.7	5.0	2.6	204	3	5.0	53	1.0	3.8	—	1	0	0	5	0	0	4	0	1	0	0	2	1	0	2	3	9	
C 2	(10.8)	(5.9)	(2.7)	(300)	1	(5.8)	(65)	—	—	1	—	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
C 3	9.2	5.3	2.5	220	1	5.3	50	1.6	4.3	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
D 1	—	—	—	—	—	3.6	55	0.6	3.3	—	1	1	0	0	2	1	0	3	0	2	2	0	2	0	0	0	0	6
D 2	6.6	3.0	1.0	3.6	3	3.1	43	0.3	2.6	4	3	1	0	4	0	3	3	2	1	0	0	0	2	0	1	3	9	
D 3	5.3	3.5	1.1	3.9	6	3.5	38	0.5	2.9	3	—	2	3	1	2	6	0	0	0	0	0	0	1	0	1	6	8	
E 1	4.1	1.8	0.7	8.2	5	1.5	31	0.3	1.0	—	—	4	0	2	3	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	5	7
E 3	2.7	1.9	0.5	5.0	1	1.9	46	0.2	1.6	—	—	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

表21 磨製石斧属性

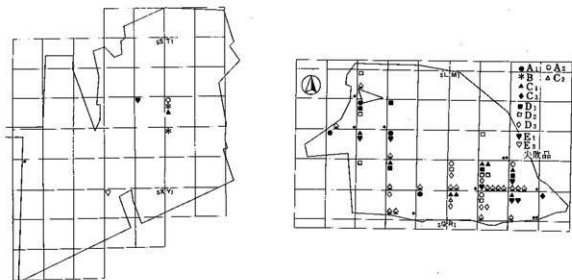


図169 磨製石斧出土分布

ス 刃 器 (図版148~150、図170・171、表22、PL64)

項目中提示した器種以外で、刃部を有し切る・掻く等の作業が想定できる資料。石匙・削器・搔器等加工の施された資料に使用痕跡を留める石層を合わせ刃器として類別。形式上大小2種に大別する。堆積岩を主体とし、大形は粘板岩61点・頁岩15点・砂岩1点、小形はチャート596点・頁岩8点・黒曜石39点である。大形は打製石斧と小形は石鎌と同一石材を選択する。製作法は2種認められ、剥離獲得した素材をそのまま使用する第1種と、素材の一部に加工を施す第2種に区分できる。加工は大小で違いが認められ、大形は背部を、小形は刃部を形成する。

技術形態的な視点から類別を行うと、大形で4類、小形で3類となる。

大形

2種A類—楕円形で断面三角形を基本とし、背部に加工を施すもの。自然面を残す率が高い。厚さ2.0cm前後で鈍重なA1と、それ以下の薄いA2に区別できる。A2はさらに直刃A2aと、外刃A2bに細分可能である(A1類7点、A2a類11点、4・11、A2b類6点、6)。

B類—円形で断面三角・凸面状を呈し、背部または縁辺部に加工を施すもの。表面5/10以上が自然面に覆われ、外刃を基本とする(10点、9・10)。

1種C類—剥片素材で基本的には加工を施さない。形状は方形C1と、三角形C2に区別でき、断面三角形。自然面を残す確率が少なく、直刃(C1類4点、C2類11点)。

D類—加工は施さない。楕円形で断面三角・凸面状を基本とし、表面は自然面に覆われる。外刃を呈する(7点、7・12)。

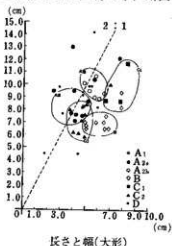
小形

2種A類—形状は多岐にわたり、素材の縁辺に緩斜度な剥離を施すもの。型的には削器に類似し、長軸側辺部の加工を基本とする。直刃主体(372点、17~20)。

B類—素材の縁辺に急斜度な剥離を施すもの。形式上搔器に類似し、基本的には長軸に直行する辺に加工を施す。直刃主体(165点、19・21・22)。



作図と計測法



長さ×幅(大形)

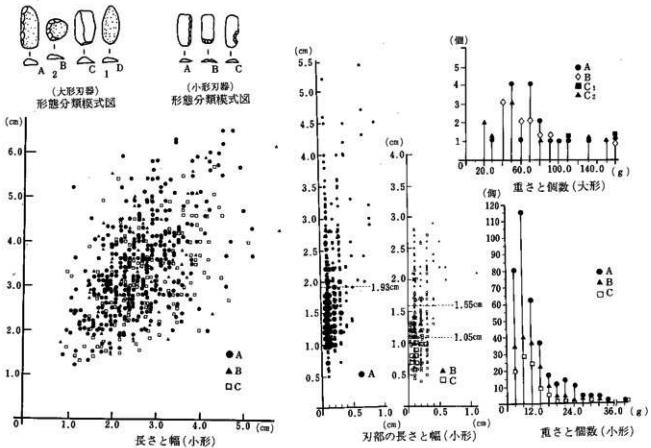


図170 刃器法量相関

C類—素材縁辺の一部に急斜度な剝離を施すもの。刃器形態は袂入状を呈し、内刃 (112点、23・24)。

1種 —形状は多岐にわたると予想されるが、観察が及ばず抽出不可。

以上の他、大形で分類不能なもの14点、核素材となるもの7点(1~3)が存在する。

機能的視点からの類別を行うと、大形で3類、小形で2類となる。観察は実体・走査電子顕微鏡を使用し、全ての大型と図示した小形に限り実施。倍率は×160・×1000までとし、大型では54点中20点に使用痕跡が確認できた。作図中スクリーン部分が痕跡の範囲に相当し、実線は線状痕の方向を、矢印は加工の範囲を示し、小形刃器中の四角形は痕跡確認部に相当する。写真は大型で×0.4・×3.3、小形で×3.3・×40で撮影している (PL70・71)。

大型1類—刃縁に添って45度未満の角度で線状痕が発達。幅0.06mm大の線状痕は集合して摩擦面を形成、表面積は平均71cm²を測定する。使用には切る作業が想定できる (A~D類18点、4~10、PL71)。

2類—刃縁に線状痕が発達。線状痕は

分類	属性	法量 (全体値)				計上数	刃部			
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		刃角	刃長 (cm)	刃幅 (cm)	
大形	A 1	8.2	4.7	1.1	77.5	1	30	6.5	1.1	7
	A 2 a	9.3	4.5	0.9	64.1	10	29	8.3	1.3	11
	A 2 b	9.6	5.6	1.1	85.2	6	28	8.1	1.5	6
	B	7.2	6.2	0.9	66.8	10	30	6.3	0.8	10
	C 1	9.7	7.5	0.9	108.4	3	23	6.5	2.3	4
小形	C 2	7.7	5.3	0.8	50.1	8	25	7.3	1.0	11
	D	10.2	4.7	1.0	86.8	6	31	8.3	0.8	7
	A	3.7	2.7	0.7	9.7	354	38	1.9	0.2	372
	B	3.2	2.8	0.8	9.1	162	44	1.6	0.2	165
刃器	C	3.4	2.6	0.7	7.7	94	—	1.1	0.2	112
	大	8.7	4.4	1.1	53.6	2	53	6.2	0.9	10
	小	—	—	—	—	0	—	—	—	4

表22 刃器属性

幅0.01mm大で面は構成しない。使用には被加工物を擦る、あるいは擦り切る作業が想定できる(A2a類1点、11)。

3類一刃部に線状痕(キズ状)が不規則に発達。幅0.01mm大で細かい。使用法の推定は困難。比較用資料の作成は現在のところ実施していない(D類1点、12)。

小形1類一刃縁から裏面(腹面)の方向にかけて光沢痕が発達する(A類、18、PL70-18)。

2類一刃縁がつぶれ、いよいよ光沢痕が発達する。(B類、19、PL70-19)。

小形1種、いわゆる使用痕跡を留める石屑については観察を実施していない。したがって加工ではなく、刃つぶれ・刃こぼれの痕跡を留める資料は除外している。

刃器中、背面の一部に基部を作出した資料を石匙として区別する。総数14点、堆積岩を主体。内訳は大形で凝灰岩7点・頁岩3点、小形でチャート4点である。大半が基部欠損資料で観察に適する資料は図中の4点である。技術形態的な分類は実施せず、機能的側面からの観察を行う。結果小形に使用痕跡が認められ、片側の刃縁に光沢痕が確認できた。発達度は弱く、範囲も非常に狭い。使用としては切る作業が想定できる(13-16、PL70-3)。

出土は遺構確認面及び検出面である。器種として特に顕著な集中は認められない。形態の類別に基づく遺構内出土資料は、大形刃器がA1類(SB590、SH1082・1182、SK3536)、A2類(SB581・599、SH550・544・567・750、SK2042・2244・2578、SQ501)、B類(SB558・590、SH1230、SK2329、SQ501)、C1類(SB566・581、SH549、SK2196)、C2類(SB110・557・566、SH528、SQ501)、D類(SB580、SH1220、SQ5) 、石匙大形が(SH558・560、SK2062、SQ501)、石匙小形が(SH511・558)出土している。総体的に大形はL8・M18に比較的同時期があり、小形刃器はL8・14、M16-18にまとまりが認められる。

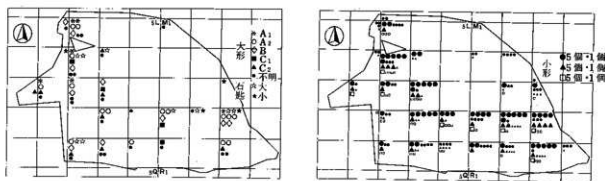


図171 刃器出土分布

セ 砥 石 (図版151-1-6、図172・173、表23、PL63)

研ぐ作業が想定できる資料。総数10点を収集。頻繁かつ最終的な用法に視点を置き、石皿との兼用例2点を包括する。堆積岩である砂岩に限定。製作法は2類認められ、素材の縁辺に整形加工を施すI類と、石皿の破片を利用するII類がある。形式上大小2種、大形のいわゆる置砥石(A類)と、小形の手持ち砥石(B類)に大別する。

形態的視点から類別を行うと、3類2細別。

I A類一楕円形・円形を呈するA1(2点、5)と長方形のA2(4点、1・2・4)。

B類一長方形を呈するもの(2点、6)。

II A類一方形を呈するもの(2点、3)。

機能的側面からの類別は、機能部を構成する幾つかの属性ごとに実施。砥面数では複数面のものが大部分である。B類は表裏2面を数えるが、側面部を機能面と認定すれば6面構成となる。砥面の状態は面を



作例と計測法

構成する1類(8点、1・2・4・6)
と溝を構成する2類(3点、3・5)
に区別でき、1類はさらに幅広い面
構成をとるa(1)と筋状の構成を
とるb(2・4)に2分できる。b

平均値	砥面数	面構成	材質	法量平均(全体値)				計上数				
属性分類	1	2	3	面溝	中細粒	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	計上数		
置砥	1	0	4	5	3	8	0	29.7	16.5	8.1	5,500	2
手持ち砥	0	2	0	2	1	0	2	7.1	4.1	1.1	45	2

表23 砥石属性

の単位は幅3.0~5.0cm(PL75-2)である。本遺跡中の磨製石斧大形・中形の幅(PL73-6・31)に該当する。2類の単位(PL75-5)に相当する器種は確認できない。観察は全てルーペを使用し、 $\times 5 \times 20$ とする。作図中平面矢印は運動方向を、断面矢印が単位幅を表現する。写真は1類を $\times 0.2$ 、2類を $\times 0.5$ で撮影している(PL75)。

大きさは計上数に限りがあるが、全体形では 10×6 cmを、砥面では 7×4 cmを境に2分できる。砥面構成の類別では、4 cm、7 cm、 $12 \text{ cm} \times 2 \text{ cm}$ で区分可能である。

出土はA・B、1・2の類別ごとに検討を行う。A(置き砥石)は遺構確認面及び検出面から出土している。G24資料はSK3398、L19はSH506、L24はSB558、T16はSB101からの出土である。B(手持ち砥石)は2点のみではあるがSB555埋土中から出土している。1類・2類の分布では当該資料から特筆すべき点は認められないが、2類が遺構に伴わない傾向がある。

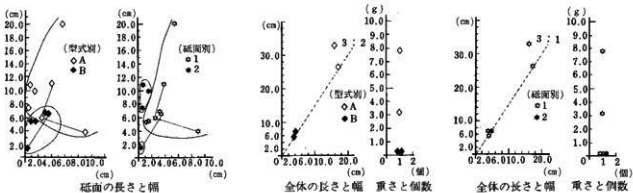


図172 砥石法量相関

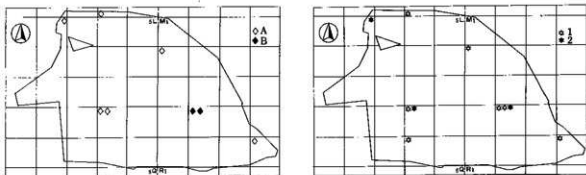


図173 砥石出土分布

ソ 石錘・土錘 (図版151-7~12、174・175、PL67)

紐掛けが予想される部位を有し、錘としての用法が想定できる資料。石製(Ⅰ種2点)と土製(Ⅱ種4点)、計6点収集。石製は堆積岩である頁岩を、土製は土器片(胴部上半)を利用する。製作法はⅠ・Ⅱ共に2者あり、類別は4類となる。

ⅠA-河原石を打ち欠き、後に切り目を入れるもの(1点、7)。

ⅠB-河原石に溝を刻むもの(1点、8)。溝は長短両辺から刻まれ十字に交差する。

II A—土器片に研磨・切り目を入れるもの(2点、9・11・12)。短辺に1対のa(9)と長辺に3対のb(11・12)に細別できる。

II B—粘土を成形し、焼き上げたもの(1点、10)

形は円形1点(9)、楕円形4点(7・8・10・12)、長方形1点(11)である。

機能的側面では特筆すべき観察結果は得られなかった。紐掛けの長さや重量は比例し、全周値で8cmを、重さでは20gを境に2分できる。II B・I A・I B・II A a・II A bの順に大小は序列する。

出土は収集数が稀少で状況の整理が難しい。分布図中、M17の2点はSB555、L 8はSH1111、L13はS H1182の確認面及び検出面である。

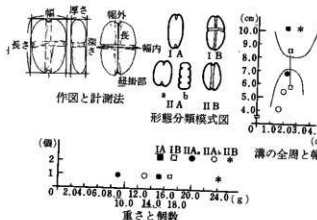


図174 石錘法量相関

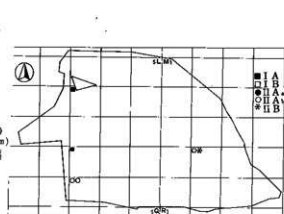


図175 石錘出土分布

タ 加工痕跡を留める石屑

剥片剥離を伴う道具製作に関し、遺跡内にて行われたであろう生産行為の結果を表現し得る資料を一括する。この場合、打製石斧等の大形品を製作する際に出現する個体群(A群)と石鏃等小形品を製作する際に出現する個体群(B群)を類別し報告する。ただし現在の研究水準では認識し得ない道具類型(α 群)の存在を否定するものではない。A群は1259点、B群は187点出土している。材質・技術的な視点から、A群中明らかに打製石斧製作に関連する資料は61点(素材剥片15点、失敗品46点)、刃器製作のそれは4点(素材4点)、磨製石斧のそれは19点(失敗品19点)である。いずれも各器種中に計上。これらの資料を除いた1175点がいわゆる大形の剥片である。B群では石鏃製作に関連すると想定される資料が157点(平均9.0g)、石錐のそれが6点(平均8.7g)あり、対象器種が想定できない資料が24点(平均11.2g)ある。各器種中に計上なし。器種が想定できずに加工痕跡を留める資料については、技術的に異質であっても小形刃器である可能性が残る。今回は機器による使用痕跡の確認が充分でなく、未確認資料として計上しておく。

チ 石剣・石棒 (図版152-154、図176、表24、PL68・69)

実作業の想定はできないが、全面を敲打・研磨し、刀剣・杖状・柱状に成形した資料を一括する。総数28点を収集。變成岩を主体とし緑色片岩10点・安山岩7点・凝灰岩4点・砂岩4点・頁岩2点・結晶片岩1点である。製作過程を確認できる資料はなく、器種面に確認される痕跡から推測すれば敲打成形・研磨の工程をとる。形態上刀剣形を石剣、杖状・柱状を呈するものを石棒とする。

石剣一両刃で鐮のあるものを剣(3点、2・3・12)とし、片刃で鐮のあるものを刀(1点、1)とする。



石棒—法量差に基づき小形を1類、
中形を2類、大形を3類とし、
頭部に柄を作出するものをA、
無頭をBとする。1類



総数6点。A類(1点、9)、B類(1点、4)、不明(4点、5~8)。2類総数8点。A類(3点、10・17)、B類(1点、15)、不明(4点、11・13~14・16)。3類総数10点。A類(1点、18)、不明(9点、19~24)である。

平均値	法量(全体値)				計上数	被熱	欠損状況						欠損部位							欠損率(%)							
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)			(上面)			(下面)			(縦位)			欠損部位											
							イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ	a	b	c	1	2	3	4		5	6	7	完			
石 剣	25.0 (10.3)	3.3 (5.0)	2.6 (3.5)	0.04 (0.03)	1 3	1	2	1	0	0	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	75
1 A	(8.2)	(3.5)	(2.2)	(0.09)	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100
1 B	30.3	4.2	3.8	0.6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
1	7.9	2.0	1.8	0.05	4	1	2	1	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	100	
2 A	22.0	8.0	7.3	1.48	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2 A	(12.2)	(7.6)	(6.0)	(0.7)	2	1	0	0	0	1	0	1	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100
2 B	35.6	9.1	8.9	4.5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2	(26.0)	(9.3)	(8.3)	(2.8)	4	2	1	1	2	0	1	0	0	4	1	0	0	1	0	0	2	0	0	2	0	100	
3 A	(23.6)	(9.5)	(8.8)	(1.2)	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100
3	(19.6)	(13.0)	(12.9)	(5.1)	9	3	6	2	1	5	0	0	5	0	4	0	0	0	1	3	0	5	0	0	0	100	

表24 石剣・石棒属性

()は欠損資料の平均値

機能的視点では、刃相当部にキズ等の使用痕跡は確認できない。観察は打製石斧に準じ、実測図右は研磨の方向を示し、写真は×1.0で切先・棟・柄頭相当部を撮影する(PL75-1)。

法量詳細については表24に示すが、大半が欠損資料で比較項に欠ける。幅(厚さ)の属性は器種の形質上偏差が大きく単純に比較値とならないが、5.0cm以下を小形、10.0cm以下(×2倍)を中形、それ以上を大形として類別する。

欠損状況は約8割を越える資料が破損しており、部位では45%が上下両端部を欠く7(2・3・5・11・12・14・20~22)と、上下いずれかを欠く1・4(6~10・13・16・18・23・24)の資料である。欠損の仕方では輪切状イが最も多く、上面で全体の57%、下面で62%を占める。

出土は遺構(墓坑)内出土のものが大部分で、形態的類別では石剣(SB555、SH552・1147)、石棒1類(SB559・595、SH18、SK2256)、2類(SB560・574、SH33・506・648・1074、SK2054、SQ501)、3類(SB555・594、SH16・504・510・672・1097・1155、SK2304)の出土となる。

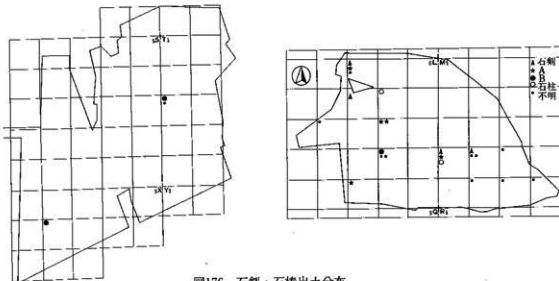


図176 石剣・石棒出土分布

ツ 小 結

(i) 原石・石核

剥片剥離には核素材と剥片素材の2者を設定する。後者は剥片の縁辺を敲打剥離し、全画的な剥片を効率的に得ることができ、最終的には失敗品として位置付けた一群「大型石鐮」を生成する。この第2種が元来の剥片剥離法なのか、大型石鐮を製作するために成立したもののなのか真意が問われる所だが、同法による石鐮の製作が認められるので剥離法の一つとして位置付けた。

※チャート原石とした2点は地山の転石であり、本来の剥片剥離用原石でない可能性が高い。

(ii) 剥片A類

挟み撃ちによる両極剥離痕ある剥片に対し、上下両端部の形態から6つに類別した。今回は類別の有効性や石器として抽出すべき属性を見出し得ず、剥片剥離法中にも同様な技術を含む場合があるので、石核関連資料として位置付け剥片A類とした。

※粘板岩製6点の存在は小形石器中に同材を見出し得ず、楔として抽出すべき資料かも知れない。

(iii) 石鐮

形態は無茎式の凹基・平基が中心である。有茎式は出現しているが、形態的に不完全。型式の情報伝達に不備が生じたものか否かは不明であるが、少なくとも当該期に有茎式が受用されていたことは確実である。問題はそれの無茎式に対する比率が、最も新しい後期中葉段階に設定したとしても、僅かに0.1%を下回っている点である。中葉といえ、利根川を越え広く関東以西にも浸透した時期であるだけに、千曲川流域での浸透の度合いは弱いことになる。形態は東北地方に主流を占める凸基式であるが、側辺・基部の作り出しにやや差異が認められる。剥片剥離法2者は石鐮製作の工程に反映される。企両値に達する剥片は製品化され、剥離法第2種に移行した大形の剥片核は「大型石鐮」へと変身する。この過程は失敗品1・2により明示することができ、大きさを大・中・小の3形をとる。衝撃痕・装着痕は殆ど確認できない。何故このような大形品を生産するのか。中期末葉に東北南部から関東地方にかけて、広くこの手の大形品が登場するが数量的な出現率は本遺跡に及ばない。むしろ晩期に移行して盛行するようで時間的なズレが生じる。

使用法としては先端の衝撃痕・欠損などを基準としたが、比較データがなく確実性に欠ける。装着痕は製品の約9割、「大型」では凡そ1割に認められた。また接着剤と考えられる付着物は製品の15%、「大型」では7%に確認できるが、装着法の差異と形態的類別に相関は認められなかった。以上から製品と認定した大部分が実用下にあったと考えられ、遺構内での存在が問題となる。機能部値の計測によって先端部長が1.0cmを下回る資料を再生の限界値としたが、有効性が問われる。また製品中には「大型石鐮」とは別に大形品が存在していることも事実で、その基部形d・eは新出である。

※機能部値とは重心を通る切断面を設け、先端部分を計測した値を指す。

(iv) 打製石斧

形態は短冊・楕形が中心である。分銅形は出現しているが数量的には稀少。全体数に対する割合は僅か

群集名	石 層							持続具 採集具										調理・加工具				漁撈具		祭祀具			加工品・有	
	原石	石核	剥片A	剥片B	剥片1	剥片2	剥片	石鐮	打製石斧	磨石	舟石	石重	多孔石	石籠	磨製石斧	刃磨石	砥石	石鏃	土鏃	石錐	石棒	丸石	玉類	大型	小型			
S B	6	74	29	449	407	167	2257	126	130	167	22	4	20	27	197	5	1	1	7	6	10	270	37					
S H	8	52	53	246	494	179	4665	223	123	130	19	1	19	17	230	2	1	1	10	9	7	337	39					
S K	0	13	2	58	64	36	267	29	32	29	1	1	6	4	22	1	0	0	3	0	1	20	22					
S Q	1	8	3	40	43	38	169	17	42	15	0	0	3	0	21	1	0	2	1	0	0	28	16					
遺構外	13	92	67	386	457	315	2016	290	344	157	17	5	20	38	264	1	0	0	7	11	3	520	73					
合計	28	239	152	1167	1465	733	9304	685	671	507	59	11	68	86	734	10	2	(4)	28	26	21	1175	187					

表25 石器遺構別出土数

() は土製品

0.1%以下であり、中期後半に広く普及する北関東地方とは様子を異にする。形態的類別に基づくA・Bを狭義の短冊と解するなら、半月形を呈するCは作りが簡単で形もやや変形している。撥形ではEが中心で、三角形を呈するDは少ない。胴部上半が括れる資料には撥形E・瓢形F・分銅形Gがあり、形態的には多様である。

使用法は刃部の磨耗痕を観察する。計測値から長さでA～EとF・Gが区別でき、括れ部をもつ資料が短い(深く刺さっていない)ことが、また幅ではD・Eが広範囲である(幅広く刺さる)ことが分かった。したがってA～C(短冊形)は刃幅が狭く・鋭利で鋭く突き刺す作業を、E・F(撥形)は刃幅が広く・鈍角で掘り起こす作業が想定でき、柄に平行して装着する土掘り具といえる。EとF・G(分銅形)は刃幅が広く・鋭利で浅く突き刺す作業を想定し、柄に直行して装着する土掘り具または土掻き具と予想したい。

※磨耗痕は複製石器の使用実験(装着法を変えて2000回以上)の結果と照合した。ただし土以外の対象物については比較成果はない。

(v) 磨石・凹石・敲石

形態は円形・楕円形が中心で、これに長楕円形(棒状)が加わる。円形は中期以来の主流形態であり、石皿に認められるA～D類とセットである。側面成形する2種はいずれも10%以下に留り、石皿E・F類とセット関係をもつ。円形(車輪形)を呈するタイプが既に22点存在し、遅くとも後期前半にはこのセットも成立している。

磨耗面は全体的に表面を活用するII類が中心であり、面に稜をもち2段階に使用するIII類も存在する。局所的使用によるI類とは別に、手首の捻りを伴う製粉運動が想定できる。これらは凹みの散しい中期的な石皿とは合致せず、あくまでも平滑に使用が続けられる縁付きタイプとの共業である。敲打面は5類に区別する。花弁状に発達した1類は置いて台石的に使用し堅果類を割ったものと想定でき、この時手に保持した敲具がアバタ状に発達した2類である。溝状に発達した3類は置いて台石的に使用し、主に石器の敲打・剝離に使用したと考えられる。すり鉢状に発達した4類は堅果類を短期的・連続的に割ると発達する痕跡で、限定した作業主対象物、使用を考慮する必要がある。大きさは長さで円形・楕円形・長楕円形が区別でき、厚さでは磨石と敲石が区別できる。磨石類の厚さは5.3cmを上回ることなく、使用に伴う最小値(使用の限界値)と考えられる。

※敲石中、1点だけ「鼠歯状の痕跡」をもつ資料がある。

(vi) 多孔石

円形と楕円形があり、加工・成形を伴う。中期に盛行するタイプの系譜上にある。石皿を活用する例はほとんどないが、石棒片を利用した1点がある。表裏以外の湾曲した側面にも敲打部(凹部)が認められ、すり鉢状の4類で、互いに重複はしない。加工を施す点、数が限られる点を加味するなら頻繁な使用ではなく、特別な時に集中して使用したものと考えられる。用途には堅果類の果皮割りを想定する。

(vii) 丸石

形態は球状を基本とする。半径10cmを超えるものを大形、それ以下を小形に区別する。大形の磨面は石皿と同様なII類、敲打部は多孔石と同様な4類で、スル・タタク作業が想定できる。一方、小形は完全な球状を呈するものが大半で、全面に良く研磨されているが、用途については今回想定が及ばない。

(viii) 台石・石皿

形態には方形と円形があり、全体を粗制成形したB・C類と皿部まで形成するD～F類がある。中期的なD類は重量があり大形で、皿部が使用により著しく窪んでいる。一方、後期になり盛行するE・F類は方形で縁を意図的に作出、両者が数量的に半々である点特徴的。E類は皿部が変形することなく、平坦が保たれる。脚付きの多い点も含めると、両者に用途差を考慮すべきかもしれない。

(ix) 石錐

形態は剥片の一部に僅かな加工を施すA類と棒状のD類が中心である。特に後者の出現率の高い点が特徴。製作は石錐と同法の剥離技術に基づく。全体を成形・加工するCとD、特にDについては石錐と同様な剥片から生産され、この点において剥片剥離法の目的的な器種として成り立っている。

使用痕は観察資料中77%の刃部に認められた。類型ごとに対象物の差異を見出すことはできないが、運動の仕方において違いがある。A類は刃部表面の左寄り、刃の左縁辺を挟り込むように使用し、対象物の穿孔でも穴部の拡大が想定できる。これに対しBとC類では裏面左よりを中心とし、痕跡は側面から表面にまで達し、対象物の穿孔(ねじ切り)が想定できる。D類は側辺部に明瞭な痕跡が発達し、肉眼でもこれと判断できる。全周の揉みきり運動にみる対象物の穿孔、穴の貫通作業と考えられる。表着については全資料確認できなかった。対象物には木と骨が想定でき、特にB類と骨、D類と木の結び付きが強い。

※使用痕の鑑定は、阿子島番1989「石器の使用痕」考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社のデータに比較対応させた。

(x) 磨製石斧

形態は全て定角式。刃形・頭部とも円形主体。大きさは4段階(大・中・小・極小)を設定するが、大形は少なく、小形(長さ6.0cm前後)が多い。製作は粗割り・敲打・研磨の工程をとり、大形と中形・小形の一部に製作途上の失敗品が存在する。小形の失敗品には粗割り・敲打の過程が認められず、大形と中形のそれには蛇紋岩以外の石材が用いられる。このことは石材の60%を占める蛇紋岩での製作が、原則的には居住域以外で実施されていたことを示し、仮に製品が流通品であった場合には、地元材を使用した製作の在り方が問題となる。成形研磨に用いられたと推定できる砥石が出土していない点も考慮する必要はある。

使用については大形に伐採斧を、他に加工斧を推定するが、形態類別に伴う痕跡差は確認できなかった。線状痕の観察では片面に激しく、刃に直行することから大部分が横斧であろう。線状痕の長さと同角では大形・中形と小形が区別可能である。対象物としては木が想定できるが、比較資料がなく不確実。

(xi) 刃器・石匙

形式には大形と小形がある。大形は横刃形と一括されるものを細別。すなわち背部に加工を施す2種(狭義の横刃)と素材に加工を施さない1種である。形態は前者の円形・楕円形、後者の方が基本。刃部は直刃と外湾刃が中心で、原則的に縁辺をそのまま使用する。ただし小形刃器2種(狭義の播・削器)は加工により刃部を作出する。いずれも前時期に系統を追うものであるが、製作法では打製石斧から独立した体系を示す。石匙も大形と小形に区別できるが、系統的には前時期と異なる。大形では技術形態的に「大形粗製石匙」とは異質で、小形は刃部に加工を施さない点で区別できる。

使用法には切る作業を中心とし、掻く・削る等がある。大形刃器に観察された使用痕跡は3類にわたり、軟質な対象物を切り取る作業が主体である。また1点硬質対象物の擦り切りがある。大形の石匙には使用痕は観察できなかった。小形には観察不十分だが1類で掻き・引く作業を、2類で掻き取る作業が想定でき、対象物は骨または木が予想できる。

※小形の刃器643点は、全て肉眼鑑定に基づく総数である。大形の刃器1種は、厳密には使用痕を留める類に属するが、今回は含めて計上した。石匙は資料数が稀少で傾向の指摘に留める。

(xii) 砥石

形態は縁辺部を粗く成形した方形が基本。置き砥石と手持ち砥石があり、機能部には面と溝の2者がある。使用は面に磨製石斧を、溝に骨角・木または垂飾品の研磨を想定する。石棒・石剣に対応する砥面はない。また方形の手持ち砥石がSB555から出土し、中期後半には登場していることが分かった。細粒砂岩が中心で使用痕が浅く、磨製石斧用では刃部の研ぎ直し程度が考えられる。

(xiii) 石錘・土錘

石製では切り目と有溝の2者があり、打ち欠きは発見されなかった。切り目は中期後半以降に登場し、SB555から出土した有溝は遅くとも後期中業には出現している。数量的には各々1点で、網の錘としては少なすぎる。土製品を製作しながら1点のみの出土であることも注意すべきである。また土器片利用の切り目1点も存在し、紐掛けの溝全周値は有溝十字の短周と一致する。

他に有孔の軽石製品と考えられる資料が1点確認されているが、遺存状態が悪く図化していない。

(xiv) 石剣・石棒

大きさには大・中・小があり、敲打・研磨の工程をとる。大形は中期後半にある「大石棒」あるいは「石柱・立石」を指すが、いずれも欠損品であるため一括した。中形は無頭で綠色片岩製の中期末から後期前半に盛行するもの。小形は後期前半以降に発達する石棒である。特に小形石棒はこの段階に粘板岩製で被熱を受けた欠損例が多く、当地域では初級形態である。石剣ではSH552坑底面から棟をもついわゆる「石刀」が出土し、この手の登場が後期中業段階にあることがわかった。資料は柄を小形石棒様に出したもので、その出自の一端を垣間見ることができる。

(3) 土製品・石製品・骨牙製品

ア 概 観

土製品は、土偶・小形土器が主体を占め、そのほかに錘・蓋・匙・玉・耳飾りがある。また土器片を利用した円板や鏝なども出土している。一方、石製品は、石棒・石剣に代表され、若干の玉類や研磨礫などもみられる。その他遺体に装着されたままの状態で、牙製腕輪・同垂飾や骨製のかんざしが若干出土している。本項ではこれらを品目別に分けて述べ、観察表などは文末に一括した。なお、土錘と石剣・石棒は石器の項に含めて扱っている。

イ 土 偶 (図版155・160、PL75~80)

100点出土している。このうち、4と30、29と57はそれぞれ接合したが、出土地点を異にするため分けて計算した。細目については、表41にまとめ、選別した58個体について図示している。

出土地点別にみると、何らかの形で住居址に係わっていたものは29点、その他では墓坑18・配石4・土坑1・遺物集中区4・遺構外49点である。住居址出土例のうち、床面直上からはわずか6点にとどまる。SB566・599では、それぞれ8点・4点とまとまっている。墓坑の場合も、遺体に密着していたケースは稀で、主として埋土中や上面配石から出土している。

時期別には、I期ないしII期に属するもの36点、III期以降の後期が55、不明9に分かれる。

I・II期は、中実の有脚立像で両腕を斜め上方に掲げたバンザイ形態をとるものが多い。文様は該期の土器に相応し、幅太の沈線による「U」字状・ワラビ手状の懸垂文、磨消縄文などがみられる。24・25もバンザイ形態だが、板状の小形品である。9は腰回りの形態と細沈線によって衣装を表現しているかのように見える。48は刺突文を多用しており、III期まで下るものかもしれない。41は中実の筒形である。頭部及び下部を欠損しているが、おそらく斜め上方に突き出した顔面をもち、脚部の表現は省略された立像であろう。縦位の沈線間に連続刺突を施している。

IV期以降になると中空の立像土偶が登場する。15・16・36・37を典型とすれば、筒状の首に板状の顔面がつき、イカリ肩で足を左右に踏ん張った形態をとる。中でも36は頭部高90mm・幅77mm・両腕幅203mmの大形優品である。頭部は立体的で、あたかも帽子を被っているかのような表現がみられ、顔面はやや丸みをもった三角形を呈し、横からみて胴部の前方に突き出した位置をとる。鼻から眉にかけての表現は隆帯

の貼り付けで行い、目および口は円孔を穿っている。両腕は斜め下方へ広げ、断面はほぼ三角形を呈する。16は頭部および胸部の左半分以下を欠く。腹のせり出したさまは、あたかも妊娠女性だが、乳房の表現はない。この時期には同形態の中実もみられる。3・4・39はイカリ肩で、40を介し1・44のようにナデ肩の山形土偶形態に近づく。文様は2ないし3条の沈線によって、腹部に三角文、背に渦巻文や流水文を施している。40の三角文は沈刻されており、13などからの変化が読み取れる。

VI期の6・7・14・46・56は、長方形の胸部に短い手足がつく板状土偶である。下腹部の連続渦文ないし山形文、背面の同心円文に特徴がみられる。

時期不明とした33・38・43は、正中線ないし凹点を施しただけの中実土偶である。33はSH1158の骨身に密着していた。腕部・脚部の表現を欠く31は、欠損部に直接頭部がつくと思われる。ほぼ同形態の35は沈線で脚部を表現している。いずれもIV・V期の墓坑埋土中から出土した。20は重厚な作りの大形土偶脚部である。足首と脚部右側面に刻み目をもつ隆線を施している。脚部の空洞は、焼成の便を考えた芯材の痕跡と思われ、中空土偶ではない。SB570の床面直上から出土している。

なお、3・8は表面に酸化第二鉄（ベンガラ）が付着していた。

ウ 小形土器（図版161・162、PL83・84、表42）

総数は80点である。土偶と同様、詳細は表42にまとめ、選別した37点について図示している。

出土地点別の内訳は、住居址24・墓坑15・土坑2・配石9・遺構外30点である。住居址出土例のうち、SB101・555・556・570では3点以上まとまっている。墓坑例の場合で人骨に密着していたのはSH977・1185のみで、他は埋土中や上面配石から出土している。

時期別には、I期が2点、III期3・V期12・VI期23・不明41点で、後期中葉に至って増えることが分かる。また、形態別にみると、鉢・釣手付き鉢・高台付き鉢・碗・皿・壺・双口壺・注口付き壺など、一般の土器以上に多様である。

I期の形態は鉢形または筒形で、文様は幅太の沈線による「U」字状やワラビ手状の懸垂文、磨消縄文などがみられる。III期になると、釣手付き鉢や注口付き鉢ないし壺が現れる。SH690の埋土中から出土した完形の19は、3ヶ所に翼状の突起がある。突起および注口の基部には、横方向の穿孔がみられる。V期には2のような壺形が、VI期になってその他の形態が加わる。8はSB555の埋土中から出土した双口壺である。全体に黒褐色で、胎土に粗粒砂を多量に含んでいる。器内は左右がつながっている。9は口縁に2単位の角状突起があり、先端に刺突をもち、内面には沈線が巡っている。10・14・22の高台は、実際のところ確かな時期は不明であるが、25の高台の文様とこれが出土した遺構の時期とを考えあわせて、VI期と推定した。遺構との関係から時期を推定したものは他に、11・13・17がある。16は胸部の上下に2条の沈線を巡らし、両者を紡錘形の縄文帯で結んでいる。18・20は口縁に向かって直線的に開く鉢で、内面に沈線が巡る。3も同類であろう。27は胸部中位が張り出して稜をつくる注口土器で、胴上半部に矩形の沈線を重ねている。31の内面底部には酸化第二鉄が付着していた。

エ 土製蓋（図版163、PL84）

図示した7点がすべてである。1・2・4は断面が弧状で、二孔一対の穿孔をもつ。3も二孔一対だが、断面は扁平で上面中央に円形のつまみがある。5・6は橋状のつまみが上面中央につき、7はそれが2ヶ所につけられている。これらは上面が無文で、端部に至るまで比較的丁寧な整形がみられる。それに対して8・9は刺突文である。8は棒状施文で放射状に押し引いており、9は器面に垂直につけている。10は扁平な円板に沈線をもつ鐙を巡らし、2ヶ所に突起がある。突起には上下2ヶ所に刺突がつけられてい

る。形態が1～9とは大きく異なるが、丁寧に整形されている上面を底裏とみることは不自然と考え、土製蓋に加えた。

オ 土製匙 (図版162、PL84)

4点出土している。1は、皿部に対して柄部が斜めにつけられている。皿と柄の先端が欠損しているため全体の寸法は分らないが、皿の幅はおよそ40mm、深さは12mmを測る。2は皿に対して柄が真直についている。柄の断面は円形を呈する。3は皿に柄がつく部分で欠損しているが、円形のみがつきそうである。こうした類例を知らないが、形態から考えて匙に加えておく。4は柄が完全に欠損しており、皿部のみ出土した。裏面には、2本単位の沈線間に縄文を充墳している。この文様はⅢ期通有のものである。

カ 土製耳飾り (図版164、PL85)

1・2は浴車形である。1は片面に刺突列、他面に沈線を巡らし、2は片面のみに短隆線に切られた沈線をもつ。1はSB566の埋土中から出土しているから、Ⅴ期ないしはⅥ期に比定されよう。4は片面が欠損しているものの、形態は3と同様で耳栓形を呈する。両面とも刺突が充墳されている。

キ きのこ状土製品・土製玉・土鈴・不明土製品 (図版163)

1はSH646の埋土中から出土した、きのこ形の土製品である。東北方面で出土する「きのこ形土製品」は、傘が薄くよれよれで茎が細くしかも曲っており、あたかも「きのこ」を写実的に表している感がある。それと比べれば、1は傘の上面が比較的平らで、茎が太いことから、「スタンプ形土製品」と言えるかも知れない。2はSH522の焼人骨片の間から出土した玉である。故人の装身具だったのであろうか。3は全体形がまったく分からない棒状土製品である。一端が「く」の字状に折れ、この頭部と思われる箇所には穿孔がみられる。棒状部の断面は円形で、先端は欠けている。4は土鈴の破片であろう。全体形は楕円球状と思われるが、内面は中空である。外面端部から、沈線による渦巻き文が描かれている。

ク 石製玉類・ヒスイ石核・剥片・有孔礫・研磨礫 (図版164、PL85)

1は表皮を残すヒスイ剥片、2は転石を利用した玉類製作途上の核である。これは整形・研磨・穿孔の過程を経て、4のような完成された玉製品となる。3は頁岩製の玉で、中央が穿孔され、周囲にも溝が掘られている。5は角礫岩で、中央にある穴は自然のもので、加工痕はない。6～9は蛇紋岩で、8・9の表面には研磨痕がある。

ケ 有孔土器片 (図版164、PL85、表44)

器面に穿孔がある土器片で21点出土している(表44)。いずれも胴部の破片であった。出土地点別にみると住居址9点、墓坑2点、その他は遺構外からである。住居址出土の9点中7点がSB555に集中していた。SB555は遺物の種類・量とも豊富な住居址で、唯一土錘が出土している。形態は、三角形・方形・多角形・円形など多様で一定せず、しかも縁辺を加工したような痕跡もみられない。ただ、割れ口の角や土器片の内外面が若干磨滅している。大きさは最大が12の53mm、最小で16の28mmである。また重さは最大が21.8g、最小5.1g、平均11.75gである。穿孔は1個がほとんどで、10のみ2孔開いている。穿孔の位置は中央の場合が多いが、3・10・12・17のように片寄るものもある。また、穿孔の内径の最大は6.0mm、最小2.0mmで、平均3.9mmだった。

用途については様々な解釈が可能ではあるが、以上に示した出土状況や形態上の諸特徴から考えて土

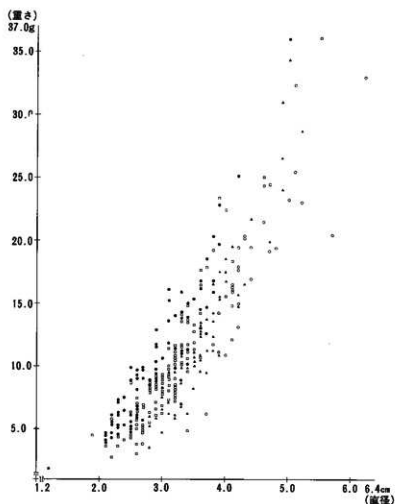


図177 土器片円板の重さ・直径(上)と出土分布(下)

(磨面率 ●=75%以上、□=75~50%、▲=50~25%、○=25~0%)

してみた。図177では、概して小形のものに磨り面の比率が高くなる傾向が読み取れる。L-8、L-14に分布が集中する。

以上の、出土状態・形態上の諸特徴から、「やすり」のような工具を想定したい。

サ 骨・角・牙製品

12点出土している。いずれも保存が悪く、取り上げ後の実測その他の記録はできなかった。出土地点別

器片鏝を想定しておきたい。

コ 土器片円板

(図版165、図177・178、PL74)

多角形や楕円形のものを含め、全体形がほぼ円形を呈することから土器片円板とした。総計293点出土し、このうち46点を図示し表43にまとめている。全体の中で、胴部の破片は283点と97%を占め、口縁は6、底は4点であった。出土地点別では、住居址122・墓坑34・配石遺構9・土坑10・遺物集中区11・遺構外107で、遺構外を含めても住居址からの出土が多い。欠損品を除き、直径の最大は46の62mm、最小が1の12mmで、平均は33.8mmである。また重さは、最大36.0g・最小2.7gで、平均は11.79gである。土器片の縁辺は打ち割り痕を留めるものがあり、磨り面は全周に対する比率から、100~75%のものをa、75~50%をb、50~25%をc、25~0%をdとして分類

に見ると、墓坑11点・住居址1点で、人骨に伴うものが圧倒的である。なかでも、SH805人骨は両手首にイノシシ牙製の腕輪を装着し、頭には骨製のかんざしを着けていた。また、SH1144も骨製のかんざしを、SH1208は左手首に牙製の腕輪をしている。SH1172は右手首の牙製腕輪に加えて、胸の上に牙製の垂飾りをのせていた。ほかにSH549・SH851・SH1136・SH1193でも牙製品が人骨に密着して出土している。唯一SB562でシカ角製品がみられた。

図版番号	法 量 (全体積)				打 痕				作 業				剥離技術	自然面 (素材)	石 材	分類	出土地点							
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	有無	形状	数	形状	剥離面有無	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					重量 (g)	遺構名	取上番号					
1	7.2	6.4	5.4	620	○	自然面	1	1	剥離面	○	○	2	103	7.2	6.4	1	○	河原石	チャート	1種	SH57	No.1		
2	7.2	7.3	5.4	450	○	自然面	○	○	100	2	○	○	3	90	6.2	4.1	1	○	○	○	○	○	SH59	55
3	5.6	6.7	6.4	300	○	自然面	○	○	90	2	○	○	3	85	5.6	4.6	1	○	○	○	○	○	SH59	20
4	3.3	4.8	2.7	122	○	剥離面	○	○	90	2	○	○	2	100	3.0	4.6	1	○	○	○	○	○	SH58	65
5	4.6	5.4	3.8	147	○	剥離面	○	○	1	1	○	○	1	78	4.0	4.2	1	○	○	○	○	○	L14	51
6	3.8	6.3	2.4	96.0	○	○	○	○	100	2	○	○	2	101	3.1	4.5	1	○	○	○	○	○	SH581	19
7	6.6	8.7	2.9	240	○	○	○	○	1	1	○	○	1	103	5.1	7.6	2	○	○	○	○	○	SH586	16
8	5.5	5.6	2.4	78	○	○	○	○	90	2	○	○	2	103	2.6	4.8	2	○	○	○	○	○	M13	58
9	5.0	6.4	1.4	71	○	剥離面	○	○	360	1	○	○	2	126	2.8	3.8	2	○	○	○	○	○	SK2321	8

表26 原石・石核一覧

図版番号	法 量 (全体積)				打 痕				剥 離				剥離技術	自然面	石 材	分類	出土地点				
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	有無	形状	数	形状	剥離面有無	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					重量 (g)	遺構名	出土番号		
1	3.3	2.5	1.7	17.8	○	剥離面	○	○	1	1	○	○	1	狭み打ち	○	チャート	II	O21	-		
2	2.4	1.6	0.8	3.5	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	V	SH452	No10	
3	5.9	1.9	1.2	16.6	○	自然面	○	○	1	1	○	○	1	○	○	○	○	II	SB586	87	
4	4.8	3.1	1.2	15.5	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	○	IV	SH1181	17
5	3.1	2.5	1.0	10.1	-	点	-	-	○	○	○	○	2	○	○	○	○	○	IV	S9-1D5	5
6	3.3	2.5	0.7	8.3	-	点	-	-	○	○	○	○	2	○	○	○	○	○	○	S IV	65
7	1.6	1.3	0.5	1.3	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	○	V	L12	56
8	1.9	1.6	0.8	2.8	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	○	V	L12	56
9	1.7	1.7	0.7	1.9	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	○	V	L12	56
10	3.1	3.2	1.1	13.3	-	点	-	-	○	○	○	○	4	○	○	○	○	○	IV	L24	2
11	2.3	2.5	0.9	6.2	-	点	-	-	○	○	○	○	1	○	○	○	○	○	○	SH585	37
12	2.7	2.1	1.0	6.1	-	点	-	-	○	○	○	○	2	○	○	○	○	○	○	SQ501	55

表27 剥片A類一覧

図版番号	法 量 (全体積)				打 痕				剥 離				剥離技術	自然面	石 材	分類	出土地点		備考			
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	有無	形状	数	形状	剥離面有無	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					重量 (g)	遺構名		取上番号		
1	4.7	4.1	1.3	26.6	○	自然面	1	120	○	○	○	○	1	直打	○	チャート	剥片1	L・L6	No26	} 集合 } 集合		
2	7.4	4.7	2.0	66.9	○	○	○	1	104	○	○	○	1	2, 2, 3, 6	○	○	○	剥片2	Z		-	
3	3.2	3.8	0.6	7.1	○	○	○	1	128	○	○	○	1	1	○	○	○	剥片3	S区		95	
4	3.5	3.4	0.7	6.3	○	○	○	1	135	○	○	○	1	1	○	○	○	○	○		92	
5	3.2	4.5	1.1	14.4	○	○	○	1	113	○	○	○	1	1	○	○	○	○	SH528		70	
6	4.7	3.3	0.8	15.1	○	○	○	1	114	○	○	○	1	1	○	○	○	○	○		70	
7	1.2	0.9	0.2	0.1	○	剥離面	1	110	○	○	○	○	1	-	-	-	-	○	○		Z	-
8	1.2	1.0	0.2	0.2	○	○	○	1	110	○	○	○	1	-	-	-	-	○	○		○	-

表28 剥片・砕片一覧

図版番号	法 量 (全体積)				微 能 形				剥 離				剥離技術	自然面	石 材	分類	出土地点		備考							
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	有無	形状	数	形状	剥離面有無	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)					重量 (g)	遺構名		取上番号						
1	3.8	2.6	0.9	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	凸	C	完	-	○	○	1	L-K5	No42			
2	3.9	2.9	1.1	11.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH53	70		
3	3.2	2.8	0.1	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	M18	23		
4	3.3	2.6	1.1	9.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH119	31		
5	3.6	3.0	1.6	10.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH826	3		
6	3.2	2.4	0.9	6.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH560	15		
7	3.0	2.2	1.2	8.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	凸	○	○	○	○	○	○	○	SH549	15		
8	3.6	2.6	0.8	6.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	凸	○	○	○	○	○	○	○	SH527	15		
9	3.0	3.1	1.8	20.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○?	○	○	○	○	○	○	○	○	SQ501	130		
10	3.8	2.4	0.5	7.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○?	○	○	○	○	○	○	○	○	L24	57		
11	3.8	2.3	0.8	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○?	○	○	○	○	○	○	○	○	L23	29		
12	3.3	2.4	1.1	6.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	L23	35	
13	3.7	2.7	0.9	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	M22	27		
14	3.4	2.3	0.7	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	L・K5	58		
15	3.4	(1.6)	0.3	(1.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH557	60	
16	2.6	1.2	0.7	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	凸	○	完	-	○	○	○	○	○	SH516	4	
17	2.0	1.7	0.5	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	L14	76
18	2.3	1.6	0.5	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH549	22	
19	1.9	1.6	0.6	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	SH1217	17	

表29-1 石鏃一覧

調査 番号	洪 量 (全保庫)			機 能 部							録音機 有無	発掘 有無	山形 有無	穴積 有無	土器 有無	石 材	分層	出土地点		備考	
	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	先鋒角 (度)	後方長 (cm)	前方長 (cm)	底長 (cm)	使用状態 有無								有	有		有
20	2.3	1.5	0.4	1.8	-	-	-	-	-	-	○?	-	平	C	完	-	チヤート	2	SH1111	92	
21	2.5	1.7	0.4	1.7	-	-	-	-	-	-	○	-	内	#	-	-	黒曜石	#	SQ601	161	
22	2.3	(1.7)	0.7	(2.3)	-	-	-	-	-	-	○?	-	内	#	-	-	黒曜石	#	SH566	256	
23	2.0	1.4	0.3	0.7	-	-	-	-	-	-	○	-	B-C	完	-	チヤート	#	SB566	257		
24	2.4	1.7	0.5	2.0	-	-	-	-	-	-	○?	-	平	A-C	-	-	-	#	SB671	23	
25	2.1	1.4	0.3	0.8	-	-	-	-	-	-	○	-	A-B	-	-	-	-	#	SB566	259	
26	(1.5)	1.4	0.4	(0.9)	-	-	-	-	-	-	○	-	平	A	口	-	-	#	SB555	465	
27	(1.0)	1.8	0.4	(1.3)	-	-	-	-	-	-	○	-	内	B	口	縦	-	#	SH296	97	
28	(2.1)	1.6	0.7	(0.8)	-	-	-	-	-	○	泡盛	平	#	口	縦	-	I A	SH742	4		
29	(1.8)	1.2	0.4	(0.6)	-	-	-	-	-	-	○	#	#	#	イ	-	-	#	SB563	18	
30	1.4	1.1	0.2	0.3	0.7	0.7	41	-	-	-	○?	○	#	#	染	横	-	#	SH555	34	
31	1.8	0.9	0.3	0.3	0.9	0.6	29	-	-	-	○	-	#	#	-	-	黒曜石	#	SB555	229	
32	(1.2)	1.4	0.3	(0.5)	-	-	-	-	-	-	○	-	#	#	A	口	チヤート	#	SB566	335	
33	(1.8)	1.2	0.3	(0.4)	-	-	0.1	1.1	-	○	泡盛	#	#	#	イ	横	-	I B	SB556	544	
34	1.6	(1.0)	0.2	(0.2)	0.8	0.8	33	0.1	0.9	-	○	平	B	口	縦	-	L K	L K	160		
35	2.6	1.1	0.4	0.8	0.9	0.7	34	0.1	1.0	-	○	#	#	染	-	-	-	#	SH556	28	
36	1.8	1.2	0.3	0.5	0.9	0.8	35	0.3	1.2	-	○	#	#	染	-	-	-	#	SH566	3	
37	(1.9)	1.3	0.4	(0.7)	-	-	-	-	-	○	平	平	#	イ	横	-	-	#	SH102	64	
38	(0.9)	1.9	0.2	(0.3)	-	-	-	-	-	-	○	#	平	A	口	-	-	#	SB621	77	
39	1.6	(1.2)	0.3	(0.3)	0.9	0.9	43	0.2	1.2	-	○	#	#	B	口	縦	-	#	SH296	62	
40	1.5	1.0	0.2	0.3	0.8	0.8	38	0.1	1.0	-	○	#	#	染	横	-	-	#	SK1316	2	
41	2.2	1.7	0.2	0.4	1.1	0.8	33	0.3	1.2	-	○	平	#	#	-	縦	-	I B	L K	130	
42	1.6	1.0	0.2	0.2	0.8	0.5	36	0.2	0.9	-	○	#	#	A	#	-	-	#	SH1129	3	
43	(1.1)	1.2	0.2	(0.3)	-	-	0.2	1.1	-	-	○	#	#	B	A	口	-	-	#	SB621	31
44	2.3	1.5	0.3	0.5	1.3	0.8	35	0.5	1.4	-	○	#	#	A	完	-	-	#	SH1111	58	
45	2.0	1.3	0.2	0.4	1.0	0.8	37	0.4	1.3	-	○	#	#	B	#	-	-	#	SB566	15	
46	1.7	1.3	0.2	1.7	0.9	0.9	42	0.4	1.3	-	○	#	#	#	#	-	-	#	SH566	367	
47	1.5	1.3	0.2	0.3	0.8	0.9	46	0.3	1.3	-	○	#	#	#	#	-	チヤート	#	SH1091	3	
48	1.4	1.2	0.2	0.3	0.8	0.9	43	0.3	1.1	-	○	#	#	#	#	-	-	#	SH24	10	
49	(1.2)	1.5	0.3	(0.4)	-	-	0.4	1.4	-	-	○	#	#	A	口	-	-	#	Z	144	
50	2.2	1.5	0.2	0.8	1.1	0.8	38	0.3	1.4	-	○	#	#	A	完	縦	-	I B	SB553	18	
51	(1.7)	1.3	0.2	(0.3)	0.9	0.9	36	0.4	1.1	-	○	泡盛	#	A-C	A	口	横	-	M 18	99	
52	2.9	(1.0)	0.3	(0.5)	1.5	0.8	21	-	-	-	○	#	#	B	B	口	-	#	SB289	67	
53	(2.8)	1.7	0.3	(1.1)	-	-	0.7	1.5	-	-	○	#	#	C	口	口	-	○	F	SH102	60
54	(2.0)	(1.1)	0.3	(0.6)	-	-	-	-	-	-	-	#	#	B	#	口	-	真砂	#	SH562	128
55	3.1	(1.0)	0.2	(1.0)	1.5	1.2	35	-	-	-	○	#	#	C	B	口	-	チヤート	#	SB566	276
56	1.7	1.2	0.2	0.3	0.8	0.8	36	0.4	1.0	-	○	泡盛	#	B	完	-	-	I B	L-1	7	18
57	1.8	1.3	0.3	0.4	1.0	0.5	32	0.5	1.1	-	○	平	#	#	#	-	-	#	L 7	25	
58	(2.2)	1.4	0.2	(0.5)	1.1	0.6	30	0.6	1.1	-	○	#	#	#	イ	-	-	#	SH562	74	
59	2.9	1.5	0.4	1.3	1.5	0.5	23	0.5	1.1	-	○	#	#	C	完	-	-	#	SB572	27	
60	2.1	1.5	0.2	1.1	1.6	0.6	22	0.6	1.2	-	○	#	#	B	#	-	-	#	SQ501	56	
61	(2.0)	1.7	0.4	(2.0)	-	-	0.8	1.2	-	-	-	#	#	C	A	イ	-	-	#	SB570	16
62	3.7	1.8	0.4	2.0	1.9	0.8	24	0.4	1.5	-	○	#	#	B	完	-	真砂	I B	SB553	37	
63	3.4	1.7	0.4	2.2	1.8	0.8	25	0.5	1.3	-	○	#	#	C	#	-	チヤート	#	MPX	76	
64	(2.2)	1.8	0.3	(1.0)	1.6	0.5	19	0.4	1.1	-	○	#	#	B	口	-	チヤート	I B	SB551	53	
65	2.1	(1.4)	0.3	(0.7)	1.1	0.5	26	0.3	0.9	-	-	#	#	#	口	縦	○	黒曜石	#	L-III	5
66	3.5	2.7	0.5	2.7	1.9	1.5	45	0.9	1.2	-	-	#	#	A	完	-	-	I B	L 9	7	
67	3.6	1.4	0.3	0.8	1.2	0.7	30	0.4	0.8	-	○	#	#	B	#	-	チヤート	#	SH751	5	
68	1.6	1.1	0.2	0.3	0.6	0.6	39	0.2	1.1	-	○	#	#	#	#	-	-	I B	SB566	258	
69	1.4	1.5	0.3	1.3	1.9	1.0	63	0.5	1.5	-	○	#	#	C	#	-	-	I B	SH488	10	
70	3.4	2.1	0.2	0.9	1.8	0.7	23	1.2	1.3	-	○	#	#	A-C	#	-	黒曜石	I B	SH487	7	
71	2.6	1.3	0.2	0.8	1.0	0.6	35	-	0.6	-	○	#	#	△	C	#	-	チヤート	II D	SB535	321
72	1.4	1.6	0.4	0.5	1.2	0.7	33	-	0.6	-	○	#	#	#	#	-	チヤート	#	SB555	395	
73	2.5	1.3	0.4	0.9	0.7	0.9	62	-	1.4	○	泡盛	#	#	B	#	横	-	#	L 3	82	
74	(1.8)	1.0	0.4	(0.6)	-	-	-	0.7	-	-	○	#	#	B-C	A	イ	-	#	SB562	76	

表29-2 石罫一覧

図録番号	法 量 (金体積)				製作技術	輪 胎 部				欠損状況	材質 (原料)	石材	分類	出土状況		備 考
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		長さ (cm)	幅外 (cm)	幅内 (cm)	深さ (cm)					遺構名	取上番号	
7	5.2	2.2	(0.7)	(18.5)	切目	4.0	0.2	0.1	0.1	欠欠	河原石	真砂	IA	SH1111	No.5	再生?
8	3.8	2.4	1.0	16.7	切目	3.0	0.3	0.1	0.2	欠	#	#	IB	SH685	119	
9	3.0	2.1	0.6	8.0	切目	5.0	0.4	0.1	0.3	#	上砂片利用	—	IIAa	SH1182	6	土壌?
10	4.8	3.0	1.2	23.8	磨溝	45.0	0.5	0.2	0.4	#	粘土粉砕所	—	IB	SB555	189	
11	4.2	2.0	0.8	12.6	(切目)	8.0	0.4	0.3	0.2	#	土砂片利用	—	IIAb	L23	—	
12	(3.1)	1.5	0.9	(7.3)	#	3.0	0.4	0.2	0.2	欠欠	#	—	#	L23	—	

表39 石錘・土錘一覽

図録番号	法 量 (金体積)				欠損状況	欠 損 状 況			素 材	製作技術	磁 熱	石材	分類	出土状況		備 考	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		(上面)	(下面)	(縦断面)						遺構名	取上番号		
1	(25.0)	3.3	2.6	(360)	(完)	—	—	—	不明	磨蝕	—	—	緑色片岩	石刀	SH552	No.1	河床石利用 汚加工? 石柱? 石製の所?
2	(5.2)	3.4	2.4	(70)	7	○	—	○	河原石	#	—	—	砂岩	石剣?	SB355	392	
3	(12.8)	5.8	4.2	(400)	#	○	—	○	#	#	—	#	#	SH1147	3		
4	30.3	4.2	3.8	430	完	—	—	—	不明	#	—	—	緑色片岩	1B	SH18	4	
5	(7.9)	4.2	2.3	(70)	7	○	—	○	#	#	—	—	粉砕岩	不明	W	6	
6	(7.1)	2.2	2.1	(60)	4・5	○	—	—	#	#	—	—	結晶片岩?	#	SB359	36	
7	(7.8)	1.6	1.4	(22)	#	—	—	—	#	#	—	—	粉砕岩	S-S-9	7		
8	(8.7)	1.9	1.5	(28)	#	—	○	—	#	#	○	—	燧石岩	SK2256	2		
9	(8.2)	(3.3)	(2.2)	(90)	1	—	—	○	#	#	—	—	緑色片岩	1A	SH590	8	
10	(13.1)	(8.7)	(5.9)	(905)	#	—	○	—	#	#	—	#	2A	SH1074	1		
11	(17.3)	(8.6)	7.4	(1,600)	7	○	—	○	#	#	—	#	#	2不明	SH566	62	
12	(13.0)	(5.3)	3.9	(480)	#	○	—	○	磨蝕	○	—	#	#	L-K 6	44		
13	(26.2)	9.4	8.3	(2,490)	4	—	—	—	#	磨・擦	—	#	#	SK2054	3		
14	(22.2)	6.5	6.3	(1,180)	7	—	○	—	#	○	—	#	#	SB874	12		
15	33.6	9.1	8.9	4,500	完	—	—	—	河原石	#	○	#	#	2B	SH33	3	
16	(38.4)	12.5	11.3	(5,830)	1	—	—	○	#	#	—	#	#	SH596	79		
17	22.6	8.0	7.3	1,440	完	—	—	—	#	—	—	#	砂岩	2A	SQ201	46	
18	(23.6)	(9.5)	8.8	(1,200)	1	—	—	○	不明	磨・擦	○	—	燧石岩	3A	SH1097	1	
19	(9.6)	(40.8)	28.4	(1,370)	7	○	○	—	#	磨蝕	?	—	安山岩	不明	Z	194	
20	(29.1)	15.6	14.5	(9,190)	#	—	○	—	#	磨・擦	—	#	#	3不明	SH10	49	
21	(16.1)	11.4	(6.0)	(3,940)	#	○	—	○	#	#	—	#	燧石岩	#	SB555	271	
22	(46.8)	18.2	18.3	(2,600)	#	○	—	○	#	#	—	#	安山岩?	#	SH604	14	
23	(14.8)	(13.7)	(2.5)	(3,000)	5	○	—	—	#	○	—	#	安山岩	#	SH672	4	
24	(17.6)	(18.0)	(9.7)	(3,400)	#	○	—	○	#	磨蝕	—	#	燧石岩	#	SH33	2	
25	(8.2)	2.6	2.8	(30.3)	1	—	—	○	#	○?	—	#	緑色片岩?	7	SB294	39	

表40 石棒・石剣一覽

河内 番号	遺跡番号	地区	系上番号	形態	出土状況	土器部位	集合体部位	文 様 そ の 他	集合関係	時期
1	SB101		SB 101-3a3	山形土偶	埋土2層中	肩から胸部	背がソケットの凹部	表面は山形文、背面は1ないし2半波線による流線文		V V
2	#	#	#-3a3	中央土偶	張り出し彫刻石直下	胴部	胴部と肩を結りつけ	肩から肩を離れて表現。目は流線、口は貫通孔		V V
3	SB552		SB 552-3a3		張り出し彫刻石直上	左胸部	肩で胸部と結りつけ	胴部の背面に2本の流線、赤色塗彩		V V
4	SB553		SB 553-3a3		張り出し彫刻石直上	背から胸部	乳房は結りつけ	背面に半円状流線による流線文	6%と塗彩	V VI
5	SB556		SB 556-3a3	中央土偶	埋土2層中	胸部		胸部付け側に流線を一筆させ、その上に流線流線をいれる		VI VI
6	#	#	#-3a7	#	#	胴部(背面)		背面に同心円文、胴部に流線文		VI VI
7	#	#	#-3a20	#	#	胴部		胴部に連続流文、背面に同心円文		VI VI
8	SH539		SB 539-3a3	埋土中	右胸部			胸部を一層する流線上に横線文1、赤色塗彩		V V
9	SB560		SB 560-3a7	#	#	胴部		腹、背、胴部にワキ字状文、縦流線が表裏逆現?		I II
10	SB561		SB 561-3a3							V
11	#	#	#-3a3		埋土上位彫刻石中	右胸部		胸部を一層する流線上に横流線		V V
12	SH563		SB 563-3a3	中央土偶	埋土1層上位	胴部		肩から流線と横線、肩の凹部に彫刻石と流線、口は横線		V III
13	SB566		SB 566-3a1	床面直上	肩から胸部	肩は結りつけ		表面は山形文、背面は3半波線による流線文		V V
14	#	#	#-3a1	埋土中	胴部			胴部に流線文、背面に連続流文、背面は同心円文		VI V
15	#	#	#-3a21	中央土偶	埋土1層中	胸部		胸部に流線		V V
16	#	#	#-3a25	中央土偶	#	肩から胸部	胴部は肩で結りつけ	流線は横線、胸部から背面にかけてタヌキ横線文		V V
17	#	#	#-3a40		埋土1層上位	胸部				V
17	#	#	#-3a39	中央土偶	床面直上	胸部		胸部に流線		V V
18	#	#	#-3a72		埋土1層上位	肩から胸部	胸部は彫刻石出土直下の溝中	胸部に流線、腰回りには連続横線文		II V
20	#	#	#-3a72		D埋土中	右胸部				V
20	SB570		SB 570-3a4	中央土偶?	床面直上	右胸部		足部と右胸部に溝口をもつ横線		V V
21	22	#	#-3a40	中央土偶	床面直上	胴部		肩から肩を離れて表現。目は流線、口は貫通孔、赤色塗彩		V V
23	SB571		SB 571-3a2		埋土中	胸部?				VI
24	SH564		SB 564-3a3		埋土1層中	胸部				VI
25	SH599		SB 599 3a4	#	#	右胸部	芯材の貫通孔	胸部付け線付近に流文		I I
25	26	#	#-3a46	#	#	胸部	肩付け部がツマミの凸部	腕位の流線と横文		I I
24	27	#	#-3a47	パンザイ土偶	#	左胸部	肩線跡も凸部	腕、背面に流線		I I
25	28	#	#-3a48	パンザイ土偶	#	肩から胸部	肩に芯材の貫通孔	背面に流線		I I
26	29	SH555	SH 555-3a7		配石直下	胸部				VI
30	SH645		SH 445-3a1	パンザイ土偶	埋土中	胸部		流線		I、II
31	SH695		SH 695-3a3	中央土偶	#	胸部		表面磨き		VI
27	32	SH787	SH 787-3a2	#	#	右胸部				III-VI
33	SH797		SH 797-3a3	パンザイ土偶	#	胸部		腹面から背面に流線		I II
29	34	SH808	SH 808-3a4	#	#	右胸部	肩の付け根跡りつけ	腕位の流線	6%と塗彩	I III-VI
30	35	SH819	SH 819-3a2	#	#	右胸部				V V-VI
26	36	SH912	SH 912-3a4	#	#	胸部				III-VI
37	SH998		SH 610-3a3	#	#	胴部?		肩は流線		~V
31	38	SH974	SH 974 3a3	#	#	胸部		腹面は5字状文、背面に流線		III~V
32	39	SH1021	SH1021-3a2	#	#	左胸部		流線		II II
33	40	SH1156	SH1156-3a5	人骨直上		左胸部		W字部へへ?腹線と横線、彫刻を流線が、背面に流線		IV VI
41	SH1182		SH1182-3a3	パンザイ土偶	人骨直下	胸部		流線		III~
34	42	SH1222	SH1222-3a1		埋土中	胸部		流線		I I
43	43	SK2256	SK2256-3a1	#	#	胸部		腹面は輪郭区内側に横流線、背面は流線文		?
44	44	SK2949	SK2949-3a2	パンザイ土偶	#	胸部		流線		III~
45	45	SK3512	SK3512-3a1	#	#	胸部?		横流文		?
37	46	SH17	SH 17-3a7	中央土偶	配石直上	背から胸部		本文に横流線		VI VI
36	47	SH1156	SH1156-3a3	中央土偶	芯石跡	胸部		胴部は半円状流線と横文、肩から肩を離れて表現、口は貫通孔		VI VI
48	48	SH601	SH 601 3a7	パンザイ土偶		胸部				I、III
38	49	#	#-3a49	#	#	胸部		彫刻跡		I、III
50	#	#	#-3a47	#	#	胸部				I、III

表41-1 土偶一覽

国庫 番号	遺物 番号	遺物 名称	地 区	取上 番号	形 態	出土状況	出土部位	接合部位	文 様 其 の 他	接合関係	所属 時期
	51	SQ601		SQ 001-000			右胸部	肩付けソケット凸部	沈線		I・II
39	52	遺構外	(B)S-3	S-12 No.1			胸部	肩かソケット凸部	沈線		VI
53	遺構外	(B)S-7	SH 22-06	中笠土偶			胸部		胸部は平行沈線。肩から鼻は隆線で表現		
49	54	遺構外	(C)S-9	S 9 No.2			右腕部	右腕部	表面は三角文様。背面は流木溝文		VI
55	遺構外	(C)S-9	S-05 No.8				胸部				
56	遺構外	(B)S-12	S 12 No.28				胸部		赤色地彩		
41	57	遺構外	(C)S-19	S-N04 No.1	半実円盤土偶		胸部		沈線間に凹線刺突文		III
42	58	遺構外	(C)Y-11	T-028 No.4	中笠土偶		右胸部		胸部に肩付、互裏に削代成		
43	59	遺構外	(C)X	X No.05			肩から腹部	肩付け横ソケット凸部	胸部に直小線		
60	遺構外	(C)X	X No.7	中笠土偶			胸部		胸部の平行沈線間に凹線刺突文		
44	61	遺構外	(E)G-23	SB 592-5019	山形土偶		右腕部	右腕部	表面は山形文。背面は流木溝文		V
45	62	遺構外	(E)L	L No.1			胸部		胸から肩にかけて縦溝。肩から鼻は隆線。目・口凹線		V
46	63	遺構外	(E)L-3	L 3 No.1			胸部	肩付け横ソケット凸部	胸部に4本の沈線		VI
64	遺構外	(E)L-3	L 3 No.61	パンザイ土偶			胸部		沈線		
47	65	遺構外	(E)L-3	L 3 No.60			右胸部	芯材の貫通孔	沈線		I
66	遺構外	(E)L-3	SKM9-No.1	パンザイ土偶			腕部		沈線		
67	遺構外	(E)L-7	No.42				右胸部	芯材の貫通孔			
68	SD594		SB 388-565			埋土中	右胸部	芯材の貫通孔	ワラビ手状彫造すん。縁沿溝文		
48	69	遺構外	(E)L-8	L-K5 No.4	パンザイ土偶		胸から腹部	肩かソケット凸部	表面は山形文。背面は流木溝文。背面は凹線刺突文		III
49	70	遺構外	(E)L-8	L-K5 No.28	パンザイ土偶		胸から腹部	肩かソケット凸部	表面は山形文。背面は流木溝文		
50	71	遺構外	(E)L-8	L-K5 No.29			左胸部	芯材の貫通孔	表面は直小線凹線文。背から鼻間は沈線		I
72	遺構外	(E)L-8	L-15 No.12				胸部				
51	73	遺構外	(E)L-8	L-L6 No.41			左胸部	芯材の貫通孔	沈線		I
52	74	遺構外	(E)L-8	L-L6 No.42			胸部		3本の芯材の貫通孔 腰周りに隆線、刺突文		I
33	75	遺構外	(E)L-11	L-D12 No.18	パンザイ土偶		胸から腹部	胸部にも肩付。貫通孔	直小線彫造文		II
76	遺構外	(E)L-13	L-112 No.18	中笠土偶			胸部				
77	遺構外	(E)L-14	L-K12 No.11	中笠土偶			胸部				
78	遺構外	(E)L-14	L-P11 No.6				胸部	芯材の貫通孔			
79	遺構外	(E)L-14	L 14 No.33				胸部		肩間に凹点		
80	遺構外	(E)L-14	L 14 No.34				右胸部				
81	遺構外	(E)L-14	L 14 No.25				胸部				
82	遺構外	(E)L-19	SH 003-5629				右胸部				
83	SH506		SH 506-5612			配石直上	胸部				
54	84	SH571		SH 571-No.1	パンザイ土偶		肩から腹部	肩付け横ソケット凸部	腕・腰・背面に沈線		II
85	遺構外	(E)L-23	L 23 No.23				胸部				
86	SD558		SB 558-5657			埋土中	右胸部		直小線彫造文		
87	遺構外	(E)M-13	M 13 No.45				胸部				
88	遺構外	(E)M-13	M 13 No.44				右胸部	芯材の貫通孔	沈線		
89	SH510		SH 510-5639	山形土偶	配石直上		左胸部		肩付で線を遺す		
36	90	遺構外	(E)M-18	M 18 No.01			肩から腹部	肩付け横ソケット凸部	下腹部・肩はハート文。刺突文		I
91	遺構外	(E)M-18	M 18 No.02				胸部				
56	92	遺構外	(E)M-21	M-C17 No.1			胸部		沈線。刺突文		VI
93	遺構外	(E)M-21	M-C19 No.1				腕部		腕はハート文。刺突文		I
94	遺構外	(E)M-22	M 22 No.9				左胸部		沈線		
95	遺構外	(E)M-23	M 23 No.10				胸部		背面に十字沈線文		
58	96	遺構外	(E)M-23	M 23 No.29	中笠土偶		胸部		肩から鼻は隆線で表現。口は貫通孔		V
97	遺構外	(E)M	M No.18	中笠土偶			腹部				
98	遺構外	(E)Z	Z No.62	パンザイ土偶			右胸部		沈線		
99	遺構外	(E)Z	Z No.61	パンザイ土偶			腕部				
100	遺構外	(E)Z	Z No.60				腕部				

表41-2 土偶一覽

図 番号	整理 番号	遺構番号	地 区	取上番号	形 状	土 器 部 位	出 土 状 況	文 様 そ の 他	胎 土	時 期	遺構の 時期
1	1	SB 101		SB 101-No.1	鉢	口縁~底	須出ノ器敷石直上	口辺部に平行波線	麻布、白色細砂混在	VI	V
2	2	#		# No.1	蓋	口縁~底	野原稲穂上		細砂多量に混在	V	V
3	3	#		# No.26	鉢	口縁~底	野原稲穂上直上		細砂混在	V	V
4	4	#		# No.27	甕	底	野原稲穂上直上		細砂多量に混在	V	V
5	5	#		# No.63	注口	注口	埋土3層中		細砂多量に混在		V
6	6	SB 108		SB 108-No.14	一	底	埋土中	麻布に網代模	細砂多量に混在		IV
7	7	SB 555		SB 555-No.90	一	胴~底	埋土中	渦巻文	麻布・細砂多量に混在	V	VI
8	8	#		# No.101	一	胴~底	野原稲穂上	格子状波線	黒色細砂多量に混在	V	VI
9	9	#		# No.114	一	胴~底	埋土2層中		黒色細砂混在		VI
10	10	#		# No.255	甕口	甕口	埋土2層中		細砂多量に混在	VI	VI
11	11	#		# No.291	甕	甕口	埋土2層1位	口辺内面に波線・2単位突起上に刺突	細砂多量に混在	V	VI
12	12	#		# No.478	高杯	杯底~脚	埋土2層中		白色細砂多量に混在	VI	VI
13	13	SB 559		SB 559-No.21	甕	甕口	埋土中		白色細砂・粗砂混在		V
14	14	SB 560		SB 560-No.51	高杯	杯底	埋土中		灰色細砂混在		II
15	15	SB 566		SH 696-No.24	鉢	口縁~底	埋土中		白色細砂・粗砂混在	VI	V
16	16	#		# No.36	高杯	杯底~脚	埋土中		黒色細砂混在	VI	V
17	17	#		# No.83	鉢	口縁~底	野原稲穂上		黒色細砂混在	V	V
18	18	#		# No.313	一	底	埋土中		赤褐色細砂混在		V
19	19	SB 570		SB 570-No.28	一	口縁~脚	埋土中		赤褐色細砂混在		V
20	20	#		# No.66	甕	口縁~底	野原稲穂上	口辺と底に2本の波線・網に斜線文	麻布	V	V
21	21	#		SH1031-No.1	一	底	埋土1層		麻布		V
22	22	SB 594		SB 594-No.34	鉢	口縁~底	埋土中		黒色細砂混在	VI	VI
23	23	SH 1235		SH1235-No.1	一	底	埋土中		黒色細砂混在		I-IV
24	24	SB 599		SB 599-No.15	鉢	口縁~底	埋土中	口辺内面に波線	白色粗砂混在	V	I
欠番											
26	26	SH 590		SH 590-No.2	一	底	埋土中		細砂混在		V-VI
27	27	SH 624		SH 624-No.1	一	底	埋土中		細砂混在		?
28	28	SH 632		SH 632-No.2	高杯	脚	埋土中		黒色細砂・粗砂混在		?
29	29	SH 695		SH 695-No.3	注口	甕口	埋土中	3箇の突起と注口上に穿孔あり	黒色細砂・粗砂混在	III	III
30	30	SH 824		SH 824-No.6	鉢	口縁~底	埋土中	口辺に平行波線	麻布・白色細砂混在	V-VI	IV
31	31	SH 835		SH 835-No.1	一	底	埋土中	波線	麻布		I-IV
32	32	SH 857		SH 857-No.1	一	底	埋土中	口辺内面に波線	石片散在	V	V
33	33	SB 568		SH 977-No.4	甕	甕口	埋土内人骨近く	逆「U」状突起内に縄文	麻布	I	III
34	34	SH 1066		SH1066-No.4	高杯	杯底~脚	埋土中		麻布	VI	VI
35	35	SH 1009		SH1009-No.1	鉢	口縁~底	埋土中		白色細砂混在		?
36	36	SH 1144		SH1144-No.1	鉢	口縁~底	埋土中		白色細砂混在		IV
37	37	SH 1185		SH1185-No.6	一	底	埋土内人骨近く		白色細砂混在		III
23	38	SH 1191		SH1191-No.1	鉢	口縁~底	埋土1層		細砂多量に混在	I	III
24	39	SH 1234		SH1234-No.3	鉢	口縁~底	埋土中		細砂多量に混在		I-IV
40	40	SK 2197		SK2197-No.2	高杯	杯底	埋土中	縄文	麻布・細砂多量に混在	VI	?
41	41	SQ 2		SQ 2-No.29	鉢	口縁~底		麻布に網代模	麻布	VI	?
42	42	遺構外 (C)S-10		S-Q 6 No.6	注口	注口	埋土2層下位	宛形文	白色細砂多量に混在	V	
43	43	遺構外 (C)S-20		S-R14 No.2	鉢	口縁~底					
44	44	遺構外 (C)S-20		S-R13 No.1	鉢	口縁~底	埋土2層下位				
45	45	遺構外 (C)S		S No.10	鉢	口縁~底			黒色細砂多量に混在		
46	46	遺構外 (E)L-2		SB 597-No.5	甕	甕口			白色細砂・粗砂混在		
47	47	遺構外 (E)L-8		L-K 6 No.2	甕	甕口	埋土内人骨近く		細砂混在		
48	48	遺構外		L-K 7 No.6	一	底	埋土層	麻布に網代模	白色細砂混在		
49	49	遺構外		L-8 No.6	一	胴~底			白色細砂多量に混在		
50	50	遺構外 (E)L-9		L-M 7 No.8	鉢	口縁~底	埋土層		黒色細砂混在		

表42-1 小形土器一覽

例番号	遺構番号	地区	取上番号	器形	出土部位	出土状況	文様その他	胎土	時期	遺構の時期
	51	遺構外 (E) L-14	L-M1 No.8	鉢	口縁-胴	III C層		磁器		
	52	遺構外 #	#	皿	口縁-胴	III C層		赤褐色細砂混在		
29	53	遺構外 #	L-N120a.6	鉢	口縁-胴		口沿に板状文・胴に線下に横線文	黒色粗砂混在	V	
	54	遺構外 #	L-O120a.7	---	---			緑-粗砂多量に混在		
	55	遺構外 #	L-P120a.2	---	底	さA層		白色細砂多量に混在		
	56	遺構外 #	L-14 No.37	鉢	口縁-胴	II D層下位		緑-粗砂多量に混在		
	57	遺構外 #	# No.9	---	底	II D層下位		黒色細砂混在		
	58	遺構外 (E) L-17	L-中層トロンチ	---	胴-底		肩下字部に2条の沈線	緑-粗砂混在		
23	59	SH 506	SH506 No.5	鉢	口縁-底	配石直上	口沿に沈線と動付付文	白色細砂多量に混在	VI	VI
	60	SH 506	# No.5	---	胴下字部	配石直上	横線文			VI
	61	SH 506	# No.8	---	口縁-胴	配石直上	円形浮文	白色細砂混在		VI
	62	SH 506	# No.14	---	口縁-胴	配石内	平行沈線	緑-粗砂多量に混在		VI
30	63	遺構外 (E) L-23	L-23 No.26	鉢	ほぼ完全	III C層		黒色粗-粗砂混在	VI	
31	64	遺構外 #	# No.27	鉢	ほぼ完全	III C層	内面底部に赤色顔料(ベンガラ)不著	白色粗-粗砂多量混在	VI	
32	65	遺構外 (E) L-25	L-T170a.1	釣手	変形	III A層		緑-粗砂多量に混在	III	
	66	遺構外 (E) L	L- No.26	---	底			白色細砂多量に混在		
	67	遺構外 #	# No.73	---	底	III A層上位	条線文	雲母混在		
	68	遺構外 (E) M-13	M-13 No.6	---	底	III B層	波線に刺代痕	粗砂多量に混在		
34	69	遺構外 (E) M-16	M-16 No.5	鉢	半変形			粗砂混在		
	70	遺構外 #	# No.38	鉢	胴-底	III A層		緑-粗砂混在		
	71	SH 510	SH510 No.1	---	底			緑-粗砂混在		VI
	72	SH 510	# No.8	---	胴-底			緑-粗砂混在		VI
	73	SH 510	# No.22	鉢	胴-底	配石直上		白色細砂混在		VI
35	74	SH 510	# No.26	鉢	口縁-胴	配石直上		緑-粗砂多量に混在	VI	VI
26	75	SH 510	# No.35	鉢	胴-底	配石内	平行沈線	磁器	VI	VI
	76	遺構外 (E) M-18	M-K100a.7	鉢	胴-底	III A層	沈線区画・刺文・流内面に刺代痕	白色細砂混在		
	77	遺構外 #	M-18 No.53	鉢	胴-底	III C層		赤褐色細砂混在		
27	78	遺構外 #	# No.54	鉢	口縁-胴	III A層	沈線	黒色粗-粗砂混在	III	
	79	遺構外 (E) M-21	M-21 No.44	---	底		波線に刺代痕	白色細砂混在		
	80	遺構外 (E) Z	Z No.78	---	変形			白色細砂混在		
81	SH 519	SH519 No.2	鉢	胴-底	堀土中		沈線・波線に刺代痕			VI

表42-2 小形土器一覽

番号	遺構番号	地区	取上番号	出土状況	土器片			穿孔		遺構の時期		
					形状	部位	径×厚 (mm)	重さ (g)	位置		数	内径 (mm)
1	SB 555		SB 555 No.39	埋土	五角形	胴	39×29	5.1	中央	1	3	VI
2	#		# No.62	張出し部敷石直上	三角形	胴	52×50	21.8	中央	1	3	VI
3	#		# No.286	P ₁ 横の床面直上	四角形	胴	48×45	23.4	1	4	4	VI
4	#		# No.101	床面直上	台形	胴	38×30	11.8	中央	1	2	VI
5	#		# No.293	P ₁ 横の床面直上	略門形	胴	37×35	9.3	中央	1	3	VI
6	SH 924		SH 924 No.2	埋土	円形	胴	27×28	5.4	中央	1	2	?
7	SB 555		SB 555 No.296	P ₁ 横の床面直上	三角形	胴	42×29	16.0	中央	1	4	VI
8	SH 1072		SH1072 No.2	埋土	四角形	胴	44×27	12.4	中央	1	4	III~
9	遺構外 (E) L	L	No.39		五角形	胴	38×27	6.0			1	6
10	遺構外 (E) L-23	L-23	No.24		六角形	胴	35×34	14.3		2	3/3	
11	遺構外 (E) L-24	L-24	No.40		五角形	胴	30×25	9.2	中央	1	4	
12	遺構外 (E) L-12	L-L11	No.15		四角形	胴	53×40	20.0		1	5	
13	遺構外 (E) L	L	No.3		五角形	胴	42×30	11.9	中央	1	5	
14	遺構外 (E) L-16	L-O13	No.13		台形	胴	35×32	9.3	中央	1	4	
15	遺構外 (E) L-25	L-25	No.23		略四角形	胴	30×28	6.8	中央	1	5	
16	遺構外 (C) S	S	No.73		三角形	胴	28×20	5.3	中央	1	4	
17	遺構外 (C) S-20	S-S13	No.15		三角形	胴	(24×18)	(4.7)		1	6	

表43 有孔土器片一覽 (図版掲載分)

番号	遺構番号	地区	取上番号	出土状況	土 器 片			遺 構 の 時 期	
					部位	直径 (mm)	高さ (cm)		磨面率
1	遺構外	(C) X	X- No6		胴	12	1.9	a	
2	SB 566		SB 566 No30	埋土中	口辺	21	4.1	a	V
3	SQ 501		SQ 501 No84		胴	22	5.4	a	I・II
4	遺構外	(B) X-3	X 3 No9		胴	21	4.0	a	
5	遺構外	(C) S	S No72		胴	23	5.1	a	
6	遺構外	(C) S	S No98		胴	23	6.1	a	
7	遺構外	(E) L-12	L 12 No48		胴	23	5.2	a	
8	遺構外	(E) L-14	L 14 No62		胴	22	4.7	a	
9	SB 555		SB 555 No246	埋土中	胴	25	6.1	a	VI
10	SB 557		SB 557 No17	埋土中	胴	30	7.9	b	IV
11	SB 570		SB 570 No38	床面下	胴	26	6.1	a	V
12	SH 518		SH 518 No5	埋土中	胴	24	5.3	a	V・VI
13	SQ 501		SQ 501 No85		胴	26	6.2	a	I・II
14	SK 3308		SK3308 No2	埋土中	胴	25	5.1	a	?
15	遺構外	(C) S	S No99		胴	22	5.5	a	
16	遺構外	(E) L-8	L 8 No21		胴	25	5.6	a	
17	SB 561		SB 561 No78	埋土中	胴	30	8.0	b	V
18	SB 566		SB 566 No312	埋土中	胴	31	9.1	b	V
19	SB 580		SB 580 No30	埋土中	胴	28	7.9	b	I
20	SH 770		SH 770 No1	埋土中	胴	28	8.1	b	?
21	SH 1072		SH1072 No2	埋土中	胴	27	5.7	a	III-
22	遺構外	(B) X	X No121		胴	29	8.7	a	
23	遺構外	(C) N	N No27		胴	24	6.5	a	
24	SB 101		SB 101 No57	埋土中	胴	30	8.3	a	V
25	SB 560		SB 560 No11	埋土中	胴	36	13.1	a	II
26	SB 566		SB 566 No66	床面直上	胴	32	9.4	c	V
27	SH 5		SH 5 No32	配石上面	胴	32	9.0	b	VI
28	SQ 501		SQ 501 No83		胴	35	11.3	b	I・II
29	SK 2265		SK2265 No2	埋土中	胴	31	8.9	b	?
30	SB 561		SB 561 No77	埋土中	胴	38	14.2	c	V
31	SB 566		SB 566 No85	床面直上	胴	39	15.3	c	V
32	SH 709		SH 709 No2	埋土中	胴	34	11.3	a	I-V
33	SH 717		SH 717 No1	埋土中	胴	37	12.6	a	I-V
34	SH 735		SH 735 No1	埋土中	胴	33	11.1	a	?
35	SK 2762		SK2762 No2	埋土中	胴	38	15.9	a	?
36	SB 566		SB 566 No32	掘出し部載石下	底	40	16.7	c	V
37	SB 566		SB 566 No71	埋土中	胴	41	16.2	d	V
38	SB 566		SB 566 No309	埋土中	胴	41	18.3	b	V
39	SH 782		SH 782 No1	埋土中	胴	42	17.9	d	I-IV
40	SH 1203		SH1203 No5	埋土中	胴	46	24.3	d	I
41	遺構外	(E) L	L No74		胴	37	13.7	c	
42	SB 560		SB 560 No4	埋土中	胴	47	19.8	c	II
43	SH 1185		SH1185 No6	埋土中	胴	43	20.3	d	III
44	SH 742		SH 742 No1	埋土中	胴	52	28.6	c	III-VI
45	SH 809		SH 809 No1	埋土中	胴	49	26.5	c	?
46	SB 581		SB 581 No15	埋土中	胴	62	32.8	d	III

表44 土器片円板一覧 (図版掲載分) (磨面率: a=100~75%、b=75~50%、c=50~25%、d=25~0%)

第4章 弥生時代

第1節 概観

弥生時代の遺構・遺物は、後期箱清水式のものである。遺物の多くはII C層に含まれ、遺構はIID層上面で検出された。

主たる遺構は、E区東側で確認された竪穴住居址1軒のみだが、IID層中では数ヶ所で火床が認められ、これはB区にまで及んでいた。遺物は、当該期の甕や他の破片で、復原できる個体は一つもない。また、石器その他の遺物は全く出土しなかった。

第2節 遺構と遺物

SB511 (図178)

位置：E区のM-I 8～L10にまたがってある。

調査経過：古代遺構面（II B層上面）の調査中、調査区の周囲に排水用の溝を掘削したところ、壁面に落ち込みが確認された。精査により、IID層上面から掘り込む竪穴住居址であることが判明したため、古代面の調査終了後、この部分を拡張し範囲をつかんだ。以後、埋土の状況を観察しながら掘り下げて完掘し、わずかに出土した遺物を取り上げ、実測・撮影を行なった。

埋土：10層に細分される。壁際には三角堆土がみられ、掘り込み内は全体的に水平堆積をしているから、人為的な埋め戻しは考えられない。詳細は、図の土層観察を参照されたい。

壁面：北西および南西側は削平してしまったため不明だが、全周を巡るものと思われる。北側で40cm、東側・南側で約25cm程度、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面：全体に締まりはないが、平坦である。火床が3ヶ所に認められたが、中央東寄りのものを除いて、これに伴う掘り込みはなかった。また、柱穴は確認されず、東から南にかけての壁寄りに溝状の浅い掘り込みが認められた。

炉：中央東寄りで確認された、掘り込みをもつ火床を炉と考えた。長径93cm、短径70cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。

規模と形態：長方形の竪穴住居址である。主軸をほぼ東西方向にもち、長径5.95m、短径4.80mを測る。

出土遺物：1は炉の西側床面から出土した甕で、口辺部から胴上半部にかけて波状文がみられる。おそらくは後期箱清水式期に伴うが、頸部に籐状文を欠くことから当該期の最終段階に位置づくものと思われる。2は埋土上層から出土した壺で、頸部付近の指頭痕や胴部の形態などから、5世紀の前半段階に比定されよう。明らかな混入品である。その他、波状文をもつ土器が数片認められた。

第3節 小結

今回の調査された遺構は、竪穴住居址1軒のみであるが、IID層中に見られた火床が、当該期の遺構であるとすれば、本遺跡のかなり広範囲に遺構が分布していたことになる。遺物の示す年代は古墳時代最初

頭ともいえる段階ではあるが、ここでは弥生時代最終末として扱った。いずれにせよ、遺構・遺物の存在は希薄であり、今回の調査区が当該期の集落の中心からは外れたものと思われる。

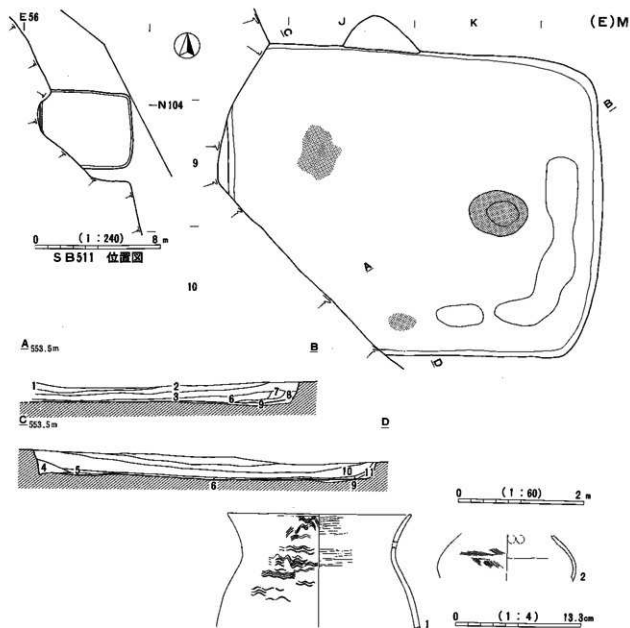


図178 SB511および出土遺物

- 土層 1 : 土壌化した粘土、砂利ほとんどなし、Feoの沈殿あり
 2 : 土壌化した粘土で砂利含む。Feoあり、黒く有機物多し。II層に由来する
 3 : 土壌化した粘土で砂利含む。2層より黒くないので有機物やや少し。よりII層に近い
 4 : 土壌化した粘土で砂利含む。黒味が強いが2層ほどではない角礫含む
 5 : 4層に黄色粘土ブロックを含む(4層+粘土ブロック)
 6 : 3層に黄色粘土小ブロックを含む(3層+粘土小ブロック)
 7 : 砂利を多く含んだ土壌化粘土のブロック(2層3層の中間くらい)
 8 : 6層に同質、粘土ブロックやや大
 9 : 黄色粘土主体の床下埋土、床直上に炭化物小片多い
 10 : 6層に炭化物焼土ブロック含む
 11 : 土壌化したII層の転落

第5章 古代以降

第1節 遺構

古代以降の遺構は、調査区全体に広がるが、大きくは東西の2地区に分けることが可能である。遺構の種類としては、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝、土坑等で構成されている。時期的には、第2節の遺物の説明で詳述するように、7世紀後半から11世紀前半までに取まり、一部近世がみられるが分布域を異にする。ここでは、それぞれの遺構について説明したのち、簡単にまとめを行う。

(1) 竪穴住居

SB1 (図版56・62、PL32)

SD8が中央部を縦断して築かれ、床面までは達している。平面は東西4.8m×南北5.5mを測るほぼ正方形である。埋土は分層できず短時間の埋没であったと考えられる。P₁~P₄が柱穴と考えられ、P₁・P₄には柱痕跡が認められた。他のピットは深さも形態も不規則で、柱穴とは考えられない。床は凹凸のある荒掘りの後、平坦にされ貼床されるが、堅い面はほとんどない。壁は比較的緩やかに立ち上がり、残存壁高は15cm程度である。カマドは東壁の中央を外側へ張り出すように築かれており、焚き口は壁のラインにくる。両側には軸の芯材と考えられる花崗岩が埋設されており、同様に支脚石であろう花崗岩が火床の中央に埋設される。なお、カマドの東延長上にあるP₅は、焼土を伴っており、煙道との関連が考えられる。遺物はほとんどが埋土中からの出土である。周囲には囲み込むようにSD13及びST14があり、関連が考えられそうである。

SB2 (図版56、PL33)

SX1を切り、SB1に隣接して存在する。北半分は検出面を下げすぎたため失ってしまい、南半分の調査のみとなった。東西4.3mのほぼ正方形と考えられ、壁は垂直に近く立ち上がり壁高20cmを測るが、柱穴等は発見されていない。施設としては西壁に張り出すようにカマドがあるが、わずかに袖石が残る程度で、焼土等もほとんど残っていない。

SB3 (図版56)

SD13を切って存在する。平面は東西4.7m×南北4.5mのほぼ正方形で、残存壁高20cmを測り、カマドは東壁中央に築かれる。埋土は分類できず、短時間の埋没であったと思われる。柱穴らしいピットはなく、カマドの脇に浅い皿状の掘り込みがあるのみである。床面は凹凸のある掘り方の上に貼床されるが、比較的軟弱である。カマドはやや壁を削り込み、煙道はないが2個一對の平石が立つように据えられ、煙道の一部と考えられる。袖ははっきりしないが、平石が張り付けられるように置かれている。火床部はやや前方部に広がり、支脚石が立てられる。遺物の大半は埋土からの出土である。

SB4 (図版56)

南半分を調査範囲外に、西半分を後世の擾乱で破壊されたため、全容は不明である。埋土は分層が可能

で、上層は砂をベースとした炭・焼土を含む土がレンズ状に堆積し、下層は粘質層である。このことから短時間である程度埋没した後、時間をおいて埋没が続いたと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり20cmを測る。床面は軟弱で、ピット等の施設はない。カマドは東壁に築かれ、緩やかに張り出す。火床と考えられる厚い焼土の中に支脚石が立てられる。袖ははっきりしないが、比較的大きく長い石が芯材として利用されている。遺物は埋土下層からほとんどである。

SB 5 (図版56、PL33)

ST22を切り存在する。平面は東西2.9m×南北2.5mの小振りなやや隅丸の方形である。埋土は分層が可能で、SB4同様の埋没過程を経ていると考えられ、上層は砂質土がレンズ状に入り、下層も粘質土が入る。床は、凹凸のある荒掘りの上に貼床されるが、柱穴と考えられるようなピットはない。カマドは東壁の中央に築かれ火床が残るのみで、袖等は残存していない。煙道と思われる掘り込みが外に延びる。遺物は埋土上層から少量出土したのみ。

SB 6 (図版56)

SB9、SD15によって切られるが、床面までは達していない。埋土は2層に区分でき、上層は粘質土が覆い、下層は炭化材や焼土を多数含む粘質土が床面まで広がる。平面は北側が調査区外に広がるため不明で、東西5.4mの隅丸方形と考えられる。床面は全体に焼けており、炭化材が散乱し廃絶時に焼失した可能性がある。柱穴はP₁～P₄と考えられ、P₁とP₄には柱痕跡が認められる。他にいくつか掘り込みがあるが、いずれも浅く断面は皿状であり、カマドの両側の掘り込みも同様である。カマドは上部をSD15によって破壊され、火床と袖の痕跡を残すのみである。遺物は上層からの出土が多く、床面からはわずかである。

SB 7 (図版57)

SD17に接するか新旧関係は不明である。当初検出が困難なためトレンチを中央にいった結果、中央部は不明である。平面は東西3.9m×南北3.8mのやや崩れた隅丸方形である。床面ははっきりせず、柱穴等の施設もみられない。カマドは西壁中央に構築されるが、煙道と思われる掘り込みと、火床があるのみである。遺物は埋土中から少量出土する。

SB 8 (図版57)

SK106とSD17によって切られ、北西隅は用地外となる。平面は東西4.8m×南北3.8mを測る隅丸方形である。床面は平坦で、南東隅には焼土や炭の広がる部分がある。ピットはいくつかあるが、いずれも浅く柱穴とは考えられない。カマドは東壁中央にあり、やや壁を掘り込んでいる。円形の火床が壁からやや離れてあり、その東にある小ピットは支脚石の抜き取られた跡と考えられる。遺物は南東隅の焼土等が分布する部分から多く出土した。

SB 9 (図版57)

北側は用地外にかかり、SB6を切り、SD15によって切られる。埋土は区分が可能でともに粘質土であるが、上層は炭化物を多く含んでいる。平面は東西3.6mをはかるほぼ正方形で、壁は垂直に立ち上がる。床面は平坦で、ピット等の施設はなく、中央に焼土の集中する地点がある。カマドは西壁にやや壁を削り込むように築かれるが、袖や煙道は残っており、支脚石と考えられる石が火床中に据えられ、袖の芯に

使用されたいし石が存在する。遺物は上層とカマド周辺から出土している。

SB10 (図版57)

ST32によって切られている。埋土は粘質土で床に近いほど焼土粒が多く混じる。平面は不整な隅丸方形で、東西2.8m×南北2.8mを測る。壁は緩やかに立ち上がるが明瞭ではない。床は南西部がやや高くなり、ピット等の施設は確認できない。カマドは東壁中央にやや外側を削って築かれ、壁からやや離れた部分に火床をもつ。遺物は埋土からまんべんなく出土している。

SB11 (図版57)

ほとんどが用地外にかかるため全容は不明である。床は深い荒掘りの上に貼って造られており、ピット等の施設は確認できない。用地外にかり床面上に焼土がみられるが、カマドかどうかは判断できない。遺物はほとんど出土していない。

SB12 (図版57)

単独で発見された。東西3.4m×南北3.4mのはほぼ正方形で、すでに調査時に上面を削平されて残存壁高も5cmと低く、埋土の状況も不明である。床面は堅くなく、カマドやピット等の施設もなく、わずかに北東隅に炭・焼土粒がまばらに分布しているのみである。遺物も埋土からわずかに出土したのみである。

SB13 (図版58)

東側を現水路によって破壊されており、その影響によって検出は困難を極め、確認に手間取り調査部分は少ない。平面は隅丸方形と考えられるが、規模は不明である。カマドは北壁中央にやや張り出して築かれ、火床部分のみ残り袖や煙道等は不明である。床面上にはピットがいくつかあるが、深さ等が均一ではなく、柱穴とは考えられない。遺物は床面上よりわずかに出土したのみである。

SB501 (図版58、PL34)

北東隅が用地外にかり、いくつかの柱穴によって切られる。平面は東西4.6m×南北4.4mの隅丸方形である。埋土は砂質土で床に近いほど焼土粒や炭粒が多い。床面は比較的堅く、炭や焼土粒が一面に広がる。ピットはいくつか検出されているが、本址に伴うものは、P₁～P₃のみで、他はいずれも柱穴とは考えられず、別な遺構であろう。また、南側には断面U字状の浅い溝溝が巡る。カマドは北西隅よりやや南に下がったところにあり、煙道は長く延びず緩やかにあがってしまう。袖ははっきりしないが、芯にしたと思われる石が火床の両側に残る。遺物は埋土及び床面から出土している。

SB502 (図版58)

SA501に平行する柵列によって切られる。平面は東西3.9m×南北4.1mを測る隅丸方形である。埋土は3層に分けることができるが漸移的である。床面は平坦で、施設等はみられない。カマドは東壁中央に削り出して構築されるが、袖や煙道は残っており火床のみが残る。遺物は埋土中より多く出土した。

SB503 (図版58、PL34)

ST504によって北東隅を切られている。平面は東西3.3m×南北3.5mを測る方形で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は粘質土で3層に分けることができたが漸移的である。床は荒掘りの上に貼ってあり比較的

堅いが、ビット等の施設はみられない。カマドは西壁中央に削り出して構築され、煙道は大きく外へのびる。袖は痕跡が残るが明瞭ではない。遺物は埋土より少量出土している。

SB504 (図版58、PL34)

平面は東西2.9m×南北3.3mを測るほぼ正方形で、埋土は分層できず多数の礫を含む。床面は平坦で、ビット等の施設等はみられない。カマドは東壁中央に壁を削り出して築かれる。袖は明瞭でなく痕跡のみ残る。遺物は埋土から少量出土する。

SB506 (図版58)

SB507の中につくられ、大部分が調査範囲外にかかるため全容は不明である。床ははっきりせず施設等も検出できない。遺物は埋土中より出土する。

SB507 (図版58)

SB506により埋土を切られるが、床面までは達していない。SB506同様全容は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は45cmを測る。遺物は埋土中より出土する。

(2) 掘立柱建物 (図179・180)

ST 1 (図版59、PL40)

ST 2と重複するように検出された。柱配置は5間×4間で、東西南北にほぼ軸を揃えている。柱穴は一辺30～40cmの方形や、直径40cm前後の円形で、残存する深さは15～40cmを測る。柱痕跡はほとんどで確認されており、柱が残存している例もある。埋土は砂質土がはいる。ほとんど遺物はないが、時期的には近世と考えられる。

この辺一帯の小字は地藏堂にあたり、実際に堂があったという伝承もある(図181)。元禄11年(1698年)書上帳の諸堂一覧には、明科町内に33の堂の存在が記され、その中の北村には地藏堂の名もみえる。内容は4間×3間の建物の存在、本尊としては地藏立像、付属して石仏があったと記されている。また元禄6年(1693年)の麻績組諸色指出帳には、地藏堂の堂守として同町光にある浄土宗宗林寺の弟子尼僧の女道心妙貞の名が記されている。現在堂は存在しないが、本尊であったとされる地藏菩薩立像が近隣の旧家に保管されており、同じく石地藏もやや離れた道沿いに移されている。

本建物は内陣と外陣に分けることができ、仏教的な色彩が強い。この配置は天台宗や浄土宗の堂にみられることが多く、本例が古文書に記されている地藏堂が浄土宗であることから、同一であった可能性があらる。

ST 2 (図版59)

ST 1に重複するように検出されたが、柱穴の切り合い等はなく前後関係は不明である。柱配置は2間×1間で、東西に1間延びる可能性がある。柱間間隔が長い、柱穴の規則的な配置、柱痕跡が残ることから掘立柱建物とした。掘り方は方形あるいは円形でほとんどに柱痕跡がある。柱は角柱と考えられる。掘り方の形態はST 1に類似しており、ほぼ同時期と考えられる。

ST 3

SD 7の埋没後に構築される。柱配置は2間×1間で、柱間寸法は南北120cm、東西100cm前後で、主軸



图179 A~D区掘立柱建物配置 (1:500)

～40cmを測り、柱痕跡がいくつか認められる。埋土は焼土粒をわずかに含む砂質土で、遺物はほとんど出土していない。

ST 9 (図版61)

ST10と重複するが、柱穴の切り合い関係はなく、新旧関係は不明である。柱配置は不規則であり、柱痕跡のある柱穴の存在より建物址として調査した。東隣の柱穴は不明であるが、東西に長い3間×2間の総柱建物と考えられる。柱穴の掘り方は円形で、直径20～40cmと一定していない。柱痕跡はわずかにみられる。埋土は粘質土で、遺物はほとんど出土していない。

ST10 (図版61)

ST 9と重複するが、新旧関係は不明である。ほぼ東西に軸がふれる柱配置2間×2間の方形の建物で、柱間寸法は120cmと150cmの二種がみられる。柱穴の掘り方は円形で直径20cm前後と小形である。埋土は粘質土で、柱痕跡はわずかにみられる。遺物の出土はない。

ST11 (図版61)

ST 5と重複し、柱穴の切り合いから新しいことがわかる。柱配置はやや不規則であるが、南北に長い3間×2間の総柱建物である。柱間寸法は東西は130cmと一定しているが、南北は110cmを基本として南端のみ150cmである。柱穴の掘り方は直径20cm前後と小形の円形で、柱痕跡はみられない。埋土は粘質土で、遺物はほとんど出土しない。

ST12 (図版61、PL35)

ST 8と重複するが、柱穴の切り合いは関係はなく、新旧関係は不明である。柱配置は2間×1間の東西に長い建物である。柱間寸法は南北は180cmと一定しているが、東西は170～210cmと不規則である。柱穴の掘り方は円形で直径は30cm～40cmを測る。柱痕跡はいくつかみられ、埋土は泥質土で、遺物の出土はほとんどない。

ST13 (図版61)

ST 7に隣接して単独に存在する。柱配置はやや不整な1間×1間の方形に近い。柱間寸法は130cmである。柱穴の掘り方は円形で直径25cm前後である。埋土は粘質土で柱痕跡もみられず、遺物の出土はない。

ST14 (図版62)

SB1を囲むように存在し、掘立柱建物址と礎石の可能性のある配石で構成される。SB1との新旧関係ははっきりしないが、その配置から竪穴住居から掘立柱建物への建て替え、あるいはその逆が考えられる。また同時に存在したと考えた場合は、柵としての機能を持っていた可能性がある。柱配置は5間×4間で、やや東西に長い側柱建物である。柱間寸法は、東西1m前後と一定で、南北は不規則である。柱穴は直径15～30cmのほぼ円形で、柱痕跡はほとんどみられる。埋土は粘質土で、遺物の出土はない。礎石状の配石は、15cm前後の平石が柱穴と対になるように置かれており、南部分には栗石状の小礫の集中地点がある。これを礎石建物と考えた場合、掘立柱建物よりやや軸を西にずらしていると考えられ、柱穴の上部に配石が乗ることから、やや後出すると考えられる。

ST15 (図版61、PL36)

単独で存在する。柱配置は、南東隅の柱穴が大きくずれる不整な1間×1間の方形である。柱間寸法も180～210cmと一定していない。柱穴の掘り方は直径40cm前後の円形である。埋土は粘質土で、柱痕跡もなく、遺物の出土もみられない。

ST16 (図版63、PL36)

ST17・18と重複しており、柱は埋土の違いにより区別した。新旧関係は切り合いより一番新しいと判断した。柱配置は一部が調査範囲外にかかるためはっきりしないが、3間×3間の方形と考えられる。柱穴は、円形を基本としているが明らかに方形を意識したものもある。大きさも直径30～70cmとまばらであり、細い柱痕跡がいくつかに残る。埋土は粘質土で、遺物の出土はない。

ST17 (図版63、PL36)

ST16により切られ、南部分が排水路によって破壊されているため、規模等は不明である。柱穴は円形で径70cm前後を測る。柱痕跡は見当たらない。

ST18 (図版63、PL36)

ST16により切られる。南部分が排水路にかかり全体の規模・構造等は不明である。柱穴は径40cm前後の円形で、一つに柱痕跡が認められる。遺物は内黒土師器及び須恵器甕片が少量出土する。

ST19 (図版63)

切り合い関係はなく、西辺は排水路にかかり全容は把握できないが、東西1間×南北2間の建物と想定される。柱間寸法は南北2m、東西4.6mを測る。柱穴は円形と方形があり、いずれも径15～20cmの柱痕跡をもつ。遺物の出土はみられない。

ST20 (図版63)

東部分は用地外にかかるため全容は不明である。建物は柱穴が円形と方形の2棟が重複していると考えられる。時間的には、前者が新しい。

ST21 (図版63)

SK113に切られ、柱配置はやや不整な正方形をした1間×1間である。柱穴は径25～40cmのほぼ円形で、柱痕跡や遺物等は検出されていない。

ST22 (図版64)

SB5によって柱穴の一つが切られる。2間×3間の南北に長い建物と考えられ、柱間寸法はほぼ2mと一定である。柱穴は円形や方形が混在し、規模も一定ではない。いくつかの柱穴の底部中央に、柱痕跡と考えられる小さな落込みがみられる。遺物は少量の土師器長胴甕片が出土したのみである。

ST23 (図版64)

SD9・19を切って存在する。2間×2間の方形の建物で、柱間寸法は南北3m前後、東西2m前後と一定である。柱穴はいずれも方形で一辺50～70cmを測る。柱痕跡も全ての柱穴に認められ、方形と円形の

二者が認められる。遺物はわずかに土師器片が出土する。

ST24・25・26 (図版64・65)

ST24・25は重複して存在し、いずれもSD15を切っている。柱穴に切り合い関係はなく、新旧関係はつかめない。いずれも2間×2間の正方形であり、同じ位置への建て替えとも考えられる。

ST24の柱穴は円形と方形が混在しており、一定ではない。柱間寸法は2m前後と同一で、いくつかの柱穴には柱痕跡が残る。

ST25の柱穴は方形と一定で、一辺40～50cmを測る。しかし柱間寸法は140～220cmとばらつく。いくつかの柱穴に柱痕跡が認められる。

ST26の柱穴は、径30cm前後の小さな円形である。柱間寸法をみると、東西は160cmと一定で、南北は北部が200cm、南部は140cmと狭い。ST24～26では、いずれも遺物は出土していない。

ST27 (図版65)

SD7と重複しているが、新旧関係は不明である。柱配置は2間×3間で北側に庇がつけられる。南北に長い建物である。東西の柱間寸法は、160cmとほぼ一定であるが、東西は不規則である。柱穴は円形を基本としており、底部分は直径40cmと小さく、他は40～80cmと比較的大きい。柱痕跡は、いくつかに認められる。

ST28 (図版65、PL36)

ST38に切られる。柱配置は2間×2間の、南北に長い側柱建物である。南北の柱間は150cm前後とほぼ一定であり、東西は160～190cmと一定ではない。柱穴は円形を基本とするが不規則で、直径80～120cmと一定しない。柱痕跡は認められない。遺物は、須恵器の小片が出土したのみである。

ST29 (図版65、PL36)

ST28と軸をそろえて建てられ、ST38と重複する。柱配置は2間×3間の、南北に長い不定形な側柱建物である。柱間は一定しておらず、130～190cmを測る。柱穴は、直径40～80cmで円形を基本としており、埋土は砂質土で、柱痕跡は認められない。建物の柱穴から須恵器の高杯・杯B・杯Aが出土している。

ST30 (図版64)

柱配置は1間×1間で、単独で検出される。柱間は380cm前後とほぼ一定で、ややゆがんでいる。柱穴は、直径40cm前後とほぼ一定で、埋土は粘質土で柱痕跡は認められない。

ST31 (図版65)

SA3に隣接して検出された不整形な1間×1間の柱配置を持った建物で、柱間は210cmと一定である。柱穴は、方形を基本としており、一辺40～60cmを測る。

ST32・33 (図版66)

ST32はSB10を切り、ST33に切られて建てられる。柱配置は一部を欠落するが、3間×3間の東西に長い不整形な側柱建物である。柱間寸法は160～200cmと一定していない。柱穴は、30cm前後の円形で、柱痕跡は認められない。埋土は、砂質土で、遺物の出土はない。

ST33はSD22の上部にST32の柱穴と接するように切る。1間×2間の側柱建物である。柱間は一定し

ておらず、柱穴はST32同様30cmと小さい。

ST34 (図版66)

単独で存在する。柱配置1間×2間の南北に長い建物である。柱間寸法は240cmと一定である。柱穴は、円形あるいは長楕円形で、大きさも一定ではない。埋土は粘質土で、遺物の出土はない。

ST35 (図版66)

ST36によって切られる。柱配置は、やや不規則な2間×2間の南北に長い建物で、總柱になる可能性もある。柱間寸法は、160~260cmと一定していない。柱穴は、方形を基本として一辺40~70cmと不規則で、柱痕跡は認められない。埋土は粘性の強い砂質土で、遺物の出土はない。

ST36 (図版67)

ST35を切る、柱配置が不規則な2間×3間と考えられる南北に長い側柱建物である。柱間寸法は、80~200cmと一定しておらず、柱穴も方形を基本としているが、一辺20~40cmとまちまちである。柱痕跡は認められず、埋土は粘質土で遺物の出土はない。

ST37 (図版67)

他の掘立柱建物址から離れる、柱配置が2間×2間の東西に長い側柱建物である。柱間寸法は、東西190cm、南北160cmとほぼ一定である。柱穴は円形を基本としているが、直径15~40cmと不規則で、柱痕跡はほとんど認められない。埋土は砂質土で、遺物の出土はない。

ST38 (図版67)

ST28・29と重複しており、その中で最も新しい。柱配置は1間×1間の不整形な方形の建物址である。

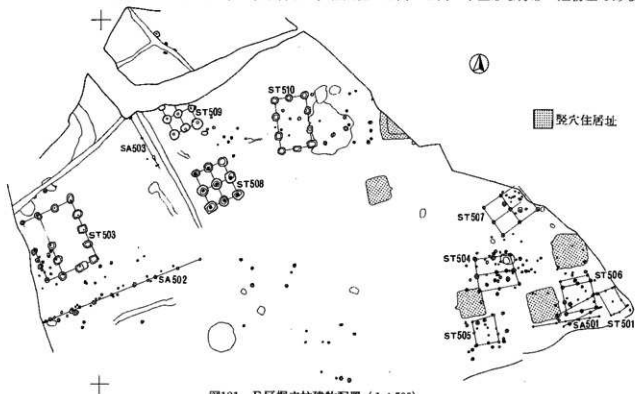


図181 E区掘立柱建物配置 (1:500)

柱穴は円形を基本としており、直径40～70cmと一定していない。埋土は礫を含む粘質の砂質土で、遺物の出土はない。

ST501・502・504・505・506・507 (図版67・68・69、PL37)

調査範囲の東端に、直径10～30cmの小規模な柱穴群が集中する。埋土は砂質土で、遺物の出土はない。検出時に掘立柱建物をいくつか想定したが、不規則にまとまる場合が多い。時期的には、周囲に存在する竪穴住居(SB501～503)の埋土を切っていることから、11世紀末以降と考えられる。5棟の掘立柱建物を想定したが、柱穴の組合せは更に何通りか想定できそうであり、SA501とした槽址も建物址になる可能性はある。

ST503 (図版68)

柱配置3間×4間の南北に長い西側に庇が付属する、今回調査された中で、最も大形の建物址である。柱穴は、北西部分に建物部と庇部の双方みられない部分があるが、当初から掘られていなかったと考えられる。柱間寸法はほぼ200cmと一定である。柱穴は円形か方形と不規則であるが、建物部が径100cm前後と大形で、庇部は60cm前後と小形である。柱痕跡はほとんどに認められ、柱穴の規模に比較して細いのが特徴的である。埋土は粘質土で、遺物は須恵器片が若干みられる程度である。

ST506 (図版70、PL37)

北東隅の一部は安全勾配を確保するため、調査を実施できなかった。柱配置が2間×2間のほぼ正方形の総柱建物である。柱間寸法は、南北が240cmと東西200cmとほぼ一定である。柱穴は不整な円形で、直径80～140cmを測る。柱痕跡はほとんどに認められ、太い角柱と思われる。埋土は粘質土で、遺物は出土していない。

ST509 (図版69)

ST508と軸方向を同じくして並列して建てられる、ほぼ同規模の2間×2間の正方形の総柱建物と考えられる。やはり一部は、調査区域を分割したため調査できなかった。柱間寸法は、東西160cmと南北240cmとほぼ一定である。柱穴は円形で、直径70～150cmと一定していない。柱痕跡は全てに認められ、円形の太い柱である。埋土は粘質土で、遺物の出土はない。

ST510 (図版69、PL37)

SQ501を切って構築される。東西に長い2間×3間の筒柱建物である。柱間寸法は、南北210cm、東西190cmとほぼ一定である。柱穴は長方形あるいは方形で、柱痕跡は認められない。埋土は粘性の強い砂質土で、遺物の出土はない。

(3) 槽 (図179・180、PL38)

槽址と考えられる柱穴の列は、西地区で3、東地区で3列検出されている。いずれも小さな柱穴の連続で、中には掘立柱建物のようにまとまらない配置を、槽址とした例もいくつかある。

西地区 (A～D区)

SA1・2はSD3・4と重複しており、時期的には最も新しい。ともにほぼ南北方向をむき、直径15cm

前後の柱穴がほぼ一定の間隔で直線的に配置されている。江戸時代に記録のある地藏堂の可能性のあるST1と、埋土、柱穴の大きさ、方向が共通していることから、それに付属した柵であった可能性が強い。ただし柵が2列同時に巡らされていたのか、一列のみで時期が前後した建て替えかは判断ができない。

SA3はST20と重複しており、時期的には新しい。柱穴の間隔は一定ではない。周囲にいくつか柱穴が存在していることから、掘立柱建物の一部分の可能性もある。

このほか、SD11と平行するように一列、SD13南側に溝に沿うように弧状を描く一群があり、ともに柵址の可能性が高い。それらは、平行する溝と同様に区画を意図していたと考えられる。

東地区 (E区)

SA501はST501・506と重複するように存在する。間隔、柱穴の規模ともに不規則であり、さらに周囲に多数の柱穴群が存在することから、掘立柱建物の一部であった可能性が高い。時期的には、竪穴住居址より新しく、11世紀以降である可能性が高い。

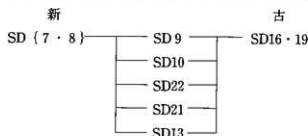
SA502・503は柱穴の配置・規模等が規則的であり、SD501・503と平行して配置される。溝と同様区画の意図をもっていた可能性が高い。なお、SA502は周囲に柱穴群があり、建て替えが考えられる。

(4) 溝 (図182・183、PL38)

調査区域全域に渡って、検出されている。比較的距離をもった掘り込みを溝として取り上げる。それらは、規格性がある場合とない場合の二者があり、後者は自然地形と密接に関係していることが多い。調査区が大きく東西の二地区に分けられるため、それぞれについて配置等を中心にみて行くことにする。また調査区を分割したため、同じ溝に対して異なる番号が付された場合があり、SD {7・8} のように表記する。

西地区 (A～D区)

溝の配置は、第182図に示す通りである。切り合い関係からみられる時期差は次のようになる。



SD {7・8} については、全ての重複する遺構を切っており、その掘り込み面から考えて極めて新しい時期と思われる。

調査区西側に集中するSD2～4・25は幅15mの中に集中し、同じ南北方向に揃っている。幅も一定ではなく、底面も不規則である。また、いずれも埋土は礫を含む砂質土と共通している。この部分が、地形上最も低い部分であり、自然流路の可能性が高い。ただし、その部分に人為的に溝をつくった可能性も否定できない。またSD1・26はそれらと合流するようであり、何らかの関係があった可能性がある。これらの時期であるが、遺物がほとんど出土しておらず、特定できない。

SD13は、直径20mほどの円形に巡っており、周囲に柵状の小柱穴群をもつことから、内部の竪穴住居址と密接な関係がある区画を目的としていた可能性が高く、出土した遺物も時期的に隔たりはみられない。他の溝についてみると、その方向に規格性があり、ほぼ東西に巡らされる一群 (SD9・10・11・12・15・

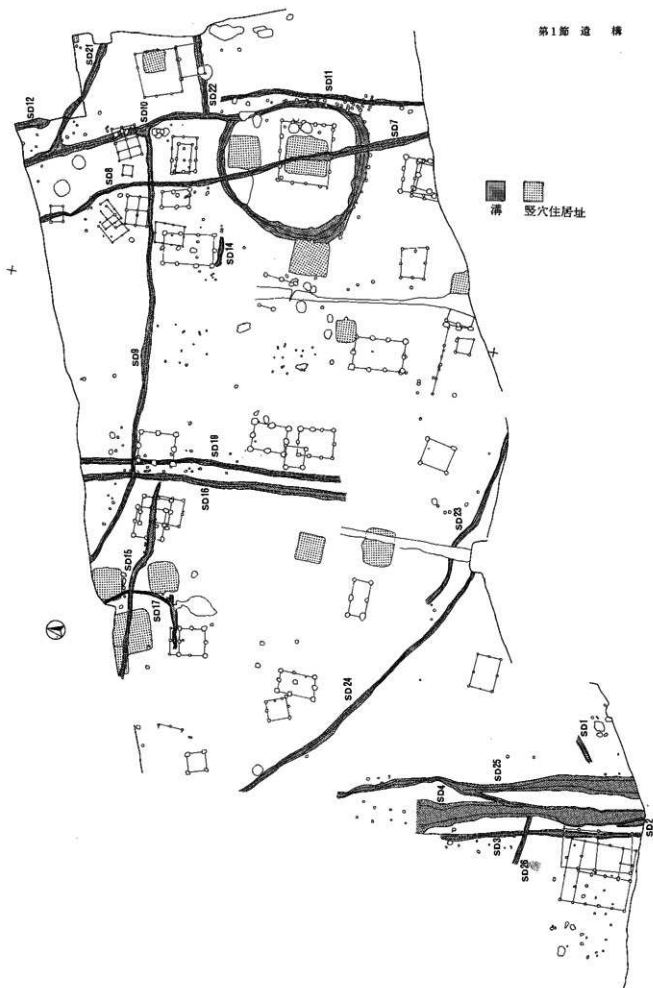


图182 A~D区溝配置 (1:500)

16・22) とほぼ北西から南東の方向に巡らされる一群の二つに分けられる。前者についてみると、SD9と10・22は交差する際に、反対側に突き抜けた痕跡はなく、両者の存在が意識されていたと思われる。しかしSD16・19はSD9に切られており、時期的には若干遅ると考えられる。配置をみるとSD9は西側で、SB8を避けるようにやや北に曲げられており、意識された可能性がある。同じようにSD10も、SD13と合流するようであり、これらの溝が堅穴住居址(SB1・2)と同じ時期で関連をもっていた可能性が考えられる。後者の群もSD21かSD10と合流しており、方向の違う二群が存在するが、同時期に計画的に配置された可能性が高い。なお、SD16・19とSD23・24のように平行している例は、掘り直し、あるいは他の溝以上に区画する必要があったためと考えられる。後者と考えたばあい、集落を他と区別する機能をもった溝の可能性があり、SD16・19が初期の段階で、SD23・24が新たに集落が西側に拡大したために必要となった溝と若干飛躍的ではあるが推定できる。なお、このほかの溝であるが、小さな住居小群を区画すると考えたSD13を除くと、他は集落の中を細分する溝と考えられる。

東地区 (E区)

溝の配置は図183に示す通りである。それらのいくつかは、調査の際の不手際により全容をつかんでいない。重複関係からの時期差は新-SD502、古-S507のみである。

大きくとらえると、SD501・502・503はその方向と配置より、一つの区画を目的にして築かれた可能性がある。SD501・503は全容がつかめていないが、それぞれ東西、南北に延びていたとすると、ST503を区画していたと考えられ、SA502・503も溝と同様な目的をもっていた可能性が高い。

SD509・510はその接する部分が突き抜けたりしていないため、意図的に交差させられたと考えられる。SD504・505は浅く、細く全容がつかめず、性格は不明である。

(5) 井戸 (図版70、図184、PL39)

SX501は、東地区のSA502・503の区画された部分の南側に検出された。古代面では80cmほどの深さま

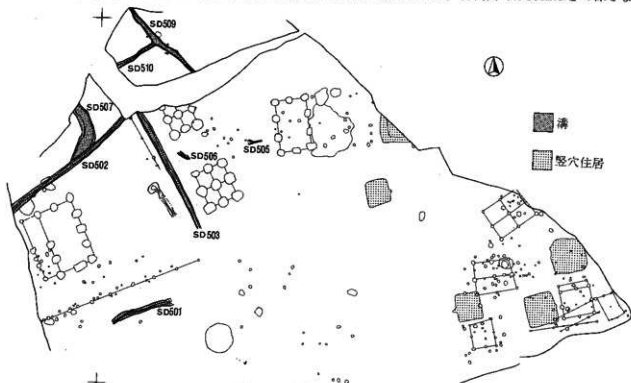


図183 E区溝配置(1:500)

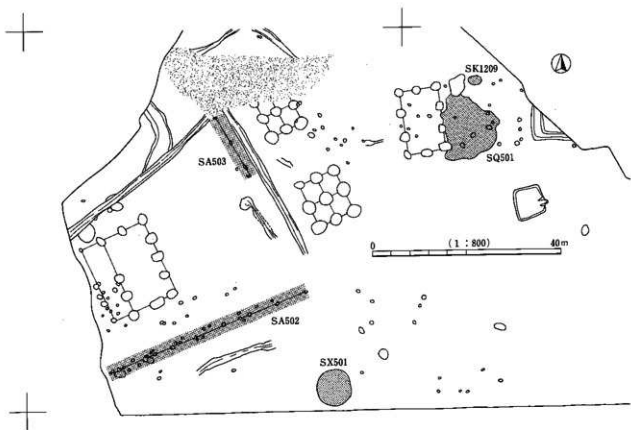


図184 E区柵・井戸・馬墓・遺物集中区(1:800)

で調査をし井戸と認識できたため、下面の調査は縄文面で分けて実施した。遺物が埋土中及び底の部分より出土している。須恵器の破片がほとんどであり、埋没中あるいは使用中に入り込んだと考えられ、意図的に設置されたとは考えられない。期的には8世紀後半が最も多い。

掘り方は、上面は直径380cm、下面は直径160cmの円形で、やや中央を凹めて掘られており、検出面からは390cmを測る逆台形を呈する。下面では、横方向に幅15cmの板を一辺80cmの方形に組んでいる。断面図を見る限り井戸の直径はその程度と思われる。

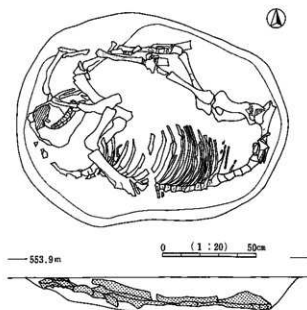


図185 SK1209馬骨出土状態

(6) 馬墓(図184・185、PL39)

SK1209はSQ501に隣接して存在するが、切り合い関係はない。長軸136cm、短軸98cmを測る長楕円形の掘り込みである。底面に接して、頭を西に向け、背骨を大きく折り出げながら頭と後足が接するように、明らかに埋葬の姿勢を取って一体分の馬が埋められている。ただ捨てたというより、手厚く葬られた状況を示している。副葬、あるいは馬に装着された遺物、また埋土にも遺物はなく、期的な特定はできない。馬については第7章に詳しく述べられている。

(7) 遺物集中区 (図184)

SQ501 (図184)

SB507とST508の間に存在し、ST510とSK1210に切られる。上面形ははっきりせず、浅い掘り込みがあり中央がやや凹み、6m×7mの遺物の分布範囲を遺構の範囲とした。遺物は、須恵器が多いが土師器もみられ、食膳具・貯蔵具・煮炊具と生活用具が多いのが特徴であり、SB507の埋土から出土した遺物と同一個体が多い。性格としては、祭祀との係りより、生活用具の捨て場と考えられ、今回は残っていないが、他の材質の生活用具も本来はあったと考えられる。

SX1

SD7に切られており、SD13に囲まれた中の一角に位置する。SD13・SB2との新旧関係は不明である。平面形は不明であるが10cm程度の浅い掘り込みがある。遺物は、須恵器・土師器がみられるが、細片が多い。やはりこれも生活用具の捨て場と考えられる。

(8) 土坑ほか (SK、SQ、SX)

ここで取り上げるのは、調査の際に明瞭に掘り込みが認識でき、掘立柱建物等の遺構と認識できず、SKと呼称した一群が最も多い。SQとした一群は、遺物が何らかの理由で集中して出土した遺構に付した名称である。このほか、SXも用途が不明の遺構に単に掘り込みのみのSKと区別するために付された名称である。いずれも用途のはっきりしない遺構である。なお、井戸についてはSX501、馬藁についてはSK1209、土器廃棄場についてはSQ501と番号が付されているが、これは検出の際の呼称であり、ここでは別項(7)遺物集中区で説明してある。また遺物の出土もほとんどなく、出土したとしても混入と考えられる場合がほとんどであり、時期もはっきりしない。西地区に186基、東地区に241基みられる。個々に取り上げて説明することはしないが、小規模な柱穴が多数あり、掘立柱建物の一部が多いと思われる。

第2節 遺物

古代以降の遺物は、大部分が土器であり、そのほとんどが食器である。以下、簡単な分析を行い、遺構ごとに記述していく。

(1) 土器の分類及び記述の方法

器種分類は、松本平で行なった本センターの分類に従う(朝長野原埋文センター：1990)。焼物の種類は便宜的に以下のように記述して説明する。

- 土師器……………ロクロ調整の仕上げ。ただし煮炊具のみ、すべて「手づくね」を省略してある。
 手づくね土師器……古墳時代の伝統を引くロクロを使わない土師器。
 須恵器……………大きく在地産と美濃須衛窯産があり、特にことわらない場合は前者を示す。
 黒色土器A……………ロクロ調整の土師器の内面をヘラミガキした後、黒色処理している。

(2) 遺構出土の土器・土製品

ア 竪穴住居出土品 (図版166~169、図186、PL86)

SB1の食膳具はほとんどが須恵器(図版166-1~5)(以下()内は図版内の番号である)で、一部手づくねの土師器がある。須恵器の大半は在地産で、わずかに美濃須衛窯産杯B(5)がある。杯A(1・2)はいずれも底部ヘラキリで、杯B(3)も同様である。煮炊具は長胴甕と小型甕の二種がみられ、前者は体部調整よりナア(6)、ハケ(7)、ケズリ(8)調整の三種に分けられる。貯蔵具はほとんどが須恵器で、在地産(9)とわずかな美濃須衛窯産で構成される。9は長頸壺の頸部で2条の沈線が入られる。図186の1は土製紡錘車で、重さ135g、直径5.7cmを測り、ほぼ中央に直径6mm程度の穴が開けられる。

SB2の食膳具は在地産の須恵器(1~3)と手づくねの土師器で構成され、前者の比率が高い。器種としては手づくねの須恵器杯A(1~3)と杯B、杯B蓋(4)がみられ、1・2はヘラキリである。煮炊具としては、長胴甕AとBがあるが僅かである。須恵器の貯蔵具には甕E(4)や甕などがある。

SB3の遺物の量は豊富である。食膳具は、多量の在地産(1~13)とわずかな美濃須衛窯産の須恵器、手づくねの土師器により構成される。須恵器杯A(1~5)の底部にはヘラキリ(2・3)と糸切りがあり、他に須恵器杯B(6~9)と杯B蓋(10~13)がある。9は底部外面を転用碗として再利用している。手づくねの土師器には、杯Eと暗文状のヘラミガキを施した杯がみられる。煮炊具には、長胴甕A(17・18)・B・C、小型甕A(14・15)・B(16)・Dがある。貯蔵具には、在地産の須恵器長頸壺A(20)、壺B(19)、甕Eの把手(22)、短頸壺の蓋(21)などがあり、わずかに美濃須衛窯産も伴う。図186の2は土鈴で下部を欠損する。

SB4の遺物はわずかである。食膳具は在地産の須恵器がほとんどで、杯A(1・2)と杯B(3・4)がみられる。杯Aには、糸切り(1)とヘラキリ(2)の二者がみられる。他に土師器や、須恵器の甕片がある。

SB5の遺物の量が比較的多い。食膳具は在地産の須恵器がほとんどで、僅かに黒色土器A杯(1)がある。須恵器杯A(2~8)はすべて糸切りで、体部の傾きは比較的急である。杯Bは法量より、BI(11・12)、BIV(9・10)に分けることができる。杯B甕(13~16)もいくつかの法量に分けることができそうである。他に鉢がある。煮炊具は長胴甕Bと小型甕B(17)・D(18)があるが、量は少ない。貯

蔵具には長頸壺A (19・20)、甕E (22)、甕D (23) がみられる。

SB6の食膳具は在地産(1-6・8)および美濃須衛窯産(11・12)の須恵器と、手づくねの土師器によって構成される。在地産の杯Aは糸切り(4)とヘラキリの二者があり、後者の割合が多く、形態的には底径が大きく体部が内湾するのが特徴である。杯B(9)と杯B蓋(11)もわずかに存在する。美濃須衛窯産は量的には少ないが、杯A(7)と杯B蓋(10・12)がある。手づくねの土師器には、雑なつくりの杯E(1)と杯D(2・3)がある。煮炊具には長胴甕A(14)とB、底部に木葉痕をもつ小型甕A(13)がある。貯蔵具は在地産の須恵器がほとんどで、長頸壺A、甕E(15)、大甕(16)がある。

SB7の食膳具は、在地産(1-3)とわずかな美濃須衛窯産(4)の須恵器で構成される。前者は杯A(1-3)と杯Bがあり、いずれもヘラキリである。後者には杯B蓋(4)がある。煮炊具には長胴甕A(5)と小型甕A(6)があり、貯蔵具には甕C(7)がある。

SB8の食膳具の量は少ない。在地産の須恵器杯B蓋(1)と杯A、杯B、手づくねの内黒の杯がある。煮炊具は長胴甕のA(2・3)・B・C(4)と小型甕A(5-7)が、貯蔵具は長頸壺A、短頸壺、甕E(8)がある。

SB9の遺物は少ない。食膳具はほとんどない。煮炊具として長胴甕A(3)とB、小型甕B(2)が、貯蔵具として甕Eと大型甕(1)がある。

SB10の食膳具のほとんどは在地産の須恵器で、杯A(1-3)がある。ヘラキリがほとんどで、1は底部周囲をヘラケズリで仕上げる。煮炊具は長胴甕A(4-6)がある。

SB11 わずかに土師器長胴甕Aがあるのみで、図化できる遺物はない。

SB12の遺物は少ない。食膳具は在地産の須恵器がほとんどで、杯A(1)と杯B蓋(2)がある。煮炊具としては、長胴甕A(3・4)がある。

SB13の遺物も少なく、在地産の底部ヘラキリの須恵器杯B(1)と美濃須衛窯産の須恵器甕片があるのみである。

SB501は多数の遺物が出土している。食膳具は土師器、黒色土器のA・B、灰釉陶器で構成されている。土師器には杯AⅡ(4・5)とAⅢ(1-3)の大小二種のほか、椀B(6・11)、盤B、鉢がある。杯AⅢの法量は、口径10cm前後、器高2~2.5cmに集中する。黒色土器Aには椀B(7)が、黒色土器Bには椀Cがある。灰釉陶器も多く、椀B(12-14)と段皿(15)がある。高台の形態は断面三角形で外反しており、東濃産大原10号窯式と考えられる。煮炊具、貯蔵具はほとんどない。

この他時期がさかのぼる遺物として、須恵器杯B(16)、杯蓋A(17)、長頸壺A(18)があるが、混入と思われる。

SB502も比較的多数の遺物が出土している。食膳具は黒色土器Aが主体を占め、杯AⅠとAⅡ(1・5)、椀A(2-4・6)、皿Bがある。そのほか若干の須恵器および軟質須恵器がある。煮炊具は長胴甕B(7-9)とC、小型甕D(10-12)がある。貯蔵具としては須恵器短頸壺(13)、長頸壺A、甕D(14)がある。

SB503の遺物は少ない。食膳具は在地産と美濃須衛窯産の須恵器があり、前者がほとんどである。杯A(1)の大半がヘラキリであり、杯B(2)と杯B蓋(3-5)、高杯がある。なお3には内面に小さなかえりをもつ。そのほか須恵器甕片、土師器長胴甕Bの破片がある。

SB504の食膳具は在地産の須恵器と手づくねの土師器によって構成される。須恵器には杯A(1)と杯B(2)、杯B蓋(3)、摺鉢(6)があり、杯Aはヘラキリがほとんどである。4は手づくねの土師器鉢である。煮炊具としては長胴甕A(5)がある。

SB506の遺物はほとんどなく、ヘラキリ須恵器杯Aがあるが、図化できない。

SB507の食器は在地産の須恵器で構成されており、杯A(1・2)、杯B蓋(3・4)、鉢(6)がある。杯Aはいずれもヘラキリであり、3の蓋は内面にかえりをもつ。煮炊具としては長胴甕A(5)があり、貯蔵具としては須恵器甕Eなどがある。

イ 掘立柱建物出土品 (図版169・170・PL87)

ST14ではいずれも掘り方からの出土である。須恵器杯A(1~4)はすべてヘラキリである。このほか須恵器杯B蓋(6・7)、鉄鉢形の須恵器鉢(5)がある。6は土師器長胴甕Aである。ST18では須恵器杯A(1)、須恵器甕E(2)が、ST22では須恵器杯B(1・2)のみである。ST29からは須恵器高杯(5)、須恵器杯B(2)、須恵器杯A(1・3・4)、ST509では須恵器杯B(1)がある。

ウ 溝出土品 (図版170~172、PL87・88)

SD6の遺物の出土は少ない。須恵器では高杯の裾部(5)・杯B蓋(6・7)・杯A(1~3)があり、杯Aはヘラキリである。このほか須恵器杯B(4)・甕E(8)がある。

SD9の遺物の量も少ない。1~3は須恵器杯B蓋で、2・3のかえりは小さい。4は須恵器甕Eで、いずれも在地産である。

SD10の須恵器には、杯B(2~7)・ヘラキリの杯A(1)・甕A(10)がある。8・9は土師器長胴甕Aである。

SD11では特に煮炊具が多い。須恵器はほとんど在地産であり、鉄鉢形の鉢(1)、杯B(2~6)、杯B蓋(7・8)、高杯(9)、甕E(21)・C(18・20)がある。煮炊具は土師器長胴甕A(11・13~17)・B(12・18)がある。

SD13の遺物出土量は多い。須恵器には、口縁近くに浅い二条の沈線が入る鉄鉢形の鉢(10)、ヘラキリの杯A(1~9)、9は底部外面に十字のヘラ書がなされる。このほか杯B(11~13)、杯B蓋(14~16)、高杯の脚部(17)がある。いずれも在地産である。18は内外面を黒色処理した土師器の小形の杯である。煮炊具としては土師器長胴甕B(19)・A(23)、小型甕A(22)がある。貯蔵具としては甕A(25・30)・C(26・27)・E(28)がある。

SD20の遺物は少ない。1は灰釉陶器小瓶である。

SD21の遺物も少ない。1は在地産の須恵器甕Aである。

SD502は比較的遺物が多い。須恵器杯A(1~6)はいずれもヘラキリである。このほか須恵器には杯B(7~11)、杯B蓋(15~17)、高杯(18)がある。10・15は美濃須衛産で、他は在地産である。貯蔵具としては須恵器甕E(19・20)、甕A(21)がある。

SD506の遺物はわずかで、1の須恵器高杯である。

エ 土坑出土品 (図版172、PL87)

遺物の出土は全体に少ない。SK2では糸切りの須恵器杯A(1)が、SK3では土師器小型甕(1)と須恵器杯B蓋がある。SK58の1は須恵器杯Aで、底部はヘラキリで丸く仕上げられる。2は須恵器杯B蓋、5は須恵器の鉢である。3・4は土師器長胴甕Aである。SK137の1は須恵器杯Aで、底部は糸切りである。SK280の1はヘラキリの須恵器杯Aで、体部は直に立ち上がる。SK1178の1は土師器椀で、高台が比較的高い。SK1183の1は黒色土器A椀で、高台の断面が三角形を呈する。

オ 遺物集中区、不明遺構出土品 (図版173)

SQ101はSB504とSB507と同一個体が多い。1は手づくねの土師器杯Dで内面黒色処理される。2・3・4は須恵器杯Aでいずれもヘラキリである。4・5は須恵器杯B、6・7・9は杯B蓋で、9は内面にかえりをもつ。10は摺鉢、8は高杯の脚部、16は須恵器甗で肩部に浅い沈線が一条走る。12・13は土師器小型甗A、14は土師器長胴甗A、11は手づくねのミニチュアである。15・17は須恵器甗A、18は須恵器甗Eの把手の部分である。

SX1の3・4は須恵器杯A、ヘラキリが多い。須恵器には杯B(5~8)、杯B蓋(9~11)がある。13は須恵器の小形の長頸壺、10は手づくねの土師器のミニチュアである。須恵器は11が美濃須賀座産で他はすべて在地産である。

SX3の1は土師器長胴甗A、2は須恵器高杯、3は同杯Bである。

SX501の1は糸切りの須恵器杯A、2は同杯B、3は土師器高杯の脚部である。4は須恵器甗Aで、波状文が施される。

カ 遺構外出土品 (図186)

3はC区より出土の須恵器円面碗の脚部破片である。腰部に縦方向に刻みが入られる。4・5は土師器で同じくC区より出土した。6・7は須恵器甗片で、内面に漆が付着している。

(3) 土器のまとめ

古代の資料は整穴住居址を中心に遺構から発見されているが、その量は組成等を分析するのに十分とはいえない。ここではおもに時間的な位置について考えてみたい。

土器編年については、1980年代後半に大規模な調査が行われ、報告書が刊行された本センターの松本平の調査の結果をもとに考えてみたい(*1)。今回得られた資料を遺構単位にみると、食膳具の焼物の種類より、大きくA~Cの3群に分けることができる(図187)。

A群……食膳具のほとんどが須恵器

B群……黒色土器Aを主体とする

C群……土師器を主体とし、灰釉陶器が伴う

この中でもA群の資料が圧倒的に多く、後に詳述することにする。

B群の資料としては、SB502・SD20があげられる。前者は黒色土器Aと軟質須恵器の存在とその比率より、松本平7期、吉田川西遺跡SB144段階と並行し、9世紀の後半代と思われる。また、後者は灰釉陶器の小瓶のみの出

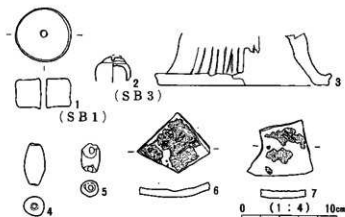


図186 古代の土製品

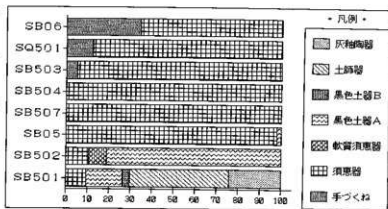


図187 遺構単位の食膳具の種類

土であるが、東濃産光ヶ丘1号窯式と思われる、同時期に比定できよう。

C群の資料しとしてはSB501のみである。土師器と灰釉陶器が食膳具の主体を占める。土師器の杯Aに二法量みられ、杯AⅢの法量のうち器高が2～2.5cmの間に収まることから、松本平14期、吉田川西遺跡SB74段階に並行し、11世紀後半であろう。伴出した東濃産灰釉陶器は、高台が断面三角形でやや外反することから、丸石2号窯式あるいは大原10号窯式と考えられ、11世紀後半という年代と矛盾しない。

最後にA群について詳しくふれてみたい。

焼物の種類の特徴について、比較的食物具の量が多い良好な遺構についてみると、第187図のようになる。圧倒的に須恵器が多く、手づくね土師器や黒色土器Aの量は少ない。

次に、この时期的な大きな指標となる須恵器杯Aの底部切り離し技法を取り上げてみる。今回の資料ではヘラキリ技法と糸切り技法の二種が認められる。遺構単位にそのあり方をみると、下記のような4群に分けられる。

I群 ヘラキリを主体として、ほとんど糸切りを含まない。

SB1・2・7・8・10・502・503・504・506・507

SD6・10・13・502・507、ST14、SQ101

II群 ヘラキリを主体として、糸切りをわずかに含む。

SB6、SX1

III群 糸切りを主体として、ヘラキリをわずかに含む。

SB3・4

IV群 糸切りを主体として、ほとんどヘラキリがみられない。

SB5、SX501

X群 資料が少なくはっきりしない。

SB9・11・12・13、IからIV群に含まれないSD・SK・ST・SX

対象とする個体数がそれほど多くない場合もあるが、松本平の調査成果により、時的的にIからIV群へという移行が考えられる。この他須恵器杯Aの視点として、法量や外傾指数があるが、今回は資料数が少ないため除くことにする。

次に指標となる須恵器杯蓋のかえりの有無である。非常に資料数は少ないが、SB501・503・507、SQ101より出土している。SB501の遺物群自体前述したように11世紀代と考えられ、明らかに混入と思われる。これを除くほかはI群に属する。

次に手づくね土師器と黒色土器A杯Aをみてみたい。手づくね土師器はI群に比較的多くみられる。黒色土器AはSB5に1点あるのみである。

以上のことから時間的な位置について考えてみたい。

まず大きくA群の上限は、須恵器のかえりをもつ蓋の存在から松本平1期、下限は黒色土器Aのわずかな存在から松本平4期と思われる。さらに細かくみると、I群とした中で、SB501・503・507、SQ501は、須恵器のかえりの蓋をもつことから松本平1期後半、もたないI群は2期、II群は3期、III群は4期、IV群は5期に対応することになりそうである。時的的には7世紀末から8世紀後半の間に収まるであろう。

第3節 小 結

弥生時代後期終末に小規模な集落が営まれた後、生活の痕跡が認められない期間が300年ほど続き、7世紀後半になり再び竪穴住居等が築かれるようになる。この間に、縄文時代から続いた地形が大きく変化し、現在に近い安定した地形が形成される。

最初に集落の動きを大きくみてみたい。遺物からみると7世紀後半に集落が営まはれはじめ、8世紀前半に調査区全体に遺構が広がる。初期の段階は東側のやや斜面の部分に展開し、徐々に西側に展開してきていることが遺物の分布からわかる。9世紀にはいと西側のみに住居址がみられるようになり、9世紀末には生活の痕跡は認められなくなる。その後やや断絶をおいて、再び東側に小規模な集落が11世紀後半に営まれるようになる。

今回は、比較的資料の多い初期の集落を中心にみてみたい(図188)。时期的には、I群に分類された土器が伴出した遺構を対象とし、年代的には7世紀後半から8世紀前半と考えることができそうである。さらに、遺構の重複関係や出土土器から細分は可能であるが、大きくまとまりとしてみていくことにする。遺構は調査区全体に展開しており、種類としては、竪穴住居址、掘立柱建物址、溝址、井戸址をあげることができる。

最初に竪穴住居の分布をみると、視覚的に2軒単位のまとまりをとらえることができそうである。(A・B・D)(※2)。それらの単位は間隔がある程度置かれており、単位AとBは60mほどの距離をもっている。単位Bは直径20m程度の不整の円形に巡る溝と周囲の小柱穴を柵とした場合、両者によって他と区画されていた可能性もある。その内部の1軒(SB1)は、ST14が柵の場合は周囲を囲んでいた可能性があるが、掘立柱建物とした場合は竪穴住居からの建て替え、あるいはその逆が考えられ、SB1はSB2に比較して優位であったといえる。単位Bに対して、A・Dは竪穴住居の規模・配置は共通するが、後者には溝等の施設はみられないことから、Bが優位であったことに疑いはない。次に掘立柱建物を見ると、その配置は単位A-ST23-27、単位F-ST16-18、単位D-ST510のように、竪穴住居の単位に隣接している。いずれも掘立柱建物であり、それらを住居と考えた場

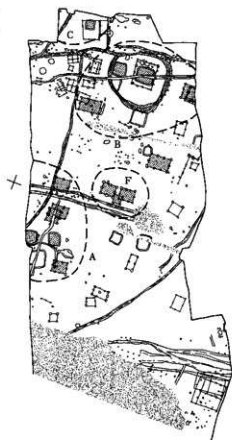
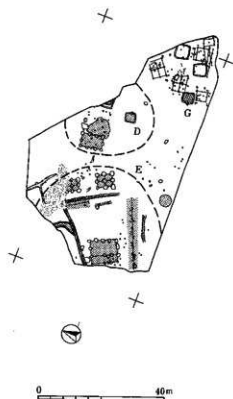


図188 7世紀末～8世紀前半の遺構

合、一つの単位が構造の異なる種類の住居によって構成されていたことになる(*3)。それらに対して掘立柱建物のみで構成される一群(単位E)がある。構成的には、庇を持つ規模の大きな掘立柱建物(ST503)を中心に、周囲と区画するように溝(SD501・502・503)、南側は柵(SA502)を配置している。さらに溝(SD503)を隔てて軸方向をともにする総柱建物2棟(ST508・509)が並列して建てられている。この配置から、住居(ST503)を中心に周囲を溝と柵によって区画し、その外側に付属する倉庫(ST508・509)を持つ単位が復元できそうである。多くの掘立柱建物が調査されたが、ST508・509ほどの明瞭な総柱建物はほとんどなく、確実に倉庫を持つ単位はEのみとすることができる。このほか、掘立柱建物のみで構成される単位としては、F(ST28・29・38)をはじめとして、獨柱建物で構成される単位がいくつかとらえられそうである(*4)。これらをまとめると、集落の核として倉庫(*5)を付属するEが存在し、その周辺にA~D・Fが分布する。前者が上位で後者を影響下においていた可能性が高い。ただしEに付属する倉庫は住居区画外にあることから、他の単位を支配に組み込むまでには至っていないと考えられる。E以外の単位は、掘立柱建物と竪穴住居の違い、溝で区画するしないの違いはあるにしろ、住居のみの構成と考えられ、Eとは質的に異なっていた可能性が高い。しかし、周囲に分布する単位の中にも、Bのように区画を有する単位もみられ、有力な一群としておいたほうが妥当と思われる、均一ではなく優劣が存在した可能性が高い。

奈良井川以西の調査の成果と比較してみたい(*6)。松本平2・3期(7世紀末~8世紀前半)との比較になるが、該期は開発の主体となる「倉」を持つ有力な小群(竪穴住居と掘立柱建物)を中心に、周囲に小規模な住居小群が展開するという状況がつかめている。北村遺跡も同様な状況であり、Fが集落の開発の主体者であり、その指導のもとに開発に携わった単位が、周囲に展開していたと考えられる。

この地に新たな集落が形成されはじめる7世紀後半の松本平は、1980年代にはじまった長野自動車道の建設をはじめとした大規模開発に伴う調査で、旧松本市街地域の狭い範囲を中心とした弥生時代以来の伝統的な地域の開発から、奈良井川以西をはじめとしたそれまでの未開であった広大な地へ集落の展開が始まる、「大開発時代」の幕明けの時期であることが明らかになってきている。北村遺跡も期を一にして居住域としての利用が始まっており、その時代の松本平の大きな流れと無縁ではなく運動していたと考えられ、その開発の契機についても同様と思われる。

今回の調査で得られた成果は、奈良井川以西中心であったこれまでの古代集落の研究、特に7世紀後半から8世紀初頭の「松本平の大開発時代」の集落の内部を考える上で、重要な資料を提供したといえよう。

参考文献

01長野県埋蔵文化財センター 1990「総論編」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4

注

- *1 これら遺跡は、深く掘られることによって現在まで残ったと考えられ、それ以外に自然の力等で失われた生活の痕跡が多く存在したと思われ、ここでの推定が古代集落の一端のみになってしまうことは、了承願いたい。
- *2 まとまりについては、便宜的に「単位」という用語を用いて表現しておく。
- *3 ここでは、獨柱建物を住居、総柱建物を倉庫という前提ですずめる。
- *4 この他、不整形で比較的規模の小さい柱穴で構成されるGがあるが、E・Fと時期が異なりSB501(11世紀後半)との関連が深い。
- *5 この倉は、集落の収穫物を管理する倉とする可能性がある。
- *6 松本平の古代集落については、参考文献1を参照した。

第2部

形質人類学

第6章 人骨の形質

獨協医科大学第一解剖学教室
茂原信生

第1節 はじめに

北村人骨は縄文時代中期末葉から後期中葉にかけての人骨で、長野県松本市近くの明科町から高速道路の建設にともなう工事によって発見され、師長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。その際多量の墓坑や住居址が発掘され、そこから人骨が多数出土した(表58)。

日本で発掘される縄文時代人骨は、縄文早期は山間部の洞窟や岩陰遺跡などが多いが後・晩期は海岸部の貝塚で発掘される例が多い。北村遺跡のような山間部の遺跡でしかもこのように大量の人骨が発掘されるのは非常に珍しい。北村人骨の特徴を明らかにすることはそれ自身でも価値があるが、海岸部での縄文時代人との比較の意味で非常に貴重なものである。また、山間部でよく発見されてきた縄文時代の早・前期人とのつながりを検討する意味でも貴重である。

はじめに住居址や墓坑から出土した人骨の形態的な特徴を記載し、その後に北村遺跡出土人骨の全体的な特徴を各項目にわたって報告する。

各人骨の記載は、最初に住居址から出土した人骨を、次いで墓坑から出土した人骨の順とし、墓坑の番号順にしたがって記載する。

最初に記載における方法や表現に関して触れておきたい。

(1) 性別の判定

古人骨が出土した場合にはまずその人骨の性別が判定される。北村人骨の場合、後述のように必ずしも保存状態がいいとはいえないものが多いので、海岸部の貝塚から発掘される一般の縄文時代人骨の様にいろいろな部分を総合して判定できない場合が多かった。もし骨盤が出土していればその形態を重視し、次いで一般によく用いられる頭蓋骨の諸形質(前額部の状態、乳様突起の大きさ、項丈さ、等)を用いて判断した。これ以外にも四肢骨の項丈さや歯の大きさも重要な要素の一つである。これらのすべてを観察して判断できた場合は多くはない。北村人骨の性別判定ではそのような限界がある個体も多かったが、多少の危険を承知で性別判定をした例もないわけではない。このことをご承知おき願いたい。

(2) 埋葬姿勢

埋葬姿勢に関しては正式には第1部を参照していただきたい。人骨の項では発掘された状態についての記載であり、考古学的な記載と異なる点もある。埋葬姿勢のなかでも、膝の位置と顔の向き表現について触れておく必要がある。本編では、「膝を立てている・いない」にかかわらず、「膝をやや右に傾けている」という表現を用いている。やや傾けているのは膝がある程度立っている状態にあることを示している。また、顔面の向きは死後に動く可能性もあるので厳密に述べても意味がないが、一応「やや右に向けている」とか「正面やや下を向いている」という表現を用いている。

(3) 年齢判定

北村人骨の場合、頭蓋骨の保存が悪く頭蓋の縫合の癒合状態を十分確認できない例が多い。したがって、年齢の判定は主として歯の咬耗によった。歯の咬耗は、集団によって咬耗の速さの程度が異なり、また時代によって、あるいは主たる食料によっても異なっているので他の集団で応用された咬耗様式による年齢判定を応用するのは危険をとまなう。よく研究されている現代人のデータはまったく応用できないのは明らかである。

集団のなかに歯の萌出で年齢の判定できる若い個体を含んでいる場合には、人類学でよく用いられる判定方法としてMiles (1963) の方法がある。この方法はある程度以上の個体数がある集団でしかも歯の萌出などで年齢をかなり正確に把握できる若い個体を含む集団に適応できる方法である。詳細はMilesの論文を参照していただきたい。この方法の信頼性は他の集団の場合にも確認されている (Nowell, 1978)。

今回は、当初Milesの方法を応用したLovejoy (1985) の方法を参考にして年齢を判定した。しかし、咬耗の様式が北村人とはやや異なっているうえに咬耗の速さも違っているようなので、Lovejoyの表と図を参考にしながら北村人用の咬耗パターン基準図を作製した〔図189：A～E〕。咬耗の判断の基準には、子供の個体を利用している。この基準図は平均的などところを取り上げていることを念頭においていただきたい。この図に含まれていない20歳以下の年齢判定は現代人の歯の萌出年齢をそのまま応用できるので今回は図に含めていない。

20歳までの個体は現代人のそれぞれの歯の萌出年齢によって判断している。前提として、現代も縄文時代も歯の萌出の年齢に大きな差がないと考える。例えば、永久歯の第1大臼歯は6歳に萌出し、第2大臼歯は12歳、第3大臼歯は18歳に萌出すると考えている。したがって、咬耗のない第3大臼歯を持つ個体は18歳と考えている。また当然のことながら、個体差、左右差、などがある。さらに、歯が少なくなれば残った歯に咬耗の負担がかかるから、加速度的に咬耗が進むことも考えられる。例えば、SH1158から出土した人骨は、切歯は脱落し、植立している臼歯も乏しい。したがって、残った左の大臼歯に負担がかかり本来の年齢以上に高く考えられる危険がある。また第2大臼歯よりも第3大臼歯の方が磨耗が進んでいたりする場合もある。

(4) 年齢区分

年齢の区分に一般的な法則はないが、生体における成長の研究で一般的に使われている区分は次のようなものである (保志; 1988)。これらはかなり機械的なものであるから集団による違いを考慮しなければならぬが今回はこの区分をそのまま用いている。

乳 児 期 (0～1)：出生時から離乳期まで

幼 児 期 (1～6)：離乳期から永久歯の萌出開始まで



図189 北村人骨の歯の咬耗による年齢判定

A：20～30歳（青年）、B：30～40歳（壮年）
C：40～50歳（熟年）、D：50～60歳（老年）
E：60歳以上（老年）

切歯は本系の歯列に齊であるのが切歯の咬耗である。年齢と共に切歯の磨耗は進む。本来の切歯は存在しなくなる。すなわち切歯全体が咬耗し、ずらして磨いてあるような状態になる。すなわち、歯の輪郭は次第に歯頸部近くの種舌槽の大きな四角形になってくる。この図ではエナメル質自身の咬耗は実質が多いので考慮に入れていない。シャドウがかかっている部分は露出した象牙質を示している。

- 少年・少女期 (6~12): 永久歯の萌出開始から第2大臼歯の萌出完了まで
- 思 春 期 (12~20): 第二次性徴の出現する時期であるが、第2大臼歯の萌出完了から第3大臼歯の萌出が完了して、成長が終わる時期まで。
- 青 年 (20~30): 成長は終わっているがそれ以降の経年変化がほとんど認められないもの
- 壮 年 (30~40): 経年変化は認められるが機能にほとんど影響がないと推測されるもの
- 熟 年 (40~60): 機能に影響すると推測される経年変化がかなり認められるもの
- 老 年 (60~): 機能に影響すると推測される経年変化が極めて著しいもの

(5) エナメル質減形成

エナメル質減形成とは歯の表面のエナメル質が形成される時期に、栄養不良、病気などのストレスによってエナメル質が十分に石灰化されず線状や窩状のへこみを生じるものを指す。エナメル質減形成の強さの程度はその性質上連続的なものであり、判断の明確な基準がない。今回は原則として山本〔1988〕の基準にしたがっている(写真1)。判定については山本氏に同じものを見ていただいて基準を統一することを試みたが、同じ判断をしているという保証はない。

エナメル質減形成に関する形成時期の判定は、時間的な制約もあり、Massier, Schour & Poncher〔1941〕による歯冠の形成時期を参考にした。したがってかなりラフな推定である。今後、より正確な時期の検討をする予定である。

(6) 墓坑の面積

各墓坑の面積は、図にかかれたものをディジタイザーで計測した。計測に用いたプログラムは獨協医科大学の高橋秀雄博士のものを利用させていただいた。計測した図がコピーであるための歪みや、ディジタイザーでの計測の誤差もあるので厳密なものではない。もちろん発掘時の掘り込みの取り方や図の作製時の誤差も含まれるので全体の信頼度はさほど高くはないと考えていただきたい。これらの誤差を合計すると、数%の誤差が含まれると考えている。

第2節 各論

1 住居址出土の人骨

SB555

ここからは、同定されたもので頭蓋骨片が数点、四肢骨が数点出土している。頭蓋骨も四肢骨も骨は厚い。詳細は不明である。

SB557

一体分の出土と考えられるが、骨の保存状態は非常に悪い個体である。頭蓋骨は表面がほとんど剥がれ落ち、外形をとどめているに過ぎない。下顎骨の下顎体が残っているが歯はない。四肢骨も骨の表面は荒れて詳細は不明である。骨の同定が不完全にしかできないので推定の域を出ないが、2本の上腕骨の方向が異なっているので攪乱された可能性が考えられる。また、左大腿骨が左上腕骨の横に位置している。もし、左上腕骨と左大腿骨は攪乱を受けていないとすれば膝を肩の近くまで強く屈曲させていたことになる。攪乱を受けていると考えるほうが自然である。顔面は正面を向いている。仰臥であるという以外は埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：前後方向に押し潰されている。顔面の存在を認識できる程度である。下顎骨は比較的残っている。

下顎体はさほど厚くない。軽度の角前切痕が認められる。後述のように歯は第3大臼歯まで萌出しているので成人と考えられるが、比較的きゃしゃで女性的である。

歯：第3大臼歯まで萌出している。土圧のため正中中部で折れ曲がっているが、上顎中切歯に相当する部分は歯槽が閉鎖しているらしい。抜歯かどうかの判定はできない。下顎の切歯はすべて植立していたと考えられる。左第2小臼歯がやや捻転している。歯の咬耗は上顎第2切歯、下顎犬歯、第1大臼歯がMolnar (1971) の3 (図190) である。上顎第3大臼歯はほとんど咬耗がない。歯の大きさは現代人女性の平均値よりも小さめである。

体幹・四肢骨：保存が悪く、観察はできない。

性別・年齢：この個体は第3大臼歯まで萌出している点を考えると成人であろうが、咬耗が少なく、20歳前後であろう。性別は女性の可能性が高い。

2 墓坑出土の人骨

SH501 (図版27・28)

頭蓋骨、歯および右上腕骨片が出土している。埋葬姿勢は仰臥であるがそれ以外は不明である。

頭蓋骨：後頭部のみが残っている。後頭稜は比較的顕著である。外後頭隆起はあまり発達せず、プロカのII型 (図191) である。骨はやや薄い。矢状縫合やラムダ縫合は内板がほとんど癒合しており、外板も癒合が進み、鋸歯状の縫合状は目立たない。

歯：下顎右第2小臼歯、第1～2大臼歯と破片が出土している。歯冠が完形なのは第2大臼歯だけである。咬耗はやや進んでおり、咬耗度は第2大臼歯がモルナーの4、第1大臼歯が残部から推定してモルナーの5である。第2小臼歯の頬側半は咬耗していたと思われる。歯の咬耗パターンから推測される年齢は壮年に属している。残存する歯片にエナメル質減形成はみられない。下顎第2大臼歯の大きさは現代日本人の男性の平均値 (權田：1959) とほとんど同じである。

Category of Wear	Incisor and Canine	Premolar	Molars
1	Unworn.	Unworn.	Unworn.
2	Wear facets minimal in size.	Wear facets, no observable dentine.	Wear facets, no observable dentine.
3	Cusp pattern obliterated, small dentine patches may be present.	Cusp pattern partially or completely obliterated. Small dentine patches.	Cusp pattern partially or completely obliterated. Small dentine patches.
4	Dentine patch (Minimal).	Two or more dentine patches, one of large size.	Three or more small dentine patches.
5	Dentine patch (Extensive).	Two or more dentine patches, secondary dentine may be slight.	Three or more large dentine patches, secondary dentine, none to slight.
6	Secondary dentine (Moderate to Extensive).	Entire tooth still surrounded by enamel, secondary dentine moderate to heavy.	Secondary dentine moderate to extensive, entire tooth completely surrounded by enamel.
7	Crown (enamel) worn away on at least one side, extensive secondary dentine.	Crown (enamel) worn away, on at least one side, extensive secondary dentine.	Crown (enamel) worn away on at least one side, extensive secondary dentine.
8	Roots functioning in occlusal surface.	Roots functioning in occlusal surface.	Roots functioning in occlusal surface.

図190 モルナーの咬耗度判定

American J. Physical Anthropology. vol.34 (1971) より引用。



図191 プロカの基準による外後頭隆起の発達状態の6段階

後頭骨を横から見ている。

四肢骨：右の上腕骨片が出土している。骨幹はあまり

太くない。

性別・年齢：この個体は、成人で、歯から判断すると壮年に相当する。性別は不明である。

SH502 (図版27・28、図34、PL11)

全身の骨格が出土しているが、保存状態は悪く、それぞれ部分的な出土である。顔面はやや右向きで、上

肢は前腕をやや曲げて下方に伸展している。下肢を強く屈曲し、やや右に倒した屈伸である。

頭蓋骨：顔面は消失し、下顎骨および後頭部だけが出土している。後頭部の内後頭隆起は明瞭であるが、骨は薄い。下顎骨はきしゃである。

歯：上顎歯の一部を除き残っている。齧蝕歯(むし歯)はみられない。下顎歯列に抜歯はない。また、上

顎の側切歯は出土していないが、下顎切歯部の咬耗状態から考えて抜歯はなかったと判断してよからう。上顎の中切歯はシャベル型切歯だが舌側面の凹みは浅い。左中切歯の遠心に舌側面から唇側面にまで続く斜切痕がある。右の中切歯では近心面に斜切痕がみられる。上顎小臼歯部では第2乳臼歯も出土している。代生歯である永久歯の第2小臼歯も出土しているが、咬耗はまったくない。これらの歯は植立した状態で出土したものでないため、お互いの位置関係は確認できなかったが、他の歯と比べて乳歯と永久歯との交換が遅れている。現代人では11歳位に交換するものである。乳歯と永久歯との交換の時期がなんらかの理由で遅れていた可能性が考えられる。下顎の右第3大臼歯は萌出直前の状態である。上・下顎の左右の第2大臼歯の遠心面には隣接面磨耗がみられないので、第3大臼歯は萌出していなかったと考えられる。

咬耗は軽度で、モルナーの2～3である。上顎の大歯や下顎の第2小臼歯はほとんど咬耗していない。一般に、これらの歯は11歳前後で萌出する。第2大臼歯は上・下顎ともに萌出しており、しかもやや咬耗している。この歯は一般に12歳前後で萌出する。第3大臼歯は一般に15歳前後で萌出が始まるから、これらの萌出状態や咬耗状態を総合して考えると、この個体の年齢は13～14歳と考えるのが妥当である。

多くの歯にエナメル質減形質がみられる(表59)。とくに顕著なのは第1大臼歯の歯冠中央付近にみられる。この歯の歯冠中央付近は2歳頃に形成されるのが一般的であり〔Massler et al.; 1941〕、離乳期(独立して食事を取れる時期)にあたる可能性がある。下顎第2切歯の歯冠歯頸部近くにもやや強度のエナメル質減形成がみられ、これに相当する形成時期は4歳頃である。これらの様子から、この個体は幼児期に何回かの栄養不良などのストレスを受けており、それが遠因となって若くして死んだ可能性が考えられる。歯の大きさは現代人女性の平均値より小さいものが多い。

四肢骨: どの四肢骨も土圧で圧平されている。上腕骨は厚さ数mmに圧平されているが、もともと非常に細かったと考えられ、圧平された幅でも15mm程度にすぎない。大腿骨はさほど圧平されていない。やはり細くしゃしゃで、粗線の発達が悪く、中央付近の横径は約22mm、矢状径は約18mmほどである。このようなしゃしゃさは若いためであり、これらの四肢骨からは性別は判定できない。

性別・年齢: この個体は13～14歳で、幼児期に数回のなんらかのストレスを受けている。性別は不明である。

SH503 (図版27・28、図35、PL11)

右上肢は直角よりやや深めに曲げて手を左胸に置いている。左上肢は伸ばして手を腰の横に置いている。下肢は強く曲げ、膝をやや左に倒している。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨: 頭蓋骨はかなり残っているが、左顔面部が破損している。頭蓋冠の骨は厚く、頑丈である。外後頭隆起は発達しておりプロカのIV型である。乳様突起は大きい。矢状縫合、ラムダ縫合の外板は未だ癒合していない。下顎骨は全体ががっしりしている。下顎骨のオトガイ隆起は顕著で、下顎体外底部に縁隆起が認められる。角前切痕はみられない。内面には左右とも下顎隆起がみられる。

歯: 上顎歯は5本が残存している。歯の咬耗は犬歯、小臼歯、第1大臼歯がモルナーの5、第2・第3大臼歯が2～3である。下顎歯は、右第2切歯、犬歯、第1～第3大臼歯の計5本が出土している。下顎歯も上顎と対応した咬耗を示している。臼歯の大きさは現代日本人女性の平均値(樫田; 1959)より小さい。歯の咬耗から判定するとこの個体は35歳前後である。

下顎歯は歯槽に退縮がなく、全歯が植立していたと推測され、抜歯はない。上顎歯でも少なくとも右側には抜歯は認められない(左は欠損)。

この他に、咬耗のない上顎左第3大臼歯の歯冠が出土している。この墓坑には1体分の人骨しか出土

していないので混在は考えられない。歯槽部が欠けているので推測になるが、反対側の第3大臼歯には咬紋がみられるので左の第3大臼歯は埋伏していたものと思われる。

四肢骨：四肢骨、とくに上肢骨の残りは悪い。上腕骨は左骨幹が残っている。比較的きゃしゃである。大腿骨は左右が出土しているが、いずれも骨端は欠けている。内側筋の付着する転子間線が比較的発達している。粗線（大殿筋、内転筋などの付着する部位）はやや発達しているが、幅は狭く、内側唇・外側唇には別れていない。胫骨は扁平で、後面の鉛直線は明瞭である。したがって、中央付近の断面はヘリチカのIV型（図192）をさらに扁平にした形である。他に腓骨片などが断片的に出ている。

四肢骨では、上肢骨のきゃしゃさと下肢骨の頑丈さの違いが目につく。

性別・年齢：頭蓋骨の形質から判断して男性であろう。年齢は壮年（30～40歳）と考えられる。

SH504（図版27・28、図36、PL11）

2個体が混在している。頭蓋骨のある下層の個体をA、頭蓋骨のほとんどない上層に埋葬されている個体をBとする。

(A)

上半身だけが出土している。左上腕骨や右尺骨の位置から考えてうつ伏せで埋葬されていたと考えられる。左鎖骨はきゃしゃである。保存が悪く肋骨や椎骨は残っていない。顔面を左に向けて、左右の肘をやや曲げ、骨盤付近で左右の手が近寄っていたと考えられる。

頭蓋骨：乳様突起は大きい。耳道上稜も発達している。眉間隆起はよく発達している。眼窩上三角は顕著である。頭蓋骨の縫合の外板が完全には癒合していないのでほぼ高齢ではなからう。壮年（30～40歳）と考えられる。

下顎骨は頑丈である。角前切痕はなく、下顎底が丸みを帯びたいわゆるロッカー・ジョーである。軽度の下顎隆起が認められる。

歯：下顎歯は歯根以外はほとんど残っていない。下顎右の小臼歯から第1大臼歯の歯冠部がやや残っている。第1大臼歯の磨耗は著しく、頬側は歯頸部付近まで磨耗している。舌側にわずかにエナメル質がみられる。対応する上顎大臼歯も舌側の磨耗が著しい。この磨耗の様式は、例えば固い植物繊維を噛んだりしたような場合にできる磨耗である。下顎歯に抜歯があった様子はない。

四肢骨：上腕骨の三角筋筋面はよく発達している。尺骨の回外筋稜は非常によく発達しているし、鈎状突起部の前後径が42.3mmもある。

性別・年齢：男性と考えられる。頭蓋骨の縫合と歯の磨耗の年齢が対応していないが、歯の方を重視して、年齢は40～50歳の熟年であると判断しておく。

(B)

下半身だけが出土している。強く膝を曲げて、右に倒している。

四肢骨：大腿骨は頑丈である。粗線は内側唇と外側唇が明瞭である。右は土圧で折れ曲がっている。骨端は欠けているが、その他の部位の位置関係は現代人の426mmの大腿骨（獨協医大資料）とほぼ同じである。右大腿骨の方がやや太い。胫骨は扁平である。

大腿骨最大長を藤井（1960）の式にあてはめて計算される身長は、160.1cmである。平本（1977）の報

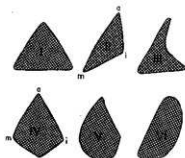


図192 ヘリチカによる胫骨の中央付近の断面形態の分類
いずれも中間線差があるためそのままではめるのは難しい
(a：前線、i：骨間線、m：内側線)

告している縄文時代男性の平均値と大差ない。

性別・年齢：性別は不明である（どちらかといえば男性の可能性が高い）。

SH505 (図版27・28、図36、PL11)

頭蓋骨と下肢骨の一部が出土しているだけである。下肢を強く屈曲していた屈葬と考えられる。

頭蓋骨：頭蓋骨の保存状態は悪く、頭蓋の形態は保っているもののほとんどの部分が細片化して表面の緻密質は剥がれ落ちている。頭蓋蓋の骨は非常に厚い。前頭骨のプレグマ付近の厚さは10mmあり、後頭部の外後頭隆起部も厚い。表面は剥がれているが外後頭隆起は発達していたと思われる。乳様突起などは識別できない。土圧でやや変形しているもののやや小さめの頭蓋骨である。縫合の状態は不明である。

下顎骨の左下顎体の大白歯部が出土している。下顎体は厚い。第2大白歯の歯根の入っていた近・遠心に分離した歯槽ソケットが認められる。歯槽から判断して第3大白歯は生前に脱落していたらしい。歯：歯の破片が出土しているが、同定できるのは下顎右第2小臼歯片、上顎大歯片だけである。大歯はやや磨耗している。第2小臼歯はさほど磨耗していない。大歯の歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成がみられる。5歳前後に形成されたものと思われる。歯からの年齢判定は、成人という以外は不明である。

四肢骨：四肢骨は右の大腿骨、脛骨の骨幹が出土している。どちらもほぼ中央付近である。大腿骨の緻密質は厚い。後面には粗線がみられるがさほど発達していない。脛骨も骨は厚く、断面形状はヘリチカのII型に近い。

性別・年齢：この個体は骨が非常に厚く、下顎も頑丈で、男性の可能性が高い。年齢は成人という以外は不明である。

SH507 (図版31・32、図37、PL12)

全身の骨格が出土している。保存状態はあまりよくない。上肢は両腕とも肘をやや曲げて手を腰に置いている。両足を強く折り曲げている。右は下腿を大腿骨の下にしており、左は膝を左側に倒している。顔面は正面やや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：乳様突起はやや大きめである。耳道上也も顕著である。下顎骨は頑丈であり、角前切痕は認められない。いわゆるロッカー・ジョーである。下顎体外側底部には縁隆起が認められ、内側にはごく軽度の下顎隆起が認められる。左第1大白歯の歯根にあたる部分に囊胞が認められ、外側に開口している。下顎枝は比較的きゃしゃである。

下顎骨が開いている（口を開けている）が死後に開いたものであろう。

歯：下顎左第3大白歯が水平に植立している（水平智歯）。水平智歯とは、下顎骨の退化した現代人によくみられるもので、下顎骨に歯が萌出するスペースが不足して最後に萌出してくる第3大白歯が横向きに萌出するものをいう。したがって第3大白歯は第2大白歯の遠心（後ろ側）にぶつかって生えてこれない（埋伏歯）状態になる。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯がY5型、第2大白歯が+5型、そして第3大白歯がX4型である。咬耗は切歯・犬歯がモルナーの5、小臼歯がモルナーの4、大白歯がモルナーの4～3である。抜歯の形跡はない。歯の大きさは現代人女性の平均値より小さめである。咬耗のパターンから判断すると33歳前後ということになる。

体幹・四肢骨：残存する椎骨にはとくに加齢変化はうかがえない。上胸骨は三角筋粗面がよく発達している。尺骨の骨間線はよく発達している。骨盤は土圧で扁平になっているが残りは比較的よい。大坐骨切痕は鋭角的であり、耳状面前溝も認められないのでこの個体は男性の可能性が高い。大腿骨は近遠位端

が破損しているが、かなりの精度で最大長が推定できる(写真2)。粗線はさほど顕著に発達してはならず、骨体中央部付近で後方に稜状に突出する程度である。胫骨は非常に頑丈である。後面の鉛直線はさほど顕著ではない。中央の断面はヘリチカのII型に近い。

大風骨を用いた藤井(1960)の身長の推定式によると身長は159.9cmであり、平本(1977)による縄文時代男性の平均値159.11cmとほとんど同じである。

性別・年齢：この個体は男性と考えられ、年齢は30~40歳の壮年である。

SH508 (図版31・32)

寝崩りである。骨の保存は比較的良好であるが、もろく、移送時に破損した。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：頭蓋骨はほぼ残っている。顔面が残っているが土圧で横方向に圧平されている。眉弓はよく発達し左右が合している。眼窩上縁は薄くはり出しており、眼窩上三角も明瞭である。鼻根部ははっきり凹んでいる。鼻骨は上部が狭くて高い。いわゆる「つまみ鼻」であったと推測される。外後頭隆起部はよく発達しプロカのIV型である。乳様突起は大きく頑丈である。耳道下縁はよく発達しているが髑髏縁は明瞭ではない。頭蓋骨の縫合は矢状縫合が癒合しておりラムダ縫合も矢状縫合に近い部分は癒合している。冠状縫合はプレグマに近い部分は縫合していないがプテリオン部近くは癒合している。したがって、この個体は頭蓋骨の縫合からは熟年に属すると考えられる。

下顎骨は普通の頑丈さで、下顎隆起はみられない。下顎歯に抜歯は認められない。下顎の左大白歯部は歯根がかなり露出している。ただし、これらの歯が挺出(ていしゅつ)していたりあるいは歯冠に歯石がたまってしまった様子がないので、対応する上顎の大白歯も脱落はしていなかったであろう。

歯：歯の磨耗は著しく、上・下顎のどの歯も咬耗度はモルナーの5~6で、白歯の咬合面の象牙質はほぼ消失している。上顎左第1大白歯の舌側部に歯石が沈着していたと思われる。咬耗パターンに従えば、この個体は50代と考えられ、熟年に相当する。

四肢骨：上腕骨は頑丈で、三角筋粗面はよく発達しており、腕骨神経溝も明瞭である。内側縁が稜状に突出している。尺骨も頑丈で、回外筋腱は大きく発達し、骨間縁も著しくはり出している。

骨盤には耳状面前溝にあたるものは認められない。大坐骨切痕の残りは悪いが鋭角であったと考えられる。大風骨は破損が著しく断片的にしか残っていない。粗線は内側唇・外側唇が明瞭である。ただしいわゆる付け柱状ではなく、全体が三角形のような断面である。転子間線は発達している。膝蓋骨は外側上部に軽度の広筋切痕が見られる。胫骨も頑丈で、後面の鉛直線は骨体中央で鋭く後方に突出しており、森本(1981)のA型(図193)で、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。脛骨は頑丈で、骨間縁も鋭い。

性別・年齢：この個体は、全体に頑丈で、四肢骨の筋付着部の発達状態や頭蓋骨の諸形態から男性であると考えられ、年齢は熟年であろう。

SH512 (図版31・32、図38、PL12)

ほぼ全身が出土している。保存状態はさほどよくない。上肢は左右とも伸展している。下肢は膝をやや左にして立たた屈葬である。顔はやや右下向きである。手指骨・足指骨などは消失している。

頭蓋骨：頭蓋骨は前後に圧平されている。顔面部はとくに保存が悪い。乳様突起は厚くなく、さほど大きくもない。外後頭隆起はやや突出し、ヘリチカのIII型である。矢状縫合の外板は鋸歯状の縫合が

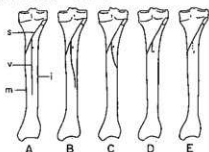


図193 胫骨後面の鉛直線に關係した分類(森本;1981)
j:骨間縁, m:内側縁, s:ヒラノ筋縁, v:鉛直線
(雄山閣、人類学講座5巻より)

まだ認められる。ラムダ縫合も外板が適合していない。

下顎骨のオトガイ結節は明瞭だが縁隆起はさほど発達していない。下顎体内面の左右の第1大臼歯部に発達した下顎隆起がみられる(写真3-1)。

歯：上顎歯は4本の切歯と右第1小臼歯、左第3大臼歯が破損している。下顎歯は右の2本の切歯、左中切歯、および左右の第3大臼歯が欠けている。咬耗度はモルナーの2〜3でさほど進んでいない。咬耗パターンからは25〜30歳位と判定される。下顎の左右の第2大臼歯の遠心面にみられる第3大臼歯との隣接面磨耗がないので、未萌出であったかあるいは先天的に欠けていた可能性が考えられる。とくに左側の歯槽には第3大臼歯が萌出するスペースもない。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯はY5型、第2大臼歯は+5型である。

下顎の左大歯の歯冠中央部に広い帯状のエナメル質減形成がみられる。上顎の左大歯の歯冠中央にも同様のエナメル質減形成がみられる。3歳前後の時期の、栄養不良などのなんらかのストレスによって形成されたものと考えられる。上顎の第1・第2・第3大臼歯の歯冠にも軽度のエナメル質減形成がみられる。左第1大臼歯のそれは大歯とほぼ同時期に形成されたものであり、第2大臼歯のものは6歳前後、第3大臼歯のそれは12歳前後に形成されたと考えられる。

四肢骨：上腕骨はやや圧平されている。三角筋粗面は中等度の発達である。最大長から推測される身長は156.4cmである。尺骨の近位部は太く頑丈である。

骨盤は圧平されており、取り出せなかった。埋葬のまま計測した坐骨切痕最大幅は31.3mm、最大高は19.7mmであった。大坐骨切痕は男性と女性の中間的な大きさである。大腿骨は左右ともやや圧平されている。粗線は比較的発達している。胫骨は右がよく残っている。中央付近の断面はヘリチカのI型である。胫骨最大長からの推定身長は154.3cmである。先の上腕骨からの推定値との平均値は155.4cmである。第1頸椎から第5腰椎までの長さが508mmである。

性別・年齢：この個体は、骨の大きさなどは男性的であるが、乳様突起も含めた頭蓋骨の形態から女性の可能性が高いと考える(男性の可能性を否定はできない)。また、咬耗が少ないこと、頭蓋骨の縫合の外板が明瞭なことなどから成人としてもさほどの高齢ではない。青年と考えられる。

SH515 (図版29・30、図39、PL13)

保存状態は非常に悪い。頭蓋骨と下肢骨の一部が出土している。上肢は右が前腕を伸展している。左は肘を強く曲げ、手を胸の中央付近に置いている。下肢骨の配列は自然の埋葬位ではない。左の大腸骨と脛骨が不自然に配列しているので攪乱があったと考えられる。この両者は離れており、埋葬後完全に白骨化してからの攪乱であったろう。ただし右の下肢骨はほぼ正常の位置である。

この墓坑の左にあったSH542との重複による攪乱であろう。

頭蓋骨：顔面部は破損している。外後頭隆起はほとんど発達していない(プロカのII型)し、乳様突起も大きくない。骨は薄い、女性であろう。

歯：歯は臼歯部が比較的残っている。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY型で第6咬頭がある。第2大臼歯および第3大臼歯は+型である。第3大臼歯の咬合面は平坦化している。咬耗パターンからは25〜30歳程度と考えられる。

四肢骨：上腕骨はきゃしゃである。大腿骨の粗線は比較的発達しているがさほど頑丈な大腿骨ではない。胫骨は扁平で骨間縁も明瞭である。中央付近の断面はヘリチカのII型である。これらの下肢骨は女性のものである。

この下肢骨は別個体のものである可能性も考えられる。

性別・年齢：この個体は女性であると考えられる。年齢は25～30歳ぐらいの青年であろう。

SH517 (図版29・30・35、図40、PL13)

横下方向きとうつ伏せの2体分が埋葬されている。うつ伏せの個体が下層に埋葬されている。

(A) うつ伏せの個体

上肢は左肘を折り曲げてやや左に出しており、右は手首が左腕の肘の付近にある。下肢骨は膝を30度程度に曲げて左方向にした屈葬である。下肢骨は右大腿骨が正常の埋葬位置にある。顔面は下向けにしている。

頭蓋骨：頭蓋骨は左後半部が欠損している。顔面はもろいが比較的よく保存されている。前後方向に土圧を受けて変形している。前頭部は比較的平坦でたっている。眼窩上隆起は弱い。乳様突起はさほど大きくない。縫合は矢状縫合、ラムダ縫合ともに明瞭である。

歯：歯の保存はよい。上顎の中・側切歯はシャベル型である。上下顎ともに第3大臼歯は萌出してない。とくに、下顎の右の第3大臼歯は水平智歯である。上顎右第1大臼歯にカラベリー結節(図194)がみられる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は+5型である。下顎左右第1大臼歯と左第2大臼歯には第7咬頭が、また右第2大臼歯には第6咬頭がみられる。咬耗は少なく、最も咬耗が進んだものでモルナーの3である。この個体は咬耗から判断して、18～20歳ぐらいの少年である。

歯の大きさは、現代日本人女性の平均値より小さめのものが多い。

四肢骨：上腕骨は細く、三角筋粗面も発達していない。伸展している左上腕骨はうつ伏せの埋葬姿勢を反映して後面が上になっている。右大腿骨は後面を上に向けている。大腿骨は比較的頑丈であるが、粗線がさほど発達していない。骨幹上部外側に殿筋隆起(写真15)がみられる。

この個体の左大腿骨は出土していない。胫骨は左右が出土している。どちらも扁平である。鉛直線は不明瞭で、中央付近の断面はヘリチカのII型である。

性別・年齢：この個体は若い女性と考えられる。年齢は18～20歳ぐらいである。

(B) 横下方向きの個体

左を下に、顔面を下方(足方)に向けた側臥位の屈葬である。残りが悪く椎骨などの体幹の骨はほとんどない。下肢の一部(膝付近)が下層のうつ伏せの個体の下肢ののっている。この個体の埋葬によって先の下向きの個体の骨の位置が乱されていないので、同時に埋葬された可能性が高い。

頭蓋骨：部分的にしか残っていない。骨は薄い。

歯：歯は上顎の第2乳臼歯が残っている混合歯列である。上顎右の側切歯に斜切歯がみられ、舌側面には棘突起が発達している。第2大臼歯は萌出して咬合平面に達しているが、第3大臼歯は上下顎ともにまだ萌出してない(歯槽内にはみられる)。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY5型で第6咬頭があり、第2大臼歯は+5型である。咬耗の進んだ歯でも咬耗度はモルナーの2で、ごく軽度である。前歯部の歯はやや大きめである。

歯の萌出状態からこの個体は12～13歳ぐらいと考えられる。

四肢骨：四肢骨の保存状態は極端に悪く、かつ上圧で折れ曲がっているものもあるのでこの個体の四肢骨かどうか正確には判定できない。

大腿骨は右大腿骨が同定された。うつ伏せの個体とほぼ同じ位の太さであり、粗線は中等度に発達しているが、内側髁・外側髁は不明瞭である。中央

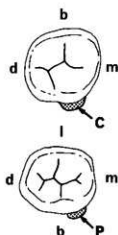


図194 歯の形態の変異
上図の矢印で示したシャドウは
上顎大臼歯のカラベリー結節
(C)

下図の矢印で示したシャドウは
下顎大臼歯のプロトスタイリ
ッド(P)

m: 近心、d: 遠心
b: 頰側、l: 舌側

付近の断面は鈍な三角形である。膝を左に倒した屈葬である。

性別・年齢：この個体は12～13歳ぐらいの少年である。性別は、年齢が若いにもかかわらず四肢骨がうつ伏せの個体と同じ位であり、かつ歯もやや大きめであるから、男性の可能性が高い。

この墓坑からは合計2体分が出土していることになる。埋葬の順番は、やや浅めにうつ伏せの個体が埋葬され、それと同時期あるいは直後に横向きの個体が埋葬されたと推測される。前者は18～20歳ぐらいの女性、後者は12～13歳ぐらいの男性であろう。

SH518 (図版29・30、図40、PL13)

全身が出土しているが保存状態は悪い。上肢は強く肘を曲げているらしい。下肢は膝を強く曲げ、かつ膝を胸につくほど強く屈曲している。顔面をほぼ左真横に向けている(左を下にした屈葬)。側臥屈葬である。下肢骨は2個体分が混在している。

(A)

頭蓋骨：頭蓋骨は左右がやや圧平されている。乳様突起は大きいがかさほど厚くない。外後頭隆起はほとんど目立たない(プロカのII型)。頬骨弓もきしゃである。前上乳突結節は発達しているが、側頭線は目立たない。眼窩上隆起は小さく眉間隆起も小さい。このように頭蓋骨の筋の付着部はいずれも発達していない。

下顎骨の角前切痕はない。

歯：咬耗は比較的進んでおり、上顎の第2大臼歯はモルナーの5、下顎の第2大臼歯および第3大臼歯はモルナーの4～5である。上・下顎歯に抜歯はみられない。上顎大歯の歯冠にエナメル質減形成が認められる。咬耗パターンから判断すると40～50歳の熟年であろう。

四肢骨：頭蓋骨と同じ個体と思われるものの方が頑丈である。大腿骨は粗線はさほど発達していないが、幅があり内側線と外側線を認める。扁平性は低い。胫骨は扁平で、後面の鉛直線が顕著な、ヘリチカのIV型の断面である。

性別・年齢：この個体は女性と考えられる。熟年である。

(B)

頭蓋骨はなく、下肢骨のみが出土している。埋葬姿勢は屈葬という以外は不明である。

四肢骨：大腿骨は細くきしゃで、粗線も発達していない。上部の外側に浅い転子下窩がみられるが、殿筋隆起(外側稜)はごく小さい。胫骨もきしゃであるが、後面に鉛直線がみられ、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。

性別・年齢：この個体は女性であろう。年齢は不明である。

SH520 (図版29・30、図41)

保存状態は非常に悪く、四肢骨の同定も難しい。頭蓋骨は正面下方を向いている。上方(頭側)から土圧でつぶされており、前頭部が顔面部に覆いかぶさるようになっており、その結果顔面骨はほとんど消失している。左の上肢は伸展しており、右も残った前腕骨の一部から推定すると伸展していたであろう。下肢骨は膝を強く曲げ左に倒している。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：上顎部、前頭部および下顎骨が出土している。骨は薄い。下顎骨の第2小臼歯から第2大臼歯までわたる下顎体内側に下顎隆起がみられる。オトガイ隆起も比較的顕著である。角前切痕はない。

歯：上顎は右の第1～第3大臼歯と左の第1・第2小臼歯および第3大臼歯、下顎は左は側切歯から、右

は第1小臼歯から遠心の、主として歯根だけが残っている。細かな歯冠形態は観察できない。咬耗は激しく、上顎歯はいずれの歯もモルナーの5～6である。上顎左第2大臼歯は生前に脱落している。

下顎歯に残っている歯はいずれも歯頸線近くまで咬耗しており、モルナーの6である。下顎の左側の歯槽は、中切歯から第3大臼歯まで確認できるが、抜歯はなかったものと推測される。咬耗状態からこの個体は60歳以上の老年と考えられる。

四肢骨：どの骨も表面は荒れており、観察に耐えるものはほとんどない。大腿骨らしいものが2本、胫骨らしいものが2本みられる。どちらもさほど頑丈ではない。

性別・年齢：この個体の性別は不明である。年齢は老年であると推測される。

SH521 (図版29・30、図41、PL14)

全身の骨格が残っている。左右の上肢は伸展してそれぞれの腰の横においている。手は回内(内側にねじること)していないので、手のひらを上にしている。下肢は膝を強くまげやや右にして立てている。膝は左右があわさっている。顔面はほぼ右に向けている。仰臥屈葬である。(展示用資料)

頭蓋骨：顔面を右に向けているので横方向の土圧を受けて変形している。眼窩上隆起部はやや破損しているが、さほど発達しているようにはみえない。額は立っている。乳様突起は大きくて厚い。上項線や後頭骨の鱗部が発達している。外後頭隆起は確認できない。冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合ともに縫合は明瞭に確認できるのでさほどの高齢ではない。

下顎骨は比較的頑丈である。角前切痕はない。オトガイ隆起はさほど発達していない。下顎枝は比較的立っていて、細い。

歯：エナメル質減形成はみられない。下顎歯は切歯部が一部破損しているが第3大臼歯まですべて萌出している。咬耗は少なく、小臼歯および第1・第2大臼歯はモルナーの3、第3大臼歯は2である。したがって、第3大臼歯の萌出後間もないと考えられ20歳前である。

四肢骨：鎖骨は長く、頑丈である。上腕骨もやや太い。埋葬時の肩幅はかなり広い。寛骨の犬坐骨切痕が90度に近い点は女性的である。耳状面前溝はごく浅いものが認められるが女性と断定できるほどではない。大腿骨は比較的頑丈で、骨幹上部には外側に股筋隆起状のはり出しがみられる。粗線は発達していない。

左右の上腕骨最大長から計算される身長は155.5cm、左大腿骨最大長から計算される身長は154.9cmである。これらの平均値は155.2cmである。この値は縄文時代人の男性の平均値である159.11cmに近く、女性の平均値148.05cmよりもかなり大きい。頭蓋骨から仙骨端までの長さは699mmである。

性別・年齢：この個体は、大柄で頑丈な点は男性的であるが、骨盤の形態などの諸形質を総合すると女性の可能性が高いと考える(男性の可能性も否定はできない)。年齢は20歳前であろう。

SH522 (図版27・28、図42、PL15)

土器内に埋葬されていた焼骨である(写真4・5)。全体の骨の量はかなり多い。出土した骨片に重複部分はなく、一体分の火葬骨と考えられる。火葬された骨から選ばれて埋葬された様子はなく、それぞれの生体の骨格の量比に応じた程度の出現率である。したがって、なんらかの都合で火葬されたか、あるいは焼死した一体分の人骨を壺に納めたものである。

頭蓋骨：頭蓋骨は数センチの細片となっている。乳様突起部は大きく厚いことが確認できた。焼けることによって収縮したことも考えれば、かなり大きかったと考えられる。

歯：下顎左第2あるいは第3大臼歯と考えられるものが出土している。熱のためエナメル質は破損・脱落

している。象牙質の状態から判断して、かなり咬耗が進んでいたらしいので、若い個体ではなかったと思われる。

四肢骨：右鎖骨の肩峰端、寛骨の恥骨部が認められる。鎖骨はさほど頑丈ではない。下面の円錐帯結節の発達も悪い。肩峰端関節面はなめらかではなく、周囲には骨増殖がみられる。加齢変化と思われる。恥骨結合の前後面に妊娠歴を示す溝はない。大腿骨の粗線はよく発達し、幅のある稜状となっている。骨質も厚い。

火葬の状態：後頭部を中心に、十分に灰化していない黒色から灰色がかった部分がある。骨盤でも後面にやや灰色の部分がある。これらのことを考えると、この個体は仰向けに寝た状態で火を受けていることがわかる。下肢を伸展していたかどうかはわからない。

性別・年齢：この個体はあまり若くない、むしろ高齢の男性と考えられる。焼かれており、仰臥状態で火葬、あるいは焼死したと思われる。

SH523 (図版27・28)

頭蓋骨片のみが出土している。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：頭頂骨と後頭骨が同定された。後頭骨の内後頭隆起はさほど発達していない。外後頭隆起もあり大きくなかったことが推測される。矢状縫合の中央部は外板の縫合がまだ認められ、内板の縫合も明瞭である。

性別・年齢：性別は不明で、年齢も成人である以外にはわからない。特記すべき形態的な特徴はない。

SH524 (図版27・28)

下肢骨のみが出土している。右大腿骨の骨幹中央外側部である。粗線は比較的発達している。他に部位のわからない長骨片がある。

性別・年齢：不明である。

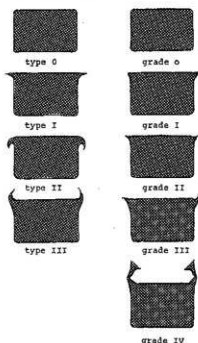


図195 椎骨の椎体における加齢(老齡)変化のタイプとその段階を示す分類(鈴木;1988の図にシャドウをかけた)

SH534 (図版35・37、図43)

頭蓋骨を含む肋骨中央部からの上半身が欠けている。保存状態はよくなく、骨はもろい。右上肢は曲げて胸に置いている。左は不明である。下肢は膝をかなり強く曲げて、左に倒している。顔面の向きはわからない。仰臥屈葬である。

体幹・四肢骨：椎骨の残りは悪いが、加齢変化である骨棘(リッピング)が第5腰椎に軽度ではあるが認められる。一種の変形脊椎症で鈴木[1988]の分類によるG-I型に属する(図195)。

右上腕骨の遠位端、橈骨および尺骨の近位部が出土している。上腕骨はきゃしゃで、女性的である。骨盤は比較的残りがよい。大坐骨切痕は90度に近い。耳状面は高い。耳状面の下部は左右ともに大きくえぐれており、妊娠経験を示す耳状面前溝である。これらの特徴は明らかに成人の女性のものであることを示している。

大腿骨は上半部の扁平性が高い。転子下窩が溝状に長く続き(約8cm)、殿筋隆起が明瞭である。第三転子が認められる。粗線はあまり発達せず、内側唇・外側唇の区別はできない。骨の中央付近の

断面は扁平ではない。脛骨は左右の骨幹中央付近が比較的保存がよい。この位置の断面はヘリチカのII型に近く、後面の鉛直線は目立たない。いわゆる扁平胫骨ではない。

右大腿骨の最大長は409mm、右脛骨の最大長推定値は313mmで、それぞれから計算された推定身長は、155.9cmは151.3cmであり、平均値は153.6cmである。平本による縄文時代女性の推定平均値(148.05cm)よりもやや大きい。

性別・年齢：この個体は、妊娠経験のある成人の女性である。椎骨に加齢変化がみられるので少なくとも熟年には達していたであろう。

SH536 (図版28)

長骨が2本出土している。保存状態が非常に悪く、表面の形態はほとんどわからない。左右の大腿骨と考えられるが、2本とも非常にさしゃである。他に左右不明の腓骨骨幹が出土している。詳しい年齢は不明だが、年齢区分では思春期のものであろう。性別は不明である。

SH538 (図版29・30、図44、PL15)

おもに頭蓋骨の一部と下肢骨の一部が残っている。下肢骨を強く屈曲しており、胸あたりに膝の部分があるので、頭蓋骨と下肢骨が同一個体のものとすれば屈葬という埋葬様式になり、右の下肢骨が体軸の左側にあるので側臥位であったと思われる。上肢の位置は不明である。

頭蓋骨：頭蓋はやや左下を向いていて、後頭部だけが取り上げられた。顔面骨、下顎骨は保存が悪く取り上げられなかった。頭頂骨は薄い。縫合など特徴的な部分がないので年齢は不明である。

四肢骨：下肢骨は、右側の大腿骨と脛骨と思われる骨が出土している。それぞれの長骨は土圧で圧平されており、後ろ半分がほとんど失われている。粗線はあまり発達しておらず、また太さもあまり太くない。

性別・年齢：この個体の性別・年齢は不明である。

SH540 (図版29・30、図45)

頭蓋骨と長骨片だけ出土している。どちらも保存状態は悪い。

頭蓋骨：顔面は右を向いていたらしい。下顎骨が出土している。

歯：歯は乳歯列で、下顎左の第1大臼歯が歯槽から出た直後であり、他の乳歯も咬耗は少ない。第2乳臼歯はモルナーの2、乳犬歯はモルナーの3である。顎骨内の未萌出の犬歯(永久歯)の歯冠の完成状態なども考えあわせると、この個体の年齢は5歳前後であろう。第1大臼歯が現代日本人の男性のものよりもはるかに大きいので男性の可能性が高い。

性別・年齢：この個体は5歳前後の幼児である。男性の可能性が高い。子供の骨は、同じ条件では成人に比べて残りにくい。

SH542 (図版29・30、図39、PL13)

一体分だが、保存状態は悪く、体幹の骨は消失している。右上肢は肘をかなり強く曲げ、手を右外側上方にあげている。左上肢は肘を伸展し、手を腰の横に置いている。右下肢は膝を立てており、左下肢は膝を左に倒している。顔面はほぼ正面でやや下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋冠はほとんど消失しているが、顔面部はやや残っている。眼窩上隆起は発達していない。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。下顎骨ががっしりしている。オトガイ隆起も発達しており、外側結節も認められる。

歯：上下顎ともに第3大臼歯は未萌出である。下顎大臼歯の咬頭と溝のパターンは第1大臼歯が左右ともに第6咬頭をもつ+5型で、第2大臼歯は右が+5型、左が+4型である。咬耗はどれも少なく、咬耗度はモルナーの2～3である。第2大臼歯の咬耗は近心部だけであり、この歯は萌出後間もないと思われる。

エナメル質減形成が認められる。下顎の左右の犬歯に認められ、うち1本はやや強い減形成である。これは5歳前後に形成されたものと推測される。また上顎第3大臼歯のものもかなり強く、12歳前後に形成されたものである。

下顎の第3大臼歯が、まったく萌出してもいない状態および咬耗状態から考えて、この個体は13～14歳ぐらいであろう。

四肢骨：上腕骨や大腿骨は細くて、短い。保存が悪く観察不能のものがおおいので、特記すべきことはない。

性別・年齢：この個体は13～14歳ぐらいで、性別は不明である。ただし歯の大きさが縄文時代の女性の平均値を下回るものが多く、とくに犬歯が小さいので女性の可能性が高い。

SH545 (図版34)

一体分であろうが一部分の骨格しか出ていない。頭蓋骨は上顎の歯槽部と下顎骨の一部、四肢骨は左上腕骨遠位部、寛骨の坐骨結節部および右大腿骨の近位部が確認される。

頭蓋骨：上顎の歯槽部が出土しているが保存は悪い。下顎骨は右の下顎体および下顎枝の下半分である。角前切痕はない。下顎角は外側にやや張り出している。下顎枝の筋突起の斜線から続く外側隆起は顕著で、上外側隆起も発達している。顎舌骨筋線はさほど明瞭ではない。

歯：上・下顎とも前歯部が破損している。上顎第2大臼歯は3咬頭性、第3大臼歯は2咬頭性で、ともに近遠心径は小さい。下顎大臼歯の溝の型は第1・第2大臼歯ともに+型である。第3大臼歯は左右ともに3咬頭性様の変形した歯である。とくに左の第3大臼歯はやや舌側に変位して植立している。上顎歯の咬耗はモルナーの2～4で、小臼歯部の咬耗は少ないが大臼歯の咬耗は進んでおり、どの大臼歯も咬合面が平坦化している。また、下顎歯の咬耗はモルナーの3～4で、やはり咬合面の平坦化が進んでいる。残存歯に齶歯(むし歯)はない。

この個体もやはりエナメル質減形成が顕著である。もっとも顕著なのは第2大臼歯と第2小臼歯にみられる歯冠ほぼ中央の太い溝(山本：1988)山本のC：溝状に相当する)で、これらはほとんど同じ時期、すなわち6歳前後に形成されたものである。また上顎第3大臼歯の歯冠中央にもやや広い溝状のエナメル質減形成がみられ、これは11歳前後に形成されたものであろう。咬耗パターンは30～35歳の壮年に属すると考えられる。

四肢骨：左上腕骨は遠位部が出土している。表面が剥がれ落ちていることを割り引いて考えてもかなりきゃしゃである。寛骨の坐骨結節はあまり大きくないが、結節から小坐骨切痕へはなだらかに移行している。つまり、半膜様筋のつくあたりがあまり発達していない。大腿骨は頑丈である。骨幹上部外側の股筋隆起(gluteal flange)が発達しており、上横径は29.5mm、上矢状径は22.6mmであり、骨体上断面示数(扁平指数)は76.6、したがって上部は扁平(広)である。粗線の上半部は幅が広く発達している。この大腿骨と頭蓋骨(下顎骨)とは同一個体であってもおかしくないが、先の上腕骨と同一個体とは考えにくい。ただし、上半身が比較的きゃしゃで下半身が発達している個体もあるので、北村人の特徴の一つと考えられなくもない。今後の検討を要する点である。

性別・年齢：この個体は壮年の男性であろうと推測されるが、上腕骨がきゃしゃで別個体のものの可能性

もある。

SH549 (図版37、図46)

頭蓋骨が2つ出土している。四肢骨の下部に埋葬されている頭蓋骨Aと、四肢骨と離れて出土している頭蓋骨Bである。四肢骨は下肢骨がほとんどである。上肢骨は他の四肢骨とはやや離れて存在し、頭蓋骨Bのものと考えられる右上腕骨だけである。

(A)

右を上にした状態である。左右(横)方向に土圧を受けている。

頭蓋骨：眉間隆起が発達しており眉間上窩は認められない。乳様突起は大きい。頭蓋冠の骨は厚みである。

左右の頭頂骨の間の矢状縫合は離開しているが、縫合が閉じていなかったかどうかは不明である。外後頭隆起は一部が破損しているがさほど発達していた様子はない。

下顎骨は比較的頑丈である。オトガイ隆起は発達している。

歯：下顎歯の歯冠はほとんど失われているが、歯槽には抜歯の痕跡はない。下顎第3大臼歯の溝の型は+型で第6咬頭がある。歯冠の一部が残っている下顎の右の大歯から第2大臼歯までは咬耗が激しく、モルナーの5～6で、咬耗状態の基準にしたがえば40～50歳の熟年と判定される。下顎第3大臼歯の咬耗はモルナーの3で、咬耗が近心のみに限局されており、他歯の咬耗が顕著なことから判断すると対応する上顎の右第3大臼歯は先天的に欠損していたと考えられる。

四肢骨：下肢骨は、大腿骨が左右それぞれ2本ずつ計4本、胫骨が左右1本ずつ計2本が出土している。これらの下肢骨は上下の方向が自然位にはなく、また、大腿骨と胫骨との整合性もない。したがって、これら2体分の下肢骨は、どちらかが埋葬されるときに片隅によせられたものと考えられる。それ以前のこれら2個体の埋葬位置の関係は推測できない。

それぞれの四肢骨は土圧で数cmぐらいの小片に割れている。大腿骨には殿筋隆起のみられる個体もあり、それらは上部が扁平な大腿骨である。付け柱状の粗線を持つものはない。どの大腿骨も胫骨もとくに頑丈であるということはない。胫骨の中央部の断面はヘリチカのIV型である。

性別・年齢：この個体は、熟年の男性であろう。

(B)

後頭部を下にした、上向き状態で出土している。左右方向にややひしゃげており、頭蓋の前半は欠けている。

頭蓋骨：矢状縫合の後方の外板・内板以外は、矢状縫合、ラムダ縫合とも癒合しておらず比較的若い個体である。外後頭隆起はヘリチカのII型でさほど発達していない。ラムダ縫合骨(図196)が左右それぞれに2・3点存在する。

性別・年齢：この個体はさほど高齢ではなく、20代の青年であろう。性別は不明である。

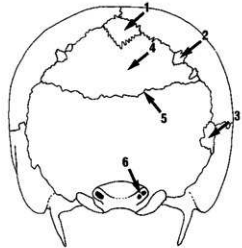


図196 頭蓋骨の後面観

1：ラムダ骨、2：ラムダ縫合骨、
3：アステリオン骨、4：インカ骨、
5：横後頭縫合、6：二分した舌下神経管(左は正常な舌下神経管)

SH550 (図版40、図47)

ほぼ全身の骨格が残っているが、保存状態はよくない。とくに上半身の骨格の残りは悪い。上肢は、右は肘を強く曲げ手を右肩近くに置いているが、左は肘をほぼ90度曲げて手を右肘付近に置いている。下肢は膝を強く曲げ、体幹とほぼ90

度の右の方向に倒している。顔面は右に向けている。仰臥屈伸である。

頭蓋骨：下顎骨が残っている。第1大臼歯部で下顎体高が約29mmである。骨体はむしろ薄い。

歯：下顎右第1・第2小臼歯と第3大臼歯が残っているが、歯冠はどれも破損している。咬耗はモルナーの4～5で比較的進んでいるので成人であることはまちがいない。第3大臼歯の咬耗を咬耗パターンにあてはめると、30～40歳ぐらいの壮年に相当すると考えられる。

四肢骨：右上腕骨が残っている。比較的細く、三角筋粗面もさほど顕著ではない。骨盤は左寛骨臼骨が残っている。大坐骨切痕の角度は比較的大きく女性的だが、骨自体がやや圧平されて変形しているのが正確にはわからない。下肢骨は左側は比較的保存がよいが、右の大腿骨は細かく破損し脛骨は圧平されている。左大腸骨はあまり太くなく、粗線は普通である。胫骨の後面の鉛直線は比較的発達している。

上腕骨の最大長は280mm前後と推測され、推定身長を計算すると151cm前後ということになる。この値は縄文時代の女性の推定身長の平均値に近い。

性別・年齢：この個体は、壮年の女性の可能性が高いと考えられる。

SH555 (図版42・43、図48、PL16)

人骨の保存状態は悪い。2個体分(A、B)の歯が出土している。人骨Aは襲披りである。

(A)

頭蓋骨：顔面部が消失している。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。耳道上稜は発達していないし、乳様突起も大きくない。矢状縫合は癒合していない。他の縫合もまだ細かい鋸歯状であるのでさほど高齢ではない。下顎骨は右の下顎角部が残っている。下顎体はさほど頑丈ではない。角前切痕はなく、顎舌骨筋線は鈍である。

歯：歯は10本が残っている。上顎は左の中切歯、犬歯、第2・第3大臼歯、右は第2大臼歯、一方下顎は右の第2・第3大臼歯および左の第1(歯冠片)・第2・第3大臼歯である。いずれも咬耗が進んでおり、咬耗度はモルナーの4～5である。咬合面は平坦である。咬耗パターンに従えば、この個体の年齢は30歳代前半ぐらいの壮年に相当している。

四肢骨：大腿骨と脛骨の一部が出土している。大腿骨は比較的きゃしゃである。小転子は小さい。粗線は発達しているが内側唇と外側唇は不明瞭である。左の大腸骨では外側に軽度の転子下窩がみられるが殿筋隆起は形成されていない。腸骨大腿靭帯のつく転子間線はよく発達している。上部は扁平ではない。

脛骨は左右とも骨幹の中央部が出土している。きゃしゃである。断面は比較的扁平のようである。

性別・年齢：この個体は、壮年の女性の可能性が高いと考えられる。

(B)

歯だけが出土している。保存状態はよい。上顎では、左・右の中切歯、左側切歯、左第1小臼歯、左右の第3大臼歯が欠けている(ただし、小さな臼歯状の歯が出土しているのでこれが第3大臼歯である可能性もある)。一方、下顎は左の中切歯から犬歯までと右の第3大臼歯が欠けている。

上顎右の側切歯はシャベル型で、舌側基底に斜切痕がみられる。上顎右第2大臼歯の頰側には臼歯結節がある。臼歯結節は現代日本人では0.5～1%出現する形質である(馬：1949、住谷：1959)。第1大臼歯から第2大臼歯にかけて歯石が多くみられる。

下顎大臼歯には、第6咬頭がみられる。咬頭と溝の型は、第1大臼歯が+5型、第2大臼歯は右が+4、左が+5、第3大臼歯はX5型である。上顎と同様第1大臼歯から第3大臼歯にかけて歯石が沈着している。

咬耗はモルナーの2～4でさほど顕著ではないが、磨耗の仕方にやや特殊な部分がある。上・下顎大臼

歯ともに頬舌方向に強い指向性を持った咬耗がみられ、とくに右側で顕著である。このような咬耗が形成されると、臼歯本来の、いわゆる臼歯運動のような咬合関係はむずかしくなったと考えられる。下顎の右第2大臼歯は咬耗が頬側面にのみに限られている。また、下顎の右大歯は切端からの咬耗が著しい。この大歯の磨耗の原因は習慣性の磨耗によるもので、例えば歯ざしりのようなものが考えられる。上・下顎の第3大臼歯の咬耗はごくわずかであるので、年齢は比較的若く20歳やや前であると考えられる。歯の大きさは現代日本人の男性の平均値を上回っており、男性の可能性が考えられる。

エナメル質減形成はみられない。

性別・年齢：この墓坑からは2体の骨が出土している。一体は壮年の女性であり、もう一体は少年の男性であるとされる。

SH558 (図版45・46、図49、PL16)

頭蓋骨と下肢骨が出土している。保存状態は悪く、埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：頭蓋骨は発掘時に左半分が失われ、右半分が残っている。眉弓はさほど発達していない。鼻根部は一般の縄文時代人のように窪んでいる。耳道上稜の発達は弱い。冠状縫合は分離している。

下顎骨は下顎体が出土している。下顎骨の縁隆起は不明瞭である。オトガイはさほど隆起していない。左の小臼歯部に軽度の下顎隆起がみられる。下顎底は内外的に薄く、角前切痕は認められない。

歯：歯は上顎の右第2大臼歯以外は破損している。下顎の左大歯と第1小臼歯部は歯が脱落したあとで、歯槽の吸収がみられる。この2本の脱落が風習的な抜歯によるものかどうかは不明だが、一般に抜歯は大歯までの前歯を抜いているので、第1小臼歯が脱落しているところをみるとなんらかの事故で歯を失ったと考えたほうがよさそうである。第2大臼歯の咬耗度はモルナーの3～4でさほど進んでいないが、咬合面は平坦化している。12歳頃に萌出する第2大臼歯の咬耗がこの程度ということはこの個体がさほど高齢ではないことを示している。

四肢骨：下肢骨は土圧で圧平されたり、折れ曲がっていたりする。大腿骨の粗線はあまり発達していないが、上部外側の股筋隆起がやややり出している。骨幹上部は自然状態で扁平で、上骨体断面示数は59.1で超広 (hyperplatymer) に属する。脛骨は土圧で圧平されており、細かな形態は不明である。

性別・年齢：この個体の性別は不明である。成人であろうがさほど高齢ではない。

SH559 (図版45・46、図49、PL16)

頭蓋骨は外形が確認できる。四肢骨の保存状態は悪い。右上肢は伸展し手を腰の横に置き、左上肢は肘をやや曲げて手指は腹部の中央部にある。下肢は膝を強く曲げ左に倒している。顔面は左に向けている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋骨は左右に圧平され、さらに前後方向にもやや土圧を受けている。頭蓋は小さめで、額は垂直である。眼窩上隆起は発達していない。外後頭隆起は発達せず、ヘリチカのII型である。乳棘突起はやや大きめで厚みはない。側頭線は明瞭ではないので、咀嚼筋 (側頭筋) はさほど発達していなかったであろう。顔は低い。矢状縫合は癒合している。ラムダ縫合の一部も癒合しているのでかなりの高齢であろう。

下顎骨はきしゃである。角前切痕はない。上外側隆起が顕著で第2小臼歯部のオトガイ孔まで隆起している。オトガイ隆起は発達している。外側隆起は顕著で、外側結節も発達している。内面の小臼歯部から大臼歯部にかけての軽度の下顎隆起がみられる。

歯：下顎歯の歯槽ソケットは出土した部分にはすべてある。ただし、第1切歯の歯槽が第2切歯の歯槽に

比べてやや小さく退行的であるので、死亡するやや前に脱落した可能性はある。上顎歯はすべて破損して失われている。

四肢骨：上腕骨は細くきゃしゃである。骨盤の残りは悪いが、右の大坐骨切痕は90度近く、女性的である。大腿骨は比較的頑丈である。中央付近の断面は三角形であり、粗線の幅は狭い。後面上部に転子下窩が明瞭に認められ、その外側には殿筋隆起がみられる。上部の扁平性は高い。胫骨は土圧で圧平されている。鉛直線は目立たない。

性別・年齢：この個体は、頭蓋骨などの形状から女性の可能性が高いと思われる。年齢は少なくとも熟年には達しているであろう。

SH573 (図版31・32、図50、PL17)

保存状態は比較的よい。上肢は左右ともに肘を強く曲げて、手をそれぞれの肩に近く置いている。下肢は膝を強く曲げ左にやや倒している。顔面は前を向いている。口を開けているが、下顎骨は死後はずれたものであろう。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：前後方向に土圧を受けている。顔面部的変形はさほどではないが、冠状縫合付近で折れ曲がったようになっている。顔面は低い。眼窩上隆起はさほど発達していない。乳様突起は大きく、かつ厚い。耳道上稜は発達しているし、前上乳突結節が大きい。外後頭隆起はあまり発達していなかったようである。矢状縫合、ラムダ縫合は明瞭に認められる。冠状縫合は破損していて不明である。

下顎骨はがっしりしており、角前切痕はない。オトガイ隆起はよく発達している。

歯：破損して消失した歯を除けば、すべての歯が萌出している。上顎中切歯はシャベル型である。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯がY5型、第2大白歯が+4型である。咬耗はモルナーの3~4で軽度である。下顎左右第3大白歯の頰側面に齶蝕(C3)と考えられる構造が認められる。上顎歯の一部にエナメル質減形成が認められる。歯の咬耗パターンによればこの個体は20~25歳と推定される。

四肢骨：四肢骨は比較的よく残っている。鎖骨はきゃしゃである。下面の円錐靭帯結節の発達もさほどでない。上腕骨はあまり太くなく、筋の付着部も発達していない。尺骨は骨間縁の発達もよくない。

骨盤の残りはよい。大坐骨切痕は直角に近く女性的である。仙骨との関節面である耳状面は腸骨粗面とは明瞭に区別される。耳状面前溝はごく軽度にえぐれている。腸骨稜の骨端は肉眼的には癒合を完了しているので、少なくとも20歳前後ではあろう。大腿骨は細めである。上部外側に転子下窩が認められ、殿筋粗面は殿筋稜となり小さな第3転子様の突起が認められる。ただし、殿筋隆起を形成するほどではなく骨体の前面にも溝はない。上部の扁平性は弱い。骨体の中央付近の断面は三角形で粗線の発達はよくない。大腿骨頭の頸に続く部分に骨頭からの関節の伸びだしがあり、アレン頸窩(図197)と考えられる。胫骨は比較的扁平である。中央付近の断面は骨間縁の発達が悪いのでヘリチカのV型である。鉛直線はあまり目立たないが、右胫骨の方が鋭い。腓骨はむしろきゃしゃである。

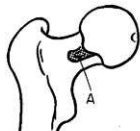


図197 右大腿骨全面にみられるアレン頸窩(A) 森本(1981)の図にシャドウを加えた

大腿骨の最大長は272mmで、これから推定される身長は約145.1cmである。また、上腕骨による推定身長は149.2cm、胫骨による推定身長は147.4cmである。したがって、これらの平均値は147.2cmである。この推定身長は平本(1977)による縄文時代の女性の平均値148.05cmとほとんど変わらない。

性別・年齢：この個体は骨の大きさや筋の付着部の発達状態、骨盤の形状から女性と考えられる。年齢は歯の咬耗、骨化状況などから20~25歳位と考えられる。妊娠歴があったと考えられる。

SH580 (図版29・30、図51)

保存状態は非常に悪く、頭蓋骨は取り出せなかった。下肢の長骨片が2片出土しているだけである。下肢は、膝をやや曲げて、両側に広く開いて埋葬されたらしい。性別・年齢ともに不明である。

四肢骨：右大腿骨上半付外側半が同定された。わずかに殿筋隆起が認められる。どちらかといえばきゃしゃな大腿骨である。粗線はあまり発達していない。一方の長骨片は大腿骨であろうが詳細は不明である。

SH606 (図版34、図52)

保存状態は非常に悪い。頭蓋骨片は取り上げられなかった。寛骨から下肢骨にかけての一部が残っている。埋葬姿勢は不明である。

四肢骨：大腿骨はさほど頑丈ではなく、むしろ細い。上部は比較的扁平(75.6:広)である。前面の上部中央付近に鈍な稜状の高まりがある。恥骨筋線や殿筋粗面はあまり発達していない。脛骨は遠位部が残っているが詳細は不明である。

性別・年齢：大腿骨があまり頑丈でない点から女性の可能性が高いが、年齢は成人である以外はわからない。

SH607 (図版34、図53、PL17)

保存は比較的良好で、ほぼ全身骨格が出土している。左右の上肢は肘を比較的強くまげて、手をそれぞれの側の鎖骨付近に置いている。下肢は、膝を強く曲げ、ほぼまっすぐに立てている。膝の部分は発掘中に失われている。頭蓋には髪が被さっている。髪は顔面の部分にあり、この部分の骨は細片化して復原はできない。顔はやや左を向いている。仰臥屈葬である。

SH517の胸部付近にこのSH607の大腿骨と脛骨の一部が出ている。SH607の方が下層(より古い)に埋葬されていたことになる。

頭蓋骨：顔面部は細かく破損している。鼻切痕をなす上顎骨の前縁は正中に向うに従って下降しており、左右の上顎骨の間の鼻縁は隆起せず鼻前溝はない。前鼻棘部は破損しているが鼻孔は梨形状ではなく、やや変わったものであったろう。頭蓋冠の骨は薄い。外後頭隆起は発達しておらず、ヘリチカのI-II型である。縫合は鋸歯状の構造が明瞭で癒合していない。まだ若い個体であろう。舌下神経管は二分している。

下顎骨は比較的頑丈で、下顎角部が外側にはり出している。軽度の角前切痕が認められる。オトガイ隆起はやや発達しているが、外側結節はさほど明瞭ではない。

歯：上下顎ともに全歯が植立しており、抜歯はない。上顎中切歯は浅いシャベル型である。大臼歯の咬頭と溝の型は左右とも、第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が+4か+5型(咬頭数は磨耗のため不明)、第3大臼歯が+5型である。咬耗はモルナーの3~4である。下顎歯は切歯部がやや破損している。

エナメル質減形成がみられる。

咬耗パターンから推定される年齢は、25~30歳位の青年である。

四肢骨：鎖骨は比較的きゃしゃである。肩峰端の下面の円錐帯結節はほとんど突出せず、菱形帯線も比較的なめらかである。肩甲骨は頑丈で、外側縁は非常に発達している。上腕骨は頑丈であるが、三角筋粗面などの筋付着部はさほど発達していない。右の尺骨および橈骨も頑丈である。橈骨後面の円凹内筋が付着する付近は非常に頑丈である。

寛骨は大きい。大坐骨切痕はやや鋭角で男性的である。耳状面前溝はほとんど認められなし、耳状

面も低い。坐骨結節は大きく発達し、寛骨臼との間の距離は近接点で約12mmである（ちなみに現代人男性の例では約20mmである）。大腿骨も頑丈で、小転子は大きい。骨幹上部は扁平ではない。粗線は明瞭で中央付近では幅が10mm程もあり、付け柱状の大腿骨である。胫骨は頑丈だが、扁平である。後面の鉛直線は明瞭である。中央の断面はヘリチカのIV型である。腓骨は太い。距骨に踵磨面はない。

上腕骨の最大長は303mmで、これから計算される推定身長は157.8cmである。これは縄文時代の男性の平均値159.11cmと大差はない。

性別・年齢：この個体は、頭蓋骨はむしろきゃしゃで、上肢骨も下肢骨に比べてきゃしゃといえる。とくに鎖骨がきゃしゃなのが目立つ。上半身のきゃしゃな男性と考えられ、年齢は歯の咬耗から25～30歳ぐらいの青年と推測される。

SH616 (図版37、図54)

保存状態は非常に悪い。頭蓋骨には顔面部がなく、後頭部だけが取り上げられた。右上肢は肘を強く曲げ、手を右肩の位置まで曲げており、左上肢は肘を軽く曲げて手を腹部に置いている。下肢は、残存部の状態から考えて、膝を比較的強く曲げ、膝を右に倒していると推測される。顔面は下方（足方）に向けている。仰臥屈葬であろう。

頭蓋骨：顔面部は欠けている。前歯部は残っていないが、発掘時点で観察した歯槽の状態から上下顎ともに抜歯はないと判断される。外後頭隆起はあまり発達しておらず、ヘリチカのIII型である。下顎骨に角前切痕はみられない。下顎角部がやや外方へはり出している。内側の顎舌骨筋線は明瞭である。下顎角幅は発掘時の計測では103mmであった。

歯：上顎の左右中・側切歯ともに破片が残っているので抜歯はなかったと考えられる。上顎の大臼歯は退化傾向が強く、第2・第3大臼歯ともに3咬頭性である。切歯の切縁の咬耗状態から判断して、縄文時代人には一般的な切端咬合（鉗子咬合）であったと考えられる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型（第6咬頭がある）、第2大臼歯は左が+5型（右は不明）、第3大臼歯は右が+5型、左は異常型である。咬耗は全体に少なく、モルナーの2～3である。咬耗は少なめであるが、第3大臼歯の咬合面全体に磨耗がみられるので、ある程度の年齢には達していると判断される。歯の咬耗パターンから推測して、この個体は20～25歳の青年であろう。

エナメル質減形成が認められる。

四肢骨：それぞれの骨は残りが非常に悪く、骨表面の観察に耐えるものはない。左上腕骨は遠位半が取り上げられたが、土圧で圧平されている。比較的頑丈である。埋葬時の上腕骨の長さは推定で263mm、頭蓋から仙骨端までの長さは804mmであった。上腕骨の最大長から計算される推定身長は146.6cmである。この値は平本による縄文時代人女性の平均値（148cm）よりやや小さめである。

性別・年齢：この個体は青年の女性であると考えられる。

SH620 (図版45・46)

歯：上顎の大臼歯が残っている。どれも咬耗が進んでおり、咬耗パターンからは50歳代と考えられる。性別は不明である。

SH627 (図版35・37、図55、PL18)

3体分（A、B、C）が埋葬されている。このうち1体（C）は、下肢骨の一部だけである。（A）

下肢をやや左に寄せて、膝を胸部まで折り曲げた屈葬である。椎骨や足骨などは消失している。頭蓋骨は胸部に顎を埋めるように強く曲げている。右上肢は右肩のところまで強く曲げている。頭蓋骨は頭頂方向からの土圧を受けており保存は悪い。

頭蓋骨：乳様突起は小さい。歯は失われているが歯槽に歯根の入るソケットがみられ、それによれば少なくとも下顎に抜歯はない。

四肢骨：上腕骨はきしゃである。大腿骨はあまり太くない。粗線は内側脛・外側脛は明瞭で、いわゆる付け柱状大腿骨である。骨幹の上方内側は明瞭な稜構造になっており、前面中央に稜状の高まりがある。その高まりの外側はやや凹んでいるが殿筋隆起を形成してはいない。緻密質は厚い。左大腿骨は骨幹のごく一部が出土している。この左大腿骨の形態は右とよく似ているが、わずかに異なる点もあり、後述のBの大腿骨の可能性もある。脛骨は土圧で圧平されていて詳細は不明である。腓骨も土圧で圧平されている。比較的細く、骨間縁もあまり発達していない。

大腿骨の最大長(410mm)から計算される推定身長は156.2cmである。この値は、縄文時代女性の平均値(148.05cm)よりも男性の平均値(159.11cm)にむしろ近い。

性別・年齢：この個体は、成人であることはまちがいない。女性の可能性が高い。

(B)

上腕骨の位置、椎骨の向きなどから判断して、下向け(うつ伏せ)に埋葬されたものと考えられる。頭蓋骨を左下に傾け、胸部方向へも折り曲げている。横からの土圧を受けている。上肢骨は残っているが下肢骨は消失しているし、椎骨や肋骨は痕跡的にしか残っていない。Aとならんで埋葬された可能性がある。

比較的残りのよい第2頸椎は前面を墓坑の底面に向けている。顔面のすぐ下方(足方)に左寛骨が外側面を底面に向けて出土している。この寛骨は後述のC個体のものである。Bの個体の下半身を含む右半身は、擾乱を受けて消失したと考えられる。

頭蓋骨：土圧で復原不可能な細片に割れている。眼窩上隆起は発達しており、眉間隆起が発達していて左右が連続している。乳様突起も比較的大きく厚い。耳道上稜は顕著である。矢状縫合はラムダ部に近い部分が癒合しているので熟年に達していると考えられる。しかし、中央に近い部分には大きめの鋸歯状の縫合が認められ、ラムダ縫合も消失していない。

四肢骨：左側上肢だけが出土している。下肢骨はない。左上腕骨は後面を上にしており位置関係からこの個体は下向けに埋葬されたと考えられる。上腕骨は比較的頑丈で、三角筋粗面も発達している。

上腕骨の最大長(約300mm)から計算される推定身長は156.9cmである。Aの個体とほとんど同じである。

性別・年齢：この個体は男性であろうと思われる。年齢は成人であろうと思われるが、詳細は不明である。

(C)

B個体より以前に埋葬されていたので、Bの埋葬時に下肢骨の一部が失われたらしい。

四肢骨：B個体の下に寛骨と大腿骨の近位部が位置している。大腿骨は頑丈で太い。後面上部の殿筋粗面は非常に発達しており、転子下窩も明瞭である。したがって外側の殿筋隆起も発達している。粗線も発達しているようであるが付け柱状大腿骨ではない。脛骨も太く頑丈である。鉛直線が比較的明瞭である。骨間縁は鋭くない。

性別・年齢：この個体は男性であると考えられるが、年齢は不明である。

SH638 (図版38、図56、PL18)

全身の骨格が残っているが、骨の保存状態は非常に悪い。左右の上肢は肘を強く曲げ、手をそれぞれの肩の付近に置いている。下肢は膝を比較的強く曲げて、右に倒れている。顔面は右に向けられている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧で横、ならびに前後の両方向につぶれている。顔面骨は破損している。頭蓋冠の骨はあまり厚くない。外後頭隆起は発達していないが、小さな突起が下方にはり出している。プロカのIII型に小さな突起がついた形である。

下顎骨に角前切痕はみられない。下顎枝の筋突起から続く外側隆起はやや発達している。内突起稜(筋稜)は発達していない。オトガイ隆起は顕著である。内側の顎舌骨筋線は鈍であるし、下顎角は外側にはり出していない。

歯：少なくとも、下顎骨には抜歯はない。第2大臼歯の咬耗度はモルナーの4、第3大臼歯は3である。咬耗パターンでは30～35歳ぐらいの壮年と推測される。

多くの歯でエナメル質減形成が観察される。4歳前後、5歳前後、11歳前後に形成されたと考えられるものが観察される。幼児期の栄養不良、あるいは病気などでかなりのストレスを受けたものであろう。しかし、第1大臼歯の歯冠には観察されないので離乳期には形成されていないらしい。

四肢骨：上腕骨は比較的太くて頑丈である。小結節稜、大結節稜も発達している。下肢骨は土圧で動かされて細片化している。比較的よく残っているのは寛骨である。大坐骨切痕は鋭角で、耳状面前溝もみられず、耳状面も高くないようであるから男性の骨盤であろう。

上腕骨の推定最大長は260mmで、これから計算される推定身長は145,8cmである。この値は縄文時代の女性の平均値よりやや小さい。

性別・年齢：この個体は壮年の男性と考えられる。

SH644 (図版36・37)

下肢骨のみが残っている。

四肢骨：右大腿骨骨幹だけが同定できた。この大腿骨は頑丈で、粗線も比較的発達している。中央付近の矢状径、横径はともに約27,8mmで断面示数は100である。殿筋隆起は認められない。

性別・年齢：この個体の性別・年齢はともに不明である。

SH652 (図版52、図57)

顔面が正面を向き、上肢骨は上腕骨が左右に平行にあるので仰臥であることが推測できる。それ以外は不明である。

頭蓋骨：土圧で前後方向にかなり圧平され、歯は本来の植立位置を保っていない。骨の保存状態は悪いので、詳細な観察が可能な部位はほとんどない。外後頭隆起はやや発達しており、プロカのIII型である。下顎骨のオトガイ隆起は顕著である。

歯：7本の歯が確認できた。上顎の大臼歯の咬耗はやや進んでいるが、下顎歯はさほど進んでいない。咬耗度はモルナーの3で、歯の咬耗パターンからは、25～30歳程度の青年段階に属すると考えられる。

四肢骨：上腕骨は比較的太く、遠位の外側縁も鋭い。大腿骨は太く頑丈である。粗線の発達は著しく、幅は10mmを越え内側唇・外側唇が明瞭である。いわゆる付け柱状の大腸骨である(図198)。中央付近の太さは、矢状径は38,7mm、横径が28,3mmで断面示数は73,1である。残存四肢骨はどれも頑丈で男性的である。

性別・年齢：この個体は青年の男性と考えられる。

SH659 (図版35・37、図59、PL18)

頭蓋骨は土圧でつぶれている。直径約20cm程の甕を被せられている。そのため一部の土器縁が顔面に食い込んで顔面の骨は細片化している。右上肢は肘を強く曲げ、手を右肩に置いている。左上肢も同様に強く曲げていたと思われる。下肢は膝を強く曲げて、膝をやや左にして立てている。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。この個体の右側に別個体の骨がみられる。

頭蓋骨：骨は全体に厚く、乳様突起は大きくて厚い。前上乳突結節が発達しているので乳突上溝も顕著である。外後頭隆起がよく発達しプロカのIII型である。

下顎骨のオトガイ隆起は顕著である。男性的な頭蓋骨である。

歯：一部の歯根は残っているが、下顎左第1大臼歯の歯冠片以外の歯冠は残っていない。下顎の左・右中切歯部の歯槽が退縮しており、抜歯の可能性を考えさせる。側切歯から遠心は歯槽の状態から考えて抜歯はない。

この個体の歯にもエナメル質減形成がみられる。唯一残った下顎の左第1大臼歯の歯冠の歯頸部近くに線状の減形成がみられ、頰側面には多数の小窩がある。これが形成されたのは2～3歳の頃と推測される。この歯の咬耗は進んでおり、咬耗度はモルナーの5である。危険性はあるが、咬耗パターンにあてはめると40歳以上の熟年であると推定される。

四肢骨：大腿骨は頰丈で、粗線はよく発達していわゆる付け柱状大腿骨である。転子下窩は顕著で、大腿骨の上部は扁平である。骨幹上部外側に殿筋隆起がみられる。胫骨の断面はヘリチカのII型に近く、扁平である。

性別・年齢：この個体は熟年の男性と考えられる。抜歯の可能性のある個体である。

SH674 (図版38)

頭蓋骨の一部(歯槽と歯の部分)、および下肢骨の一部が出土している。頭蓋骨はほとんど形をとどめておらず、歯だけが観察可能である。四肢骨は破損がひどく、左大腿骨らしい長さ約20cmの骨幹部以外ほとんど同定できない。

歯：上下顎の大臼歯部が出土している。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は右第2・第3大臼歯がX4型、左第2・第3大臼歯が+4型である。咬耗は少なく、モルナーの2～3である。咬耗パターンで判断するとこの個体は20代後半から30歳ぐらいの青年である。歯はあまり大きくない。

エナメル質減形成は第3大臼歯歯冠の下唇付近に軽度のものが認められ、上顎では比較的是っきりしているが、下顎歯は小窩状のものである。

四肢骨：大腿骨は後面を上方にしており、粗線部分は破損している。土圧でやや圧平されている。あまり太くない。歯による年齢推定ではこの個体はすでに成人であると判断されるので、大腿骨の太さから判断して、女性の大腿骨である可能性が高い。他に胫骨の一部と思われる骨が出ているが左右の同定はできない。

性別・年齢：この個体は青年の女性であると推測される。

SH692 (図版31・32、図60、PL19)

頭蓋骨と上肢の一部、および椎骨の一部が残っている。一体分である。左右の上肢は肘を伸展して腰の



図198 典型的な付け柱状大腿骨

SH652の右大腿骨中央付近の断面である。後面にほり出した部分が付け柱で粗線の一部である。

I：外側、P：後方

横に置いている。下肢は、膝をやや強めに曲げ、わずかに左に寄せて立てている。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：前後方向に土圧で圧平されている。前頭部から頭頂にかけては細片化しており、形態は不明である。外後頭隆起はほとんど発達していない（ヘリチカのI型）。頭蓋冠の骨は薄い。乳様突起は小さい。後頭骨の表面はなめらかで筋のあまり発達していないことを示している。ラムダ縫合は癒合のまったくない明瞭な縫合線が残っているので若い個体であろう。正中口蓋縫合の口蓋骨部も明瞭である。

下顎骨はきゃしゃである。オトガイ隆起は顕著であり、オトガイの外側結節も明瞭である。オトガイ孔は左右とも1個である。

歯：上下顎とも未萌出の第3大臼歯以外はすべて残っている（写真6-1）。きれいな歯列をしている。抜歯はない。下顎の第3大臼歯が歯槽内で形成されている段階である。上顎の中切歯、側切歯はどちらもシャベル型である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY5型（右；第6咬頭がある）、Y5型（左）、第2大臼歯が+5型（右）、X5型（左）である。切歯の切端の摩耗状態から判断して、上下顎の咬合関係は、縄文時代人には少ない缺状咬合であるが、年齢が若く成長中のために咬合が未だ安定していないことによると考えられる。咬耗はごく少なく、モルナーの2-3である。第2大臼歯は上・下顎ともに萌出しているので、第3大臼歯の未萌出を考えあわせると、歯から推定される年齢は13-14歳ぐらいである。

ほぼ全歯のエナメル質が荒れているが、山本〔1988〕の定義ほどのものではない。

四肢骨：鎖骨と肩甲骨、および上腕骨が出土している。肩幅は狭い。左鎖骨は肩峰端が出土している。下面の円錐帯の付着部は発達している。上腕骨はきゃしゃで、この年齢としては極端に細く、筋付着部である三角筋粗面もほとんど発達していない。近位骨端は未だ癒合していない。この部位は、現代人では14歳前後に癒合を開始、20歳前後で骨幹と癒合を完了するといわれている。したがって、骨端の化骨状態からはこの個体の年齢は15歳前後と推測される。遠位端は欠けているが、肘窩窩のすぐ上の部分が確認できるので最大長は推定で240-245mmの範囲であろう。この値から計算される推定身長は、140.2-141.6cmである。この値は縄文時代人の身長（男性：159.11cm、女性：148.05）よりかなり小さく、成長期の個体であろう。ただし、年齢が15歳前後と考えられるので、この個体は女性の可能性が高く、女性としても小さい方であったと考えられる。

性別・年齢：この個体は13-14歳ぐらいの女性であろうと推測される。

SH693（図版45・46、図61、PL19）

右上肢は肘を強く曲げ、手を肩に置いている。左は不明である。下肢は膝を強く曲げ、膝を胸にまで強く曲げた屈葬である。顔面は右に向けられている。保存状態は悪く、観察可能なのは頭蓋骨と下肢骨、および一部の上肢骨である。

頭蓋骨：顔面は破損している。頭蓋骨は土圧を受けて横方向に圧平されている。眼窩上隆起はやや発達しているが、前頭骨（額）はむしろ立っていて女性的である。鼻根部は一般的な縄文時代人にみられるようにくびれている。外後頭隆起は発達せず、ヘリチカのII型である。乳様突起はやや発達している。頭蓋の縫合はほとんど確認できない。頭蓋骨最大長は推定で182.2mmである。

下顎骨はきゃしゃである。角前切痕はない。

歯：歯は出土していないが、右下顎骨にわずかに歯根がみられるので、生前にすべて失われたわけではなさそうである。

四肢骨：ほとんどの四肢骨は土圧で圧平されている。左上腕骨は普通である。大腿骨はどちらかといえば

きゃしゃで、粗線もさほど顕著ではない。胫骨は強く圧平されていて細かな形態はわからない。腓骨は細い。

性別・年齢：この個体は全体に骨がきゃしゃで、さほど若い個体でもないので、女性の可能性が高い。年齢は成人という以外に不明である。

SH694 (図版35～37)

2体分が出土している(A、B)。Aが下層に、そしてBがやや上層に位置している。Aは、ほぼ全身がみられるが保存状態が非常に悪く、取り上げはほとんど不可能であった。

(A)

頭蓋骨：前後方向に土圧を受けているので顔面はつぶれている。ほとんど観察できない。頭蓋冠の骨は比較的厚めである。

四肢骨：上腕骨は普通の太さである。大腿骨の粗線はやや発達している。

性別・年齢：この個体は成人であろうが、詳細は不明である。

(B)

頭蓋骨と下半身だけが出土している。保存状態が悪く、取り上げられなかった。

頭蓋骨：頭蓋冠はやや厚めである。下顎骨の下顎体は薄い。大臼歯部の歯は脱落しているらしいが詳細は不明である。

SH703 (図版34、図62)

保存状態は非常に悪く、四肢骨はほとんど失われている。頭蓋骨も土圧で前後方向に圧平されている。左右上肢は肘を軽く曲げ、手を腰の部分にのせている。右手がやや上(頭側)にある。下肢は膝を強く曲げ、膝をやや左にして立てている。顔面はやや左に向けている。仰臥屈身である。

頭蓋骨：鼻根部は一般の縄文時代人のように凹んでいる。眼窩上隆起はやや発達している。乳様突起は大きい。外後頭隆起はあまり発達せず、プロカのII型である。耳道土稜は比較的発達している。下顎骨は左側が欠けている。土圧でややつぶれているが下顎枝角は大きめである。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：歯冠はもろく、かなり失われており、取り出しは不可能であった。歯槽の状態や残った歯根から判断して抜歯はない。上顎犬歯の咬耗度はモルナーの4～5であり、下顎左の第3大臼歯もかなり咬耗している。この個体は成人で、少なくとも壮年以上であると推測される。

四肢骨：上腕骨は比較的太い。大腿骨は近位部がわずかに残り、太く頑丈である。上部横径は30.4mm、上部矢状径は26.0mmで扁平ではない(上骨体断面示数：85.5)。殿筋筋面はさほど発達していない。骨幹上部外側に殿筋隆起がわずかに認められる。四肢骨は全体に男性的である。

性別・年齢：この個体は成人で、男性の可能性が高いが、外後頭隆起が発達していないなどの女性的な点も認められる。

SH709 (図版34、図63)

上半身だけが出土している。左顔面が破損している。左右の上肢は肘を強く曲げ、それぞれの側の肩に置いている。顔面はやや左下を向いている。仰臥である。

頭蓋骨：眼窩上隆起はほとんど目立たない。外後頭隆起もほとんど目立たず、プロカのII型である。頭蓋冠の骨は全体に薄い。乳様突起はさほど大きくなくて、全体的に女性的な印象の頭蓋骨である。ラムダ縫合の外板の一部が癒合し始めており、内板はほとんど癒合している。

ややきゃしゃな脳頭蓋に対して下顎骨は比較的頑丈である。角前切痕はない。外側隆起が顕著である。右の小白歯部から大白歯部にかけての歯槽の内側に軽度の下顎隆起がみられる。

歯：下顎骨の左右の第3大臼歯が残っている。下顎の左第1・第2大臼歯が生前に脱落しており、その部分の歯槽が退縮している。第3大臼歯は左右とも咬耗が進んでおり、咬合面は平坦である。咬耗度はモルナーの4～5である。かなりの高齢（50歳以上の熟年）であろうと推測される。

四肢骨：上腕骨は土圧で圧平されている。さほど太くはない。橈骨の遠位端はむしろきゃしゃである。性別・年齢：この個体は熟年の女性の可能性が高い。

SH711 (図版37、図64、PL19)

頭蓋骨と下肢骨が部分的に残っているが、保存状態は非常に悪い。歯は残っていない。右上肢は肘を強く曲げており、右の肩の近くに手を置いていたと推測される。一方、左上肢は伸展して腰の横に手を置いていたらしい。下肢は膝を強く曲げ、膝をやや右に倒している。股関節は強く曲げて膝は胸の位置にある。左右の膝はやや腫れている。顔面は右に向けている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：顔面は破損している。眉弓はやや発達している。外後頭隆起はプロカのIII型である。頭蓋冠の骨は薄い。頭蓋骨の縫合は一部の内板が癒合しており、ラムダ縫合の外下部の外板が癒合しているので比較的高齢（熟年～老年）であろうと推測される。

四肢骨：上肢骨は保存状態が悪く観察できない。大腿骨は太く頑丈であるが、粗線は発達していない。腱筋隆起はない。脛骨の上横径は32.1mmで、上矢状径は26.0mmであるから上骨体断面示数は81.0とやや扁平である。脛骨の中央付近の断面は後面の鉛直線があまり発達していないのでヘリチカのV型である。扁平脛骨ではない。

大腿骨の最大長は462mmと長く、これから計算される推定身長は169.0cmである。脛骨は最大長369mmで、これによる推定身長は165.1cmである。この両者の平均値は167.1cmで、この値は縄文時代男性の平均値より約8cm大きく、この時代としてはかなりの高身長である。

性別・年齢：大腿骨や脛骨の頑丈さから判断して、この個体は男性の可能性が強いと考える。年齢は、比較的高齢に属すると考えられる。

SH714 (図版34)

歯と下顎骨は残っていない。右上肢は肘を鋭角に曲げて左胸に手を置いている。左上肢は骨として取り上げることではできなかったが、右上肢と同様に肘を曲げ、手を胸に置いている。左右の手は正中で重なる位置関係にある。下肢は大腿骨の一部しか確認できなかったので詳細は不明だが伸展はしていない。顔はやや右に向けられている。仰臥屈葬であろう。

頭蓋骨：斜めの方向に土圧を受けている。眼窩上隆起では眉弓がやや発達している。外後頭隆起はあまり発達せずプロカのII型である。耳道上稜の発達もよくない。乳様突起は大きいが薄い。縫合はラムダ縫合、矢状縫合は明瞭な鋸歯状の縫合がみられるのでさほど高齢ではなからう。ひたいは垂直に近い女性型である。

四肢骨：こく一部しか出土しておらず、下肢の一部はSK2294のために破損している。上腕骨の近位部は圧平されているが大結節後には明瞭である。大腿骨の太さは中等度で、上部の遠位部後面はややへこんでいるが、これは転子下窩と考えられる溝の最下部であろう。前面中央には鈍な稜状の構造がみられるが比較的扁平である。粗線の発達状態は不明である。

性別・年齢：この個体は成人の女性と考えられる。

SH717 (図版34、図65、PL19)

2体(A、B)が重なって埋葬されている。上層に(後から)埋葬されているほうをA、下層に(先に)埋葬されているほうをBとする。両者の間には円礫が多量に混じっている土が介在している。

(A)

頭蓋骨はない、左上肢は伸展して左の腰の横に置いている。右上肢も胸部に手の骨がみられないので同様に伸展していたと考えられる。下肢は、膝を強く曲げてほぼ正中に立てている。

四肢骨：左右の寛骨にはともに耳状面前溝らしいものがみられる。また右の大坐骨切痕は直角に近く、この個体は女性の可能性が高い。大腿骨の粗線はさほど発達していない。太さもさほどではない。骨幹上部外側に転子下窩と思われる窪みがあるが前面には溝状の構造はない。上部はやや扁平である(上横径27.2mm、上矢状径22.5mm：上部断面示数82.7)。

性別・年齢：この個体は女性であろう。年齢は妊娠痕がみられるので成人であろう。

(B)

歯は残っていない。右上肢は伸展して右の腰の横に置いている。左上肢はやや強く肘を曲げ、手を右肩に置いている。下肢は膝を曲げ、股関節を強く曲げて膝が胸に達している。顔面は正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧でひしゃげており、顔面は破損している。外後頭隆起は目立たずヘリチカのI型である。乳様突起はやや大きめである。頭蓋冠の骨は比較的厚い。ラムダ縫合は縫合の癒合がほとんど観察されずさほど高齢ではないと思われる。ラムダ縫合以外は不明である。

下顎骨のオトガイ隆起は発達している。下顎隆起がやや発達しており、その下部は大きくえぐれて顎下腺窩が顕著である。歯は残っていないが、下顎骨の歯槽のソケットは確認できる。少なくとも下顎歯の小白歯より前に抜歯はない。上顎は不明である。

四肢骨：寛骨の耳状面付近が出土しており、耳状面前溝は認められない。大腿骨の粗線はよく発達しており、いわゆる付け柱状大腿骨である。中央付近の太さは矢状径30.3mm、横径が26.1mmである。脛骨の中央付近は、骨間縁が発達し、さらに鉛直線はそれほど目立たないが後面が丸くはり出しているの、断面形状はヘリチカのV型である。

性別・年齢：この個体の年齢は成人であるということ以外は不明である。男性である可能性が高いと考えられる。

SH730

左大腿骨の骨幹上部と考えられる骨だけが出土している。かなり太く頑丈であるが、細かな特徴は不明である。もう一片大腿骨らしい骨が出ているがやはり詳細は不明である。

SH735 (図版38、図66)

全身に近い骨格が確認できるが、骨の保存状態は非常に悪い。右上肢は肘を強く曲げて、右肩付近に手を置いている。左上肢は欠損している。下肢は左右とも膝を強く曲げ、やや左に倒している。股関節はかなり屈曲している。左右の膝の位置は離れている。頭蓋骨はおぼろげにみられるがやや左を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：前後方向に土圧を受けている。外後頭隆起はほとんど発達していない。乳様突起も小さいが、側頭線に続く耳道上縁は発達している。頭蓋冠の骨は薄い。ラムダ縫合の外下部には明瞭に鋸歯状の縫合が認められる。

下顎骨はややひしゃげているものの比較的原形を保っている。下顎骨体の高さは低いが、頑丈である。オトガイ隆起が認められ、外側隆起も比較的発達している。角前切痕がみられる。内側の顎舌骨筋線は明瞭である。

歯：下顎歯の歯槽は退縮していないので抜歯はない。第2・第3大臼歯とも咬頭と溝の型は+4型である。上顎右第3大臼歯の頬側に臼旁結節がある。この結節は現代日本人では1%前後の出現率である。第2・第3大臼歯ともに退化形で3+型(3咬頭性)である。上顎の左第3大臼歯と思われるものは咬合させると左の第3大臼歯とぴったりと咬合できるにもかかわらず、形態は逆側の右の大臼歯状である点が特異である。

明瞭なエナメル質減形成は認められないが、第1大臼歯の歯冠歯頸部付近に軽度の線状のものがみられるとともに、第2小臼歯や第2・第3大臼歯の歯冠には表面の荒れが認められる。

咬耗はあまり進んでおらず、下顎の小臼歯および大臼歯はいずれもモルナーの3~4である。咬耗パターンでは25~30歳の青年に属する。

四肢骨：鎖骨は細くきゃしゃである。上腕骨や橈骨・尺骨も細い。右寛骨の大坐骨切痕を含む一部が出土しているが、切痕がやや広めで女性的である。

四肢骨は全体に女性的である。

性別・年齢：この個体は女性と考えられ、さほど高齢ではなく青年に属する年齢段階である。

SH739 (図版38、図78)

右上肢は肘を強く曲げて、手を右肩に置いている。左上肢は肘をほぼ直角に曲げて右側の腰付近に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、左に倒した屈葬である。顔面は正面を向いているが、足方を見るように頭蓋骨をやや起こしている。

頭蓋骨：頭頂方向から上圧を受けてつぶれている。前頭縫合が前頭骨の上半部に残っている(メトビズム)。乳様突起はやや大きめであるが、耳道上縁は発達していない。外後頭隆起はヘリチカのII型であり発達していない。頭蓋冠の骨は薄い。ラムダ縫合や矢状縫合の後半部は明瞭でさほど高齢ではない。下顎体は比較的頑丈である。角前切痕はない。臼歯外溝は顕著である。

歯：上・下顎ともに切歯部が欠けている。上顎にはすべての歯のソケットがあり抜歯はない。下顎歯は前歯部が欠けている。ただし、残存する上顎の側切歯の咬耗が他の歯と同等に進んでいる点を考えると、下顎にも抜歯はなかったと考えて差しつかえなからう。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第2・第3大臼歯ともに+4型である(第1大臼歯は不明)。歯の大きさは現代日本人女性の平均値よりも小さいものがほとんどである。咬耗はモルナーの3~4である。上・下顎とも大臼歯の咬合面は平坦化している。咬耗パターンから判断すると上・下顎ともに30歳代前半である。

この個体にもエナメル質減形成が認められる。上顎の第3大臼歯にみられるものは溝状のもので、12歳前後に形成されたものである。

四肢骨：上腕骨は近位部が欠けている。きゃしゃで、三角筋粗面も発達していない。骨幹の一部が残っている橈骨と尺骨もきゃしゃである。

下肢骨の保存状態は悪くはないが、土圧で一部が扁平になっている。寛骨の大坐骨切痕はほぼ90度で、女性的である。さらに、妊娠痕である耳状面前溝がみられる。大腿骨は比較的頑丈で、上部はやや扁平である。粗線の発達は普通で、転子下窩がみられる。胫骨は扁平ではない。中央付近の断面はIV型で、後面の鉛直線は比較的顕著である。腓骨はきゃしゃである。

尺骨の推定最大長が220mmで、これから計算される推定身長は150.6cm、また、左胫骨の推定最大長が

327mmで、これから計算される推定身長は154.8cmである（両者の平均値は152.7cm）。この値は縄文時代の男性と女性の平均身長の間の大きさである。

性別・年齢：この個体は比較的頑丈そうだが、骨質の薄さや上腕骨のきゃしゃさなどから女性の可能性が高い。年齢は壮年であろう。この個体でも、上肢骨はきゃしゃだが下肢骨は比較的頑丈という特徴がみられる。

SH741 (図版47)

ヒトの頭蓋骨片が数点出土しているだけである。後頭部であろう。骨は薄い。詳細は不明である。

SH743 (図版35・37、図67)

上半身と下半身の2つの部分に分割されて取り上げられた。頭蓋骨は前頭部から顔面にかけて破損している。左上肢は肘を強く曲げて、左肩に手を置いている。右上肢は不明である。下肢は膝を強く曲げて、やや左寄り立っている。顔面は右下を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：顔面は破損しているが外形をとどめている。上顎の切歯部の歯槽は破損して抜歯の有無は不明であるが、下顎に抜歯はない。鼻骨はいわゆるつまみ鼻で狭く、鼻根部はほりが深く眉間から窪んでいる。眉間隆起は発達していたようである。頭蓋冠の骨は厚い。外後頭隆起は大きく発達して下方に突出しているプロカのV型である。

下顎骨に角前切痕はない。オトガイ隆起はよく発達し、外側結節（オトガイ結節）も明瞭である。下顎枝はむしろきゃしゃである。右側の犬歯から第2小臼歯にかけての内側に下顎隆起が認められる。臼歯部の歯槽は退縮している。左右の第1大臼歯部の歯槽には歯根嚢胞が形成されており、歯槽はほぼ根尖まで退縮している。第2大臼歯部の退縮も著しい。上顎も右は第1大臼歯から遠心の歯槽の吸収が進んでおり、第2大臼歯は生前に脱落していたものと考えられる。

歯：前述のように歯槽の退縮が著しい。下顎左の第2大臼歯の萌出状態がやや挺出気味なので咬合する上顎の第2大臼歯は早期に脱落していた可能性がある。下顎の第3大臼歯は歯槽の状態から判断して萌出していなかったと思われる。上顎の遠心の大臼歯は破損のため状態は不明である。

咬耗度は上顎は第1大臼歯がモルナーの4～5であり、下顎歯は、右第2小臼歯はモルナーの4、右第1大臼歯が6、右第2大臼歯が5、左第2大臼歯が4で、左第3大臼歯が3である。第2大臼歯を比較すると、右の方が咬耗が進んでいる。左の第1大臼歯の歯槽の退縮の原因と考えられる嚢胞のために、咬合が右に偏っていた可能性が考えられる。それらと咬耗パターンを加味して考えると、50～60歳の熟年である。

四肢骨：上腕骨はさほど太いとはいえない。鎖骨はむしろ細いほうである。大腿骨は太く頑丈で、粗線の発達もよい。いわゆる付け柱状大腿骨である。骨幹上部後面の転子下窩は深いがさほど上下に長くはない。脛骨の中央付近の断面はヘリチカのII型に近く、比較的扁平である。跗跖面（図199）は、脛骨の内側跗跖面が発達しており、それに対して距骨の内果面は前方に伸びだしており、パーネットの分類のB型である。

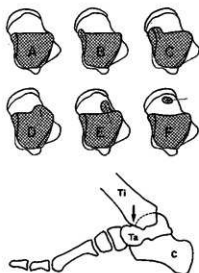


図199 距骨にみられる跗跖面の森本(1981)による分類
上は森本の図の脛骨との関節面でシャドウをかけた。下図は下肢骨の足首の関節の側面図、脛骨による距骨の圧迫で跗跖面が形成される。Ti：脛骨、Ta：距骨、C：踵骨

性別・年齢：この個体は男性で、比較的高齢である。50～60歳ぐらいの熟年であろう。

SH751 (図版47、図68)

肋骨や椎骨などを除いてほぼ全身の骨が出土しているが、保存状態は非常に悪く詳細な観察はできない。右上肢は肘を強く曲げ、同側の肩の付近に手を置いている。左上肢は伸展し手を腰の横に置いている。下肢は左右とも膝を強く曲げ、右真横に倒している。顔面は右に向けている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：形としては残っているがほとんど観察不可能である。乳様突起は比較的発達している。下顎骨は頤丈で筋突起はよく発達している。オトガイ隆起は大きい。角前切痕はない。

歯：もろくて全歯が破損している。しかし抜歯はない。咬耗は歯冠が低くなっているのがかなり進んでいたようである。かなりの高齢であろう。

四肢骨：上腕骨はさほど太くない。大腿骨は土圧を受けてやや扁平だが、比較的太い。粗線もよく発達している。胫骨の中央付近の断面は扁平である。

性別・年齢：この個体はかなり高齢の男性であった可能性が高い。

SH753 (図版47、図69)

保存状態はよくない。頭蓋骨と一部の四肢骨以外の骨は体幹も含めてほとんど残っていない。上肢は、右上腕を体軸に平行しているが前腕の位置は不明である。左は伸展して腰の横に置いている。下肢は膝を強く屈曲させ、膝をやや右にしている。左右の膝は離れている。顔面は右下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：横方向にやや圧平されている。顔面、とくに歯槽部は破損している。眉窩上隆起は発達していないので、前頭部はかなり垂直に近い。外後頭隆起はあまり発達せずプロカのⅡ型である。後上乳突結節は比較的発達している。乳様突起の大きさは不明である。頭蓋骨の骨は薄い。縫合はラムダ縫合がかなり癒合しており、比較的高齢であることを思わせる。下顎骨はさほど頤丈ではない。角前切痕はない。オトガイ隆起は明瞭である。この個体の頭蓋骨には女性的な特徴が多い。

歯：ほとんど残っていない。下顎左第3大臼歯の咬合面は平坦化しており、咬耗度はモルナーの4～5でかなり進んでいる。遠心部が残った第2大臼歯は歯冠のエナメル質が咬耗しているため咬耗度はモルナーの6であろう。50～60歳ぐらいの熟年に属するものと推測される。

四肢骨：上腕骨は細い。寛骨の大坐骨切痕は直角に近く、女性的である。大腿骨の転子下窩は顕著で、殿筋隆起も発達しているが太さはさほどではない。上部は扁平で超広に属する(上横径28mm、上矢状径20mm、上骨体断面指数71.4)。粗線は発達し軽度ではあるが付け柱状である。胫骨の中央付近の断面は三角形でヘリチカのⅡ型である。扁平胫骨といえる。

性別・年齢：この個体は熟年の女性と考えられる。

SH761 (図版38)

保存状態が悪く、頭蓋骨と四肢骨の一部しか出土していない。埋葬姿勢は仰臥以外は不明である。

頭蓋骨：保存状態は悪い。骨質などの判定はほとんどできない。下顎骨は比較的きゃしゃである。

歯：歯の保存は比較的よい。上下顎ともにすべての切歯・犬歯の破片が確認できたので抜歯はないと考えられる。上顎中切歯のシャベル型はごく軽度である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が+4型、第2大臼歯はX4型、第3大臼歯はX5型である。咬耗はモルナーの3がほとんどで、第3大臼歯は2である。咬耗パターンから判定される年齢は上下顎ともに20～25歳ぐらいの青年である。エナメ

ル質減形成が認められる。

四肢骨：上腕骨は左の遠位骨幹部が残っているが細くしゃしゃである。左大腿骨の骨幹も残っているが土圧を受けて扁平化している。転子下窩はよく発達して溝状となっており、殿筋隆起もよく発達している。粗線は狭い稜状である。

性別・年齢：この個体の性別は不明であるが、年齢は若く青年（20～25歳）であろう。上腕骨のしゃしゃさから女性の可能性が高いと考える。

SH762 (図版34、図70、PL19)

一体分の骨格が出土しているが、保存状態は非常に悪い。左上肢は伸展して手を腰の横に置いている。右上肢は不明である。下肢は膝を強く曲げて、やや右に立てている。顔面はやや右に向けている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：骨は非常にもろいが全体が残っている。顔面がやや右を向いている関係で左前方から頭蓋底に向かっての土圧を受けている。眼窩上隆起はあまり発達していないようである。外後頭隆起はあまり発達せずプロカのII型である。乳様突起は破損している。頭蓋冠の骨は薄い。

下顎骨はむしろしゃしゃである。オトガイ隆起は発達している。下顎体は低いが下顎枝は広い。内側の顎舌骨筋痕は鈍である。軽度の角前切痕が認められる。筋突起の内突起稜は発達している。

歯：ほぼ全歯が出土している。出土していない歯も死後の破損であるから抜歯はない。エナメル質減形成はごく軽度だが認められる。おもに少年期のもので大歯にみられるものは6歳前後に形成されたものであり、第3大臼歯のものは12歳前後に形成されたものである。離乳期のものは見当たらない。咬耗は比較的進んでおり、咬耗度はモルナーの4～5である。咬合面はほぼ平坦化している。咬耗パターンでの推定年齢は40～45歳ぐらいの熟年と考えられる。

四肢骨：上腕骨はむしろ細い。左寛骨の一部が出土しているがやや深い耳状面前溝がみられるので女性であろう。大腿骨はさほど太くない。やや土圧を受けているが、骨体の上部の本来の形態も扁平であったと考えられる。粗線はあまり発達していない。

性別・年齢：この個体は熟年（40～45歳）の女性で、妊娠歴があったようである。

SH763 (図版34、図71、PL20)

膝の部分が欠けている他はほぼ全身の骨格が出土している。右上肢は伸展し手を腰の上に置いている。左上肢は肘を強くまげ、左肩の位置に手を置いている。下肢は左右とも強く膝を曲げており、ほぼ中央に立てている。顔面はやや左下を向いている。仰臥屈葬である。

なお、この墓坑からは焼かれたイノシシの左踵骨が出土している。

頭蓋骨：前頭部から顔面にかけて破損している。外後頭隆起は比較的発達しておりプロカのIII型である。乳様突起は大きくて厚い。耳道上稜は発達している。上顎の口蓋正中部に口蓋隆起が認められる。下顎骨は頰丈で、大歯から第1大臼歯にかけての内側歯槽に下顎隆起がみられる。オトガイ隆起は顕著で外側結節も明瞭である。

歯：上顎は前歯部が欠けている。上顎右の第2小臼歯は生前に脱落している。左の第1小臼歯は、歯髄腔が露出しており、しかも表面は平らではなく円く磨耗しているので、歯冠の消失の原因は磨耗ではなく他の外傷などに求められるべきである。小臼歯の咬耗度はモルナーの6で、とくに上顎左第1および第2小臼歯は歯冠が消失している。上顎の第1大臼歯の咬耗はモルナーの5～6である。下顎の歯は全歯植立しており抜歯はない。咬耗は激しく、どの歯もモルナーの5～6である。とくに右の第1及び第2

大臼歯の咬耗が激しい。ただし、下顎の第1大臼歯の頬側の辺縁が高まっているので、いわゆる皮なめしなどで形成される咬耗とは異なるものである。咬耗パターンでは50～60歳ぐらいの熟年に属している。四肢骨：上腕骨は比較的頑丈である。寛骨は大坐骨切痕が鋭角的であり、さらに耳状面前溝は認められないので男性の可能性が高い。大腿骨は上部が扁平で、殿筋粗面はよく発達しており、転子下窩は溝状に長く、殿筋隆起は顕著である。これに対応して前面の上部外側に浅い溝状の窪みができ、中央は稜状である。粗線の発達さはほどではない。

性別・年齢：この個体は熟年（50～60歳）の男性である可能性が高い。

SH764 (図版34、図72)

ほぼ全身の骨格が出土しているが、頭蓋骨は土圧を受けて形をなしていない。右上肢は肘を強くまげ、手を右肩近くに置いているが、左上肢は伸展して腰の横に手を置いているようである。下肢骨は判然としない。下肢は膝を曲げて、左にやや倒しているらしい。顔面は正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧でつぶれている。外後頭隆起は発達しプロカのⅢ型であるが、乳様突起はさほど大きくはない。頭蓋冠の骨は厚い。上顎骨の歯槽突起外側（おもに左右の小臼歯部）には軽度の歯槽隆起がみられる。

歯：上顎歯だけが残っている。切歯から犬歯は破損しているが、抜歯はない。咬耗はかなり進んでおり、モルナーの4～6で咬合面は平坦になっている。咬耗パターンでは30～40歳ぐらいの壮年と判断される。エナメル質減形成はどの歯にもみられる。とくに第2大臼歯のものが溝状で顕著である。大臼歯には歯頸縁に近い部分の歯冠のエナメル質に多数の小窩、あるいは表面の凸凹がみられる。これらの形成された時期は、2歳前後、および6歳以後14歳位までの間のものである。この個体はこのような厳しいストレスにもかかわらずかなりの年齢まで生き延びている。

四肢骨：鎖骨はさほど頑丈ではない。尺骨は太く頑丈で、骨間縁もよく発達している。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。耳状面前溝は浅い溝が確認できるが、妊娠痕ほどに顕著なものではない。大腿骨は頑丈である。殿筋粗面がよく発達している。粗線もよく発達しており、いわゆる付け柱状の大腿骨である。骨幹上部外側の殿筋隆起はさほど発達していない。骨幹上部は扁平ではない。遠位端は左右とも土圧で押しつぶされている。胫骨は、扁平で後面の鉛直線は非常に明瞭である。したがって中央付近の断面はヘリチカのⅣ型である。

性別・年齢：この個体は男性と考えられ、年齢段階は壮年と考えられる。

SH768 (図版41下)

下肢骨の一部が出土しているだけである。

四肢骨：胫骨の中央付近が出土している。胫骨の後面は凸である。性別・年齢は不明である。

SH771 (図版35・37)

2体（A、B）が合葬されている。

(A)

頭蓋骨と頸椎が出土しているが、頭蓋骨は非常にもろく、顔面部と下顎骨が取り上げられたに過ぎない。

頭蓋骨：顔面は低い。鼻根部は窪んでおり、鼻はいわゆるつまみ鼻である。頬骨下結節が発達している。眼窩上縁は薄くはり出している。

下顎骨は頑丈で、オトガイ隆起は顕著であり、外側結節もやや発達している。角前切痕はみられない。

下顎角部がやや外側にはり出している。下顎枝の内側の三角隆起は著しく発達している。

歯：下顎歯は全部、上顎歯は右の中切歯以外はすべて萌出している。上顎右中切歯は、歯槽に萌出するだけのスペースがないことや脱落歯の歯槽に特有の退縮がみられないことなどから判断して、先天的に欠如していた可能性がある。中切歯の先天的な欠如は珍しい。下顎の切歯部に歯石の沈着が認められる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型、第2および第3大臼歯が+5型である。咬耗は少なく、モルナーの3~4である。歯の咬耗パターンの判定方法では25歳前後の青年である。性別・年齢：この個体は、成人と考えられ、咬耗が少ないので青年であろう。性別は男性と考えられる。

(B)

保存状態は非常に悪く、下半身は別の土坑 (SH690) で切られて消失している。仰臥であることがわかるのみでそれ以外の埋葬姿勢などは不明である。後述のようにこの個体の保存状態が悪いのは年齢が若いためである。

頭蓋骨：前後方向に土圧で完全につぶれている。頭蓋冠の骨は非常に薄い。ラムダ縫合、矢状縫合ともに明瞭な鋸歯状の縫合が残り、かなり若い個体である。ラムダ部分に大泉門のような空所はないので乳幼児ではない。下顎骨は、下顎体部が判別できる程度である。第1大臼歯は萌出しているがその近心には第2乳臼歯が植立しており、さらに下顎体の中に永久小臼歯が埋伏している。

歯：歯の残りはよい。第1大臼歯は萌出しているが乳臼歯の残る混合歯列である。第1大臼歯の咬耗はごく軽度である (モルナーの2)。上顎の中切歯にはごくわずかな咬耗がみられ、下顎の大歯と第2大臼歯が歯槽内で形成されているので、この個体は8~9歳と考えられる。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯は右が+5型、左がY5型、第2大臼歯がX4型である。

第2大臼歯にエナメル質減形成がみとめられる。形成された時期は6歳前後であろう。

四肢骨：上腕骨らしい骨片が出土しているが、詳細は不明である。

この個体は8~9歳の少年で、性別は不明である。

性別・年齢：この墓坑には成人(青年)の男性と、8~9歳の子供とが合葬されていた。

SH775 (図版34)

全体の保存状態はよかったが、運送中に破損した。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：頭蓋骨は土圧でやや変形している。とくに後頭部で著しい。顔面上部は比較的よく保存されている。眉弓はよく発達し、そのため鼻根部のくぼみが著しい。眼窩は低い。前頭部の後方への傾きは大きく、男性的である。外後頭隆起はプロカのIII型である。乳様突起の長さは小さいが、厚さ(内外径)は大きい。乳突稜がよく発達しており基部の断面は円形に近い。後上乳突結節がよく発達している。顔面下部はごつく、鼻骨は狭い。矢状縫合の一部は癒合が進んでいる。

下顎骨は頑丈で、ごく軽度の角前切痕が認められる。オトガイ隆起は発達し、外側結節(オトガイ結節)も明瞭である。下顎歯から続く外側結節部も比較的顕著である。内側の顎舌骨筋線は鈍である。下顎枝は下顎体に対してかなり立っている。

頭蓋骨の諸形質を総合して考えるとこの個体は男性である可能性が高い。

歯：生前に脱落していた上顎右第2大臼歯以外はすべて残っている(一部は歯根のみ)。抜歯はない。咬合は切端咬合である。咬耗度はモルナーの4~5である。咬耗パターンから推測される年齢は壮年(30~40歳)である。

エナメル質減形成が多量の歯種にみられる。とくに顕著なのは第2大臼歯で、歯冠のやや咬合面寄り

に溝状のものがみられ、これは6歳前後に形成されたものである。下顎の大臼歯にも何本かの線状のものがみられ、5～6歳頃に何回かのストレスを受けたものと推測される。第1大臼歯にはエナメル質減形成がみられないので離乳期まではこのようなことがなかったらしい。

四肢骨：四肢骨はほとんどが圧平されていて詳細な観察には耐えないものが多い。上腕骨は太く頑丈である。大腿骨の粗線はさほど発達していないが内側髁・外側髁は明瞭である。四肢骨の頑丈さは男性的である。

性別・年齢：この個体は壮年の男性と考えられる。

SH782 (図版34、図73)

左上肢を伸展している以外の埋葬姿勢は不明である。保存状態はよくない。

頭蓋骨：土圧でつぶれている。乳様突起は比較的大きい。頭蓋冠の骨はやや薄い。下顎骨は比較的良好に保存されている。さほど頑丈ではない。オトガイ隆起や外側関節は比較的良好に発達しているが、角前切痕はない。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：下顎の切歯を除いてよく保存されている。歯根から判断して下顎にも抜歯はみられず、上顎にもない。上顎中切歯・側切歯はシャベル型で、中・側切歯ともに舌側面に斜切痕が認められる。上顎左右の第3大臼歯は先天的に欠如していた可能性がある。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1・第2大臼歯が+5型、第3大臼歯がX5型である。下顎大臼歯は遠心に向けて急激に大きさを減じている。下顎右第3大臼歯は斜めに萌出している。下顎左大臼歯の頬側面にプロトスタイリッド (protostylid, 図194) が認められる。

咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はモルナーの2～3である。下顎第3大臼歯は1である。第3大臼歯が萌出直後であるのでこの個体は18歳前後である。エナメル質減形成は認められない。

四肢骨：鎖骨は細くきゃしゃである。大腿骨はさほど太くはない。土圧で折れたり、つぶれたりしている部分がある。粗線はさほど発達しておらずせまい線状である。股筋粗面の発達で転子下窩は発達して溝状になっている。その結果、股筋隆起がよく発達して外側にはり出している。骨幹上部はやや扁平である。大腿骨の骨頭はまだ骨幹と癒合を完了していない。脛骨は後面の鉛直線が発達しており、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。距脛関節の脛骨側の外側関節面が認められる。

性別・年齢：この個体は18歳前後で、女性の可能性が高い。

SH784 (図版32、図74、PL20)

襪披りである。全身の骨格がよく残っている。左右の上肢は肘を強く曲げ、手首をそれぞれの肩から胸部付近に置き、手は手首をまげて胸部にのせている。下肢も膝を強く曲げ、左右の膝をあわせてほぼ正面に立てている。顔面は左を向いている。上顔部から頭蓋にかけては土圧で細片化している。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：顔面は破損して復元できない。眼窩上隆起は比較的良好に発達しており、鼻根部はくびれている。外後頭隆起はやや発達しプロカのIII型である。外後頭隆起から大孔に続く外後頭稜 (項靱帯が付着する) はよく発達し高さ数ミリの稜となっている。乳様突起は小さくて薄い。耳道上稜は発達しているが側頭線は明瞭ではない。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。縫合は矢状縫合、ラムダ縫合、冠状縫合ともに内板はいうにおよばず、外板もかなり癒合しており、この個体が比較的高齢であることを示している。

下顎骨は比較的良好で、角前切痕はなく、下顎底が丸みを帯びたいわゆるロッカー・ジョーである。オトガイ隆起はやや発達しているが、外側関節は認められない。内側の翼状筋線はよく発達している。

歯：上・下顎歯ともに切歯部が破損しているが、歯根の残部や破片などから抜歯はなかったと考えられる。咬耗は比較的少なく、切歯・犬歯がモルナーの4、第2小臼歯・第2および第3大臼歯は2、他の臼歯は3である。咬耗パターンからは20~30歳ぐらいに相当する青年と考えられる。一部にエナメル質減形成がみられる。

四肢骨：保存状態はよい。上腕骨はさほど太くないが、大・小の結節稜や三角筋粗面はよく発達している。尺骨の骨間線はよく発達しているが、太さは桡骨とともにさほど太くない。寛骨は頭丈だが比較的小さい。大坐骨切痕は男女の中間的な角度であるが、男性の寛骨にはみられない深さをもったやや長めの耳状面前溝が認められる。大腸骨はさほど太くないが頭丈である。粗線がよく発達しており、内側唇・外側唇が区別できる。転子下窩は明瞭ではないが骨幹の上部外側はやや出し出て殿筋隆起になっている。脛骨はヘリチカのIV型で扁平とはいえない。骨間線はよく発達し、下部では稜状にはり出している。腓骨の骨間線も発達しているが太さはさほどではない。

それぞれの骨の最大長から推測される推定身長は上腕骨154.2cm、尺骨161.1cm、腓骨152.0cmで平均は155.8cmである。この値は縄文時代男性の平均値(159.11cm)よりは小さめとなるが、女性の平均値(148.05cm)よりは大きい。

性別・年齢：この個体は比較的頭丈な女性であると考えられ、年齢段階は青年である。

SH785 (図版37、図5、PL20)

2体分(A、B)が出土している。BがAの上層に埋葬されていた。

(A)

髪被りであったため、髪を被った部分の頭蓋骨の破損が著しいが、全身の骨格が残っており骨の保存状態も比較的よい。上肢は左右とも肘を強く曲げ、それぞれの肩近くに手首を置いているが、SH784と同様に手首をまげて手を胸の位置にあわせている。下肢も膝を強く曲げており、左右の膝を寄せて立てており、足も左右をよせて並べている。顔面は右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：髪を被せられていたために破損が著しいが、骨そのものの保存はよい。外後頭隆起はよく発達しプロカのIV型である。乳様突起は大きくかつ厚い。耳道上稜も発達しており、乳突上溝も顕著である。後頭部の縫合の内板は縫合が消失している。ラムダ縫合の外下部の外板は癒合が進んでおり、縫合が消失している部分が多い。比較的高齢の個体であろう。頭丈そうなりに骨は厚くない。

下顎骨は頭丈で、オトガイ隆起は発達しており、外側結節も顕著である。角前切痕はない。左右とも犬歯から第2小臼歯にかけての歯槽の内側面に軽度の下顎隆起がみられる。下顎枝はさほど広くない。歯：上顎切歯部と下顎の一部の歯が破損している。全歯が植立しているので抜歯はない。咬耗は顕著で咬合面は平坦化し、咬耗度はモルナーの4~5である。とくに第1・2大臼歯の咬耗が顕著である。咬耗パターンでは50~60歳ぐらいの熟年に属すると考えられる。上顎大臼歯は第2大臼歯が3咬頭性、第3大臼歯は2咬頭性であり、下顎の左第3大臼歯は+5型の咬頭と溝の型である。

第3大臼歯の歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成が認められる。12歳前後に形成されたものであろう。第2大臼歯の歯冠中央付近のものは6歳前後に形成されたものであろう。エナメル質減形成は少ない方に属する。

四肢骨：上腕骨は太く頭丈で、三角筋粗面は非常によく発達している。鎖骨は太く、肩峰端の菱形靭帯線はよく発達して明瞭である。寛骨は大きく頭丈である。耳状面は高くなく、耳状面前溝は認められないので男性の可能性が高い。大腸骨は太く頭丈で、粗線もよく発達しており、いわゆる付け柱状の大腸骨である。転子下窩は認められるが溝状ではない。殿筋隆起は軽度である。骨幹上部は扁平ではない(上

横径31.3mm、上矢状径28.3mm、断面示数90.4)。脛骨の後面の鉛直線はよく発達しており、中央付近の断面はヘリチカのIV型で扁平である。腓骨の骨間縁も発達はいい。距骨には跗跏面が認められる。森本〔1981〕がパーネットの分類に追加したC型で、内側跗跏面が前方に伸びだしており、伸びだした部分の内果面も前方に延長している。

上腕骨から計算される推定身長は158.1cm、橈骨からは161.5cm、尺骨からは163.2cmであり、これらの平均値は160.9cmである。この値は縄文時代の男性の推定身長平均値159.11cmとほぼ等しい。

性別・年齢：この個体は熟年の男性と考えられる。

(B)

この個体は、先のSH785Aの上層に埋葬されていた個体で、散乱していた頭蓋骨である。まとまって出土した部分もあるが大きく3部分に分けて取り上げられた。個体Aの埋葬時に付近から混入したものであろう。骨が非常に薄い後頭部を中心にした頭蓋骨の破片である。外後頭隆起はほとんど発達せず、縫合は非常に明瞭で若い個体である。性別は不明である。

SH794 (図版41下、図77)

ほぼ全身が出土している。全体に保存状態は悪く、歯は出土していない。右上肢は肘を鋭角に曲げ、手を左肩付近に置いている。これに対して左上肢は、肘を強く曲げ、手を左肩の横に置いている。下肢は両側ともに強く膝を曲げ、左に倒している。顔面は左に向け、さらにやや下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧で横方向に押し潰されている。眼窩上隆起はあまり発達していない。乳様突起はさほど大きくなく、薄い。耳道上稜はやや発達している。外後頭隆起は発達せず、プロカのII型程度である。

四肢骨：上腕骨は土圧でつぶれていることを割り引いても細くきゃしゃである。寛骨の大坐骨切痕は直角に近く、女性的である。大腸骨は細いが粗線が発達し、いわゆる付け柱状の大腸骨である。大腸骨近位端の骨頭の骨端線は閉鎖しているようなので成人である。

性別・年齢：この個体は女性と考えられる。成人であるという以外は不明である。

SH796 (図版38、図78)

右上肢は肘をやや曲げ、手を骨盤部にのせている。左上肢は伸展して腰の横に手を置いている。下肢の保存は比較的よい。膝は強く折り曲げて右に倒した屈葬である。足の位置関係がやや崩れている。とくに下腿の関係が自然状態ではありえない位置関係にあるから、なんらかの擾乱があったと思われるがその程度はごく軽度である。顔面を右に向け、かつ足の方を向いている。側臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧で横方向につぶれており、左半分は割れて内部に陥没している。顔面骨は消失している。乳様突起は大きくて厚い。耳道上稜は発達している。頭蓋冠の骨は比較的厚い。頭蓋骨は男性的である。

歯：上顎右の第1大臼歯歯冠だけが残っている。咬耗度はモルナーの4である。この歯にはエナメル質減形成が認められ、歯冠中央よりやや下方にあり溝状である。これが形成された年齢は2歳前後と推測される。離乳期に関係するものかもしれない。

四肢骨：右上腕骨は近位部が残っている。項丈で三角筋筋面は著しく発達している。大腸骨はさほど頑丈な印象ではない。上部は扁平ではなく、粗線もさほど発達していない。中央部の前後径は大きめである。脛骨は項丈で中央付近の断面はヘリチカのIV型である。腓骨は太く、各縁は発達している。

各骨の最大長から推定された身長は上腕骨150.8cm、橈骨158.6cm、大腸骨154.9cm、脛骨157.2cmで、

これらの平均値は155.4cmである。この値は縄文時代人男性の平均値よりやや小さい。

性別・年齢：この個体は男性であろう。成人ではあるが、年齢を示すような部位は確認できない。第1大臼歯の咬耗がさほど顕著ではなく、各骨に加齢変化がみられないのでさほど高齢ではないと考えられ、壮年に属すると推測される。

SH799 (図版37、図79)

ほぼ全身が出土しているが保存状態はよくない。左右の上肢は肘を強く曲げ、手首をそれぞれの側の肩付近に置き、指は胸部方向に伸ばしている。下肢は膝を強く曲げ、左右をあわせてやや右寄りに立てている。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：骨の保存状態は悪く、前後方向に土圧を受けている。顔面部はほぼ失われている。眼窩上隆起はさほど発達していない。乳様突起は先端部が失われているがあまり大きくないようである。耳道上縁は発達していない。頭蓋冠の骨は比較的厚い。外後頭隆起はほとんど発達せず、プロカのII型である。口蓋の正中部に軽度の口蓋隆起がみられる。

下顎骨はさほど頑丈ではない。筋突起内側の三角隆起は比較的発達している。角前切痕はみられない。オトガイ隆起はやや発達している。異突筋粗面はよく発達している。犬歯から第1大臼歯にかけての歯槽内側に軽度の下顎隆起が認められる。

歯：下顎歯列は破損しているものが多く、完全に残っているのは左右の第3大臼歯だけである。しかし、いずれの歯も歯根部は認められ、少なくとも下顎に抜歯はなかった。下顎の第3大臼歯の咬頭と溝の型は、右が+5型、左が+4型である。この個体にもエナメル質減形成が認められる。第3大臼歯の歯冠中央よりやや歯頸よりに溝状の減形成があり、これが形成されたのは12歳前後と考えられる。

咬耗は進んでおり、咬耗度は第1大臼歯・第2大臼歯がモルナーの6、第3大臼歯は5である。咬耗パターンから類推すると50歳代の熟年と考えられる。左第1大臼歯の歯槽がやや吸収されている。歯の近心部に欠損があったようなので生前の欠損による歯槽の退縮であると考えられるが原因は不明である。体幹・四肢骨：上腕骨は細いが三角筋粗面は顕著であるし、骨幹遠位部の外側縁もはり出している。橈骨や尺骨は細い。寛骨の残りは比較的よい。大坐骨切痕は90度に近く、耳状面前溝は大きくえぐれている。したがって、この個体は何回かの妊娠経験のある女性であると考えられる。大腸骨は比較的頑丈である。粗線は内側髌骨・外側髌骨の区別がみられるような幅はなく、後方に狭い稜として突出している。殿筋粗面はよく発達しており、その外側の転子下窩は溝状に発達していて、約10cm程の長さがある。したがって骨幹の上部外側の殿筋隆起は比較的発達しており、対応した前面外側に溝状の窪みもみられる。胫骨は中央付近の断面がヘリチカのIV型に近く、鉛直線も中央付近で認められる。脛骨ではない。距骨の内果面の伸展と上面の伸展の様相は森本とバーネットの分類によるC型である。腰椎に加齢変化である骨棘はない。

四肢骨の最大長から推定される身長は、右腕骨が154.7cm、右橈骨が157.3cm、左大腸骨が154.4cm、および左脛骨が156.5cmで、平均値は155.7cmである。この値は縄文時代の女性の平均値148.05cmを上回り、同時代の男性の平均値(159.11cm)に近い。

性別・年齢：この個体は熟年の女性であるが、年齢の割に筋はよく発達していたようであり、身長も女性としては高かった。

SH800 (図版36・37)

歯だけが出土している。破損しているものが多い。12本残っている歯のうち歯冠が完形のもの6本で

ある。永久歯で形成途中のものがみられ、乳歯も植立している混合歯列であるから若い個体である。乳歯は上顎の第2乳臼歯である。形成途中のものは、上・下顎の第2大臼歯、上顎の犬歯、および下顎の犬歯である。また、第1大臼歯にはごくわずかな咬耗（モルナーの咬耗度2）がみられる。これらの状態から判断してこの個体は7歳前後と考えられる。

下顎の第1大臼歯の咬頭と溝の型は+5型で、第6咬頭がある。歯の大きさは、近遠心径が縄文時代の男性の平均値より大きいものが多いが、頬舌径は男女の間である。

エナメル質減形成がみられる。側切歯のものは4歳前後、第1大臼歯は2歳前後、そして第2大臼歯のそれは6歳前後に形成されたと推測される。下顎の犬歯の歯冠先端近くものは軽度であり、3～4歳ぐらいに形成されたものと考えられる。何回かのストレスを受けていることが予測される。

性別・年齢：この個体は7歳ぐらいの幼児で、男性の可能性が高い。

SH803 (図版32・34、図80、PL21)

骨格の残りはよい。ほぼ全身の骨格が出土している。左右の上肢はともに肘を強く曲げて、手をそれぞれ側の肩に置いている。下肢も強く膝を曲げ、左右の膝をあわせて、股関節を強く屈曲して膝を腹部に置いている。顔面は左真横を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：顔面を左に向けているため横方向の土圧を受けている。顔面はひしゃげていて計測はできない。

鼻根部は眼窩上隆起がやや発達しているので窪んでおり、鼻はいわゆるつまみ鼻で狭い。眼窩上孔は大きく解放されている。眼窩上縁は鈍である。頬骨は頑丈である。頭蓋内面の中硬膜動脈溝の縁は鈍である。外後頭隆起はやや発達しヘリチカのⅢ型だが、後頭部は全体に後方へ膨隆している。頭蓋冠の骨は非常に厚い。乳様突起は大きめで厚く、乳突上溝も顕著である。矢状縫合・ラムダ縫合は内板・外板ともに癒合していないので、比較的若い個体と考えられる。頭蓋骨最大長は、発掘時の計測で188.0mmである。

下顎骨は厚みはないが体高が高い。オトガイ隆起はやや発達している。外側関節は顕著である。それに続く縁隆起はやや発達し、後縁隆起は比較的発達している。角前切痕はない。

歯：上顎の右切歯と犬歯および下顎の左右の切歯が破損しているが、歯根は残っており抜歯はない。上顎歯は、側切歯が浅いシャベル型である。犬歯は小さい。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯では不明だが、第2大臼歯は+4型、第3大臼歯は+5型である。咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はほとんどの歯がモルナーの3であり、第1大臼歯のみ4である。咬耗パターンからの年齢推定は、25～30歳ぐらいの青年であろう。

エナメル質減形成が認められる。上顎歯のほとんどにみられる。下顎歯の頬側面は磨耗のため確認できない。これらの減形成は、2歳前後、3歳前後、6歳前後に形成されたものであろうと推測される。第3大臼歯にはみられない。

四肢骨：上腕骨はさほど太くないが、遠位の外側縁は発達している。弯曲のない、まっすぐな上腕骨である。尺骨は骨間縁がよく発達し、近位の回外筋稜の発達も著しい。寛骨には耳状面前溝はみられず、かつ耳状面も低い。また大坐骨切痕も鋭角的で、男性的である。大腿骨は比較的太く頑丈である。粗線は発達しているがいわゆる付け柱状大腿骨ではない。転子下窩は左右とも発達し溝状になっているが右の方が顕著であり、殿筋隆起も右ではり出しているが左はさほどではない。上部の骨体は扁平ではない。膝蓋骨は大きく厚みがある。右上縁の広筋切痕（Vastus notch）は著しい（写真7-2、7-6）。脛骨も弯曲は乏しくまっすぐである。後面の鉛直線はよく発達し遠位 $\frac{1}{4}$ ぐらいまで伸びており、森本のA型である。したがって中央付近の断面はヘリチカのⅣ型である。腓骨は太く頑丈である。

長骨から推定した身長は、上腕骨157.9cm、尺骨163.5cm、橈骨161.5cm、大腸骨165.8cm、脛骨162.9cmで、平均値は162.3cmである。この値は縄文時代人の男性の平均値よりも約3cm大きい。
性別・年齢：この個体は男性で、年齢段階は青年（25～30歳）である。

SH805 (図版41下、図81、PL21)

全身の骨格が出土している。左右の上肢は肘を伸展し、回内して手の掌面を下に向けて腰の横に置いている。左右の手首に近い部分にイノシシの犬歯で作られた飾りをつけている。下肢骨は、左右ともやや強く膝をまげ、右に倒れている。股関節は軽く曲げている。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。
(展示用資料)

頭蓋骨：前後方向に土圧を受けている。眼窩上隆起は比較的発達していたようであり、鼻根部のくびれは顕著である。乳様突起は大きく厚い。縫合の状態は確認できない。下顎骨は顎丈で下顎底部に縁隆起が認められる。オトガイ隆起はやや発達している。角前切痕はない。

歯：右側臼歯部は確認できないが、少なくとも左側の全歯と右の大歯より前の歯はそろって植立しており抜歯はない。咬耗はさほど進んでいない。上顎の第2大臼歯の頬側の咬頭は象牙質が未だ露出していない。咬耗度はモルナーの4以下であり、咬耗パターンでは少なくとも壮年以下に属すると判定される。上顎第1大臼歯の歯冠頰側面のほぼ中央に線状のエナメル質減形成が確認される。2歳前後に形成されたものと推測される。

四肢骨：鎖骨は比較的太い。上腕骨は太く顎丈である。寛骨は大坐骨切痕が鋭角で男性的であり、耳状面前溝も認められない。大腸骨は長く長い。粗線はさほど発達していない。骨幹の上部はやや扁平で、殿筋隆起も中等度の発達である。脛骨の中央付近の断面はヘリチカのI型とII型との中間形である。

性別・年齢：この個体は男性である。咬耗パターンから類推すると壮年に属している。

SH814 (図版38・41上)

ヒトの歯の破片だけが出土している。上顎小臼歯の近心半と思われる部分である。咬耗はほとんどない。エナメル質減形成はみられない。詳細は不明である。

SH815 (図版37、図82、PL22)

保存状態は悪いが、ほぼ全身の骨格が残っている。北村遺跡では例が少ない伏臥位の埋葬姿勢である。顔面は上向きになっている。体の他の部分に攪乱はないので、埋葬後に動いたと推測される。ただし、下顎骨が咬合した状態を保っているため、埋葬時は顔を立てて、顎をつきだした姿勢であったと考えられ、その後に胸部の構造が壊れるに従って顔面が上向きになったのであろう。

左上肢は左肘を直角に曲げ、手を左外方にのばしている。右は前腕がなく不明である。下肢は強く膝を曲げ、左右とも左に倒れている。下肢は左側が上にある。脊柱の曲がりなどかなり無理な埋葬姿勢である。伏臥屈葬である。

頭蓋骨：額から後頭の底面にかけての方向に土圧を受けている。眼窩上隆起は中等度の発達である。鼻根部はやや凹んであり、軽度のいわゆるつまみ鼻状である。乳様突起はやや大きく厚い。頭蓋冠の骨は厚くない。下顎骨はさほど顎丈ではない。下顎骨内面の顎舌骨筋線は鋭い。後述のように年齢が比較的高いにもかかわらず、頭蓋骨の諸形質は発達していないので女性の可能性が高い。

歯：上・下顎ともおもに臼歯部が残っている。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第2大臼歯が+4型、第3大臼歯がX5型である。咬耗は比較的進んでおり、第3大臼歯の咬耗度は3、それ以外はモルナーの4～

5である。咬耗は下顎の方がやや進んでいるが、平均すると35～40歳くらいで壮年であろう。

この個体の歯にも、エナメル質減形成に近い形成不全が認められる。第1大臼歯の歯冠歯頸部付近はエナメル質表面が荒れており、同様のものが第2および第3大臼歯にもみられる。第1大臼歯のものは2歳前後、第2大臼歯のものは6歳前後、第3大臼歯のものは12歳前後に形成されたと考えられる。上顎犬歯にはこれらに対応した明瞭な線状のエナメル質減形成が認められる。

四肢骨：肩甲骨の関節面は小さい。寛骨の下前腸骨棘はやや鈍である。寛骨臼のやや上方にある上寛骨臼窩はよく発達している。寛骨上孔の腸骨部分の縁（筋裂孔部）は著しく屈曲していて現代人の直線的な形態とは異なっている。腓骨は細い。

これら以外の四肢骨は保存状態が悪く、観察できない骨がほとんどである。

性別・年齢：この個体は、壮年に属しており、女性の可能性が高いと考える。

SH818 (図版46)

右の上腕骨片、肩甲骨片、鎖骨片と数本の肋骨だけのわずかな出土量である。骨の保存状態はよくない。年齢・性別は不明である。

四肢骨：上腕骨は三角筋粗面部である。さほど太くない。

SH824 (図版46)

2体分が埋葬されている。やや右向きのをA、やや左向きをBとする。両者は隣接しており、Bは下半身部分がなく、Aの下半身は攪乱を受けている可能性がある。

(A)

保存状態は悪い。左右の上肢は肘を伸展して、手を腰の横に置いている。下肢は膝を強く曲げて左に倒していると考えられる。顔面はやや右を向いている。

頭蓋骨：乳様突起は大きく厚い。外後頭隆起が発達しており、ヘリチカのⅢ型である。口蓋の正中部に軽度の口蓋隆起が認められる。下顎骨のオトガイ隆起がよく発達しており、縁隆起もやや発達している。軽度の角前切痕が認められる。内側の顎下腺窩は顕著である。犬歯から第1大臼歯にかけての歯槽内側に軽度の下顎隆起がみられる。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：歯は全歯がそろっており、抜歯はない。ただし、もろくて破損しているものが多い。咬耗は進んでおり、咬耗度は上・下顎の大臼歯は5である。咬耗パターンから推定される年齢は50歳以上の熟年である。

エナメル質減形成が認められる。犬歯の歯頸部近くと小臼歯の下臼付近、および第3大臼歯の歯冠のやや上部が明瞭で、犬歯のものは6歳前後、小臼歯のものは5歳前後、第3大臼歯のものは11歳前後に形成されたと考えられる。これらに対応して、あるいは他にも歯冠表面のエナメル質の「荒れ」が多くみられる。

四肢骨：上腕骨はやや太い。左の大腿骨や右の大腿骨、左右の脛骨、腓骨は自然位にはなく、AとBとの間にまとめて埋葬されている。大腿骨は比較的頭丈で粗線も顕著である。脛骨の骨間縁はやや鋭く、鉛直線も発達しているようである。

性別・年齢：この個体は熟年と考えられるが、性別は男性の可能性が高い。

(B)

右上肢は肘をほぼ直角に曲げて、手を左の胸に置いている。これに対して左上肢は肘を強く曲げ、手を左肩の横に置いている。下肢は不明である。顔面はやや左に向けている。

頭蓋骨：骨質はもろく、しかも骨が薄いためほとんど観察不可能である。かなり小さめの頭蓋骨である。

下顎骨はかろうじて形をとどめている。厚みは少なく比較的きゃしゃである。切歯から小臼歯にかけてはほとんどが破損している。抜歯はない。

歯：歯は小さい。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1・第2大白歯が+5型、第3大白歯がX5型である。下顎の左第3大白歯は水平に萌出している。咬耗はあまり進んでおらず、とくに第3大白歯は上・下顎ともモルナーの2である。咬耗パターンから推定される年齢は25~30歳ぐらいの青年である。

この個体に明瞭なエナメル質減形成はない。

四肢骨：上腕骨は細くきゃしゃであり、橈骨および尺骨も細い。

性別・年齢：この個体は、成人であり、骨もきゃしゃなので女性の可能性が高い。年齢は青年と考えられる。

SH828 (図版51)

ごく少数の骨片と、上顎右第3大白歯、およびそれ以外の歯種不明の歯の破片が出土している。右第3大白歯の象牙質は露出していないが咬耗しており、咬耗度はモルナーの2である。右の下顎第2小臼歯は咬耗しておらず、第1大白歯はわずかに咬耗がみられる程度でモルナーの2である。したがって成人であることはまちがいないが、年齢段階は高くとも青年であろう。エナメル質減形成はみられない。

性別・年齢：成人であるという以外は不明である。

SH842 (図版51、図83)

下肢骨の一部が出土しているだけである。出土したのは左右の大腿骨で、埋葬姿勢は不明である。保存状態は悪い。

四肢骨：左右の大腿骨骨幹部が出土している。横方向の土圧をやや受けている。さほど太くない。粗線は比較的発達し、内側唇と外側唇が区別できる。成人であれば女性的な大腿骨といえる。

SH851 (図版27・28、図84)

骨の保存状態は非常に悪く、頭蓋骨、左上肢および下肢骨の一部が残っているだけである。左上肢は肘をほぼ直角に曲げ、手を右胸に置いている。下肢は膝を強く曲げてやや右に寄せている。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。左胸にイノシシの牙の装身具がある。

頭蓋骨：頭蓋骨の保存は悪く、顔面は消失している。土圧を受けて陥没している部分が多い。外後頭隆起はややはり出しており、ヘリチカのIII型である。後頭稜が高さ数mm張り出している。乳様突起の発達は中等度だが厚い。耳道上稜がよく発達している。下顎骨は比較的頑丈である。オトガイ隆起は顕著であり、下顎体は厚い。男性的な印象を受ける。

歯：数本の下顎歯しか出ていない。下顎の切歯部は欠損していて抜歯の有無は判定できない。第2大白歯は咬頭と溝の型が+4型で、咬頭数は不明だが第1大白歯も+型である。咬耗はやや進んでおり、咬耗度は第1小臼歯がモルナーの5、第1・第2大白歯ともにモルナーの4である。咬耗パターンから類推すると、40~50歳ぐらいの熟年である。

エナメル質減形成が観察される。残っている歯の歯冠はどれも歯頸部に近い $\frac{1}{2}$ ぐらいは表面が荒れており、とくに小臼歯のもので顕著である。小臼歯のものと第2大白歯のそれはほぼ同じ時期に形成されたと考えられ、5歳から6歳にかけてのものと思われる。第1大白歯のものは2歳前後で離乳期に相当するかもしれない。

四肢骨：大腿骨は太く頑丈で、骨も厚い。殿筋粗面はよく発達しており、転子下窩は溝状である。
性別・年齢：この個体は、熟年の男性と考えられる。幼い時期にかなり長期にわたるなんらかのストレスを受けているものと思われる。

SH852 (図版31・33、図85、PL22)

頭蓋骨は細片化しているが、保存状態は比較的よい。左右の上肢は肘を伸展し、前腕を回内して腰の横に置いている。下肢は膝を強く曲げてほぼ真ん中に立てている。足の位置がややずれていて、右足をやや前（下方）に置いている。顔面は左に向けてやや下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：横方向の土圧を受けてほとんどが細片化している。頭蓋底部の観察が可能である。乳様突起は小さく、かつ薄い。乳突切痕は顕著であるし、耳道上稜の発達は著しいので乳突上溝も顕著である。外後頭隆起の突出度はヘリチカのIII型程度であるが、上項線部が全体に厚く張り出し、外後頭稜はよく発達している。外後頭隆起付近に小さな骨棘がいくつかみられるが、これらは加齢変化と考えられる。左のラムダ縫合部に縫合骨がみられる。頭蓋冠の骨は薄い。口蓋の正中に軽度の口蓋隆起がみられる。

下顎歯は比較的頑丈である。顎舌骨筋線は明瞭であるが、筋突起内側の内突起稜は発達していない。角前切痕はない。

歯：切歯は上・下顎とも失われているが、少なくとも下顎骨では骨の吸収がないので、抜歯はないと考えてよからう。下顎の第1大臼歯の咬耗は頰側に著しく傾いた咬耗（偏摩耗）で、対応した上顎の大臼歯も舌側に傾いた磨耗をしている（写真3-2、3-2'）。ただしこれらの咬耗はいわゆる皮なめしに使われたような偏在性のものではない。咬耗は著しく、上顎の小臼歯では咬合面にエナメル質のないモルナーの7の咬耗状態である。下顎でも左第1大臼歯は歯頸部まで磨耗し咬耗度はモルナーの7、第2・第3大臼歯は5である。咬耗パターンから判断すると、この個体は50歳代の熟年と考えられる。

軽度のエナメル質減形成がみられる。第1大臼歯の歯頸部近くの線状のものは2〜3歳頃に形成されたものである。第3大臼歯の歯頸部付近にも軽度の線状のものがみられるがこれは12歳前後に形成されたものと考えられる。

四肢骨：鎖骨は太く頑丈で、最大長は発掘時の計測で149mm（右）である。上腕骨は太く頑丈で、骨幹遠位部の外側縁は鋭く発達している。寛骨は頑丈で、大坐骨切痕は鋭角であり、かつ耳状面前溝は認められないので、男性の可能性が高い。大腿骨は太く、粗線は内側唇と外側唇が明瞭に認められるが、付け柱状大腿骨ではない。骨幹上部は扁平ではない。左の大腿骨では転子下窩が比較的発達し殿筋隆起も明瞭であるが、右はさほどではない。粗線のいくつかの部分では細かなヒダ状の稜が認められ、加齢変化の可能性が考えられる。脛骨の中央付近の断面は右かヘリチカのIV型、左がI型に近い三角形である。右脛骨では後面の鉛直線が下方に伸びている。骨間縁は鋭く発達している。

上腕骨の最大長は、発掘時の計測で254mmと257mmで、それからの推定身長は144.1cmと144.9cmである。一方、橈骨の最大長は218mmで、推定身長は154.7cmであるから、これらの平均値は147.9cmとなり、縄文時代の男性の平均値よりかなり小さく、女性の平均値とほぼ等しい。

性別・年齢：この個体は、頭蓋骨に女性的な面がみられるが、四肢骨や寛骨は男性的であり、高齢であることを加味すると男性である可能性が高い。ただし、身長は女性なみの小柄であった。年齢は50歳代の熟年と考えられる。

SH853 (図版31・33、図86)

全身の骨格が出土しているものの、保存状態は非常に悪く観察に耐えない骨がほとんどである。右上肢

は肘をやや曲げ、手を左腹部に置いている。一方左上肢は肘を伸展し、前腕を回内して手を左腰の横に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、左に倒している。顔面は左下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：横方向の土圧を受けてつぶれている。乳様突起はさほど大きくないが比較的厚い。耳道上稜はやや発達しており、乳突上溝も認められる。乳様突起内側の顎二腹筋のおおる乳突切痕は顕著である。外後頭隆起はへりチカのⅢ型である。頭蓋冠の骨はさほど厚くない。口蓋隆起はやや顕著である。

下顎骨は比較的頑丈である。下顎左の小臼歯および大臼歯の歯槽はすべて閉鎖していて、これらの歯は生前に脱落している。縁隆起は目立たないが後縁結節は顕著である。内面の顎舌骨筋線は鈍である。軽度の角前切痕が認められる。

歯：上顎は左の大歯から第2小臼歯までの歯根が残っている。他は破損して不明である。一方、下顎は左中・側切歯・犬歯、および右中切歯は歯根が残っている。下顎の右大臼歯は第3大臼歯が生前に脱落していたらしいが、第1・第2大臼歯の歯根は残っている。かなりの高齢のようなので、この時期まで下顎切歯群が残っていたということは抜歯はなかった可能性が高いことを示している。

四肢骨：四肢骨は保存が悪く、多くの四肢骨はほとんど観察できなかった。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。大腿骨はさほど太くない。粗線はやや発達しており、幅をもった稜状になっているが付け柱状大腿骨ではない。

発掘時の長骨の最大長推定値は、左上腕骨287mm、左大腿骨402mmで、これらから計算される推定身長はそれぞれ153.3cmと154.2cmで、平均値は153.8cmである。この値は縄文時代の男・女性の推定身長はほぼ中間の大きさである。なお、座高は約78cmであった。

性別・年齢：この個体は男性で、高齢の可能性が高いが詳細は不明である。

SH854 (図版31・33、図87、PL23)

SH858と足の部分が重なっている。本墓坑の方が上層にある新しいものである。しかし保存状態は悪く、ごく一部の骨格しか残っていない。上肢などの位置は不明である。また残った右下肢骨は膝を強くまげて左に倒している。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬であろう。

四肢骨：左右の大腸骨のみが残っているが保存状態は悪い。大腿骨は非常に細くしゃやである（上横径：20.8mm、中央付近の周径：約60mm）。殿筋隆起は認められるが、粗線の発達はごく悪い。左の大腸骨の骨頭がまだ癒合していないことから、この個体はまだ若いと考えられる。一般的なヒトの骨化年齢にあてはめると、大腸骨の骨頭は、男性で18～21歳、女性で15～19歳に骨幹と癒合を終えるという。この個体の場合は、骨端の状態から一部癒合にも達していない状態と判断される。このことは大腸骨が非常に細いことから裏付けられる。先の計測値を分部〔1985〕のデータにあてはめてみると、ごく大雑把なものであるが12～15歳ぐらいということになる。

性別・年齢：この個体は若い個体（12～15歳ぐらい）であると考えられるが性別は不明である。SH858とほぼ同じ位置に、しかもあとから埋葬されたにもかかわらず本人骨の保存が悪かったことは、年齢が若く骨が完成していなかったことに起因している。

SH855 (図版31・33、図88、PL22)

保存状態は悪い。左下肢と寛骨は欠けている。右上肢は肘をほぼ直角に曲げ、手を左の肘付近に置いている。左上肢はやはり肘をほぼ直角に曲げて、手を右の肘に置いている。いわゆる腕組みをした状態である。右の前腕の方が上にあり、しかも頭に近い上方（頭側）にある。下肢は右だけが残っている。膝を強

く屈曲し、やや右に倒している。顔面はほぼ正面を向いているが、やや下向きである。仰臥屈葬である。頭蓋骨：額から頭蓋底部に向っての土圧を受けており、顔面は破損している。外後頭隆起はあまり発達しておらず、プロカのII～III型である。乳様突起の大きさは中等度だが、薄い。頭蓋冠の骨はやや厚めである。口蓋中央にごく軽度の口蓋隆起がみられる。下顎骨はきゃしゃであるが、オトガイ隆起は比較的発達している。内面の顎舌骨筋線は鈍である。

歯：上顎の歯は右第3大臼歯以外はほとんど欠けている。下顎は左の小臼歯・大臼歯と右の側切歯・小臼歯・犬歯が残っており、右の大臼歯は歯根のみが残っている。下顎の切歯部の歯槽は左・右中切歯および左切歯部が薄くなっており、生前に歯が脱落していた可能性を考えさせる。これが抜歯かどうかは今のところ判定できない。なんらかの外傷によって脱落した可能性も考えられるからである。それはこの個体が比較的高齢であることから予想されることである。もし定型的な抜歯をしていたとするなら、下顎の右側切歯を抜歯していないのはおかしいことになるからである。

第3大臼歯の歯冠がやや荒れている以外はエナメル質減形成に関しては不明である。咬耗は進んでおり、咬耗度は上顎の第3大臼歯がモルナーの5、下顎の左第2・第3大臼歯も5である。したがって咬耗パターンから判断すると50～60歳の熟年であると考えられる。

四肢骨：保存状態は悪い。比較的よく残っているのが右尺骨と右の下肢骨である。尺骨はあまり太くない。大腿骨は近位端が土圧でつぶれている。粗線が比較的発達し、幅がない細い稜状にはり出している。転子下窩は目立たないが、殿筋隆起はややはり出している。脛骨は土圧を受けている。きゃしゃである。ヒラメ筋線は顕著に発達している。鉛直線も比較的顕著である。栄養孔より近位が現代人とほぼ同じ長さと考えて推定した全体の長さは全長131mmで、推定身長は約150cm程度である。この身長は縄文時代人の女性の推定身長とほぼ同じである。

性別・年齢：この個体は女性で、かなり高齢（熟年）であったと推測される。

SH856 (図版31・33、図89)

SH879の上層に埋葬されている。保存状態は非常に悪く、頭蓋と一部の下肢骨が出土しているだけである。かなり攪乱されているようである。頭蓋骨はやや左を向いている。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：右斜め上からの土圧を受けている。頭蓋冠の骨は薄い。外後頭隆起はほとんど発達していない。

ラムダ縫合の内板はほぼ閉鎖しているが外板はまだ縫合が明瞭である。また、矢状縫合の内板も閉鎖している。乳様突起は小さく、かつ薄い。耳道上稜は認められない。下顎骨はきゃしゃである。上下方向に土圧を受けているにしても、下顎体の高さは低い。オトガイ隆起は比較的顕著だが、角前切痕はない。

歯：下顎骨は、左は少なくとも第1・第2大臼歯の歯根が確認できる。抜歯については前歯部が破損しているので不明である。歯槽から脱落した下顎の大臼歯と上顎の側切歯と思われる歯が出土している。いずれも咬耗は顕著で、咬耗度は大臼歯でモルナーの5～6、中切歯で5である。このことから判断して、この個体はかなりの高齢と考えられる。なお、切歯の歯冠歯頸部近くに線状のエナメル質減形成がみられる。これらは3～4歳時に形成されたものと考えられる。

四肢骨：大腿骨は細くきゃしゃである。粗線の発達は普通である。

性別・年齢：この個体は女性と考えられ、年齢は高齢であろうが詳細は不明である。

SH857 (図版31・33、図89、PL22)

ほぼ全身の骨格が残っているが、上半身の残りはやや悪く、他の部分の保存状態もよくない。右上肢は

肘をほぼ直角に曲げ、手を左胸に置いている。一方、左上肢も同じく肘をほぼ直角に曲げ、手を右のわき腹付近に置いている。右の肘の曲げ方がやや強いので右手の方が頭側にある。下肢はどちらも膝を強く曲げ、左に倒している。左の股関節はかなり強く曲げられている。顔面はほぼ正面を向いているがやや下向きである。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：保存状態はよくない。眼窩上隆起はあまり発達していない。乳様突起は小さいがやや厚めである。耳道上稜は発達していない。外後頭隆起は目立たずヘリチカのII型程度である。ラムダ縫合・矢状縫合はどの部分も縫合が確認でき、癒合は完全ではない。頭蓋冠の骨は薄めである。

下顎骨はやや頑丈である。切歯から第1大臼歯にかけての歯槽内側に顕著な下顎隆起がみられる。角前切痕はなく、下顎骨底が円弧をなしており、いわゆるロッカー・ジョーである。切歯部の体高は低い。オトガイ隆起はやや発達していたようである。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：上・下顎とも切歯部が破損している。少なくとも下顎歯では、歯槽はさほど退縮していないので抜歯はなかったと考えられる。咬耗はかなり進んでおり、咬合面はすべての歯で平坦化している。咬耗度はモルナーの5～6である。咬耗パターンで判断すると40歳代の熟年である。歯の大きさは東海地方縄文時代人の女性の平均値に近い(Matsumura; 1989)。

エナメル質減形成が認められる。大歯、小臼歯、および第2大臼歯の歯冠中央付近にあるものは強く帯状のものではほぼ同時期に形成されたものと考えられ、その時期は6歳前後と推測される。第3大臼歯のものは、帯状の顕著なエナメル質減形成で12歳前後に形成されたものと考えられる。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は直角に近く女性的である。大腿骨は普通である。土圧を受けてもろくなっている。骨幹の後面上部外側の転子下窩は浅いが溝状を呈しており、筋筋隆起も比較的発達している。粗線の発達は普通である。胫骨の太さは普通である。鉛直線はよく発達しており、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。

発掘時に計測した長骨の長さから計算された推定身長は、右および左大腿骨から154.0cmと154.4cm、胫骨から155.3cm、そして腓骨から152.3cmで平均は154.2cmであった。この値は縄文時代の男性と女性の身長の間値である。座高は75cmであった。

性別・年齢：この個体は熟年(40歳以上)の女性と考えられる。

SH858 (図版31・33、図87、PL23)

足先はSH854の墓坑の掘り込の際に切り取られて消失している。それ以外はほぼ全身が出土している。骨の保存状態は比較的よい。右上肢は肘をやや曲げ、手を腹部に置いている。一方、左上肢は肘を強く曲げ、手を左肩に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、股関節も強く屈曲して左右の膝は胸部にまで達している。右前腕から手の部分は下肢の下になっている。顔面は正面下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋骨は左上からの土圧を受けている。眼窩上隆起は顕著に発達しており、鼻根部の陥没は顕著である。鼻骨は狭く、いわゆるつまみ鼻である。乳様突起は大きく厚く、耳道上稜は顕著である。外後頭隆起は小さく、ヘリチカのII型程度で発達していないが、下方に数mmほど垂れており、加齢変化と考えられる。頭蓋冠の骨は厚い。口蓋の中央に顕著な口蓋隆起がみられる。矢状縫合やラムダ縫合は外板でも癒合消失している部分があるので比較的高齢であろう。

歯：歯は破損していて観察できるものはない。前歯部は歯槽が開いていること、あるいは歯根が残っていることなどから抜歯はないと判定される。右上顎の大臼歯は、生前に脱落していたらしく歯槽が開閉している。あまり若い個体ではなからう。

四肢骨：鎖骨はあまり太くない。上腕骨の太さは普通である。三角筋粗面はやや発達している。寛骨の大坐骨切痕は直角に近く、むしろ女性的だが、耳状面前溝はみられない。大腿骨はやや太く頑丈である。粗線は比較的発達しており5～6mmの幅のある稜状にはり出しているが、いわゆる付け柱状大腿骨ではない。骨体上部の転子間線（腸骨大腿帯の付着する部分）の下部は著しく突出しており加齢変化を思わせる。小転子も粗な構造である。土圧を受けてやや変形しているが骨幹上部は扁平ではない。脛骨は鉛直線が顕著で下方まで伸びて森本（1981）のA型である。したがって、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。

発掘時に計測したそれぞれの骨の最大長（左上腕骨284mm、右尺骨247mm、左大腿骨409mm）から推定身長を計算すると、それぞれ152.5cm、158.9cm、155.9cmとなり、平均は155.8cmとなる。この値は縄文時代人の男性の平均値（159.11cm）に近い。

性別・年齢：この個体は高齢（詳細は不明）の男性と考えられる。

SH859（図版31・33、図90、PL23）

ほぼ全身の骨格が出土している。骨の保存状態は比較的よい。右上肢は肘をやや曲げ、前腕を回内して手を下腹部に置いている。左上肢は肘を強く曲げ、手を胸のほぼ真ん中に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、やや右に傾けて立てている。顔面はほぼ正面の下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧で額から頭蓋底にかけてつぶれている。乳様突起は大きく厚い。耳道上稜はよく発達している。乳突切痕はむしろ浅い。外後頭隆起はよく発達し、ヘリチカのIII～IV型で、上項線部の後頭隆起も肥厚している。頭蓋冠の骨はあまり厚くない。

ほぼ完全な下顎骨である。下顎そのものはほとんど頑丈ではない。下顎骨の角前切痕はない。オトガイ隆起はやや発達しているし、外側結節も顕著である。小臼歯から第1大臼歯にかけての歯槽内側に軽度の下顎隆起がみられる。下顎角はやや大きめであり、下顎枝はきしゃである。

歯：下顎骨では切歯・犬歯・小臼歯の一部が失われているが、歯槽から判断して抜歯はない。上・下顎ともに第3大臼歯が萌出している。上顎歯列は、土圧でややひしゃげているので正確な判断はできないが、切歯の植立するスペースがやや足りないように思われる。上顎切歯に残っているのは左の第1および第2切歯で、右は出土していない。左の中切歯と左の犬歯の間は歯が2本（中切歯と側切歯）植立するほどのスペースはない。先天的なものなのかあるいはなんらかの事故によるものか、あるいは抜歯によるものかなどは不明である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯は右が+5型、左がY5型、第2大臼歯は+4型、第3大臼歯はX4型である。

エナメル質減形成はこの個体にもみられる。第1大臼歯にはみられないので乳児期のストレスはなかったらしい。しかし、下顎の側切歯や犬歯にみられるものは、3歳前後および5歳前後に形成されたものと考えられる。

歯の咬耗はごく軽度で、咬耗度はいずれの歯もモルナーの2～3で、咬耗パターンと萌出パターンから推測される年齢は、20歳ぐらいの青年に相当している。

四肢骨：上腕骨はさほど太くないが、比較的頑丈そうである（写真8）。大・小転子稜も発達している。三角筋粗面の発達は中等度である。寛骨は残りがよい。耳状面前溝はない。大坐骨切痕部は比較的角が大きく、どちらかといえば直角に近い女性型である。坐骨結節がよく発達しており、寛骨臼と坐骨結節との間は1cm程度でごく狭い。大腿骨は比較的太く頑丈である。粗線の発達はさほどよくない。転子下窩は溝状で、骨幹上部の外側にはり出しており、殿筋隆起の発達もよい。上部はやや扁平である（上骨体断面示数の左右平均は81.5）。脛骨はやや頑丈である。後面の鉛直線はさほど発達していない

ので、中央付近の断面はヘリチカのII型に近く扁平である。

長骨の最大長からの身長は、上腕骨で156.1cm、尺骨で159.5cm、大腿骨で160.9cm、胫骨で156.0cmであり、これらの平均値は158.1cmである。この身長は、縄文時代の男性の平均値159.11cmとは等しい。

性別・年齢：この個体は、大坐骨切痕などがやや女性的だが、耳状面前溝もなく全体に頑丈なので男性の可能性が高い。粗線などの未発達は年齢が若いためと考えられる。歯から推測される年齢は青年（20歳くらい）である。

SH854 (図版33上、図91)

SH855に隣接しているが、掘り込みがあるので本人骨の方が先に埋葬されたものである。下半身だけが出土しているが、骨の保存状態はよい。膝を強く曲げてやや左に傾けている。屈葬である。仰臥であったろう。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。耳状面前溝は認められない。大腿骨は頑丈で粗線がよく発達している（写真9）。骨幹の上部は扁平ではない。骨幹上部外側の殿筋隆起はやややり出しているが、転子下窩はほとんどない。殿筋粗面はよく発達している。胫骨も太く頑丈で、後面の鉛直線はあまり長くない、森本のD型である。中央付近の断面はヘリチカのIV型である。腓骨は普通である。距骨には踵距面が認められる。内果面が前方に延長しており、内側踵距面も伸びだしている。また、距骨頸の外側に頸結節が発達している。

胫骨最大長から計算される推定身長は158.5cm、腓骨最大長から158.5cmと計算され、したがって平均値は158.5cmである。この身長は縄文時代の男性の平均値159.11cmとほとんど同じである。

性別・年齢：この個体は男性の可能性が高い。成人という以外に年齢をうかがえる材料はない。

SH872 (図版33上、図84)

保存状態が悪く、しかも土圧を受けている。下肢骨が発掘時に判定でき、膝を強く曲げ左に倒しているらしいことがわかったが、埋葬姿勢は屈葬という以外は不明である。やや土圧を受けたが大腿骨が認められるが細くしゃしゃである。粗線の発達は普通である。大腿骨の細さが、若いためなのか、あるいは女性であるからなのかは不明である。

SH879 (図版33上、図92、PL24)

ほぼ全身の骨格が残っているが、それぞれの骨はもろくて保存状態が悪い。左右の上肢は肘を伸展し、回内して手をそれぞれの腰の横に置いている。下肢は膝を強く曲げて左右をあわせてほぼ中央に立てている。顔面は右真横でやや下を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋骨の左側は失われているが、顔面の保存は比較的よい。眼窩上隆起は発達し、鼻根部はくびれており一般的な縄文時代と同じである。乳様突起は大きくて厚い。乳突切痕は顕著である。耳道上稜がよく発達しており、したがって乳突上溝も、顕著である。外後頭隆起はよく発達し、ヘリチカのIV型である。上項線は明瞭である。ラムダ縫合の一部の癒合がみられるが矢状縫合などでは外板の癒合はみられない。

下顎骨はさほど頑丈ではない。オトガイ隆起は発達しており、外側結節も認められる。下顎枝の傾きは大きい。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：一部の切歯が破損しているが、歯根が残っていたり、歯槽ソケットが確認できるので抜歯はない。咬

耗は進んでおり、咬耗度はモルナーの4～5である。咬耗パターンから推定される年齢は40～50歳ぐらいで、熟年であろう。上・下顎歯ともに臼歯部では右側の咬耗が左よりも進んでいる。左の下顎第3大臼歯が水平に萌出しているためであろう。下顎切歯の咬耗が水平であるので咬合は鉗子状咬合であったと考えられる。

エナメル質減形成が認められ、5歳前後と11歳前後に形成されたものと考えられる。下顎大歯にはこの他に軽度のもので6歳前後に形成されたものと考えられるものも認められる。

四肢骨：上腕骨は太く頑丈である。前腕の筋の附着する内側上顆もよく発達している。尺骨や橈骨も頑丈でそれぞれの骨間縁もよく張り出している。尺骨の回外筋稜も顕著である。

寛骨は大きく、大坐骨切痕は鋭角で男性的である。また、耳状面も低く、耳状面前溝もみられない。大腸骨は太く頑丈で、粗線は幅をもってよく発達している。胫骨はやはり太く、後面の鉛直線はよく発達し、そのため中央付近の断面はヘリチカのIV型である。骨間縁も明瞭である。腓骨は太く、後面および内側面は深くえぐれている。

長骨の最大長からの推定身長は、上腕骨は右155.3cm、左は155.8cm、および左尺骨は160.1cmで、平均値は157.1cmである。この値は縄文時代の男性と女性の平均値の間の値だが、男性の平均値に近い。性別・年齢：この個体は、熟年の男性と考えられる。

SH908 (図版53、図93)

ほぼ全身が出土している。上肢や体幹骨は原形をとどめておらず、頭蓋骨と下肢骨の一部が主である。保存状態は悪く、顔面は失われている。右上肢は肘を100度近く曲げて手を左胸に置いていた。左上肢は不明である。下肢は膝をやや強く曲げ、左に倒れている。顔面は下顎骨の位置から推定してやや左を向いていたものと考えられる。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：ほぼ正面を向いていたので前後方向の土圧を受けている。顔面から頭蓋底にかけては失われている。乳溝突起は小さい。耳道上也も発達していない。外後頭隆起はヘリチカのII型であり発達していない。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨はあまり厚くない。内面の顎舌骨筋線は鈍である。後述の歯の咬耗から、ある程度の年齢に達していると判断されるので、頭蓋骨の印象から女性の可能性が示唆される。

歯：破片を含めて下顎歯が5本残っているだけである。下顎左大臼歯は植立して出土した。咬耗があまり進んでおらず、いずれの咬耗度もモルナーの4である。各大臼歯はその萌出時期の違いほどには咬耗は違っておらずむしろほぼ同じかあるいは第2大臼歯の方が第1大臼歯より磨耗している程度である。咬耗パターンでは30～40歳の壮年と推定される。

第2および第3大臼歯に、歯冠歯頸部近くのエナメル質が荒れており、軽度のエナメル質減形成と判断される。

四肢骨：大腸骨はあまり太くなく、粗線も発達していない。胫骨も中等度の太さである。

性別・年齢：この個体は、壮年(30～40歳)の女性の可能性が高い。

SH924 (図版47、図94、PL24)

ほぼ全身の骨格がみられるが、体幹や小さな骨の保存状態は悪い。頭蓋骨は破損している。右上肢は肘をほぼ直角に曲げて手を左のわき腹あたりに置いている。一方左上肢は肘を強く曲げ、手を左の肩付近に置いている。下肢は膝を強く曲げるとともに股関節も強く屈曲しているため、膝は左右とも胸部にまで達している。左右の膝は開いている。顔面はほぼ正面を向いているが頭蓋部が高い位置にあったせいかやや下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧を受けており、しかも消失した部分が多い。外後頭隆起は比較的発達しておりヘリチカのIV型である。乳様突起は大きく、耳道上稜も発達している。骨はさほど厚くない。下顎骨は頑丈で厚く、オトガイ隆起も発達している。土圧で数ヶ所折れている。抜歯に関しては確認できない。頭蓋骨は男性的である。

歯：下顎の大臼歯には左右とも少なくとも2本は残存しており、上顎も破損はしているが第2および第3大臼歯が残っていた。成人であることはたしかと考えられる。下顎の左第3大臼歯の歯冠が残っている。咬耗度はモルナーの5である。このような咬耗に相当する咬耗パターンを考えると年齢はかなり進んでいる。第2大臼歯との隣接面磨耗も著しいことから、この個体はかなりの高齢であると推測され、少なくとも60歳以上であろう。

この歯の歯頸部近くはエナメル質の表面が荒れており、帯状になったエナメル質減形成が認められる。形成期は12歳前後であろう。

四肢骨：大腿骨は比較的太く頑丈である。粗線の発達はよく、幅7～8mmで稜状になっている。転子下窩はさほど顕著ではないが外側への筋筋隆起の張り出しは中等度である。骨体上断面が数は86.5で扁平ではない。胫骨はやや太めである。

性別・年齢：この個体は男性と考えられ、かなりの高齢（60歳以上）である。

SH938 (図版47・49、図95)

少量の四肢骨片と10数点の歯の破片が出土している。ヒトの歯であることはまちがいないがそれ以上のことは不明である。

SH952 (図版48・49)

歯の破片と、下肢骨の一部のみが出土している。粗線が認められるので大腿骨である。土圧を受けてほとんどが扁平になっている。

歯：歯の破片が出土している。白歯の歯冠片と考えられる破片であるが、いずれも咬頭は磨滅しており、歯冠の高さも小さいので咬耗が進んでいたと考えられる。少なくとも成人ではあったろう。

四肢骨：大腿骨の粗線の外側唇は下方で顕著に発達している。土圧の影響をあまり受けていない右大腿骨の骨体上部は細い。粗線が明瞭であり、状態が成人のものと考えられるので、この個体は女性の可能性が高い。

性別・年齢：この個体は、成人の女性の可能性が考えられる。

SH958 (図版48、図96、PL25)

ほぼ全身が出土しているが、骨の保存状態はよくない。右上肢は肘を伸展し、手を右腕の横に置いている。一方、左上肢は肘を強く曲げて、手を左肩付近に置いている。下肢の膝は左右とも伸展している。胸椎から腰椎、肋骨の部分が攪乱されている。右前腕もやや動いている。指骨が恥骨付近にあるので、右手は元は下腹部に置かれていたらしい。顔面はやや左下方を向いている。仰臥伸展姿勢である。

頭蓋骨：横方向の土圧を受けてつぶれている。乳様突起は土圧で変形しているがむしろ小さめである。耳道上稜がやや発達しており乳突上溝も認められる。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。頭蓋冠の骨は厚くない。左右の外耳道に骨腫と思われる小さな骨の出っ張りがある（写真10）。右の方が著しく、外耳道は極端に狭くなっている。外耳道骨種は潜水作業などに従事する日本人に高率（15%～約50%）にみられるもので、縄文時代人では海岸部の遺跡に高頻度でみられる〔百々：1972〕。北村遺跡の場合は

犀川沿いの遺跡であるが、習慣的な淡水魚の素潜り漁などはあまり考えられないので、偶然に出現した可能性の方が高いかもしれない。

下顎骨はあまり厚くない。角前切痕はない。内側の顎舌骨筋線は比較的顕著であり、下顎枝も広い。歯：上下顎歯ともにすべて萌出しているが、切歯の歯冠が一部破損している。抜歯はない。上顎中切歯は浅いシャベル型である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯は不明、第2大臼歯は+5型、第3大臼歯は+4型である。大臼歯部に歯石がやや沈着している。咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はモルナーの3がほとんどである。咬耗パターンから推測される年齢は25~30歳ぐらいの青年である。

エナメル質減形成がかなり多くの歯にみられる。もっとも顕著なのは下顎第2大臼歯の歯冠中央にあるもので、これは5~6歳に形成されたものであろう。これに相当するものが上顎大歯にもみられるが表現型はかわっていて表面の荒れになっている。上顎の切歯にも軽度の線状のものがみられ、これらは2歳前後のものと考えられる。

四肢骨：上腕骨はやや太く、三角筋粗面も発達している。大腿骨はさほど太くない。粗線は中等度の発達状態である。脛骨はあまり太くない。中央付近の断面はヘリチカのII型に近い。

伸展葬であるため発掘時に身長を計測し、153cmを得た。大腿骨の左右の推定最大長の平均値398mmから計算される推定身長は153.2cm、脛骨最大長320mmからは153.0cm、上腕骨最大長278mmからは150.8cmである。これらの平均値は152.3cmで実測とほとんど差がない。これは縄文時代の男性と女性のほぼ中間の値である。この結果は藤井〔1960〕の推定式を北村人骨の身長推定に適用しても有効であることを示している。

その他：イノシシの焼かれた距骨が混入していた。人骨周辺に木炭片や土器片が散乱しているので、覆土に混入していたものであろう。

性別・年齢：この個体は青年（25~30歳）の女性の可能性が高いと考える。

SH879 (図版48、図98、PL24)

ほぼ全身の骨格が出土しているものの骨の保存状態は悪く、取り出せない部分が多い。右上肢は肘をわずかに曲げて前腕を回内し、手を腰付近に置いている。左上肢も同様に肘をやや曲げ、前腕を回内して手を腹部に置いている。下肢はともに膝を強く曲げ、左に倒れている。股関節はほぼ90度曲げている。顔面は正面を向いているが頭蓋が高くなっていたために下方を向いている。寝た状態で仰臥屈葬である。

頭蓋骨：残りは非常に悪い。下方を向いているため、前頭方向から後頭底部にかけての土圧を受けている。

乳線突起はやや大きめである。耳道上稜はよく発達しているため、乳突上溝も比較的顕著である。頭蓋冠の骨は薄めである。下顎骨は頑丈である。オトガイ隆起は顕著で、縁隆起もみられる。大歯から第1大臼歯にかけての歯槽内側に下顎隆起がみられる。

歯：上・下顎ともに切歯部が破損している。上顎は不明だが、少なくとも下顎に抜歯はない。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第3大臼歯がX4型である（第1・第2は不明）。咬合面は平坦だが、咬耗はさほど進んでいるとはいえず、咬耗度はモルナーの3である。咬耗パターンから推測される年齢は25~30歳ぐらいの青年である。下顎の右第1大臼歯および第2大臼歯の咬合面に小窩がみられるが、齶蝕の可能性がある。齶蝕とするとエナメル質と象牙質だけで、歯髄腔には達していないC2段階である。

エナメル質減形成がみられる。下顎第3大臼歯のものは11~12歳ぐらいで形成されたかと推測される。

四肢骨：寛骨は大坐骨切痕が鋭角的であり、耳状面の前後に耳状面前溝・後溝もみられない。また、耳状面は低い。大腿骨は保存状態が悪く全周残っていないが太さは普通であらう。粗線は比較的発達している。脛骨は太く頑丈である。土圧で変形しているが、中央付近の断面はヘリチカのII型であったと推測

される。腓骨は太くなり、骨間線もあまり発達していない。

大腿骨の最大長は約420mmで、これから計算される身長は158.6cmである。この値は縄文時代男性の平均値とほとんどかわらない。

性別・年齢：この個体は青年（25-30歳）の男性と考えられる。

SH1048 (図版39)

上顎右第2大臼歯片と、下顎右第2あるいは第3大臼歯が出土している。上顎第2大臼歯はやや小型である。下顎の大臼歯は遠心面に隣接面磨耗がないので第3大臼歯である可能性が高い。咬耗はモルナーの4である。成人であることはまちがいないだろう。性別は不明である。

SH1049 (図版36、図99)

下肢骨の長骨のみが出土している。保存状態は悪く、数ヶ所で折れているうえに表面はげ落ちており骨の種類もよくわからない。太さと形状から脛骨らしいが、かなり若い個体のもの、あるいは成人とすればきゃしゃな女性のものであろう。

性別・年齢：ともに不詳である。

SH1066 (図版35・36)

頭蓋骨と上肢骨片だけが出土している。骨の保存状態は非常に悪い。この個体とは別個体の頭蓋骨片が混入している（左側頭骨片が2個ある）。埋葬の際に混入したものであろう。

頭蓋骨：土圧でつぶれている。乳様突起は大きくない。外後頭隆起はほとんど発達していない。ヘリチカのII型程度である。頭蓋冠の骨は薄い。頭蓋骨の縫合は鋸歯状の縫合が明瞭に認められるので若い個体であろう。

歯：上顎左第3大臼歯が残っている。まったく咬耗しておらず、歯槽内に埋伏していた未萌出歯である可能性が高い。歯根はかなり形成されているので15歳前後と考えられる。この歯の歯冠歯頸部近くに帯状のエナメル質減形成がみられる。これが形成された時期は12歳前後と考えられる。

性別・年齢：この個体は15歳前後の少年で、性別は女性の可能性が高い。

SH1068 (図版35・36、図100)

頭蓋骨の一部と上肢骨および体幹の骨の一部が残っているが、骨の保存状態は非常に悪く、観察に耐えないものがほとんどである。右上肢は肘を強く曲げ、手を右肩付近に置いている。一方、左上肢は肘を90度ぐらゐ曲げ、手を右胸に置いている。下肢の状態は不明であるが、わずかに残った部位から仰臥屈伸と推測される。

頭蓋骨：後頭骨と、側頭骨と思われる骨が出土している。後頭骨の外後頭隆起はほとんど目立たず、ヘリチカのI-II型である。頭蓋冠の骨は薄い。

四肢骨：上腕骨の遠位部は非常にきゃしゃである。寛骨の寛骨臼部が出土している。ここでは坐骨・腸骨・恥骨が癒合を完了しており、少なくとも18歳以上で、成人の可能性が高い。寛骨臼の最大長は51.9mmで、現代日本人のデータ（宮本：1927、米須：1952）にあてはめると、女性の値とほぼ同じである。縄文時代人の津雲貝塚人の場合は女性に近い中間の値をとる。

性別・年齢：この個体は女性の可能性が高く、年齢は成人であろうという以外は不明である。

SH1129 (図版19・21・22、図101)

ほぼ全身の骨格が認められるが保存状態は悪い。右上肢は肘をやや深く曲げ、手を左肩付近に置いている。左上肢は肘を強く曲げ、手を左肩付近(顔面の横)に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、股関節も強く曲げているので膝が胸の前にある。脊柱はゆるやかに曲げられている。顔面は左に向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：顔面は左を向いているため横方向の土圧を受けている。乳様突起は小さめで薄い。耳道上縁はやや発達している。外後頭隆起は小さくヘリチカのII型程度である。頭蓋冠の骨は薄い。後頭骨の左側に横後頭縫合がみられる(右は破損)。ラムダ縫合は明瞭である。下顎骨は土圧でさまざまな変形を受けている。下顎体はさほど厚くない。角前切痕はなさそうである。オトガイ隆起は小さい。

歯：上顎歯では、左右の中切歯が残っている。これらは歯頸線付近まで咬耗しており、咬耗度はモルナーの6である。高齢である。下顎歯の歯冠は残っていない。左右の大白歯では第3大白歯が欠如していたらしい。切歯部はかなり破損していて観察できないが、左右の大歯部は生前に脱落していた可能性を示す狭い歯槽になっている。可能性としては抜歯ではなく、事故あるいは高齢のための脱落が考えられる。その理由は、もし下顎の大歯までがすべて抜歯されていたとすれば、上顎の中切歯の咬耗が激しいことが説明できないからである。少なくとも下顎の中切歯は残っていた可能性が高い。

四肢骨：いずれも土圧をかなり受けており、断片的にしか原形を保っていない。大腸骨は細いが粗線は発達していたようである。転子下窩は目立たないが、殿筋隆起はややはり出している。脛骨の骨間縁の発達はやよい。

性別・年齢：この個体は女性と考えられる。成人で、かなり高齢であろう。

SH1136 (図版19・21、図102、PL25)

全身骨格が出土している。骨の保存状態は悪い。上肢は左右ともに肘をやや曲げ、手を下腹部に置いている。下肢は膝を強く曲げ、左右の膝をあわせて右に倒している。顔面はやや左下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧でつぶれており、顔面から頭頂にかけてほとんど細片化している。外後頭隆起は大きくなく、ヘリチカのII型程度である。乳様突起は基部が確認できるがあまり大きくなさそうである。ラムダ縫合は鋸歯状の縫合が顕著に認められる。下顎骨は比較的きゃしゃで、骨体は厚くない。オトガイ隆起はやや発達しており、外側結節も小さいながら認められる。角前切痕はみられない。第2小臼歯から第1大白歯にかけての歯槽内側面に軽度の下顎隆起が認められる。

歯：上・下顎ともに全歯萌出しており、抜歯はない。上顎の大白歯は第2および第3大白歯がやや変形している。下顎大白歯の咬頭と溝の型は第1大白歯が+5型、第2大白歯は右がX4型、左が+4型、第3大白歯はどちらもX4型である。咬耗は少なく、咬耗度は切歯・犬歯がモルナーの3、小臼歯は2、第1大白歯が3で、他の大白歯は2である。咬耗パターンから推測される年齢は20~25歳の青年である。

多くの歯にエナメル質減形成が認められる。犬歯には少なくとも5本の線状、あるいは帯状の減形成がみられ、それ以外の歯冠表面も小さな窩状の減形成が多く認められる。これらは1歳頃から何回にもわたっており、上顎第3大白歯のものは12歳前後に形成されている。このような厳しいストレスを受けたことこの個体が若くして死亡したことはけっして無縁ではなからう。また、上顎の大白歯の変形にも影響していることが考えられる。

四肢骨：上腕骨は細い。寛骨は小さめで、大坐骨切痕はさほど小さくはない。耳状面は高く、女性的である。耳状面前溝はみられない。大腸骨は細くきゃしゃである。粗線は比較的発達しており幅をもった稜

状になっている。転子下窩は溝状になっており、外側の殿筋隆起は張り出している。これにともなって骨幹の上部外側前面は平坦化して殿筋隆起に続いている。骨体上断面示数(扁平示数)は77.8で扁平大腸骨である。脛骨も細くきゃしゃであるが、後面の鉛直線は発達している。そのため、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。

大腿骨の最大長からの推定身長は149.3cmで、縄文時代の女性の平均値(148.01cm)と大差ない。

性別・年齢:この個体は比較的若い青年(20~25歳)の女性である。幼少時から栄養不良などのストレスを多く受けており、妊娠歴もない。

SH1143 (図版19・21、図101)

全身のかなりの骨格が残っているが、後述のように若い個体であるためか保存状態は極端に悪い。頭蓋骨と歯および長骨の一部だけが取り出せた。右上肢は肘を曲げ、手を胸の中央付近に置いている。左上肢は不明である。下肢は左右とも膝を強く曲げて左に倒れている。股関節もやや屈曲されている。顔は中央やや下方を向いている。側臥屈葬である。

頭蓋骨:脳頭蓋は取り出せたが、表面はほとんど脱落しており観察に耐えない。

歯:下顎の第2大臼歯が萌出直後である。下顎骨は切歯部から臼歯部の歯槽が残っている。抜歯はない。

上顎切歯は軽度のシャベル型で、唇側面もごく僅かに凹んでいる。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が+5型である。咬耗が少なく、モルナーの2~3である。第2大臼歯は未だ萌出していなかったと考えられる。歯の萌出から推測される年齢は10~11歳前後である。第1大臼歯と第2大臼歯との咬耗の違いはごくわずかである。歯の大きさは男女のどちらともいえない。

エナメル質減形成はみられない。

四肢骨:大腿骨の近位部と遠位部が取り出されたが、どちらも細くきゃしゃである。

性別・年齢:この個体はまだ若い10~11歳前後の子供で、性別は不明である。

SH1144 (図版20・22、図103)

ほぼ全身の骨格が出土している。骨の保存状態は比較的よいが、体幹の骨は残りが悪い。右上肢は肘をわずかに曲げ、手を腰に置いている。左上肢も肘をやや曲げ、手を下腹部に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、やや右に寄せて立てている。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨:保存は比較的よいが、すべて小片化している。頭蓋冠の左前部分が欠けている。眉弓の発達は著しい。乳様突起は小さく、かつ薄い。外後頭隆起はほとんど発達せずヘリチカのII型である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。矢状縫合は内板・外板ともに縫合がほぼ完全に癒合しておりかなりの高齢であることを示している。中硬膜動脈の溝は縁が鈍である。下顎骨はやや厚めで頑丈である。左右の大歯から第1大臼歯にかけての歯槽内面に軽度の下顎隆起がみられる。オトガイ隆起は発達しており、外側結節も小さいが確認できる。角前切痕はみられない。筋突起の内突起稜は発達していない。

歯:上顎の切歯は残っているが、それより遠心の一部および下顎の左側切歯が生前に脱落している。咬耗はかなり進んでいるが、切歯や小臼歯と比較して大臼歯の方がより咬耗している。下顎の小臼歯の咬耗度が低い(モルナーの3)のは、咬合する上顎の小臼歯がかなり若い時期に脱落したことを示しているものと思われる。切歯部の咬耗度は3~4であり、下顎の大臼歯の咬耗度は第1大臼歯がモルナーの7、第2大臼歯が6、第3大臼歯が5である。上顎の左右それぞれの大歯から小臼歯の歯槽は退縮している。咬耗パターンは、臼歯部と前歯部の咬耗の仕方が一般のものとはやや異なった進み方をしているが、総合して考えると45~50歳ぐらいの熟年であったと推察される。

下顎右の側切歯の歯槽は、この歯が生前に脱落したことによって退縮しているらしい。そのため、隣接する右犬歯が近心がわに傾いて植立している。また、下顎の左第2小臼歯と第1大臼歯の歯槽は吸収が進んでおり、これらの歯は脱落寸前であったと考えられる。第2小臼歯には齧蝕も、その他の外傷もみられないので、この歯槽の吸収は第1大臼歯のなんらかの破損によるものであろう。上顎の大歯と小臼歯および下顎側切歯の脱落も故歯によるものではないと考える。

下顎の左右の大歯、小臼歯および上顎の第2大臼歯にエナメル質減形成がみられる。大歯のものは5歳前後、第2大臼歯の歯頸部近くのエナメル質の荒れは7歳前後に形成されたものと考えられる。

四肢骨：四肢骨は土圧の影響をあまり受けていない。鎖骨は細くきゃしゃである。上腕骨も細くきゃしゃで、三角筋粗面も発達していない。大腿骨は細く、粗線もあまり発達せず狭い稜状である。殿筋粗面は発達しているが殿筋隆起はあまり突出していない。転子間線は目立たない。骨体上断面示数(扁平示数)は82.2で扁平大腿骨である。脛骨は比較的頑丈である。後面の鉛直線はよく発達して鋭い稜が上部にみられるが短く、その下方は鈍な稜になっている。しかし、中央付近の断面はヘリチカのIV型でかなり扁平である。栄養孔位での扁平示数は60.7で扁平脛骨である。腓骨は太く頑丈である。

性別・年齢：この個体は熟年(45~50歳)の女性と考えられる。下半身がよく発達しているのに対し上半身はむしろきゃしゃである。

SH1149 (図版21、図104)

ほぼ全身の骨格が出土している。保存状態は非常に悪い。左右の上肢は肘をやや深めに曲げて前腕を胸で交差し、手をそれぞれ反対側の肩に置いている。左手の方が右手の上にある。下肢は膝を強く曲げ、股関節も完全に屈曲させている。したがって右の膝は胸の下あたり(みぞおち付近)に、左膝は左の肘の横に位置している。顔面はほぼ正面下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：上下方向に土圧を受けており、頭蓋冠はつぶれている。乳様突起の大きさは普通だが薄い。外後頭隆起は発達しておらず、ヘリチカのII型~III型程度である。頭蓋冠の骨は薄めである。下顎骨はあまり厚くなく、下顎杖角は大きめである。角前切痕はない。オトガイ隆起は普通である。

歯：下顎歯は全歯が植立しており、抜歯はない。上顎歯は左右とも切歯から犬歯部が破損している。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第2・第3大臼歯ともに+4型である。第1大臼歯の咬耗度はモルナーの6であるが、第2・第3大臼歯および小臼歯は4、大歯は3である。咬耗パターンは、前歯では遅く臼歯では進んでいるので正確にあてはめるのは難しいが、臼歯を主にして考えるとこの個体の年齢は、30~40歳ぐらいと考えられ、壮年である。

やはりエナメル質減形成が認められ、とくに第2大臼歯のものが顕著で、帯状である。これが形成された時期に相当する年齢は6歳前後であり、第3大臼歯のものは12歳前後、第1大臼歯のものは2歳前後に形成されたものである。

四肢骨：ほとんどが土圧の影響を受けている。上腕骨は細くきゃしゃである。寛骨は比較的よく保存されている。寛骨は小さい。大坐骨切痕は直角に近く、耳状面は高い。耳状面前溝が観察される。妊娠歴をもつ個体であろう。大腿骨は細いが転子間線は比較的明瞭である。

長骨の最大長から計算される推定身長は、上腕骨最大長(268mm)から148.0cm、橈骨最大長(194mm)から147.0cm、大腿骨最大長(359mm)から143.6cm、脛骨最大長(308mm)から150.1cmである。これらの平均値は147.2cmでこの値は縄文時代の女性の推定身長の平均値とほぼ等しい。

性別・年齢：この個体は壮年(30~40歳)の女性で、妊娠歴をもつと考えられる。

SH1155 (図版23、図105、PL25)

ほぼ全身の骨格が認められるが、保存状態は悪い。とくに下半身は破損するものが多い。左右の上肢は肘をやや曲げて手を下腹部に置いている。ほぼ同じ場所に置いているが左手を上に出している。下肢は膝を強く曲げ、右に倒している。そのさい股関節もかなり曲げており、膝は右側腹部にあるが手の位置よりも頭に近い。顔面はやや右で下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧を受けて細片化しており修復不能である。眼窩上隆起は発達していない。頭蓋冠の骨は薄い。外後頭隆起はあまり発達しておらず、ヘリチカのⅢ型程度である。下顎骨に角前切痕はない。下顎体は厚くない。オトガイ隆起はやや発達している。左大白歯がすべて生前に脱落しており歯槽が閉鎖している。

歯：下顎左大白歯はすべて生前に脱落しているが、切歯から小臼歯は両側とも植立している。しかし、咬耗は著しく、歯冠のエナメル質がほとんど失われるぐらいの咬耗である。上顎の大白歯でも咬耗は著しく、生前に脱落している下顎左側大白歯に対応する、左の第2および第3大白歯は咬耗度がモルナーの7で、歯根まで咬合に参加している。遠心に著しく傾いた咬耗である。この傾向は上顎の小臼歯にまで及んでいる。これらは著しい咬耗によって歯が近心に傾いてからさらに咬耗した結果であろう。なぜなら、下顎の切歯から小臼歯の間の長さがかなり短くなっていて近心につまっているからである。第1大白歯は咬耗度がモルナーの5で、遠位の第2・第3大白歯より咬耗していないが、これは咬合する下顎の第1大白歯が他の歯より早く脱落したためであろう。

歯から年齢を推定するとかなりの高齢で、50歳代と考えられる。エナメル質減形成が上顎の小臼歯にみられる。これが形成された時期は6歳前後と考えられる。他の歯は歯冠がほとんどなくて確認できない。

四肢骨：上腕骨は細くきゃしゃである。大腿骨は普通である。粗線は狭い稜状である。

性別・年齢：この個体はかなり高齢（50歳代の熟年）の女性と考えられる。歯の咬耗が著しく、歯の脱落が多い。

SH1156 (図版20・22、図106、PL26)

3体分の頭蓋骨が埋葬されている。これらをA、B、Cとする。これらの頭蓋骨は本来の埋葬姿勢とは考えられず、埋葬後になんらかの理由で同じ墓坑に葬られたものと考えられる。四肢骨・体幹骨は少なくとも2体分が確認できる。四肢骨は大腿骨の同側が2本出土しており、太さがはっきりと異なっている。比較的自然位を保っているのはきゃしゃなほうである。このきゃしゃな四肢骨は、女性の頭蓋骨と考えられる頭蓋骨Aと頭蓋骨C（後述）のどちらかのものであろうが、近い位置にある頭蓋骨Aを仮にきゃしゃな四肢骨のものとしておく。

(A)

この個体の埋葬姿勢は、これらが自然位とすると、右上肢は肘をやや曲げて手を胸に置いており（左上肢は不明）、下肢は左右ともに股関節を強く屈曲し、膝は胸にある。顔は位置が不明である。

頭蓋骨：頭蓋骨は四肢骨などの骨格のやや右にある。自然位ではなく頭蓋は上下方向が反対向きになっている。顔面は失われている。眼窩上隆起はあまり発達していない。乳様突起もさほど大きくなく乳突上溝もみられない。外後頭隆起は大きくないようである。下顎骨は頭蓋骨とセットになって自然位の咬合をした状態で出土している。やや土圧を受けているが、大歯部から第1大白歯部にかけての歯槽の内側に下顎隆起が認められる。それを考慮に入れば下顎体は厚くない。顎下腺窩からオトガイ内側にかけては深くえぐれている。

歯：下顎の大白歯部がおもに残っている。右の第2小臼歯は生前に脱落していたと考えられる。左大歯も脱落していた可能性が考えられる。切歯部の歯槽は破損しており不明である。咬耗はかなり進んでおり、第1大白歯の咬耗度はモルナーの6であり、第2および第3大白歯は5である。断片的である小臼歯もかなり咬耗しているのでこの個体は比較的高齢であろう。咬耗パターンでは50歳代の熟年と考えられる。

四肢骨：上腕骨は細くしゃしゃである。三角筋粗面は発達していない。大腿骨はやはり細く、殿筋隆起も顕著ではない。粗線はあまり発達せず、狭い稜状である。脛骨の中央付近の断面はやや遠位からの推測では鉛直線のやや発達したヘリチカのIV型であろう。

上腕骨の最大長から計算した推定身長は148.6cmであり、縄文時代の女性の平均身長とほぼ同じである。

性別・年齢：この個体は女性で、熟年（50歳代）と考えられる。

(B)

頭蓋骨：頭蓋骨は頑丈で、眼窩上隆起はかなり発達しており、鼻根部のくびれは大きい。乳様突起は大きく厚い。外後頭隆起は大きく発達しヘリチカのIV型である。頭蓋冠の骨は厚い。矢状縫合はかなり癒合していて、癒合はほとんどみえない。下顎骨のオトガイ隆起は顕著である。角前切痕はない。下顎体はさほど厚くない。

歯：上顎歯は残っていない。歯槽は残っており、切歯部から小臼歯にかけては全歯が植立していたと考えられる。下顎歯も、歯槽の状態からすべての歯が植立していたようで、抜歯はないと考えられる。上顎の左第1大白歯の歯槽は退縮しており、生前に脱落していた可能性がある。これに対応した下顎の左第1大白歯は歯冠内部が浸食されて隣接面からの「齶蝕」の可能性を示している。下顎は大白歯がおもに残っている。咬耗は進んでおり、咬耗度は下顎の第1および第2大白歯がモルナーの4で、小臼歯は5である。咬耗パターンからは30~40歳ぐらいの壮年と考えられる。

四肢骨：太さからみてこの個体のもと考えられる四肢骨が、SH1156Aの四肢骨の左側に位置している。脛骨に肩甲骨が乗っていたりしており、自然状態ではなく攪乱を受けている。多分SH1156Aの埋葬時に片側に寄せ集められたものであろう。

大腿骨は太く頑丈で、粗線はよく発達して内側唇・外側唇の区別が明瞭な、幅をもった稜状になっている。骨幹上部は扁平で、骨体上断面示数（扁平示数）は72.2と超扁平大腿骨である。転子下窩は明瞭ではないが殿筋隆起はやはり出している。この大腿骨は両端がないが現生の骨の長さを用いて最大長をかなり強引であるが推定すると420mmとなる。これから推定身長を求めると158.6cmで、縄文時代人の男性の平均値とほぼ等しくなる。

性別・年齢：この個体はがっしりした男性で、壮年（30~40歳）であろう。

(C)

頭蓋骨：この頭蓋骨は頭蓋骨Bと並んで出土している。乳様突起は小さく薄い。外後頭隆起は大きくなくヘリチカのIII型程度である。矢状縫合は癒合を始めている。冠状縫合や矢状縫合の内板はまだ消失していない。頭蓋冠の骨は薄めである。下顎骨はしゃしゃである。オトガイ隆起はやや発達しているが、角前切痕はない。下顎体高は低い。顎舌骨筋線は鈍である。

歯：下顎の大白歯が残っている。切歯部は破損しているが歯根は残っており、少なくとも下顎歯に抜歯はない。咬耗は進んでおり、咬耗度は第1大白歯がモルナーの6、第2大白歯が5、第3大白歯が4である。咬耗パターンから推測される年齢は、50歳代と考えられる。左第2大白歯と第3大白歯の間の歯槽が吸収されているし、大白歯列の頰側の歯槽上縁はリッピング状の稜を形成している。加齢変化と考えられる。

性別・年齢：この個体は女性で、50歳代の熟年と考えられる。

SH1157 (図版22、図107、PL25)

上半身だけが出土している。骨は認められるが後述のように幼い個体なので取り上げはできなかった。左右の上肢は伸展していたようである。顔面は正面やや下向きと考えられる。歯だけが観察可能である。歯：乳歯列であったと考えられる。出土した永久歯は歯根が完成しておらず歯槽内にあったものである。乳歯はすべて植立していたと考えられる。咬耗は第2乳臼歯でごくわずかで萌出後間もないと考えられる。第2乳臼歯の萌出は3歳ぐらいである。また、下顎の切歯の歯根はもとより、歯冠も歯頸部付近は未完成であるので、この個体は3歳前後と考えられる。エナメル質減形成はみられない。

第1大臼歯が現代人の女性の平均値よりも小さく、また、縄文時代人の女性の平均値よりも小さめであるので、この個体は女性の可能性が高い。

性別・年齢：この個体は3歳位の幼児で、性別は不明だが歯の大きさからは女性の可能性が考えられる。

SH1158 (図版20・22、図108、PL26)

ほぼ全身の骨格が出土している。左右の上肢は肘をかなり曲げ、手を胸骨付近に置いている。左手は胸から右肩に向けており、右手は手首を曲げ、胸から左腰の方を向いている。下肢は左右の膝を強く曲げ、左右をあわせて立てている。顔面はやや左下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：後頭部が失われている。眼窩から上方は比較的良好に残っている。眼窩上縁は鋭く、眼窩上隆起は発達していない。鼻根部はさほど窪んでいない。乳様突起は小さくて薄い。耳道上縁は発達していない。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。前頭縫合遺残がみられる（メトビズム；写真11-1・2）。矢状縫合・冠状縫合の内板は癒合しておらず、外板も癒合していない。

下顎骨の下顎体高は低い。内側の顎舌骨筋線は鋭い。オトガイ隆起は顕著である。

歯：下顎大臼歯の一部以外は残っていない。下顎の切歯部は歯槽がやせており、生前に脱落していた可能性がある（写真11-3）。右小臼歯も歯槽が閉鎖している。これらが抜歯である可能性も考えられるが、なんらかの外傷によるものか、あるいは下顎体高が低くなっており高齢の加齢変化とも考えられるので年齢による自然脱落なのかは、歯槽の状態が悪く判定できない。左第1・第2大臼歯は咬耗度がモルナーの5である。咬耗パターンからは45～55歳ぐらいの熟年と判定される。

線状あるいは帯状のエナメル質減形成は認められないが、下顎第2大臼歯の歯冠中央付近にエナメル質の荒れが観察される。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は直角に近く、女性的である。大腿骨はあまり太くない。転子下窩がやや溝状になっており、外側の股筋隆起がやや出し出している。粗線はあまり発達せず幅のない稜状である。脛骨は土圧による変形をやや受けているが、断面はヘリチカのIV型に近い。腓骨は細く、きゃしゃである。性別・年齢：この個体は熟年の女性であろう。顔面は縄文時代人の特徴をよく示している。

SH1160 (図版20・22、図109、PL26)

ほぼ全身の骨格を認めることはできるが保存状態は非常に悪く、ほとんどの骨は取り上げることができなかった。右上肢は伸展して、手を腰の横に置いている。左上肢は肘を伸展しているが回内しておらず、橈骨が本来の位置からずれて下腹部に置かれている。他に攪乱を受けた様子はないので理解に苦しむ。埋葬後しばらく経過してからの軽度の攪乱と考えるのが妥当であろう。左下肢は膝を強く屈曲し右に倒している。一方、右下肢はあまり曲げていないので、当然、膝や足は左右でかなり離れている。ただし、右足

は下腿から遠位がない。攪乱でこうなった可能性も残されると考える。顔面はわずかに左を向いている。仰臥屈葬である。

獣骨が混入していた。

頭蓋骨：眼窩上隆起は発達していないようである。乳様突起は小さく薄い。耳道上稜はわずかに盛り上がっており、そのため乳突上溝が認められる。外後頭隆起はほとんど発達せずヘリチカのII型である。

頭蓋冠の骨は薄い。矢状縫合の外板はほとんど癒合しているし、内板は単純な直線状の縫合がわずかに認められるにすぎない。ラムダ縫合は比較的明瞭である。下顎骨は左右の大臼歯部がおもに残っている。体高は低く、きゃしゃである。第2小臼歯の歯槽内面にごく軽度の下顎隆起が認められる。

歯：下顎の左第1・第2大臼歯および右の第1大臼歯が残っている。これらは咬耗が強く、咬耗度はモルナーの6である。かなり高齢と考えられ、咬耗パターンからは、60歳以上の老年であろうと推測される。第3大臼歯の歯槽が閉じているが、生前に脱落していたものであろう。

エナメル質減形成については咬耗が進んでいて観察できない。

四肢骨：左右の大腸骨の一部が残っている。大腸骨は細くきゃしゃである。粗線は内側脛骨・外側脛骨が明瞭で幅のある稜状だが、あまり発達していない。大腸骨の推定最大長は380mmであるので、これから計算される推定身長は148.8cmである。この値は縄文時代女性の身長の前平均値とほぼ同じである。

性別・年齢：この個体は老年（60歳以上）の女性と考えられる。

SH1161 (図版20・22、図108)

ほぼ全身が出土したと思われるが、二つに分けて取り上げられているので上肢骨は破損している。右 upper 肢はやや肘を曲げ、手を下腹部に置いている。左上肢は肘を伸ばし手を左腰の横に置いている。下肢は膝を強く曲げ、股関節をほぼ90度曲げて左に倒している。顔面はやや左下方を向いている。仰臥屈葬である。頭蓋骨：頭蓋骨は前頭から頭蓋後部にかけての方向の土圧を受けており、顔面上部がつぶれている。眼窩上隆起は発達し、鼻根部はくびれている。上顎骨に犬窩はみられない。乳様突起は小さく薄い。乳突稜はよく発達し乳突上溝は顕著である。乳突切痕は幅が広い。左の外耳道に骨椗様の構造がみられる。外後頭隆起は大きくヘリチカのIV型で、小突起が多い加齢変化がみられる。矢状縫合後部の外板はほとんど閉鎖している。

下顎骨は大きいさがほど頑丈ではない。左下顎角部がやや外側に張り出しており、角前切痕様になっているが、右はこのような突起はなく本来は角前切痕はなかったと考えられる。オトガイ隆起はやや発達している。外側結節はないが縁隆起がみられる。

歯：下顎の切歯部が破損している。全歯植立していたので抜歯はない。咬耗が顕著である。下顎の大臼歯は頰側に傾いて歯根にまで達する特殊な咬耗で、とくに左側で著しい(写真3-2・2')。咬耗度は大臼歯はモルナーの5~8で、小臼歯は5~6である。下顎の切歯も5である。この咬耗パターンからはかなりの高齢(老年)と考えられる。左側の磨耗は上顎ではとくに特殊ではなく咬合面は平坦である。

エナメル質減形成がみられる。咬耗が著しい歯では観察できないが、犬歯にやや強めの線状の減形成と普通の線状の減形成がみられ、これらの形成時期は強いほうが6歳前後、弱いほうがそれよりやや前である。また、第3大臼歯には帯状の減形成が観察され、これの形成時期は12歳前後である。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。また耳状面も高くないし、耳状面前溝もみられない。大腸骨は太く頑丈である(写真12-1~3)。殿筋粗面がよく発達し上部は第3軀子状になっている。粗線はよく発達し、幅は狭いが後方にはり出している。軀子下窩は浅いが殿筋隆起は厚めに外側へはり出している。小軀子が発達しているので骨頭下方の内側面が凹面になっている。骨体上断面示数(扁平

示数)は86.7で扁平ではない。脛骨は太く非常に頑丈である。鉛直線の発達が顕著で中央付近では鋭い稜となっており、断面はヘリチカのIV型である。距骨の踵脛面は内下面が前方に延長した森本のB型である。

大腸骨の最大長から計算される推定身長は、161.1cm、脛骨最大長からは164.4cmで、両者の平均値は162.8cmである。縄文時代男性の平均値(159.11cm)よりやや高い。

性別・年齢：この個体は老年の男性である。咬耗が顕著で、偏磨耗もみられる。

SH1162 (図版20・22、図110、PL26)

ほぼ全身の骨格が認められる。保存状態は比較的よい。右上肢は肘を軽く曲げ手を回内して右下腹部に置いている。左上肢は肘をやや強く曲げ、手を胸のほぼ中央部に置いている。下肢は膝を強く曲げ、足は股関節に近く位置している。左右の膝をあわせてやや左寄りに立てている。顔面は右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：左半分は完全に失われているが、右半分の保存状態はよい(写真13)。土圧をやや受けている。

眼窩上隆起はやや発達しているが、鼻根部のくびれはさほど大きくない。上顎骨に犬歯高はみられない。乳様突起は小さいがやや厚みがある。耳道上稜がよく発達しているし、乳突稜も顕著なので乳突上溝も明瞭である。後頭発が比較的よく発達しており、外後頭隆起もやや発達してヘリチカのIV型である。冠状縫合は隅頭に近い部分が癒合しており、矢状縫合・ラムダ縫合は大きな鋸歯状の縫合がまだ認められる。内板も癒合していない。

下顎骨は大きいがさほど頑丈ではない。犬歯から第2大臼歯にかけての歯槽内側面に発達した下顎隆起がみられる。角前切痕はない。筋突起の内側の三角隆起は顕著である。

歯：全歯が植立している。上顎の中切歯がウインギング(捻転の一種)している。咬耗は進んでおり、ほとんどの歯がモルナーの5である。咬耗パターンから推測される年齢は50歳代と考えられる。エナメル質減形成がみられる。上顎中切歯や犬歯などのものは2歳前後、第2大臼歯のものは6歳前後、第3大臼歯のものは12～13歳ぐらいに形成されたと考えられる。咬合様式は切端咬合である。

体幹・四肢骨：腰椎体の上縁と下縁に顕著なりッピングがみられる。これらは老齢変化と考えられており、鈴木(1988)の分類によるタイプI、グレードIII(図195)である。上肢骨はやや太く頑丈で、三角筋粗面は比較的発達している。尺骨は骨間縁が非常に大きく発達している。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。また、耳状面も高くなり、耳状面前溝もみられない。大腸骨はやや太く頑丈で、粗線が発達して幅をもった稜状に張り出しており、いわゆる付け柱状の大腸骨である。小転子がよく発達している。転子下窩はさほど顕著ではなく、殿筋隆起も目立たない。骨体上断面示数(扁平示数)は83.7で下限に近い扁平大腸骨である。脛骨は太く頑丈で、中央付近の断面は鉛直線が明瞭であるため、ヘリチカのIV型である。骨間縁も鋭い。栄養孔位の断面は64.1で中脛骨でありいわゆる扁平脛骨の範ちゅうには入らない。腓骨はさほど太くない。

性別・年齢：この個体は、熟年(50歳代)の男性である。

SH1163 (図版20・22、図111、PL26)

比較的小さな土坑に2体分が混在して出土している。ともに自然位ではない。四肢骨が非常に頑丈な個体ときゃしゃな個体とである。頑丈な個体をA、きゃしゃなそれをBとする。これらは頑丈な男性と15歳前後の子供である(後述)。

埋葬状況：頑丈型Aの大腸骨と脛骨は骨盤を中心に左右がそれぞれベアになっている。右の脛骨は向きが

前向きで他のものとは違っているが、全体としてはやや足を開いた下向きになっている。

もっとも下層（すなわち墓坑の底部）にあるのは頑丈型Aの体幹の骨である。椎骨と肋骨の関係は自然位であるから本来この位置にあったと考えられる。この上部に同じ頑丈型Aの四肢骨、その上にきゃしゃ型Bの四肢骨と頭蓋骨がのっている。きゃしゃ型Bの下肢骨は左下腿を上にしてあぐらをかいた状態で、下腿の脛骨と腓骨との関係は自然位である。しかし、Bの上肢骨はこれらの下にあるし、頭蓋骨の位置もこれとは対応しない。

この墓坑が形成された過程としていくつかの可能性が考えられるが、最初に埋葬されていた頑丈な男性の頭部が他の墓坑を造るときに削られて掘り出されてしまい、その頭蓋骨を埋め直したことも考えられる。しかし、それに対しては四肢骨が自然位に並んでいるのはおかし。体幹と下肢とのまとまりが自然位でないにもかかわらずそれぞれの部分は本来の関節の関係を保っていることを考えると、骨がまだつながっていた状態、すなわち死んだ直後になんらかの原因で切断されて埋葬された可能性が高い。この上に埋葬されているきゃしゃ型Bも同時になんらかの原因で切断されて下肢と頭蓋とを別に埋葬されたものと考えられる。周囲に攪乱するような墓坑が見つかっていないことがこの考えの妥当性を支持していると思う。ただし、Bの体幹の骨がない点が疑問ではある。

(A)

頭蓋骨：前のやや左上から下方に向かって土圧を受けて変形している。眼窩上隆起はかなり発達していたことが残存部からうかがえる。鼻根部は大きくくびれている。鼻骨はいわゆるつまみ鼻になっている。犬歯窩はない。乳様突起は大きく厚い。耳道上縁は顕著に発達しているため乳突上溝が認められる。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。後頭骨は鱗部にいくつかの大きな縫合骨が認められる（左側しか確認できない）。

下顎骨は頑丈である。小臼歯から第1大臼歯にかけての歯槽の内側に軽度の下顎隆起がみられる。オトガイ隆起は顕著で、小さな外側結節も認められる。

歯：ほぼ全歯がそろっている。上顎側切歯に斜切痕がみられる。上顎の左右の犬歯の歯槽ソケットが小さく、少なくとも永久歯の犬歯歯根が入るに十分なスペースではない。したがって、犬歯の小さな歯根が残っていたか、あるいは乳犬歯が残っていたかなどの可能性が考えられる。もし前者であるとすれば外傷か抜歯の可能性もある。

軽度のものだが多くのエナメル質減形成がみられる。もっとも顕著なものは第2大臼歯のものでその形成時期は6歳前後と考えられる。他にも2歳前後、11歳前後に形成されたものなどがみられる。

咬耗はあまり進んでいない。咬耗度はほとんどがモルナーの3である。咬耗パターンから推測される年齢は25歳前後の青年である。

四肢骨：鎖骨は太く頑丈で、韌帯の圧痕も顕著である。上腕骨は太いがあまり長くはない。三角筋粗面は大きく発達している（写真14）。尺骨および橈骨も太い。骨盤は大きく、耳状面前溝はみられない。大坐骨切痕は鋭角で男性的である。大腸骨は非常に大きく頑丈である。粗線はよく発達し内側唇・外側唇が明瞭に区別できる。転子下窩は溝状で、外側の殿筋隆起はやや出している。骨体上断面示数（扁平示数）は、左右平均値が76.6で扁平大腸骨である。脛骨は太く頑丈で、骨間線はよく発達し鋭い。後面の鉛直線はよく発達し、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。扁平脛骨ではない。

大腸骨および上腕骨の最大長から計算される推定身長は、167.5cmと160.0cmで、平均値は163.8cmである。この値は縄文時代男性の平均値よりもかなり大きい。

性別・年齢：この個体は青年の男性と考えられる。北村人の中ではもっとも身長が高い部類に属する。

(B)

頭蓋骨：頭蓋骨は左を下にしている。乳様突起は基部しかないが大きく厚い。頭蓋冠の骨は薄い。縫合はいずれも鋸歯状が顕著で比較的若い個体である。耳道上稜は目立たない。下顎骨は下顎枝のみが取り上げられたが、筋突起内側の三角隆起は大きく発達している。

歯：上顎の切歯が消失しているが、歯槽のソケットはあるので抜歯はない。上・下顎ともに第3大臼歯が未萌出で、歯槽内に埋伏している。咬耗はごく少ない。モルナーの2～3である。萌出型から考えると18歳よりやや前と判定される。やはりエナメル質減形成が認められる。6歳前後に形成されたものが比較的顕著である。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が+4型である。歯は大きい。

四肢骨：これらの四肢骨はあまり残りがよくない。前述のように若い個体であるのが原因と考えられる。

上腕骨はあまり太くない。大腿骨は粗線があまり発達せず、狭い稜状である。ただし転子下窩は明瞭な溝状で約10cmの長さを持ち、その外側の殿筋隆起は大きく張り出している。脛骨の断面はヘリチカのII型に近い。大腿骨の推定最大長から計算される身長は161.1cmである。

性別・年齢：この個体は、18歳よりやや前である。性別は女性と考えられる。

SH1165 (図版20・22、図108、PL27)

左右の膝、および左右の足先を除いてすべて出土しているが保存状態は悪い。左右の上肢は肘を強く屈曲し、それぞれの側の肩の部分に手を置いている。下肢はやはり膝を強く曲げ、左右をあわせてほぼ正面に立てている。顔面はほぼ正面を向いている。襷褌で、仰臥屈葬である。(展示用資料)

頭蓋骨：土圧、および被っていた土器片で押されて、額の方から頭蓋底に向かってやや圧平されている。

眼窩上隆起は比較的発達しており、鼻根部の陥没も中等度である。顔高は低い。乳様突起はやや大きく、耳道上稜は発達しており前上乳突結節は大きい。頭蓋冠の骨は厚い。頬骨は頑丈である。矢状縫合はほとんど認められないのでかなりの程度癒合しているものと考えられる。ラムダ縫合は一部が認められる。

下顎骨は下顎体が厚く頑丈である。オトガイ隆起および外側結節も顕著である。外側隆起も顕著である。角前切痕はない。犬歯部より遠心の歯槽が退縮している。かなり早期に大臼歯が失われた可能性がある(後述)。切歯部は破損して抜歯の有無は不明であるが、大臼歯部の下顎体の高さと比較するとかなりの高さがあり、上顎骨の切歯部歯槽もほとんど退縮していないので抜歯はなかったと判断される。外後頭隆起の全体は確認できないが男性的である。

歯：上顎の左の2本の小臼歯が著しい磨耗を示しているにもかかわらず、上顎の大臼歯は歯冠が $\frac{1}{2}$ 程度しか咬耗していない。下顎骨の歯槽が退縮していることから判断して、左の大臼歯はかなり若い時期に脱落した可能性がある。右の第1大臼歯は少なくとも歯根の部分が確認できる。右の下顎小臼歯も歯槽の退縮から判断して生前に失われた可能性がある。

四肢骨：上腕骨は太く頑丈である。左上腕骨の外側稜も発達している。橈骨も比較的太く、尺骨の骨間縁は発達している。寛骨の残りはよい。大坐骨切痕は鋭角で男性的であり、耳状面前溝はまったく認められない。大腿骨は太く頑丈で、粗線は発達し、粗線の高さはさほどではないが中央付近ではいわゆる付け柱状になっている。殿筋隆起は認められない。脛骨はさほど扁平ではない。後面の鉛直線は発達しておらず、ヘリチカの断面の分類ではI型とII型の中間形である。

左橈骨最大長は248mm、上腕骨最大長は推定で292mmでこれから計算される推定身長はそれぞれ164.4cm、154.7cmであり、両者の差は大きい。平均値は159.6cmである。この値は縄文時代男性の平均身長とほとんど同じである。

性別・年齢：この個体は男性で、若くはない成人である。

SH1166 (図版20・22・図112)

下肢骨および上肢骨の一部が失われているが全身のかんりの骨格が認められる。左右の上肢は肘を伸展している。また大腿骨も股関節ではさほど屈曲していない。顔面は焼失して向きは不明である。体幹の骨は正面向きであるから仰臥である。この個体は小さく、座高は約35cmである。出産後間もない時の比座高の大きさからこの個体の身長を推定すると約50cmで、大きくても60cmよりは小さいであろう。1960年度の厚生省の統計では女児で生後1～2ヶ月の身長は54.19cm、4～5ヶ月で61.76cmであるから、縄文時代人の身長の低さを考慮に入れても、この個体の年齢は出産後3ヶ月内ぐらいに死亡した個体と考えられる。性別は不明である。

性別・年齢：この個体は出産後まもなく死亡した乳児(生後3ヶ月以内)で、性別は不明である。

SH1168 (図版22)

左右の大腸骨片と脛骨片とが出土している。大腸骨は非常に細くきゃしゃである。粗線の発達は悪い。しかし、転子下窩が深い溝状(溝の長さ約10cm)に発達しており、したがって殿筋隆起は大きくはり出した印象になる(写真15-2)。骨体上横径は右大腸骨で25.7mm、骨体上矢状径は19.1mmで、骨体上断面示数(扁平示数)は74.3と超扁平大腸骨である。脛骨も細くきゃしゃで、断面はへりチカのIV型に近い。これらの骨は、一部分しか残っていないがそれぞれの骨が非常に細いので、まだ若い個体である可能性が考えられる。若い段階ですでに殿筋隆起が発達している点が今後の検討課題(若い段階からみられるのが一般的か否か)である。性別は不明である。

SH1172₁ (図版20・22・図113、PL27)

左の前腕および下腿の他は全身が出土している。右上肢は肘を伸展し、回内した手を腰の横に置いている。手首にはイノシシの犬歯で作られた飾りをつけている。左の前腕は消失しているが、他の部分に手や前腕の骨がないので多分伸展していたと考えられる。下肢は膝をやや屈曲させていたようであるが詳細は不明である。胸部にやはりイノシシの犬歯でできた飾りを置いている。(展示用資料)

頭蓋骨：土圧を受けず、ほぼ本来の形で出土している珍しい例である。眼窩上隆起は発達している。したがって鼻根部のくびれも著しい。鼻は縄文時代人に特有のいわゆるつまみ鼻である。乳様突起は大きく厚い。外後頭隆起はみえないがそこに向かう後頭骨の部分は発達しており外後頭隆起の発達を示唆している。骨は厚い。下顎骨の角前切痕はごく軽度で認められる。オトガイ隆起は発達しているが外側結節はほとんど認められない。

歯：下顎歯は歯冠が破損しているが前歯はすべて残っている。しかし、上顎の右切歯部は歯槽が退縮しており側切歯が生前に脱落していた可能性がある。ただしこれが抜歯によるものかどうかは不明である。

四肢骨：鎖骨はたくて頑丈である。上腕骨も太いが各筋の附着部の発達状態は表面が荒れていてわからない。寛骨は大坐骨切痕が鋭角で男性的であり、耳状面前溝も認められない。大腿骨は非常にたく頑丈であるが、粗線はさほど発達しているようにはみえない。骨幹の上部は扁平ではない。

性別・年齢：この個体は男性であるが、年齢は成人という以外に手掛かりになるようなものはない。

SH1172₂ (図版26・図114)

SH1172₁の下半身の下層に、ほぼ直交するように埋葬されている。下肢は大腸骨の近位部を除いて墓坑

の切り合いで欠けている。上半身は胸部の下方から上はない。ほぼ骨盤だけの出土である。妊娠歴を示す寛骨の耳状面前溝は右はごく浅く、左は不明である。大坐骨切痕は90度に近く女性的である。骨盤の向きから考えて仰臥であろうがそれ以外は不明である。

性別・年齢：この個体は寛骨の形態から女性と推測される。成人であろうが詳しいことは不明である。

SH1174 (図版20・21、図115)

全身の骨格が認められるが、保存状態は非常に悪く取り上げられた骨格は四肢骨が主である。右上肢は肘を軽く曲げ、手を回内して腰に置いている。左上肢も同様で手を左腰に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、左に倒している。顔面はやや右の下を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：下顎骨以外の顔面の残りは悪い。乳様突起は細い。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨は項丈である。小臼歯部の歯槽内側には軽度の下顎隆起がみられる。オトガイ隆起は普通である。内側の顎舌筋線は明瞭である。下顎体はあまり高くない。

歯：下顎骨に抜歯はない。上顎の大臼歯は類舌的に長い。下顎の第2大臼歯の咬頭と溝の型はY5型、第3大臼歯がX4型である。咬耗はあまり進んでおらず、小臼歯、第2・第3大臼歯はモルナーの3～4である。咬耗パターンからは30～40歳の壮年であると推測される。

エナメル質減形成は比較的顕著である。とくに第2・第3大臼歯に顕著なものがみられ、これらが形成されたのはそれぞれ6歳前後、12歳前後であると考えられる。

四肢骨：上腕骨の太さは普通である。三角筋粗面がやや発達している。大腿骨はあまり太くない。粗線は狭い稜状である。殿筋隆起はやや張り出しているが、扁平大腿骨ではない(扁平示数：91.6)。脛骨はあまり太くない。骨間縁は鋭く発達している。後面の鉛直線が発達し中央付近の断面はヘリチカのIV型である。腓骨は種状腓骨で、幅は広いが厚みはない。四肢骨の太さは女性的である。

性別・年齢：この個体は壮年(30～40歳)の女性と考えられる。

SH1178 (図版20・21、図116、PL28)

全身骨格が残っている。上肢は肘を強く曲げ、手首をそれぞれの側の肩の近くに置き、手は胸の位置で左右を組んでいる。下肢も膝を強く曲げて、左右の膝をあわせてやや右に倒している。顔は正面を向いている。仰臥屈葬である。(展示用資料)

頭蓋骨：額から頭蓋底部に向ってやや土圧を受けている。眼窩上部は破損している。上顎骨はやや歯槽性の突顎状態を呈している。乳様突起は大きいが厚みはさほどではない。耳道上稜はやや発達し、前上乳突結節も大きい。矢状縫合はラムダ付近は認められるがそれより前方は外板が癒合しているようである。ラムダ縫合は認められる。下顎骨に角前切痕はない。オトガイ隆起は発達しているが、外側結節はない。

歯：上下顎とも全歯そろって植立していて、抜歯はない。咬耗状態は一部の歯で確認できるだけである。大歯から小臼歯にかけてはモルナーの6程度で、外側から観察できる大臼歯は歯冠の高さの半分以上が咬耗しておりモルナーの6以上であろうと推測されるので、この個体は歯から判断するとかなりの高齢—50歳代の熟年ということになる。

この個体にもエナメル質減形成が認められるが比較的軽度である。上顎の第1大臼歯、第2大臼歯および下顎第3大臼歯の頬側面に線状のものがある。それ以外の歯では咬耗が激しく確認できない。第1大臼歯のものは2歳前後に形成されたものであり、第2大臼歯は6歳前後、さらに第3大臼歯のそれは11歳前後に形成されたものである。

四肢骨：鎖骨は細くてきゃしゃである。上腕骨は三角筋粗面がやや発達しているものの全体にきゃしゃで

ある。左右の寛骨は比較的良好に残っている。耳状面前溝らしいものが左の寛骨に認められ、それぞれの大坐骨切痕は90度に近く女性的である。大腿骨はさほど太くない。粗線はさほど発達していないが、殿筋隆起はよく発達しているため上部外側の骨幹は扁平に突出し、転子下窩が溝状に下方に伸びている。上部骨幹は扁平である。脛骨の扁平性はさほど高くない。

性別・年齢：この個体は50歳代の熟年の女性であると考えられる。

SH1177 (図版20・22、図115)

SH1179の墓坑によって上半身が一部切れ込まれている。保存状態は悪く、頭蓋骨と一部の長骨しか残っていない。右上肢は肘をやや曲げ、手を下腹部に置いている。左は上腕骨しか残っていないので位置は不明である。下肢は膝を強く曲げ、股関節も強く屈曲して左右の膝をそろえて右に倒している。膝が胸の前にある。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：左前頭部から底部に向け土圧を受けている。乳様突起は小さく薄い。耳道上稜はわずかに発達しているが乳突上溝はみられない。外後頭隆起はヘリチカのII型程度である。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨もややつぶされている。小臼歯部歯槽内側に軽度の下顎隆起がみられる。下顎はさほど厚くなく、下顎体高もさほど高くない。角前切痕はない。オトガイ隆起はよく発達している。頭蓋骨は女性的な印象を受ける。

歯：下顎歯はすべてそろっており抜歯はない。上顎は第2切歯までしか確認できないが、それまでの範囲で抜歯はない。咬合面は咬耗して平坦になっているが、咬耗パターンから推測される年齢は20歳～30歳ぐらいの青年であると考えられる。残っているエナメル質に減形成は認められない。

四肢骨：肩甲骨はきゃしゃで外縁線は薄い。上腕骨は遠位が残っているが非常に細くきゃしゃである。大腿骨はさほど太くなく、粗線も幅のない稜状である。上部の転子下窩は浅い溝状で、殿筋隆起はやや張り出している。転子間線は顕著である。骨体上断面示数(扁平示数)は78.6で扁平大腿骨である。脛骨は細くきゃしゃで、扁平ではない。後面の鉛直線はよく発達しており、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。四肢骨は女性的である。大腿骨の最大長から計算される推定身長は156.2cmで、縄文時代の女性の平均値(148.05cm)より大きく、男性の平均値に近い。

性別・年齢：この個体は青年(25歳前後)の女性で、しかも大きめである。

SH1178 (図版20・22、図117)

頭蓋骨と下肢骨片が出土している。顔面は右を向いている。下肢骨は位置から推定すると股関節を強く曲げ膝も強く屈曲し右に倒しており、側臥屈葬の可能性が高い。

頭蓋骨：顔面は右を向いている。眼窩上隆起は普通である。外後頭隆起はあまり発達せずヘリチカのII型である。乳様突起は残っている基部から考えてさほど大きくなかったであろう。頭蓋冠の骨の厚さも普通である。頬骨弓は細くきゃしゃである。下顎骨は頑丈ではない。下顎骨体は薄く、角前切痕はない。

歯：下顎歯のみが残っている。残存する歯や歯槽のソケットから少なくとも右側の歯はすべて植立していたと推測される。咬耗は進んでおり、モルナーの5～6である。咬耗パターンから推測される年齢は50歳代の熟年である。

四肢骨：大腿骨はあまり太くなく、むしろきゃしゃである。粗線は幅のない稜状である。骨体上断面示数は79.1で扁平大腿骨である。脛骨はやはり細くきゃしゃである。遠位部しか出ていないが、後面の形態から考えて、鉛直線はあまり発達していないようである。

性別・年齢：この個体は熟年(50歳代)の女性と考えられる。

SH1179 (図版20・22、図115)

ほぼ全身骨格が認められる。右上肢は肘を伸展し、前腕を回内して手を下腹部に置いている。左上肢も肘を伸展し、前腕を回内して手をやはり下腹部に置いている。右下肢は膝を強く曲げ、股関節も強く屈曲して右に倒している。左下肢は膝を強く曲げ、股関節はやや曲げて右に倒している。右膝は胸の前、一方、左膝は右の足首付近にある。顔面は左を向いているが体幹は正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋骨は保存状態が非常に悪く細片化している。外後頭隆起はほとんど目立たずヘリチカのII型である。乳様突起は小さく薄い。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨は体高が低くしゃしゃである。下顎の右前歯部に抜歯はない。右の大臼歯部は歯槽が閉鎖しており、生前に脱落したものと考えられる。

歯：下顎の右大臼歯が脱落している。また破片の残った下顎小臼歯の咬耗はかなり進んでいるようなので高齢の可能性はある。

四肢骨：鎖骨はしゃしゃである。大腸骨は細くしゃしゃである。粗線はあまり発達せず狭い稜状である。腕筋隆起はわずかに張り出している程度である。胫骨の骨間線はよく発達し鋭い。後面の鉛直線は中央付近まで達している。したがって、中央付近の断面はヘリチカのIV型である。

長骨の最大長から計算される推定身長は、上腕骨・橈骨ともに148.9cmであった。この値は縄文時代女性の平均値(148.05cm)とほぼ同じである。

性別・年齢：この個体は女性と考えられ、年齢は高齢の可能性が高いが詳細は不明である。

SH1180 (図版20・22、図117、PL28)

数体分が同時に埋葬されている。頭蓋骨は4個体分が認められる。頭蓋骨を仮にA、B、C、Dとする。これらと四肢骨との関係は不明である。四肢骨は5体分が出土している。(展示用資料)

頭蓋骨A：上下方向に土圧を受けている。眼窩上隆起はよく発達している。頭蓋冠の骨は厚い。矢状縫合は癒合してほとんど認められないので比較的高齢の可能性はある。この頭蓋骨に対応すると考えられる下顎骨がやや離れた位置から出土している。下顎体に対して下顎枝は比較的立っている。植立する歯の咬耗はモルナーの5～6とかなり進んでいる。男性であろう。年齢は相当の高齢である。

頭蓋骨B：頭蓋冠の骨は比較的厚めである。やはり上下方向の土圧を受けている。顔面に他の個体の大腸骨や胫骨・腓骨がのっている。乳様突起は大きい。右上顎歯はすべて萌出しているので18歳以上であることはまちがいない。耳道上稜はよく発達している。

頭蓋骨C：頭蓋冠の骨は薄い。頭蓋骨の上に他の個体のものと考えられる長骨や頭蓋骨(D)が乗っている。観察は難しい。

頭蓋骨D：この頭蓋骨は破損し、やや散乱しているが、位置としてはもっとも上層にある。この個体のものと考えられる下顎骨には、一部の歯が植立している。かなり咬耗は進んでいる。

四肢骨：各四肢骨は完全にばらばらではない。例えば胫骨と腓骨がセットになっていたり、橈骨と尺骨がセットになっていることもある。あるいは大腸骨と下腸骨が明らかにセットになっているものもある。全体では、まずほぼ1体分の埋葬時の状態に近いかまりを認めることができる。比較的あとから埋葬されたものであろうと考えられるもので、大きな石の近く(北西方向)にあり女性と考えられるものである。ただし、この個体の頭蓋骨は不明である。別の墓坑を掘ったときに失われたものであろう。最後に埋葬されたものでないことはこの胸の部分に別の個体の胫骨と腓骨のセットが乗っていることでもわかるし、上半身と下半身との位置関係にやや無理があることでもわかる。この個体を含めると少なくとも5体分の骨格が混ざり合っていることになる。

埋葬の順序：大きな石に近い北西部分にある上述の女性が比較的あとに埋葬されたものである。女性の埋

葬姿勢は膝を強く屈曲させた屈葬である。それ以前に埋葬されていたものでもさほど古くない時期に埋葬されたものがあり、それらの四肢骨がセットになっている。それらは埋葬されてから完全に骨になる前に掘り出されて再度埋葬されたものである。頭蓋骨の性別、および長骨の頭丈さから考えて、この墓坑には少なくとも男性3体、女性2体が埋葬されていたと考えられる。

それぞれの骨格の間に土などが介在していたことを考えると、ある時期にいくつかの墓坑のものがまとめられた可能性も考えられ、それも骨の出土状態からもとの埋葬時期がさほど違わないものが含まれていたと推測される。北條ら〔1958〕によれば、土の中の遺体は3～4年で軟部組織がなくなり、靭帯や軟骨が付着するだけになるという。さらに、完全に白骨化するのは7～8年であるという。土壌や埋葬時期の違いなどがあるもののこれに従えば、少なくとも埋葬されてから7～8年以内には再埋葬されていたことになる。

性別・年齢：この墓坑には少なくとも5体分の骨格が混ざり合って埋葬されていた。男性3体、女性2体と考えられ、いずれも成人の可能性が高いが詳細は不明である。

SH1181 (図版20・22、図118、PL29)

ほぼ全身の骨格が出土している。骨の保存状態は悪い。右上肢は肘を伸展して回内し、腰の横に手を置いている。一方、左上肢は伸展し自然位(手のひらを上)にして手を左腰の下に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げ右に倒している。顔面はやや左を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：骨の状態は悪いが形は残っている。前頭部から頭蓋底にかけての方向に土圧を受けている。眼窩上隆起は発達せずそのため鼻根部はあまりくびれていない。外後頭隆起はあまり発達せずヘリチカのII型程度である。ただし軽度の後頭稜が認められる。乳様突起はあまり大きくなく、かつ薄い。矢状縫合は内板・外板ともに閉鎖しているので比較的高齢であろう。下顎骨は下顎体が比較的厚い。

歯：ほとんど残っていない。上顎の左切歯部、および下顎の左右の前歯部は破損している。大臼歯のうち生前に脱落していたと考えられるのは、上顎の左右の第2・第3大臼歯、下顎の右第2および左の第1大臼歯である。これらの植立していた部分では歯槽が退縮している。上顎の左大臼歯と第1小臼歯の咬耗はモルナーの6であるので、かなり咬耗が進んでいる高齢の個体と考えられる。したがって、大臼歯の脱落は老齢のためのものと考えるのが適当であろう。

咬耗パターンは不明だが個々の歯の咬耗状態と先の縫合の状態とから考えて、この個体は60歳前後にはなっているものと考えられる。

四肢骨：上腕骨は土圧でつぶれている。細くてきゃしゃである。寛骨の大坐骨切痕は鈍角に近く土圧の影響を受けていることを割り引いても女性的である。大腸骨は細めである。粗線はあまり発達せず狭い稜状である。外側は失われている部分が多く股筋隆起等は不明である。

長骨の最大長から計算される推定身長は、上腕骨150.0cm、橈骨150.2cm、大腸骨147.8cm、脛骨150.6cmでこれらの平均値は149.7cmと縄文時代の女性の身長に近い。

性別・年齢：この個体は老年(60歳前後)の女性と考えられる。

SH1182 (図版22、図119)

2体分が含まれている。ほぼ全身の出土している方をA、部分骨をBとする。

(A)

保存状態は非常に悪く、頭蓋骨、長骨などの一部だけが確認できる。どれも土圧で圧平されている。左右の右上肢は肘を伸展しているが、手の位置は不明である。下肢は左右ともに膝を強く曲げ、さらに股関節

も強く曲げて膝を右に倒している。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：ほとんど残っていないが下顎骨の残りは比較的よい。下顎体は頤丈ではない。角前切痕はなさそうである。

歯：左側の歯が残っている。咬耗は上下顎の第1大臼歯、下顎の第2大臼歯がモルナーの5、上顎第2および第3大臼歯が3、下顎の第3大臼歯が4である。下顎大臼歯は小さい。咬耗パターンでは40~50歳ぐらいの熟年である。この個体にはエナメル質減形成はみられない。

四肢骨：上腕骨は圧平されている。発掘時の推定最大長は254cmで、これから計算される推定身長は144.1cmである。この値は縄文時代女性の平均値よりやや小さい。大腸骨の太さは普通であるが、表面が荒れていて詳細な観察はできない。

性別・年齢：この個体は熟年の女性の可能性が高い。

(B)

一部の骨と下顎骨が出土している。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：下顎骨はまだ若い個体のものであるがやや頤丈である。角前切痕はない。

歯：第2大臼歯が歯槽内にあり、第2乳臼歯が植立している混合歯列である。永久歯の第1小臼歯もまだ歯槽内にみられるので、この個体は9歳前後と考えられる。下顎の第1大臼歯の咬頭と溝の型は+5型で、第6咬頭が認められる。上下顎の第1大臼歯の咬耗はやや進んでいるが、咬耗度はモルナーの3である。エナメル質減形成が歯槽内の下顎第1小臼歯にみられる。歯頸線に近いもので、5~6歳に形成されたものであろう。

別個体のもと考えられる下顎の第3大臼歯が混入している。

性別・年齢：この個体の性別は不明だが、混合歯列で年齢は9歳前後の少年と考えられる。

SH1183 (図版22)

全身の骨格があるが保存状態が悪く、断片的にしかり取り上げられなかった。埋葬姿勢は不明である。

頭蓋骨：土圧を受けて前後方向につぶれており、骨は細片化している。後頭部は観察可能である。外後頭隆起は小さくへりちかのII型程度である。乳様突起も小さく薄い。口蓋の正中部には口蓋隆起がみられる。

歯：上顎歯は、歯冠が破損しているものもあるがすべて植立している。少なくとも上顎に抜歯はない。下顎歯は右の大臼歯列のみが残っている。咬耗は比較的進んでおり、上顎切歯と大歯の咬耗度はモルナーの3、小臼歯は4、上顎と下顎の大臼歯は5である。近心の歯に比して大臼歯の磨耗が著しい。ただし、磨耗の仕方は水平であり特殊ではない。咬耗パターンから推測される年齢は50歳代と考えられる。

第1大臼歯に強いエナメル質減形成が認められる。形成期は2歳前後であろう。また大歯や小臼歯にみられるものは、5歳前後に形成されたものであろう。

四肢骨：寛骨は左の腸骨部が出土している。耳状面の下部は破損している。耳状面後溝はみられない。かなり小形の寛骨である。左大腸骨の遠位部がみられるがやはりきゃしゃである。

性別・年齢：この個体は、耳状面後溝はみられないものの、骨格のきゃしゃさや小ささから判断して、女性の可能性が高く、年齢は50歳代の熟年であろう。

SH1184 (図版26、図120、PL29)

全身が出土している。右上肢は伸展している。前腕を回内して手は左右の大腸骨の間に挟んでいる。左上肢は肘を90度近く曲げて右上肢の上に手を置いている。下肢は膝関節、股関節ともに90度近く曲げて左

右の膝を寄せて右に倒している。左手は左右の膝の近くにあることになる。顔面を右に向けている。側臥屈葬である。(展示用資料)

頭蓋骨：体幹を右に向けている。顔面も右に向けているので、横方向に土圧を受けて頭蓋はかなりつぶれている。眼窩上部は一部しか残っていないが眼窩上隆起はかなり発達していたようである。外後頭隆起はよく発達しプロカのV型である。乳様突起は確認できない。頭蓋冠の骨はさほど厚くない。縫合は冠状縫合、矢状縫合ともにまだ癒合していない状態でありさほど高齢ではない。下顎骨は頑丈である。角前切痕はない。オトガイ隆起、外側結節ともに発達している。下顎枝は広い。下顎枝角は大きくない。歯：前歯部を含めて、確認できる部位はすべて歯が残っているので抜歯はない。咬耗はあまり進んでいない。咬合面を確認できる唯一の歯である下顎の第2小臼歯は咬耗度がモルナーの4であり、さほど高齢とは思えない。破損しておりエナメル質減形成の有無は不明である。

体幹・四肢骨：椎骨には加齢変化のリップリング(骨棘)が認められる。鎖骨は太く頑丈である。上腕骨は太く頑丈で三角筋粗面が発達している。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。耳状面前溝は認められない。大腿骨は太く頑丈で粗線も発達しており、いわゆる付け柱状大腿骨である。骨幹上部外側の殿筋隆起の発達は軽度である。下腿骨は土圧で圧平されて詳細な形態は不明である。

性別・年齢：この個体は成人の男性である。年齢は、やや強引ながら咬耗パターンをあてはめて考えると40~45歳ぐらいの熟年であろう。

SH1185 (図版26、図120、PL29)

ほぼ全身骨格がみられるが、手足の先や体幹骨などが消失している。残っている四肢骨も、後述のように若い個体であるので保存状態は非常に悪い。右上肢は前腕が消失している。左上肢は肘を伸展しているようである。下肢は膝を強く曲げ、右に倒している。顔面は右を向いている。仰臥屈葬である。四肢骨は取り上げ不能であった。

頭蓋骨：頭頂部から上顎骨までは土圧でつぶされており、後頭部の一部しか残っていない。骨は非常に薄い。大泉門は閉鎖している。下顎骨は比較的残りがよいが特記することはない。

歯：乳歯列である。下顎の第1大臼歯は歯槽内にみえりし、切歯部には舌側に導出孔が認められる。永久歯はそれぞれが形成過程にある。乳歯にはエナメル質減形成はみられない。ただし、乳歯の第1および第2乳臼歯の頬側面にエナメル質の荒れが認められる。母体を通してのなんらかのストレスと考えられ、当時の生活環境の厳しさを推測させる。取り上げられた永久歯にはすべてエナメル質減形成がある。上顎の大歯のものは歯冠の咬頭頂に近く3歳前後に形成されたものである。第1大臼歯のものは、2歳前後に形成されたものであろう。乳切歯にも象牙質が露出するほどの咬耗はない。あまり粗なものは食べていなかった可能性がある。誕生してから大事にされ、軟らかいものを食べさせられたほど体が弱かったのかもしれない。

歯の萌出状態、永久歯の形成状態から判断してこの個体は3~4歳ぐらいと思われる。

四肢骨：四肢骨は取り上げられないものがほとんどで観察はできなかった。

頭蓋骨の頭頂部から仙骨の上面までの長さが419mmである。仙骨の長さを約100mmとして座高と考えると、推定座高は519cmで、厚生省のデータ(1973;木村1979による)にあてはめると2歳ぐらいに相当する。成長率の違いや成人での身長の違いなどを考慮すると先の年齢鑑定はおおむね妥当であろう。

性別・年齢：この個体は3~4歳ぐらいの幼児である。性別は不明である。

SH1186 (図版22、図121)

一体分であろうが、保存状態が非常に悪く、頭蓋骨の一部と下肢骨だけが観察可能である。右上肢は肘をほぼ直角に曲げ、手を左側へ伸ばしている。上腕骨は体幹骨の上に乗っていることになる。左上肢はわずかに肘を曲げ、手を下方に伸展している。下肢は左右ともに膝を強く曲げ左に倒している。股関節はほぼ直角に曲げている。顔面は左を向いているし、脊柱の位置から考えて側臥屈葬である。

頭蓋骨：右半分は失われている。眼窩上隆起はあまり発達していないので鼻根部のくびれは顕著ではない。

乳様突起はやや大きめで厚い。耳道上稜（前上乳突結節）は顕著で、乳突上溝も明瞭に凹んでいる。外後頭隆起はよく発達しヘリチカのV型である。下顎骨はあまり頑丈ではない。前下歯槽窩は明瞭である。上外側隆起も認められる。大臼歯部の歯槽が退縮している。小臼歯部の歯槽部内側に軽度の下顎隆起がみられる。

歯：下顎の大臼歯（左第1、右第1・第2大臼歯）が生前に脱落している（写真11-4・5）。右切歯部は歯槽の上縁は破損しているがやや下方の歯槽の幅も狭い。退縮しているようにもみられるが老齢で歯槽のソケットが浅かった可能性の方が高いだろう。犬歯は左右ともに植立していた。したがって、先の右中切歯の脱落は、抜歯によるものではない可能性が高い。上顎左の第1大臼歯の咬耗が他の歯と比べて進んでいないので、咬合する下顎の第1大臼歯は他の大臼歯よりも早く脱落したと思われる。といっても咬耗がモルナーの5まで進んでいるので30歳前後での脱落であろう。また、下顎左小臼歯の頰側に著しい歯石の沈着が認められる。左大臼歯の頰側にも歯石が認められる。咬耗パターンから推測される年齢は50歳代後半の熟年と考えられる。

四肢骨：大腿骨は細い。粗線は幅のない稜状である。殿筋隆起はごくわずかである。胫骨はあまり頑丈そうではない。土圧で圧平されていることを加味すると中央付近の断面はヘリチカのII型である。

大腿骨から計算される推定身長は150.7cmで、胫骨の最大長にもとづく推定身長は151.6cmである。両者の平均値は151.2cmである。この値は縄文時代の男性と女性の平均値の間に位置するが女性の方に近い。

性別・年齢：この個体は50歳代後半の熟年の女性と考えられる。

SH1187 (図版22)

2体分が混在している。1体分は頭蓋骨だけである。上半身のある方をA、頭蓋骨だけのものをBとする。Bの頭蓋骨は攪乱を受けて破損している。

(A)

右上肢骨は肘をやや外方にだしている。肘を強く曲げ前腕を肩の方にあげている。左上肢では、前腕の骨はほとんどないが手の指骨が肩付近にあるので、肘を強く曲げていたと思われる。下半身はない。仰臥である。

頭蓋骨：前後方向、横方向の土圧を受けて原形をとどめていない。眼窩上隆起は発達していない。犬歯窩はない。外後頭隆起はあまり発達していないヘリチカのII型である。乳様突起はあまり大きくなく薄い。下顎骨の角前切痕はない。下顎体は低く、厚みはあまりない。内側の顎舌骨筋線は鈍である。筋突起の内側の内突起稜は発達していない。

歯：下顎歯は左右の第1および第2大臼歯しか残っていないが、切歯部の歯槽ソケットはあるので抜歯はない。下顎の第2小臼歯の歯槽ソケットはこの歯が捻転していたことを示している。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が第6咬頭のあるY5型、第2大臼歯が+5型である。下顎の第3大臼歯は萌出していない。先天的な欠損であると考えられる。上顎は第3大臼歯も植立している。咬耗は進んで

おらず、咬耗度はモルナーの2～3である。咬耗パターンから推測される年齢は20～25歳ぐらいの青年と考えられる。

エナメル質減形成が多くの歯に観察される。上顎切歯のものは2歳前後、第2大臼歯のものは6歳前後、第3大臼歯のものは12歳前後に形成されたと考えられる。いずれにせよかなり多くの回数なのんらかのストレスを受けていると考えられ、この時代の環境の厳しさを推測させる。

四肢骨：鎖骨は細くしゃしゃである。上腕骨は太くないが三角筋粗面はやや発達している。

性別・年齢：この個体は青年（20～25歳）の女性と考えられる。

(B)

歯が残っている。大きさから考えて女性の可能性が高い。

歯：咬耗パターンから推測される年齢は、40～45歳ぐらいの熟年である。

SH1188 (図版20・22、図122)

全身が出土しているが保存状態は非常に悪い。右上肢は肘をほぼ直角に曲げ、手を胸の中央付近に置いている。左上肢は上腕骨をやや外方に開いているが、前腕の位置は不明である。下肢は膝を強く曲げ、股関節をほぼ90度曲げて左に倒している。顔面はやや左を向いている。仰臥屈伸である。

頭蓋骨：土圧で変形しており原形をとどめていない。外後頭隆起はヘリチカのIII型で、後頭隆起がやや発達している。乳様突起はあまり大きくなく、薄い。耳道上稜はあまり発達していない。下顎骨の歯槽は退縮が著しい(写真6-3)。角前切痕が認められる。オトガイ隆起は発達している。

歯：歯は残っていない。上顎歯については不明である。下顎骨の歯槽は右切歯部に3つのソケットがみられ、左大臼歯部に第2大臼歯と考えられる歯根が残っている以外は植立していたとは思われない。生前に残っていた歯は合計4本である。切歯部の歯槽ソケットも浅く、ここに植立していた切歯は硬いものを噛めなかったであろう。切歯部と犬歯部に歯があったと考えられることから、脱落したのは抜歯によるものではなく老齢によるものであろう。

四肢骨：寛骨は小さい。大坐骨切痕は鈍角に近く、女性的である。妊娠歴を示す耳状面前溝がみられる。大腿骨は細い。転子下窩が溝状になっており、殿筋隆起はよく発達して外側に張り出している。粗線は発達し幅のある稜状になっている。骨体上断面示数(扁平示数)は81.9で扁平大腿骨である。脛骨の後面の鉛直線はあまり発達していないようで、中央付近まで達していない。したがって中央付近の断面はヘリチカのIV型の変形で、後面は丸い。

性別・年齢：この個体は多くの歯が脱落していることなどから考えると、詳細は不明だが高齢の女性と考えられる。

SH1189 (図版22、図123、PL29)

全身骨格が認められるが、土圧を受けて変形している骨が多い。右上肢は肘を強く曲げ、手を右肩付近に置いている。左上肢も肘をかなり曲げているが、手は胸に置いている。下肢は膝を強く曲げて右に倒しており、股関節もかなり強く曲げている。顔面は右を向いている。寝た状態で、仰臥屈伸である。

頭蓋骨：髪が割れて頭蓋骨も土圧を受けている。眼窩上隆起は比較的発達している。鼻根部はくびれており、いわゆるつまみ鼻である。後頭隆起はやや発達しており、外後頭隆起はヘリチカのIV型である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。ラムダ縫合・矢状縫合はほとんど閉鎖しているので高齢の可能性はある。下顎骨はあまり頑丈ではない。オトガイ隆起はわずかである。角前切痕はない。小臼歯から第1大臼歯

にかけての歯槽部内側に軽度の下顎隆起が認められる。

歯：ほとんど残っていない。上顎前歯部の歯槽は破損している。下顎の切歯から犬歯部には歯に対応した歯槽のソケットがみられるので抜歯はない。下顎の右第3大臼歯は生前に脱落している。右の大臼歯は上下顎ともに偏磨耗しており、下顎の磨耗は頰側では歯根にまで達している。上顎の左第1大臼歯は咬耗度がモルナーの5であるが、右の第2大臼歯は6、下顎の右第1大臼歯は7である。

下顎の左第1大臼歯は頰側と近心の一部の歯冠が認められるが、歯冠がほとんど残っていないほどの咬耗を示している。一方、上顎の左大臼歯は下顎歯の咬耗に対応するほどには咬耗していないので、下顎のこの部分の偏磨耗は咬耗によってすり減ったのではない。また、上顎左第3大臼歯らしい歯が出土しているが、この歯はまったく咬耗していない。この個体の年齢を考えれば萌出していなかった、すなわち埋伏歯であった可能性が考えられる。いずれにせよ、下顎の左第2あるいは第3大臼歯はかなり早期に脱落していたと考えられる。咬耗パターンから推測される年齢は50歳代である。

第1大臼歯にエナメル質減形成が認められる。形成された時期は2歳前後であろう。

四肢骨：上腕骨はやや太めである。橈骨や尺骨はさほど頑丈ではない。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。下股骨はすべて土圧でつぶれている。大腿骨は太く頑丈である。粗線は非常に発達し、幅の広い稜状にはり出し、いわゆる付け柱状の大腸骨である。殿筋隆起はやや張り出している。脛骨も太く頑丈である。鉛直線は後面の中央付近まで明瞭である。断面はヘリチカのIV型に近い。

長骨の最大長から計算される推定身長は脛骨で162.4cmである。この値は縄文時代の男性の平均値よりやや大きめである。

性別・年齢：この個体は男性で、50歳代の熟年と考えられる。

SH1190 (図版26、図124)

頭蓋骨はない。下股骨は比較的良好に残っている。左上肢は強く曲げて、手を左肩に置いている。右上肢は不明である。左右の下肢は膝を強く曲げ、右に倒している。股関節をかなり屈曲させているので膝は腹部に近くなっている。仰臥屈葬と推測される。

四肢骨：上腕骨は、細ききゃしゃである。三角筋粗面も発達していない。寛骨は大坐骨切痕が直角に近く、さらに妊娠歴があることを示す耳状面前溝がみられ耳状面も高いのでこの個体は女性と考えられる。大腿骨は、やはり細ききゃしゃである(写真12-4・5)。粗線は比較的発達していて数mmの幅のある稜状で、いわゆる付け柱状大腸骨といってよい。骨体上部外側の殿筋隆起はやや発達している。骨体上断面示数は77.9で扁平大腸骨である。脛骨も細く、中央付近の断面はヘリチカのII型に近い。鉛直線は明瞭だが中央付近までは達していないようである。

大腿骨の最大長は、遠位端の欠けた右大腿骨と、遠位半のある左大腿骨の2本の大腿骨から推測して410mm程度であり、これから計算される身長は156.2cmである。この値は縄文時代人の男性と女性の平均値の間の値であり、どちらかといえば男性に近い。

性別・年齢：この個体は妊娠歴のある成人の女性である。

SH1191 (図版26、図125)

発掘時はほぼ全身が出土していたが、移送中に梱包材のウレタンが破損して多くが失われた。骨の保存状態は非常に悪い。右上肢は肘をかなり強く曲げ、手を右胸の上部に置いている。左手はやはり強く肘を曲げて手を左肩付近に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げて左に倒している。顔面はわずかに左を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：左上方向からの土圧を受けて細片化している。乳様突起は小さく薄い。耳道上縁はわずかに認められる。乳突切痕は浅い。頭蓋冠の骨は非常に薄い。外後頭隆起はほとんど認められず、ヘリチカのI型である。中硬膜動脈溝の縁は鈍である。口蓋部が出土しているが臼歯部の歯槽は退縮し、切歯部も含めて全体に小さい。矢状縫合は内板・外板が単純化しているがまだ閉鎖はしていない。下顎骨はきしゃである。角前切痕はない。

歯：歯は失われており、左の第1あるいは第2小臼歯の歯根が1本認められるだけで他はない。生前にすでにほとんど上顎歯がない状態であったと推測される。下顎骨は大臼歯部と右切歯部の一部が観察可能だがいずれも植立した歯はなかったと考えられる。このことはかなりの高齢であったことを予感させる。北村人骨の中でもっとも多くの歯を失っていた個体である。

四肢骨：尺骨の近位部は非常にきしゃである。その他は不明である。

性別・年齢：この個体はかなり高齢（老年）の女性である。歯はほとんど脱落している。

SH1192 (図版26、図126)

上半身が出土しているが骨の保存状態は非常に悪い。左右の上肢は肘を伸展し、手をそれぞれの腰の横に置いている。右前腕は回内している。下肢は不明である。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥である。頭蓋骨：土圧で前後方向につぶれている。外後頭隆起は発達せず、ヘリチカのII型である。乳様突起は厚いが小さい。頭蓋冠の骨は薄い。ラムダ縫合の内板はほとんど閉鎖しており、外板も部分的に癒合しているので高齢であることを予感させる。女性的な頭蓋骨である。

歯：ほとんどが破片であり、残っている歯の咬耗度はすべてモルナーの5である。咬耗パターンから推測すると50～60歳の熟年の可能性が高い。強いエナメル質減形成がみられる。小臼歯の歯頸部に近い帯状の減形成は6歳前後に形成されたと考えられ、また第3大臼歯のやはり歯頸部に近い帯状のものは12歳前後に形成されたものであろう。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は鈍角に近く女性的である。寛骨臼の最大径は52.1mmである。他は不明である。性別・年齢：この個体は熟年（50歳代）の女性である可能性が高い。

SH1193 (図版26、図126、PL29)

子供の骨格である。上肢は左右ともに伸展し腰の横に置いている。どちらも前腕を回内して手のひらを下にしている。足は強く屈曲し、膝を左に倒している。顔面はやや左を向いている。左の寛骨部にイノシシの大歯の筋りが置かれている。（展示用資料）

頭蓋骨：上下方向（頭頂から頭蓋底方向）に土圧を受けて顔面はつぶれている。詳細は不明である。

歯：下顎の第2大臼歯が萌出中であるから12歳前であろう。この歯にエナメル質減形成が認められる。歯冠のほぼ中央であり、これが形成されたのは6歳前後と考えられる。上顎の中切歯は近遠心径が9.0mmと大きい。

四肢骨：骨端はいずれも未化骨である。この個体の下肢を伸展し、頭蓋を起こした自然位を想定して身長を推定すると、大きめにみても約103cmとなる。

性別・年齢：この個体は12歳前後の少年である。性別は不明である。

SH1195 (図版21、図127)

2体分である。最初に掘り込まれた墓坑をA、あとから掘られた墓坑をBとする。

(A)

下半身と左上半身が失われている。右上肢は肘を伸展し、前腕を回内して手を腰の横に置いている。体幹は正面を向いている。頭蓋骨は下顎骨だけの出土であるが、攪乱を受けているので顔面の向きは不明である。

頭蓋骨：下顎骨は頤丈である。角前切歯はない。下顎角部が外側にはり出しており咬筋の発達がよかったことを想像させる。オトガイ隆起は発達しており縁隆起とそれに続く外側結節も認められる。下顎の第1小臼歯から第1大臼歯の歯槽部内側に下顎隆起がみられる。

歯：上顎歯は左右の中切歯と右の側切歯、および左の第2小臼歯が出土している。下顎は左の3本の大臼歯が出土している。切歯部は破損しており中切歯は確認できないが、歯槽のソケットから、少なくとも左側は側切歯までは植立していたことが確認できる。また上顎の切歯は植立していたので、抜歯はないと考えて差しつかえなからう。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯が+5型、第2・第3大臼歯がX4型である。咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はモルナーの3~4である。咬耗パターンから推測される年齢は30~35歳の壮年である。上顎の切歯の磨耗は缺状咬合と考えられ、唇側から舌側にかけて著しく傾いている。下顎左第3大臼歯の舌側面に齶蝕が認められる。歯髓腔にまで達するC3の齶蝕である。

エナメル質減形成が認められ、上顎の切歯のものは2~3歳にかけて、また第3大臼歯のものは12歳前後にそれぞれ形成されたものであろう。

四肢骨：肩甲骨の関節窩は広い。鎖骨は太く頤丈である。上腕骨は遠位半が出土しているがやはり太くて頤丈である。三角筋粗面は大きく張り出していたと考えられ、外側縁も顕著である。尺骨は太いが骨間縁はあまり発達していない。寛骨の寛骨臼と坐骨結節との間の距離は短い。

脛骨最大長から計算すると推定身長は162.1cmで、縄文時代男性の平均値よりやや大きい。

性別・年齢：この個体は壮年(30~35歳)の男性であらう。

(B)

あとから掘り込まれた墓坑のものと考えられているもので、右大腿骨だけが出土している。

四肢骨：右大腿骨で、骨頭はない。粗線は発達しており幅のある稜状で、軽度の付け柱状大腿骨である。転子下窩は顕著ではない。殿筋隆起の張り出しはわずかである。骨体上断面示数(扁平示数)は74.5で超扁平大腿骨に属する。推定大腿骨最大長(420mm)から計算された身長は158.6cmで、縄文時代の男性の平均値とほぼ同じである。

性別・年齢：この個体は男性と考えられるが、年齢は成人という以外は不明である。ただし、これ以外の骨が出土していないし、この大腿骨が先のSH1195Aの大腿骨であってもならおかしくないの、むしろ攪乱された際に位置が動かされたもので、同一個体と考えたほうがよいであらう。

SH1198 (図版26)

頭蓋骨と、右の肩甲骨、上腕骨のごく一部だけが出土している。頭蓋骨は細片化しているが保存状態はよい。埋葬されたままの状態出土したのではなく、攪乱を受けて再葬された墓坑である。

頭蓋骨：眼窩上隆起では眉弓が比較的発達している。前頭部は傾斜している。外後頭隆起はあまり発達せずヘリチカのII型である。乳様突起は大きめであり、側頭線に続く耳道上稜はやや発達している。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。冠状縫合は単純化しているがラムダ縫合は鋸歯状の縫合がまだ明瞭である。下顎骨はさほど頤丈ではない。大歯から第1大臼歯にかけての歯槽部内側に下顎隆起がみられる。オトガイ隆起はよく発達しており外側結節も認められる。

歯：下顎の大臼歯部の歯槽が退縮しており、左の第1大臼歯は生前に脱落している。歯槽にソケットのみ

られるものでもソケットは浅い。左の第2・第3および右の第1・第2大臼歯の歯槽ソケットは歯根の長さの根尖側1/3程度までの深さしかなく、退縮度は第3度(P3)である。右第3大臼歯は第2度(P2)である。下顎の右犬歯部から小白歯にかけて歯石が沈着しているが、大臼歯にも及んでいた可能性があり、歯槽膿漏と考えられる。上顎の右第3大臼歯部も歯槽が退縮している。

咬耗は進んでおり、咬耗度は歯冠の半分以上が磨耗したモルナーの5~6である。咬耗パターンから推測される年齢は、50歳代後半の熟年である。軽度のエナメル質減形成が第2大臼歯に認められる。おもに歯冠歯頸部近くのエナメル質の荒れであり、線状のものは軽度で6歳前後に形成されたものである。他の歯は咬耗が激しく観察不能である。

性別・年齢：この個体は熟年(50歳後半)であると推測され、性別は男性であろう。

SH1199 (図版22、図128、PL30)

ほぼ全身骨格が出土しているが保存状態は非常に悪く、骨の表面の観察は一部を除いて難しい。右上肢は肘を伸展して、前腕は回内せずに腰の横に置いている。左上肢は肘を強く曲げ、手を左肩付近に置いている。下肢は左右ともに膝を強く曲げて左に倒している。顔面はやや左を向いている。仰臥屈葬である。頭蓋骨：外後頭隆起はあまり発達せずヘリチカのII型程度である。乳様突起はあまり大きくない。耳道上稜はやや発達している。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。矢状縫合の後半は癒合しているが、ラムダ縫合はまだ明瞭である。内面の中硬膜動脈溝の縁は鈍である。下顎骨は退縮しており小さい。右下顎体後半から下顎枝にかけてが失われている。オトガイ隆起や縁隆起はやや発達しているが、歯槽の退縮で発達しているようにみえるのかもしれない。

歯：歯は残っていない。左大臼歯はすべて脱落して歯槽は退縮している。また左右の切歯から犬歯部はすべて脱落しており、左側で植立していたと思われる歯は2本の小白歯だけである。歯槽のソケットはどれも浅く十分に咀嚼に耐えるとは思えない。第1小白歯のソケットも本来の先が細いものではなく病的である。切歯が脱落しているのは抜歯ではなく老齢のためであろう。歯槽膿漏であったと考えられる。

四肢骨：上腕骨は細くきゃしゃである。橈骨・尺骨も細い。大腿骨はやはり細く、粗線は狭い稜状である。殿筋隆起は外側にやや張り出している。骨体上断面示数(扁平示数)は80.2で扁平大腿骨に属する。

長骨の最大長から計算される推定身長は上腕骨144.4cm、橈骨144.1cm、尺骨144.7cm、大腿骨143.1cm、胫骨148.8cmで、これらの平均は144.0cmであり、この値は縄文時代女性の身長の平均値(148.05cm)よりもかなり小さめである。

性別・年齢：この個体はかなり高齢の女性である。

SH1200 (図版26、図129、PL30)

部分的に失われている。右上肢は肘を強く曲げ、手を右肩付近に置いている。左上肢は肘を伸ばし、手を腰の横に置いている。下肢は本来の位置から動かされているようである。顔面はほぼ正面のやや下方をむいている。仰臥である。

頭蓋骨：前頭部が土圧で頭蓋腔内へ陥入している。犬歯窩はみられない。外後頭隆起はほとんどなく、ヘリチカのI型である。頭蓋冠の骨は薄い。乳様突起は基部だけが残っているが小さくて薄い。耳道上稜はほとんど目立たない。ラムダ縫合や矢状縫合は外板の縫合が癒合しておらず、まだ明瞭である。下顎骨は頤丈ではない。オトガイ隆起はやや発達している。下顎角部がやや突出しているので角前切痕が認められる。

歯：上顎の大白歯は左の第3大白歯だけが植立しており他は生前に脱落している。歯槽が著しく退縮しているので第3大白歯も根尖だけが骨に植わっているに過ぎない。下顎では第3大白歯が生前に脱落している。抜歯はない。咬耗は進んでおり、下顎の大白歯の咬耗度は第1・第2大白歯ともにモルナーの5である。上顎の第3大白歯は咬耗度が3であまり咬耗していないが、これは咬合する下顎の第3大白歯が早期に脱落したことによると考えられる。咬耗パターンから推測される年齢は50～55歳の熟年である。

軽度のエナメル質減形成がみられる。犬歯のものは線状で、5～6歳に形成されたものであり、第3大白歯のものは12歳前後に形成されたものであろう。

四肢骨：寛骨は耳状面の前の耳状面前溝がみられず、耳状面も高くない。また大坐骨切痕はやや鋭角的で男性的である。大腿骨は太くなくむしろ細めである。粗線もあまり発達しておらず幅のない稜状である。殿筋隆起はわずかに張り出しているにすぎない。

上腕骨最大長からの推定身長は151.4cm、胫骨からは158.7cmである。両者の平均値は155.1cmである。この値は縄文時代男性と女性の平均値の中間でやや男性に近い。

性別・年齢：この個体は大坐骨切痕はやや男性的だがその他の形態はすべて女性的である。したがって、熟年の女性と考えられる。

SH1201 (図版26、図130、PL30)

下顎の右第1小臼歯、左第2小臼歯、および歯の破片、上腕骨の近位端だけが出土している。

歯：小臼歯はやや咬耗しており、どちらもモルナーの4である。大きさは現代日本人の平均値と比較するとやや小さめである。

四肢骨：上腕骨の近位端が出土している。土圧で圧平されており詳細は不明である。

性別・年齢：この個体は咬耗から判断して成人であろうが詳細は不明である。性別も不明である。

SH1202 (図版25、図131、PL30)

2体以上の骨を集めた墓坑である。それぞれの骨は自然位にはない。頭蓋骨が2つある。完形に近い方をA、頭蓋冠だけの方をBとする。それ以外の四肢骨は別に記載する。

(A)

頭蓋骨：顔面と頭蓋底部は破損している。外後頭隆起はやや発達し、ヘリチカのIV型である。後頭隆起もやや発達している。頭蓋冠の骨は薄い。矢状縫合、ラムダ縫合は外板・内板ともに癒合していない。後頭骨に大きなインカ骨(図196)と、右ラムダ縫合部に小さな縫合骨がある。この頭蓋骨に植立していた上顎大白歯は下顎歯と正しく咬合するので、この墓坑から出土した下顎骨はこの個体と同一個体である。下顎骨は頤丈である(写真6-2・2')。下顎角部が発達し外側にやや張り出している。角前切痕はない。内側の顎舌骨筋線は鋭い。オトガイ隆起は明瞭で外側結節も認められるのでオトガイ三角が明瞭である。軽度の縁隆起が認められそれに続く後縁結節もある。

歯：下顎には大白歯が残っている。上顎は左第1大白歯だけが出土している。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯がY5型、第2大白歯が+5型、第3大白歯がX4型と+4型である。咬耗度はモルナーの4～3である。咬耗パターンから判断される年齢は25歳前後の青年である。

軽度のエナメル質減形成がみられる。下顎犬歯の歯頸線付近が荒れており、これは6歳前後に形成されたもの、また第3大白歯の軽度の線状の減形成は12歳前後に形成されたものであろう。

性別・年齢：この頭蓋骨の個体は青年(25歳前後)の男性である。

(B)

頭蓋骨：左側頭部から後頭部にかけてが残っている。外後頭隆起はほとんど認められずヘリチカのI型である。乳様突起は小さく耳道上稜も発達していない。頭蓋冠の骨は薄い。ラムダ縫合は認められるが成人には達している。歯は出土していない。

四肢骨：これらの四肢骨は同一個体のものであるかどうかは埋葬状況からは判定できないが、頭蓋骨との対応からみて2体のうちのどちらかものと考えるのが妥当であろう。左上腕骨はほぼ完形である。太くて頑丈である。(写真15-4)。三角筋粗面は発達している。骨幹の遠位外側縁はよく発達して稜状の狭い隆起が認められる。前面に曲がり込んだこの稜状の構造は下半部(長橈側手根伸筋の起始部)で著しい。外側縁の後面で外側上腕上方の上腕三頭筋の付着部に小さな結節が形成されている。内側の腕上突起とは反対側である。左橈骨近位半はあまり太くなく、骨間縁もさほど発達していないが、先の上腕骨と同一個体のもので考えて矛盾はない。

寛骨は左右ともに比較的良好に保存されている。この左右は同一個体のものである。大坐骨切痕は鋭角であり、耳状面は低い。また耳状面前溝はないので男性の骨格であろう。坐骨結節と寛骨臼とは10mmしか離れていない。左大腿骨は比較的太くて頑丈である。粗線はあまり発達しておらず狭い稜状である。転子下窩が溝状に発達しており、したがって殿筋隆起は外側に張り出している。骨体上断面示数(扁平示数)は73.5で超扁平大腿骨に属する。

長骨の最大長から計算される推定身長は上腕骨が151.4cm、大腿骨が154.7cmである。両者が同一個体かどうか推定身長だけでは明らかではないが、ともに男性的であることもうひとつの頭蓋骨が女性の可能性が高いことを考えあわせると、これらの四肢骨は同一個体の可能性が高いといえ、頭蓋骨ではAとのペアが考えられる。両者の身長は平均値は153.1cmで、縄文時代男性の平均値(159.11cm)よりかなり小さく、女性の平均値(148.05cm)にやや近い中間的な値である。

性別・年齢：この頭蓋骨は成人の女性のものである可能性が高い。

SH1203 (図版26)

下肢骨だけが出土している。ほとんどが土圧で細片化、あるいは扁平化している。埋葬姿勢は膝を強く曲げ、右に倒している。股関節も90度以上曲げている。

四肢骨：尺骨は非常に細くてきゃしゃである。大腿骨も細くてきゃしゃである。殿筋隆起が発達しており、著しく突出しているが加齢変化と考えられる。大腿骨頭も骨幹と癒合しているので少なくとも若い個体ではなかろう。とするとこのきゃしゃさはこの個体が若い個体であるというよりも、女性である可能性を示唆していることになる。

性別・年齢：この個体は女性であるが、年齢は成人であるという以外は不明である。

SH1204 (図版22, 図132)

右下肢の一部を除いてほぼ全身が出土している。骨の保存状態はさほどよくない。左右上肢は肘を伸展し、手をそれぞれの側の腰の横に置いている。前腕は回内していない。下肢は膝を強く曲げ、左右をあわせて立てている。顔面はわずかに左を向き、下方を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：上下方向の土圧を受けて頭蓋上半身はつぶれている。後頭隆起が発達しており、外後頭隆起はヘリチカのII型である。外後頭稜はやや発達している。乳様突起は大きく厚い。側頭縁に続く耳道上稜はよく発達しており、乳様突起との間の乳突溝も顕著である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。縫合の状態は不明である。

下顎骨は頑丈である。角前切痕はなく、下顎底が丸みを帯びたいわゆるロッカー・ジョーである。下

顎角部が外側にやや張り出して咬筋の発達を示している。下顎枝の幅は広い。オトガイ隆起は比較的発達している。外側結節もやや目立つ。

歯：上顎歯の一部が欠けているが、中切歯は直立しており、下顎の右の中・側切歯もあるので抜歯はなかったと考えられる。上顎の右第1大臼歯の歯槽ソケットが閉鎖しており、下顎の左第1大臼歯の歯槽ソケットが閉鎖しかかっている。下顎の大臼歯はそう遠くない時期に脱落したものであろう。下顎の大臼歯の舌側、および下顎切歯の唇側に歯石の沈着が認められる。下顎の右第1大臼歯の咬合面に径2mm程の小窩が開いている。齧蝕の可能性もある。齧蝕とすると歯髄腔に達していないC2の齧蝕程度である。咬合面は平坦化している。咬耗はほとんどがモルナーの4～5である。咬耗パターンから推測される年齢は40～45歳の熟年である。

エナメル質減形成が認められる。切歯や第1大臼歯にみられる線状のエナメル質減形成は2歳前後に形成されたものであり、第2大臼歯のものは6歳前後、第3大臼歯のものは12歳前後に形成されたと推測される。

四肢骨：寛骨は大きく、大坐骨切痕も鋭角的である。耳状面の前後の溝もみられないし、耳状面も低い。大腿骨は太く頑丈である。殿筋粗面はよく発達し稜状で、上部は小さいながら第三転子状になっている。転子下窩は溝状に発達し外側への殿筋隆起の張り出しは顕著である（写真15-3）。骨体上断面示数（扁平示数）は83.8で、扁平大腿骨である。粗線は発達し幅のある稜状だがいわゆる付け柱状ではない。性別・年齢：この個体は熟年（40～45歳）の男性であると考えられる。歯石の沈着が著しい個体である。

SH1205 (図版26)

下肢骨だけが出土している。それぞれの位置関係は自然位ではないが、脛骨と腓骨の組み合わせは自然状態のセットをなしている。したがってこの個体は埋葬後に攪乱を受けているが、埋葬後さほど時間がたっていない時期（骨だけになっていない時期、すなわち埋葬後7～8年以内）に攪乱を受けたと思われる。四肢骨：大腿骨は比較的太い。粗線は幅をもった稜状になっているが高くはない。骨体上断面示数（扁平示数）は82.9で扁平大腿骨に属する。転子下窩はあまり発達せず殿筋隆起もごくわずかである。脛骨はあまり太くはない。後面の鉛直線は中央までは達していない。中央付近の断面はヘリチカのIV型に近いが、後面はやや丸身を帯びている。腓骨の太さは普通である。性別・年齢：この個体の性別は不明である。年齢は成人であろうという以外わからない。

SH1206 (図版26、図133)

ほぼ全身の骨格が確認できるが、骨はもろい。右上肢は肘を伸展しているが前腕の遠位部はない。左上肢は肘をごく軽く曲げ、手を下腹部に置いている。下肢は膝を強く屈曲し、右へやや倒している。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：頭蓋骨は顔面が土圧で崩れている。眼窩上隆起はあまり発達していないようである。犬歯窩はない。乳様突起はやや長めだが小さく細い。耳道上稜はほとんど目立たない。大孔の後方の後頭稜はやや発達しているが、外後頭隆起は小さくヘリチカのII型程度である。頭蓋冠の骨は薄い。ラムダ縫合はまだ鋸歯状の縫合が認められるが、矢状縫合は癒合している部分がある。

下顎骨は比較的きゃしゃである。ごく軽度の角前切痕が認められる。下顎体高は低い。小臼歯から大臼歯にかけての歯槽の内側にやや発達した下顎隆起がみられる。筋突起の内突起稜は発達していない。オトガイ隆起は普通であり、外側結節は認められない。内側の顎舌骨筋線は鈍である。

歯：保存状態は悪い。上顎は右の第3大臼歯、および左の第2小臼歯、第2・第3大臼歯が生前に脱落し

ている。下顎歯は左の第3大臼歯が生前に脱落している。脱落した上顎歯の歯槽は狭い縁になっているのでかなり前の脱落である。咬合様式は縄文時代人に一般的な鉛子咬合である。咬耗が進んでおり、咬合していた第1大臼歯の咬耗度はモルナーの6であり、前歯も5～6である。咬耗パターンから50～55歳ぐらいの熟年と推測される。

エナメル質減形成が認められる。下顎の第1小臼歯と第2大臼歯で、これらは同じ頃のもので6歳前後に形成されたものと考えられる。

四肢骨：鎖骨や上腕骨は細くしゃしゃである。上腕骨の三角筋粗面はやや発達している。寛骨の大坐骨切痕は鋭角的であったと推測される。左側に妊娠歴を示す耳状面前溝が認められた。大腿骨は細い。殿筋粗面はよく発達し、数cm程の高まりとなっている。そのため転子下高は溝状となり殿筋隆起が張り出している。殿筋隆起は右の方が発達している。粗線は幅のある稜状で、付け柱状大腿骨である。骨体上断面示数(肩平示数)は右が90.7、左が84.8で左の方がやや扁平だが、どちらも扁平大腿骨とはいえない。脛骨は細くてしゃしゃであるが骨間縁は鋭い。後面の鉛直線が発達していて中央やや下まで明瞭である。中央付近の断面はヘリチカのIV型に近い。

長骨の最大長の推定値から計算されたこの個体の身長は上腕骨(左右平均)145.1cm、大腿骨145.3cm、脛骨146.2cmで、これらの平均値は145.5cmである。この値は縄文時代女性の平均値よりやや小さめである。

性別・年齢：この個体は50～55歳ぐらいの熟年の女性である。

SH1207 (図版25、図131)

上半身だけが出土している。右上肢はやや外方に上腕骨を張り出し、肘をほぼ直角に曲げ手を胸に置いている。左上腕骨も同様にやや外方に置いているが前腕は出土していない。下肢は不明である。顔面はほぼ右を向いている。仰臥である。

頭蓋骨：真横を向いている関係で横方向の土圧を受けている。顔面の保存は比較的よい。乳様突起は小さく薄い。耳道上稜はほとんど膨隆していない。頭蓋冠の骨は非常に薄い。外後頭隆起は不明である。一部残っている頭蓋の縫合は、鋸歯状が明瞭にみられるのでかなり若い個体であることを想像させる。前頭部は直立している。下顎骨はしゃしゃで体も低い。内側の顎舌骨筋線は明瞭ではない。

歯：破損している歯はあるが、上・下顎とも第2大臼歯までの全歯が植立していたので抜歯はない。下顎の切歯部が破損している。第3大臼歯は上下左右とも歯槽内に埋伏している若い個体である。咬耗は進んだものでも象牙質が小さく露出した状態(モルナーの3)であり、ほとんどは象牙質の露出していない(モルナーの2)状態である。第3大臼歯の形成状態や歯の萌出状態からは13～15歳ぐらいと思われる。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が+4型である。

エナメル質減形成は軽度のものが切歯や第2大臼歯にみられる。切歯のものは2歳前後に形成されたもの、第2大臼歯のものは6歳前後に形成されたものである。

四肢骨：肩甲骨は小さい。また、上腕骨は細くしゃしゃである。

性別・年齢：この個体は13～15歳ぐらいの子供と考えられる。この年齢にしては乳様突起が小さいこと、前頭部の直立状態から考えて、また歯の小ささから考えて女性の可能性が高い。

SH1208 (図版26、図134、PL30)

ほぼ全身の骨格が認められる。骨はもろい。右側にやや攪乱されたと考えられる変化がある。右上肢は体幹と平行に下へ伸ばしている。前腕は動いているらしく橈骨が骨盤の上に乗っている。左上肢は肘を伸

展し、手を左腕の横に置いている。左手首にイノシシの犬歯の飾りがある。左右の下肢は膝をやや曲げているが大腿を開いているので下肢全体で「O」型を作っており、左右の足を合わせている。右の第一肋骨が奇妙なことに右のわき腹に移動している。顔面はほぼ正面を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧で完全につぶれている。顔面の特徴は把握できない。後頭部はよく保存されている。外後頭隆起は大きく発達し、ヘリチカのV型である。乳突切痕も顕著である。乳様突起は基部の後半が残っていて大きかったことを推測させる。ラムダ縫合に小さな縫合骨がいくつかみられる。ラムダ縫合は未だ癒合していない。

下顎骨は大きく頑丈である。切歯部から第1大臼歯にかけての歯槽骨の内側に発達した下顎隆起がみられる。前下歯槽窩が大きい。角前切痕はない。

歯：上顎の前歯部が欠けているが残りは比較的よい。上顎の切歯も歯槽のソケットは確認できるので抜歯はないことが確認できる。右上顎大臼歯の遠心に円錐歯（臼後歯）がある。咬耗はあまり進んでおらず、咬耗度はモルナーの3～4である。上・下顎の大臼歯は、各大臼歯があまり変化なく咬耗している。切歯部の咬耗も進んでいないので比較的若いのではないかと考えられる。咬耗パターンから推測される年齢は30～40歳の壮年である。

エナメル質減形成がみられる。下顎の犬歯には数本の線状の減形成がみられ、これらは5～6歳にかけての間に形成されたものであろう。他に上顎第2大臼歯や切歯などにもみられる。

四肢骨：上腕骨は太くて頑丈であるし、尺骨も太い。寛骨の耳状面は低く、耳状面前溝も認められない。大坐骨切痕は鋭角である。大腿骨は非常に太く頑丈である。殿筋粗面はよく発達し、第3転子状になっている。転子下高は深くない。したがって殿筋隆起はやや外側にはり出しているだけである。骨体上断面示数（扁平示数）は右が80.1、左が76.5で扁平大腿骨に属している。粗線はよく発達しているが幅はあまり広くない。脛骨は太く頑丈であるが後面の鉛直線はさほど顕著ではない。後面のヒラメ筋線から続く凹みが顕著である。

長骨の最大長から計算される身長は上腕骨162.0cm、大腿骨160.4cm、脛骨161.4cmでこれらの平均値は161.3cmである。この値は縄文時代の男性の平均値よりやや大きめである。

性別・年齢：この個体は壮年（30～40歳）の男性である。頑丈な体つきであったと考えられる。

SH1211 (図版25、図135、PL31)

ほぼ全身が出土している。左右の上肢は肘を体の横におき前腕を強く屈曲させて、手を胸に置いている。下肢はやはり強く屈曲させ、下肢を体幹に近づけるように膝を上肢のそれぞれの側の肘の位置にまで曲げている。全体の形が楕円形のようになっており窮屈な埋葬姿勢である。

このような埋葬姿勢のものは他にみられない。（展示用資料）

頭蓋骨：顔面を正面に向けているが、前頭部が顔面までかぶさっているので破損している。眼窩上隆起は発達していたようである。乳様突起は大きく厚い。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨は頑丈である。角前切痕はない。下顎枝角は小さめである。

歯：右下顎の切歯から第1大臼歯にかけての歯が観察できる。抜歯はない。咬耗は少なく小臼歯はモルナーの2、第1大臼歯は3である。咬耗パターンから考えると、18～20歳の少年に属すると考えられる。エナメル質減形成が認められる。第1大臼歯のものは2歳前後、小臼歯のものは5歳前後、中切歯のものは3歳前後に形成されたものであろう。

四肢骨：上腕骨は比較的太いが三角筋粗面はさほど発達していない。尺骨も橈骨も比較的頑丈で骨間縁も発達している。寛骨の保存状態はよい。大坐骨切痕は鋭角で男性的である。耳状面前溝も認められない。

大腿骨は粗線が中等度に発達している。腓骨は各線が非常に発達している。
性別・年齢：この個体は18~20歳ぐらいの男性であろう。

SH1213 (図版25)

ヒトの下顎骨片である。保存状態が悪く、特記すべき事項はない。性別・年齢不明である。歯はない。

SH1215 (図版26、図136、PL31)

顔面が破損しているかほぼ全身が出土している。骨の状態は悪い。左右の上肢を比較的強く曲げて、手を胸の位置に置いている。右手の方がやや上方にある。下肢は強く曲げ、左右の膝をあわせてやや右に傾けて立てている。顔面はやや左に向けられている。仰臥屈葬である。歯は残っていない。(展示用資料)

頭蓋骨：顔面は完全に破損している。外後頭隆起はみられない。頭蓋冠の骨は厚い。矢状縫合はまだ観察できるし、冠状縫合も鋸歯状が明瞭であるので、さほど高齢ではない。乳様突起は大きく厚い。耳道上縁はさほど発達していないが側頭線は明瞭である。下顎骨は下顎枝がやや細めである。角前切痕はない。
四肢骨：鎖骨も比較的太い。上腕骨は長く頑丈である。三角筋粗面はやや発達している。寛骨は大坐骨切痕が鋭角で男性的である。耳状面前溝は認められない。大腿骨は太く頑丈で、粗線は中等度に発達している。骨幹上部外側の殿筋隆起が認められるがさほど発達していない。上部はやや扁平である。胫骨の中央付近の断面はヘリチカのIV型である。腓骨は非常に太く頑丈である。

性別・年齢：この個体は男性であろう。年齢を示すものは頭蓋骨の縫合だけであるが、それによればさほど高齢ではなくむしろ若いと考えられる。

SH1216 (図版26、図137)

上半身だけが出土している。下半身はSH1184、SH1185墓坑を掘る際に失われたと考えられる。上肢は左右ともに前腕が失われているが、手の骨が上半身の範囲にみられないので伸展していたと考えられる。下肢は不明である。顔面はやや右の下方を向いている。仰臥である。

頭蓋骨：前頭部から頭蓋底にかけての土圧を受けている。眼窩上隆起は比較的発達している。鼻根部は凹んでおり、鼻骨はいわゆるつまみ鼻である。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。乳様突起は幅が小さく、厚いあまり大きくない。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨は大きいあまり頑丈ではない。オトガイ隆起はわずかに発達している。

歯：上顎の切歯部は破損していて状態は不明である。第2小臼歯と第1・第2大臼歯が残っている。下顎では左前歯が出土している。上顎の第3大臼歯は生前に脱落していたと考えられる。下顎の臼歯部は歯槽の退縮が著しく、歯根が残っているのは右の第1大臼歯だけである。歯槽は狭い後状ではなく窪みをもっているものでこれらの大臼歯は歯肉によって支えられて植立していた可能性がある。しかし、咀嚼にはあまり役に立っていたとは思えない。小臼歯は生前に脱落していた。下顎の右の前歯部もソケットがあるので少なくとも下顎に抜歯はないと考えられる。下顎の前歯は咬耗が著しく、咬耗度はモルナーの6である。上顎の大臼歯の咬耗度は6と5で、小臼歯は5である。上顎の歯槽も退縮しているのでこの個体はかなりの高齢ということであろう。咬耗パターンから判断される年齢は老年であったと考えられる。切歯の咬耗状態は鋸歯状咬合であったことを示している。

エナメル質減形成がみられる。第1大臼歯にはみられないが、第2小臼歯と第2大臼歯にみられ、同じ時期で6歳頃から2・3回にわたって形成されたと考えられる。

四肢骨：鎖骨の太さが左と右で大きく異なっており、土圧の影響を割り引いても右が太い。左の鎖骨は細

くしゃしゃである。右利きであったためと考えられる。上腕骨の太さは普通である。
性別・年齢：この個体は老年（60歳以上）の女性の可能性が高い。

SH1217 (図版26、図138)

骨は2体分出土している。1体は子供(A)で、1体は成人(B)である。

(A)

上半身の右半が欠けている。保存状態は後述のように若い個体であるのでよくない。左上肢は肘をごく僅かに曲げ、回内して手を腰に置いている。下肢は左右ともに膝をかなり強く曲げ膝を立てている。顔面はやや右を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨：土圧でつぶれており骨が薄いこともあってほとんど細片化している。観察は不可能である。

歯：上顎左第2乳臼歯の植立した混合歯列である。第3大臼歯は埋伏している。第2大臼歯も咬耗のあるものとなしものがあり、それらは萌出直後あるいは萌出中と考えるとよからう。したがってこの個体は12歳前後と考えられる。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は、第2大臼歯がX4型、第3大臼歯が+5型である。犬歯の大きさは縄文時代の男性の平均値よりも大きめであり、現代人の男性の平均値とほぼ等しい。

エナメル質減形成が認められる。形成中の第3大臼歯のものが顕著である。10歳前後で形成されたエナメル質減形成であろう。

四肢骨：それぞれの骨は細く、くしゃしゃである。保存が悪く形態の観察には耐えない。腓骨の最大長は残っている骨幹の部分から推定して長くとも240mmは越えない長さである。この長さから計算される身長（成人の推定式を使う危険性はあるが）は133cmぐらいである。この身長は木村（1979）の表にあてはめると男女どちらとも10歳ぐらいとなる。縄文人の身長の低さを考えると先の年齢推定とおおむね合致するといえよう。

性別・年齢：この個体は12歳前後で、性別は不明である。

(B)

下肢骨の一部だけが出土している。胫骨はさほど太くない。詳細は不明である。

SH1220 (図版26)

イノシシの上腕骨遠位端が混入している。人骨（胫骨近位部?）と思われる骨はあるが細片で、性別・年齢（大きさから考えて成人であろう）は不明である。

SH1228 (図版26、図139、PL31)

頭蓋骨の破片が10数点出土しているだけである。頭蓋冠の骨は薄い。ヒトの頭蓋骨であるが、性別・年齢は判定できない。

SH1229 (図版26)

下半身の一部、および歯が出土している。埋葬姿勢などは不明である。

歯：第3大臼歯は萌出していない。第2大臼歯の咬耗はごくわずかである。上顎の第2小臼歯は萌出中と考えられる。これらのことを考えあわせると、萌出パターンから推測される年齢は13~14歳ぐらいということになる。

四肢骨：寛骨の大坐骨切痕は部分的で性別の判定はできないが、耳状面は低く、少なくとも耳状面の前後

の溝はない。大腿骨は細い。上部は扁平で転子下窩が深い溝状に発達している。したがって上部外側の股筋隆起は顕著に張り出している。粗線は発達しているが狭い稜状である。骨体上断面示数(扁平示数)は76.6(左:土丘の影響があるか?)、81.2(右)で扁平大腿骨である。

性別・年齢:この個体は女性と考えられ、年齢は13~14歳ぐらいの子供である。

SH1232 (図版25)

頭蓋骨の後頭部だけが出土している。変形である。外後頭隆起はあまり発達していない。ヘリチカのII型である。頭蓋冠の骨の厚さはやや厚めである。ラムダ縫合は非常に明瞭でまだ若い個体であろう。性別は不明である。

SH1233 (図版21、図140、PL31)

変形である。保存状態は非常に悪く、体幹骨はほとんど残っておらず、また下肢骨も一部が残っているだけである。右上肢は肘をやや曲げて、手を下腹部に置いている。一方左上肢は肘を伸展して手を腰の横に置いている。下肢は残りが悪く詳細は不明だが、膝を強く曲げ、やや左に傾けているらしい。顔面は正面を向いている。歯は残っていない。

頭蓋骨:後頭部が残っているが顔面は消失している。右乳様突起は大きく厚みも目立つ。耳道上稜はさほど発達していない。乳突上溝はやや発達している。外後頭隆起はヘリチカのIII型である。頭蓋冠の骨は薄めだが全体としては男性的である。縫合は確認できない。

四肢骨:大腿骨片がみられるが、詳細は不明である。さほど太くはなさそうである。

性別・年齢:この個体は成人の男性と考えられる。

SK2029 (図版37、図141)

ほぼ全身の骨格が出土している。保存状態はさほど悪くないが小児骨であるため取り上げは難しい。右上肢は肘を強く曲げ上腕をやや外方に張り出して、手を胸に置いている。左上肢は肘を伸展し、手を腰の横に置いている。下肢は左右ともに膝を比較的強く曲げ、左に倒している。左右の膝は離れている。顔面は左を向いているが頭部の下の石のため顔面は下方(足方)を向いている。仰臥屈葬である。

頭蓋骨:頭蓋冠の骨は非常に薄い。眼窩上隆起は発達していない。前頭部は平坦である。乳様突起は基部だけが残っているが年齢の割には大きめである。外後頭隆起はやや張り出しているがヘリチカのII型には達していない。下顎骨は厚くがっしりしており、オトガイ隆起もやや発達している。外側結節も発達しているのでオトガイ三角が認められる。

歯:乳歯と永久歯の混合歯列である。第1大臼歯は萌出しているが第2大臼歯がまだ萌出していない。上・下顎の切歯は萌出しているが側切歯には咬耗がほとんどないので、この個体は8歳前後と考えられる。下顎大臼歯は第1・第2大臼歯ともに第6咬頭のある+5型である。歯の大きさは、縄文時代の女性の平均値よりも小さめである。

エナメル質減形成が認められる。上顎側切歯のものは3歳前後に形成され、下顎犬歯にみられるものは5~6歳に形成されたものであろう。どちらも軽度の線状の減形成である。

四肢骨:大腿骨の骨頭と上腕骨の骨頭はまだ骨幹と癒合していない。大腿骨は転子下窩が明瞭で溝状に発達している。そのため、外側の股筋隆起は薄いながらも外側に張り出し、将来発達した股筋隆起になることを予測させる(写真15-1)。粗線はまだよく発達していない。現在の骨体上断面示数(扁平示数)は70.1で超扁平大腿骨である。

性別・年齢：この個体は8歳前後の幼児で、正確に性別を判定できる部位は出土していないが他のいくつかの形質から、女性である可能性が高いと考える。

3 土坑出土の人骨

SK2309

焼けた頭蓋骨片が数点出土している。焼けて縮小したことを考えても骨は薄い。詳細は不明である。

SK2398

下顎右の第2小臼歯、および第1大臼歯片といくつかの破片が出ている。第1大臼歯は主として咬合面が残っているが溝は+型で5咬頭である。第1大臼歯の咬耗もごくわずかで、第2小臼歯はまったく咬耗していない。したがって、この個体は第1大臼歯が萌出してさほど経過していない年齢段階の幼児で、8～9歳と推定される。性別は不明である。

4 遺構外出土の人骨

L区No.8

下顎右の第2および第3大臼歯とその歯槽部が出土している。

頭蓋骨：下顎体は外面が削れているが、比較的厚かったと推測される。また、内側の顎舌骨筋線は比較的発達している。

歯：咬頭と溝の型は、第2大臼歯はX4型、第3大臼歯はX5型である。咬耗はモルナーの2～3であまり進んでいない。年齢区分は青年であろう。歯の大きさは現代人の男性の平均値より大きい。エナメル質減形成はない。

性別・年齢：性別は男性の可能性が高い。

L-D11区No.8

脛骨片と思われる骨片だけが出土している。ヒトであるという以外は不明である。

L-L7区No.43

四肢長骨片10点あまりが出土している。詳細は不明である。

L-C10区No.3

上腕骨片が取り上げ時に確認されている。骨質は薄い。詳細は不明である。

5 出土地不明の人骨

SH587 (不明)

保存状態は悪く、頭蓋骨と骨盤、および下肢骨の一部が出土しているだけである。下肢は膝を強く曲げて左に倒れている。頭蓋骨の位置は左を向いているが頭頂方向からの土圧を受けてつぶれている。仰臥位であろう。

頭蓋骨：上下方向に土圧を受けてつぶれている。頭蓋骨の底面から下顎骨にかけては土圧を受けていないようである。乳様突起は破損しているが基部は大きめである。後上乳突結節は明瞭である。下顎骨は比較的頑丈であり、外側隆起は顕著である。角前切痕はない。

歯：上顎歯は左第3大臼歯が消失している。他はすべて萌出している。右第3大臼歯は萌出中あるいは萌出直後である。下顎歯は全歯萌出している。上顎前歯部と下顎前歯部が破損しているが、破片であっても全歯が確認されるので抜歯はなかったと考えられる。前歯部をのぞき咬耗はモルナーの2～3で若い個体である。萌出パターンから判断すると18歳前後である。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が+5型(右)とY型(左)、第2大臼歯がX5型、第3大臼歯がX5型である。

上顎の第1小臼歯、第2大臼歯および右第3大臼歯、また、下顎の第1・第2小臼歯および第2大臼歯にいろいろな程度のエナメル質減形成が認められる。とくに第2大臼歯の歯冠中央付近のものは幅広い形成不全で、山本〔1988〕のいう溝状(Groove)に相当するものである。この減形成は、6歳～7歳にかけてのなんらかの栄養障害等の疾患によって形成されたと考えられる。第1小臼歯には上・下顎ともに2～3本の帯状の減形成がみられ、これらは3～5歳位の間に形成された部分である。第3大臼歯のエナメル質減形成は軽度で、小窩がいくつか形成されている程度であり、これは12歳前後の頃に形成されたと推測される。切歯部が破損しているのでさらに若い時期のことは明らかではないが、第1大臼歯にはエナメル質減形成がみられないので誕生後から3歳までは普通の成長であったと考えられる。

このようにこの個体は幼児期からの成長の過程で何回かの栄養障害などのストレスを受けていることが明らかである。厳しい生活状況であったと推測される。誕生直後に形成される歯冠エナメル質にはエナメル質減形成がみられないことは、食料がたとえ乏しくとも、母乳によって育てられている間は健全な栄養摂取が可能であったり、ストレスを受けにくいことを示していると考えられる。

四肢骨：上肢骨は出土していない。骨盤は左の保存がよい。大坐骨切痕は鋭角で男性的である。大腿骨の骨頭と関節する部分である月状面の内縁の形態から判断して、寛骨臼窩に直径1cm程の穿孔があったと思われるが、対応する左大腿骨の骨頭には病変はみられない。耳状面前溝は認められるがごく浅い。左大腿骨は比較的保存状態がよい。骨幹の上部後面に溝状の転子下窩がみられ、その外側は前面にも溝状のへこみのみられるような強度な殿筋隆起となっている。粗線は比較的発達しており、軽度の付け柱状の大腿骨である。胫骨は中央付近がわずかに残っている。断面形状は骨間縁の比較的発達したヘリチカのV型である。

性別・年齢：この個体は男性の可能性が高い。年齢は18歳前後である。

第3節 北村人の形態的な特徴

1 北村人の特徴と他の縄文人骨との比較

(1) 頭蓋骨の特徴

頭蓋骨では、一般的な縄文時代後期人の特徴を具えているといえる。5メートルの地下に埋まっていた関係でほとんどの頭蓋骨が土圧の影響を受けている。したがって計測的データはごく少量しか得ることができなかった。

北村人は一般的な縄文時代後期人と大差ない形態である。頭蓋骨を上方から見ると丸みを帯びており、一般的な縄文時代人や現代人に近い短頭である。中世や鎌倉時代の長頭とは大きく異なっている。

前頭縫合が成人になっても癒合しないで残っているいわゆるメトビズムはごく少数例でしかみられない。北村人では保存状態が悪いため、縫合関係の情報はあまり得られていない。鼻根部は大きく凹んでおり、この点でも一般的な縄文時代人と同じである。したがって、鼻骨は前頭骨との縫合近くで狭くしかも高くなっている。いわゆるつまみ鼻が多くみられ、彫りの深い顔である。顔面は低く頬骨がよく発達している。しかも顔面は横に広い。上顎大歯の歯根が植立している歯槽骨部分は、現代人にみられるようなへこみ、すなわち大歯高はみられない。咀嚼に関係した器官が発達していることを示唆しているものである。

外後頭隆起は北村集団では発達しているとはいえない。ヘリチカの型区分ではII型からIII型が多く、IV型は少ない。乳様突起はやや発達しているが、男女の差はさほど大きくない。後頭部のラムダ縫合部にインカ骨が少数例にみられ、小さな縫合骨も認められる個体もある。

口蓋の正中部に時として骨の高まりがみられることがあり、これを口蓋隆起という。その成因は不明だが、集団によってあるいは時代によって異なっているといわれている。北村人では観察可能な個体29例のうち程度の差はあれ隆起が認められたものが8例(27.6%)であった。これらのうちには溝口(1991)が示すような2型や3型に属する極端に発達した口蓋隆起はみられなかった。上顎の歯槽の外側に骨の高まりが出現することがあるが、これは歯槽隆起と呼ばれている。この形質は北村集団では1例(SH764)でみられたに過ぎない。

下顎骨は全体ががっしりしているが、下顎体高はさほど高くない。しかも前方から後方までの高さの差があまりない形態である。下顎骨の角前切痕はほとんどみられず、存在しても下顎骨の前の部分がわずかに上方に凸の弱いカーブを示しているだけである。下顎底部が丸みを帯びた、いわゆるロッカージョウをなしている個体が散見された。また、下顎枝は全体に広めである。下顎枝は下顎体にたいして比較的傾いている。このことは下顎枝角の大きさに現れている。

下顎体の内側に骨の隆起がみられることがあり、これは下顎隆起と呼ばれている。観察可能な北村人の個体は57例で、軽度のもも含めて29例(50.9%)に下顎隆起が見られた。そのうち4例(17%)は溝口(1991)の3型に相当するよく発達した下顎隆起であった(写真3-1)。北村人の場合、20歳ぐらい(SH859男性)でもすでに下顎隆起が存在しているが、年齢の高い個体での出現が多い傾向はみられる。思春期や少年少女期、あるいは幼児期などには認められていない。ある程度年齢に関係する形質であることが推測されるが、上顎の口蓋隆起や歯槽隆起と同じく成因についてはいまだに不明である。

ア 計測値にみられる特徴(表60・61、図200~205)

先にも述べたように保存状態が悪く、しかもほとんどの頭蓋骨が土圧の影響を受けているため、計測できた個体は少なく、しかもその部位も少ない。土圧の影響をほとんど受けていないと判断された項目のみ

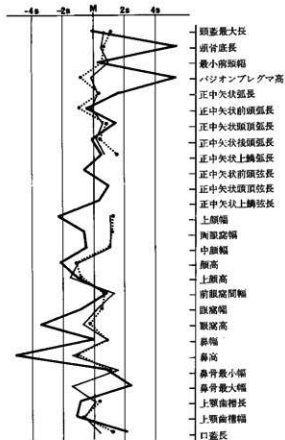


図200 男性の頭蓋骨計測値の偏差折線
M: 現代関東人男性の平均値, s: 標準偏差, 太い実線が北村人男性の平均値, 細い実線は吉胡貝塚人男性の平均値, 点線が津雲貝塚人男性の平均値 (図202まで共通)

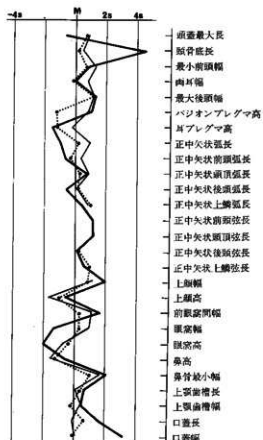


図203 女性の頭蓋骨計測値の偏差折線
M: 現代関東人女性の平均値, s: 標準偏差, 太い実線が北村人女性の平均値, 細い実線は吉胡貝塚人女性の平均値, 点線が津雲貝塚人女性の平均値 (以下図205まで共通)



図201 男性の下顎骨計測値の偏差折線

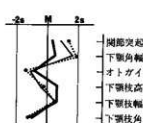


図204 女性の下顎骨計測値の偏差折線

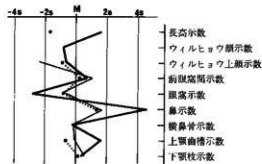


図202 男性の頭蓋骨に関する示数の偏差折線
点線と大きな点が津雲貝塚人男性の平均値, 小さな点は吉胡貝塚人男性の平均値



図205 女性の頭蓋骨に関する示数の偏差折線

を選んで計測しているが、多少の影響を受けている可能性がある。一般の貝塚の人骨の計測値より信頼度が低いことを念頭においていただきたい。

男性では、頭骨底長やバジジョン・プレグマ高が大きい。これは個体数が1～2個体だけであるための偏りであろう。眼窩高や鼻高などは現代関東人よりもかなり小さく、また津雲（貝塚）人よりも小さい。また、上顔幅や両眼窩幅、中顔幅も津雲人より小さく、顔面の幅が一般の縄文時代後期人よりもかなり小さかったこと、すなわち顔の横幅は広くなくややきゃしゃな印象を受ける。このことは、顔面が比較的よく保存されていたSHの合成復元像からもうかがうことが出来る（写真17）。その他の点では津雲人と大差なく、偏差折線も似ている。比較的保存のよかった下顎骨では、下顎体の正中部の高さのオトガイ高が津雲人とかわらず、顔面の狭さを反映して幅の項目がやや小さいが、偏差折線は津雲人に似ていると言える。

頭蓋骨の示数では、長高示数は現代人より大きく、津雲人よりもかなり大きめである。眼窩示数は小さく、鼻示数はかなり大きい。それ以外では両者は比較的似た偏差折線である。

女性では、やはり頭蓋底長が大きい（1個体）。眼窩幅および眼窩高はともかなり小さめである。眼窩が小さいということである。しかし男性のように顔面の幅が広くないという印象はない。それ以外では偏差折線は津雲人と似ている。

(2) 歯の特徴

ア 一般的な形態とその特徴（表45～47）

縄文時代人は、歯の諸形質ではスングドント（Sundadont）に分類されている〔Turner; 1989〕。これに対して、現代日本人や中国人などの持ついくつかの歯の特徴を総称してシノドント（Sinodont）という。スングドントは寒冷地適応していない古モンゴロイドの示す特徴のことであり、シノドントは寒冷地適応した新モンゴロイドの示す歯の特徴のことでありとされている。スングドントは日本人の祖先として東南アジアのスングランドから日本に住み着いた人々である。

スングドント（縄文時代人）は、我々現代日本人には多くみられる上顎の切歯のシャベル型の頻度が低い。北村人でもやはりシャベル型の上顎切歯はごく少ない。

上顎の大白歯の咬頭数（表45）は、第1大白歯では4咬頭性がほぼ100%を占めているが、第2大白歯では3咬頭性（3+型、3型）のものが圧倒的に多くなり両者で83.8%を占める。第3大白歯では2咬頭性のもも出現し（16.1%）、4咬頭性のもはわずかに13%にすぎない。3咬頭性でも3型がほとんどで、3+型は少ない。このように、北村人はかなり退化的な傾向を示していると言える。

一方、下顎大白歯の咬頭と溝の型は表46に示すとおりである。第1大白歯で最も多いのは+5型（60.6%）で、第2大白歯では+4型（60.5%）、第3大白歯では+4型（40.9%）であった。Y5型の大臼歯は第2および第3大白歯にはまったくみられない。X型は第1大白歯にはみられなかったが、第2大白歯で全体の15.8%と増加し、第3大白歯では36.4%と約1/3を占めている。

咬頭数	第1大白歯			第2大白歯			第3大白歯					
	4	3	4	4-	3+	3	4	4-	3+	3	2+	2
例数	38	1	3	3	19	12	2	2	3	19	1	4
%	97.4	2.6	8.1	8.1	51.4	32.4	6.5	6.5	9.7	61.2	3.2	12.9

表45 上顎大白歯の歯種別咬頭数

咬頭の数え方は、主としてDahlbergの標準模型にしたがっている。

歯種	第1大白歯			第2大白歯			第3大白歯				
	Y5	+5	+4	+5	+4	X5	X4	+5	+4	X5	X4
例数	12	20	1	9	23	1	5	5	9	2	6
%	36.4	60.6	3.0	23.7	60.5	2.6	13.2	22.7	40.9	9.1	27.3
溝の型の割合	36.4	63.6		84.2	15.8			63.6		36.4	

表46 下顎大白歯の咬頭と溝の型

第6咬頭は付加的な形質であるので、第6咬頭がある場合でもこの場合は5咬頭として数えた

これらを現代日本人と比較してみると、Y5型が非常に少ないのが目につく（表47）。一般的には縄文時代人は

原始的でY5型が多いと考えられからであるが、北村人に関するかぎりそのようなことはみられない。この咬頭と溝の型に関する他の縄文時代人の報告がない。一般に、下顎大臼歯の咬頭数は5咬頭から4咬頭に、溝の型はY型から+型を経てX型に進化していくといわれている〔藤田：1976〕。このような観点からは、スグドントである北村人は現代日本人（シノドント）よりもむしろ進歩的であるといえる。

イ 歯の計測値から見た北村人 (表62~65、図206・207)

歯の大きさは、現代日本人（權田：1959）よりも一般的に小さく、この点ではやはり他の縄文時代人と大差ない特徴を示している。

男性では、上顎の第2切歯は近遠心・径類舌径ともに現代日本人より大きい。他の歯は現代日本人の平均値と同じか小さい。第2・第3大臼歯の近遠心径がとくに小さめである。下顎の大臼歯では、第2小臼歯と第1大臼歯の類舌径以外は現代日本人の平均値よりも小さい。

女性では、上顎の近遠心径はすべての歯で現代日本人より小さく、第2大臼歯の近遠心径がとくに小さめである。下顎の第1切歯以外の近遠心径も現代日本人より小さい。これに対して類舌径はとくに現代人よりも小さめという傾向は示していない。とくに第1大臼歯の類舌径は男性の場合と同じく、現代人よりも大きめである。

第1大臼歯	Y5	Y4	+5	+4	X5	X4	
北村人	36.4	0	36.4	3.0	0	0	
現代日本人	62.8	1.7	29.4	3.8	2.0	0.3	中村 (1957)

第2大臼歯	Y5	Y4	+5	+4	X5	X4	
北村人	0	0	23.7	40.9	2.6	13.2	
現代日本人	2.3	1.5	27.9	43.7	11.7	13.9	中村 (1957)

第3大臼歯	Y5	Y4	+5	+4	X5	X4	
北村人	0	0	22.7	40.9	9.1	26.3	
現代日本人	1.8	0.0	24.6	22.8	24.6	26.3	中村 (1957)

表47 北村人の下顎大臼歯の「咬頭と溝の型」と現代日本人との比較
北村人の場合、各歯種で最も頻度の高いものにシャドウをかけてある

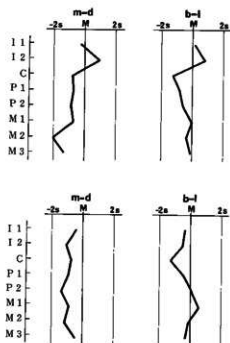


図206 男性の歯の大きさの偏差折線
上段は上顎歯、下段は下顎歯である。
M：現代人男性の平均値（權田：1959）
m-d：近遠心径、b-l：類舌径。
I1：第1切歯（中切歯）、I2：第2切歯（側切歯）、C：犬歯、P1：第1小臼歯、P2：第2小臼歯、M1：第1大臼歯、M2：第2大臼歯、M3：第3大臼歯（M以外は図207共通）

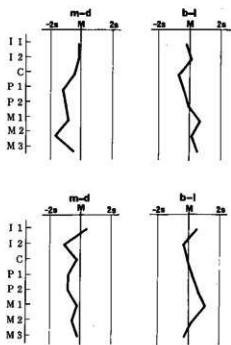


図207 女性の歯の大きさの偏差折線
上段は上顎歯、下段は下顎歯である。
M：現代人女性の平均値（權田：1959）

ウ エナメル質減形成の頻度 (表48、写真16)

歯は古人骨でも最も残りやすい部分であり、しかも歯の形成期(新生児から18歳ぐらいまで)の栄養状態などを示すものとして重要視されている。エナメル質減形成(enamel hypoplasia)は歯に出現する形で、歯冠が石灰化していく形成期にその個体がこぐむったなんらかのストレスによって歯の表面に諸種の影響があらわれるものを指している。厳密な意味でエナメル質減形成の原因となる障害因子はまだわかっていないが、一般になんらかの環境ストレスを示すものと考えられている。その原因には局所的なあるいは全身的ないくつかの障害が考えられている。全身的な障害の例としては、飢餓(栄養不良)、タンパク質やビタミンの欠乏などの栄養障害、胃腸疾患、発疹性伝染病(麻疹、水痘、しょうこう熱、ジフテリアなど)、肺炎、結核などがあげられている(石川・秋吉:1978)。エナメル質減形成であると判断する基準は山本[1988]と同様の基準、すなわち「肉眼で境界明瞭に、周波条に沿って歯面の $\frac{1}{3}$ 以上にわたって認められるもの」とした。疑わしいものはすべて減形成なしと判断したため実際の状態よりもやや低めに見積もっている可能性があるが、今後の課題としたい。

北村人の場合は一般の縄文時代人と比べてエナメル質減形成の出現頻度は高い。上顎の切歯および犬歯は山本の報告している海岸部の縄文時代人と大差ない。しかし小臼歯列では顕著に高い出現率となり、第2大臼歯でもやはりかなり高い出現率となる。また、下顎歯では、中切歯の出現率は低いものの、犬歯と第1小臼歯ではストレスの高かったといわれている江戸の町民とほとんど同じ出現率を示し、第2小臼歯より遠位では北村人の方が高い出現率を示している。全体的には下顎歯よりも上顎歯の方が出現率が高い。下顎の犬歯に最も高い頻度で出現するのは他の時代の例と同じである。

また、北村人の場合小臼歯列と第2大臼歯にもかなりの頻度でみられるのが目につく。これらの形成時期は、5歳ぐらいから7歳ぐらいにかけての時期である。上下顎共に第1大臼歯での出現頻度が低いのはこの歯の形成時期が生後まもなくから2歳ぐらいまでの哺乳の時期にあたっているためである。その後の離乳時期以後の環境は自ら食料を摂取する環境となるため、たとえ親の保護を受けているものであっても環境ストレスを直接的に受けることになる。したがって、エナメル質減形成が多くなりみられるようになると考えられる。乳歯にはエナメル質減形成はみられない。母体内で形成されるためである。ただし表面に小窩状の「荒れ」がみられる個体もある。

コーゲン分析によれば北村人は植物性の食料が主であったという(南川:1990)。海岸部の貝塚人とはかなり異なった食性であった可能性が指摘されている。すなわち、動物タンパクの摂取が少なくなり、

		山本(1988)							
		個体数	有	%	縄文	古墳	室町	江戸	現代
上 顎 歯	I 1	16	5	31.3	44.4	22.2	0.0	33.3	24.1
	I 2	21	10	47.6	50.0	16.7	16.7	19.4	6.7
	C	29	17	58.6	50.0	10.0	0.0	30.8	10.0
	P 1	34	15	44.1	12.5	5.6	0.0	5.6	0.0
	P 2	33	15	45.5	17.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	M 1	37	7	18.9	24.0	12.5	0.0	5.9	6.7
	M 2	37	17	45.9	16.7	6.3	0.0	3.0	3.4
M 3	28	10	35.7						

		個体数	有	%	縄文	古墳	室町	江戸	現代
下 顎 歯	I 1	15	1	6.7	33.3	26.7	—	27.6	7.1
	I 2	19	3	15.8	28.6	30.8	—	32.4	14.7
	C	23	15	65.2	48.1	36.4	33.3	65.1	39.5
	P 1	29	7	24.1	6.9	0.0	33.3	25.0	3.3
	P 2	33	8	24.2	3.7	0.0	0.0	2.7	3.0
	M 1	37	2	5.4	6.9	4.5	0.0	11.8	3.8
	M 2	37	8	21.6	0.0	0.0	0.0	6.1	0.0
M 3	27	3	11.1						

表48 北村人骨の歯にみられたエナメル質減形成の歯種別の頻度
若い例で、歯が10本以上ある個体(39例)だけを対象とした。右側を調査し、ないものは左側を調査した。原則的には左右対称に出現する。(個体別には表59参照)

硬組織の形成に影響を与えた可能性を指摘できる。この点は今後の検討課題として興味ある点でもある。今回の発掘では住居址なども発掘されており、遺跡の規模の割りに獣骨の出土量が非常に少ないこともこの可能性を支持している。

エ 咬耗の特徴 (図208・209)

北村人では、20代(青年)になると第3大臼歯にはっきりした咬耗がみられるようになり、25歳ぐらいになると、象牙質の露出がない場合でも第3大臼歯の咬合面が平坦化してくることが多

い。また切歯の切端の象牙質がかなり露出してくる(図208-A)。また、25歳過ぎるころから第1大臼歯の露出した象牙質はやや大きめになってくる。第1大臼歯と第3大臼歯の咬耗とは正確な対応はしていないこともある。個体によって第2大臼歯に象牙質の露出がなくとも第3大臼歯に露出があることもある。ただし、そのような例は少ない。

30歳から35歳ぐらい(壮年前半)で第3大臼歯に象牙質の露出が見られる。この頃は下顎の第3大臼歯は舌側の咬頭が、上顎第3大臼歯では頬側の咬頭がまだ高まりを持っている。25歳過ぎるぐらいから露出し始めた第1大臼歯の象牙質は次第に大きくなってくる。各咬頭の露出した象牙質がお互いにつながり始めるのは30歳代になってからである(図208-B)。20歳代では各咬頭に出現した象牙質はまだお互いが連絡しない。30歳代になると下顎第1大臼歯の「咬頭と溝の型」はほとんど識別できない。咬合面の咬頭がすり減って大臼歯の咬合面が平坦になるのも30代後半になってからである。

40歳代(熟年)になると第1大臼歯の咬合面はほとんど象牙質が露出するかあるいはごくわずかなエナメル質が固有咬合面に残るだけとなる(図208-C)。この年代になると、下顎大臼歯の咬頭数や溝の型、あるいは上顎の大臼歯の咬頭数などは識別できないものが多い。

50歳代には、切歯の咬耗が進み、歯冠はその高さの半分以上が摩耗する(図208-D)。したがって、切歯の咬合面の外形が歯頸部に近くなるために厚みのある四角形になってくる。第3大臼歯の露出した象牙質も連続するようになる。脱落する歯も見られるようになる。

60歳代以上になると第3大臼歯以外のほとんどの歯は歯冠の固有咬合面すべてが象牙質となり、エナメル質は歯冠の周りに残るだけとなる(図208-E)。年齢が進んでいるものでは歯頸部から歯根まで咬耗が進んでいる場合がある。脱落する歯が多くなってくる。

Lovejoy (1985) のNubia人の咬耗度(図209)と比べると、北村人では第3大臼歯の咬耗が他の大臼歯と比べてやや進んでいる。すなわち、Lovejoyの咬耗図では45～55歳になっても、第3大臼歯ではバラコーン(近心頰側咬頭)のみに象牙質の露出があることになっている。しかし、北村人では30代になると第3大臼歯に象牙質の露出がみられるようになる。これに対して、前歯部の咬耗は北村人の方が遅い。切

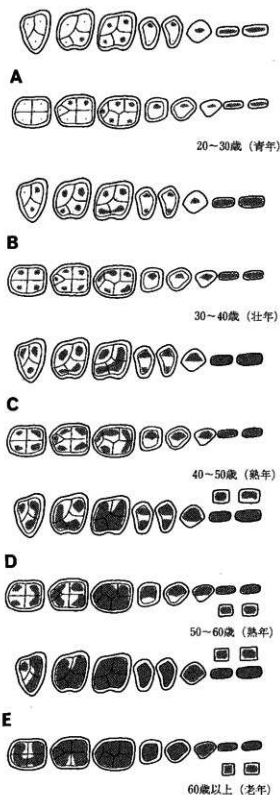


図208 北村人の咬耗の年齢別特徴

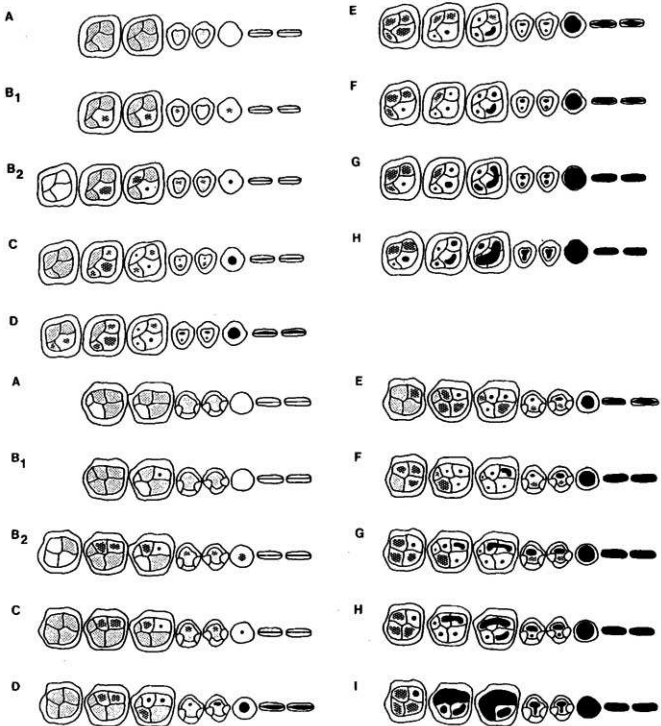


図209 Lovejoyによる歯の咬耗からの年齢推定方法

図208でLovejoy (1985) のA-Cまでを除いてある。北村人骨にこの方法をそのままでは応用できない。

歯の切端の象牙質は、25歳ぐらいでようやくかなり露出してくる。歯冠のすべての面が咬耗するのは北村人の場合では50代になってからである。

北村人では、第1大臼歯から第3大臼歯までの大臼歯間での咬耗の差が小さい。また、咬耗がかなり進んでいるのに象牙質がすぐに露出してこないが、これは北村人のエナメル質が厚いことによるものであろう。北村人の特徴の一つとして、海岸部の縄文時代人に比べて咬耗が遅いことを指摘することができよう。海岸部の縄文時代人と磨耗に関する研究がないので比較のしようがないが、海岸部のものは北村人よりも咬耗が早い印象を受ける。海岸部の縄文人は砂混じりの食糧（例えば貝類）が多く、歯のすり減り方も著

しかった可能性がある。北村人はカラーゲン分析から明らかのように、植物食が大きな割合を占め、咬耗も海岸部のものよりは少なかったと考えられる。一般には植物繊維は硬くて、歯の咬耗に大きな影響を与えるといわれているが砂混じりの食料ほどではない。今後の検討課題であろう。

大臼歯、とくに下顎の第1大臼歯などの咬耗が進むと歯冠が舌側に、歯根が頰側に著しく傾くことがある。例えばSH504の右第1大臼歯、SH1161の左右の第1大臼歯などである。(写真5-2・2')この現象は、Taylor (1963) によって「fern root planes」と名付けられた傾きと同じもので、fern (シダ) 類のような固い繊維の多い根を習慣的に、あるいは長い期間にわたって食べることによってできる歯の咬耗と歯軸の傾きと言われている。北村人がシダを食べたかどうかは別にしても、少なくともシダの根のような固い繊維性の植物を食べていたことはまちがいない。ただし、高齢になっても必ずしもすべての個体でこのようなすり減り方や歯冠の傾きができるわけではなく、むしろ少ないと言えるので、個人の好みの問題もあったのかもしれない。

オ 他の地域の縄文時代人との比較 (表49-52, 図210-212)

後・晩期の全国の縄文人の平均値、ならびに5地域の縄文人の歯の計測値との比較をこころみた。比較する各縄文時代人の計測値はMatsumura (1989) を使用した。なお、上下顎の第3大臼歯は変異形が多いため分析対象から除外している。

北村人と全国縄文人の平均値との有意差を検定 (t-検定、両側) すると、男性では有意差が示された項目は少なく、第1大臼歯の近遠心径が小さい点が北村人男性の特徴としてあげることができる (表49)。一方、女性では近遠心径に有意差が示された項目はわずかであるが、頰舌径では多くの項目において有意

	北村縄文人			全国縄文人			平均値の差の検定		
	標本数	平均 (mm)	標準偏差	標本数	平均 (mm)	標準偏差	t-値	有意確率	
上顎	近遠心径								
	I 1	5	8.6	0.33	108	8.50	0.39	0.30	0.7616
	I 2	4	7.7	0.26	106	7.09	0.46	2.34	0.0210>
	C	8	7.5	0.46	68	7.55	0.42	0.25	0.8014
	P 1	12	7.1	0.67	153	6.90	0.37	1.51	0.1315
	P 2	13	6.7	0.59	183	6.45	0.40	1.84	0.0661
	M 1	17	10.3	0.44	190	10.27	0.47	0.03	0.9706
M 2	13	8.7	0.52	172	9.12	0.60	2.41	0.0168	
下顎	I 1	2	5.3	0.21	61	5.27	0.36	0.07	0.9376
	I 2	5	5.8	0.48	91	5.72	0.36	0.21	0.8362
	C	13	6.8	0.33	112	6.73	0.44	0.94	0.3456
	P 1	12	6.9	0.42	172	6.90	0.37	0.13	0.8918
	P 2	13	6.8	0.47	190	6.94	0.45	1.19	0.2348
	M 1	17	11.3	0.58	210	11.61	0.44	2.87	0.0044<<
	M 2	20	10.6	0.64	201	10.80	0.62	1.25	0.2127
上顎	頰舌径								
	I 1	5	7.4	0.37	125	7.28	0.34	0.85	0.3933
	I 2	3	7.0	0.68	118	6.69	0.42	1.09	0.2777
	C	11	7.8	0.38	71	7.95	0.49	0.25	0.7961
	P 1	16	9.1	0.74	153	9.26	0.48	0.85	0.3920
	P 2	15	9.1	0.91	184	9.00	0.57	0.92	0.3563
	M 1	18	11.8	0.62	189	11.77	0.50	0.06	0.9459
M 2	16	11.6	0.50	175	11.45	0.61	0.85	0.3941	
下顎	I 1	3	5.8	0.25	79	5.92	0.36	0.76	0.4486
	I 2	7	6.3	0.33	108	6.19	0.37	0.17	0.8579
	C	14	7.6	0.35	115	7.44	0.51	0.81	0.4151
	P 1	13	7.9	0.49	173	7.79	0.47	0.96	0.3373
	P 2	17	8.6	0.42	193	8.32	0.47	2.42	0.0162>
	M 1	18	11.2	0.44	218	11.23	0.43	0.40	0.6829
	M 2	21	10.4	0.46	207	10.46	0.50	0.27	0.7856

表49 北村遺跡出土の縄文人男性と後・晩期全国縄文人男性の歯計測値平均との比較

有意差レベル > : 5%レベルで北村の値が大 >>> : 0.1%レベルで北村の値が大
>> : 1%レベルで北村の値が大 > : 1%レベルで北村の値が小

	北村縄文人			全国縄文人			平均値の差の検定			
	標本数	平均 (mm)	標準偏差	標本数	平均 (mm)	標準偏差	t-値	有意確率		
上顎	近遠心径									
	I 1	14	8.5	0.39	74	8.27	0.41	1.88	0.0635	
	I 2	14	7.0	0.31	78	6.83	0.51	1.12	0.2658	
	C	18	7.5	0.43	54	7.33	0.51	1.09	0.2781	
	P 1	19	6.9	0.34	126	6.65	0.47	1.80	0.0735	
	P 2	19	6.5	0.31	164	6.29	0.44	2.45	0.0152>	
	M 1	17	10.0	0.38	174	9.90	0.49	1.04	0.2977	
	M 2	18	8.7	0.62	150	8.80	0.53	0.89	0.3739	
	I 1	8	5.6	0.26	49	5.22	0.41	2.64	0.0108>	
	I 2	9	5.7	0.15	62	5.70	0.36	0.21	0.8290	
下顎	C	13	6.6	0.36	85	6.49	0.37	0.54	0.5879	
	P 1	16	6.8	0.36	164	6.60	0.46	1.74	0.0821	
	P 2	19	6.9	0.32	187	6.68	0.52	1.93	0.0539	
	M 1	23	11.2	0.60	209	11.15	0.49	0.75	0.4500	
	M 2	27	10.5	0.59	200	10.44	0.58	0.79	0.4257	
	上顎	頬舌径								
I 1		10	7.2	0.42	93	7.00	0.34	1.60	0.1122	
I 2		12	6.6	0.46	95	6.38	0.38	1.46	0.1468	
C		17	7.8	0.45	58	7.71	0.51	0.14	0.8873	
P 1		21	9.2	0.52	123	8.95	0.55	1.95	0.0521	
P 2		21	9.2	0.43	165	8.74	0.52	3.52	0.0005>>>	
M 1		21	11.8	0.39	176	11.36	0.48	3.86	0.0002>>>	
M 2		22	11.3	0.64	151	10.97	0.57	2.77	0.0062>>	
下顎		I 1	4	6.0	0.12	59	5.68	0.34	1.70	0.0926
		I 2	7	6.2	0.21	78	6.10	0.42	1.02	0.3101
	C	13	7.5	0.54	88	7.10	0.40	2.87	0.0050>>	
	P 1	16	7.9	0.43	166	7.50	0.50	2.29	0.0232>>	
	P 2	20	8.6	0.43	190	8.02	0.52	4.45	0.0000>>>	
	M 1	23	11.1	0.47	210	10.83	0.47	2.30	0.0223>>	
M 2	30	10.3	0.55	197	10.06	0.50	2.30	0.0222>>		

表50 北村遺跡出土の縄文人女性と後・晩期全国縄文人女性の歯冠計測値平均との比較

差が認められた(表50)。全体的に北村人女性の歯の頬舌径は大きい傾向にある。

以上をまとめると、北村遺跡の男性の歯の特徴は、下顎第1大臼歯が比較的小さいという点である。女性の歯では臼歯の頬舌径が大きい傾向が認められた。Matsumura (1989)によれば、縄文時代人の地理的変異はおもに頬舌径に認められるが、北村人においてもその傾向がしめされ、とくに女性でははっきりしている。

次に、歯冠の計測値を用いて、日本の5つの地域(北海道、東北、関東、東海、山陽)の縄文時代人、近世アイヌ、ならびに現代日本人とのペンローズの形態距離を算出した(表51-52)。切歯・犬歯部は抜歯などによって標本数が不十分なものが多いため、使用した項目は、小臼歯と大臼歯の近遠心径、および頬舌径の16項目とした。基準とする標準偏差は全国縄文人のものを用いた。

北村人と各比較集団との形態距離を図210に示した。男性・女性とも北村人は東海地方の縄文時代人にもっとも近く、ついで関東地方縄文人に近い。また、男女ともに北海道の縄文時代人とは遠いことが示さ

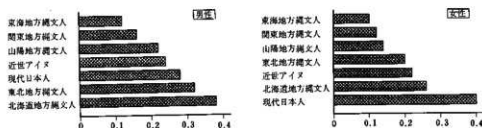


図210 北村人から各地域の縄文人集団へのペンローズ形態距離(Shape Distances)

男性	北村	北海道縄文	東北縄文	関東縄文	東海縄文	山陽縄文	現代日本
北海道縄文	0.3869						
東北縄文	0.3217	0.0683					
関東縄文	0.1662	0.1878	0.1165				
東海縄文	0.1254	0.1422	0.0858	0.0505			
山陽縄文	0.2120	0.1183	0.0806	0.0506	0.0365		
現代日本	0.2827	0.3685	0.2692	0.1682	0.2199	0.2824	
近世アイヌ	0.2299	0.1011	0.0364	0.0747	0.0612	0.0754	0.1364

女性	北村	北海道縄文	東北縄文	関東縄文	東海縄文	山陽縄文	現代日本
北海道縄文	0.2614						
東北縄文	0.2112	0.1395					
関東縄文	0.1157	0.1228	0.0672				
東海縄文	0.1083	0.1428	0.0458	0.0634			
山陽縄文	0.1419	0.1935	0.0739	0.0656	0.0352		
現代日本	0.4060	0.3302	0.1724	0.2445	0.1737	0.1591	
近世アイヌ	0.2290	0.1145	0.0812	0.1144	0.0707	0.0946	0.0790

表51 歯冠計測値16項目にもとづくペンローズの形態距離 (Shape Distances)

男性	北村	北海道縄文	東北縄文	関東縄文	東海縄文	山陽縄文	現代日本
北海道縄文	0.0281						
東北縄文	0.0810	0.0137					
関東縄文	0.0112	0.0749	0.1527				
東海縄文	0.0002	0.0338	0.0906	0.0080			
山陽縄文	0.0010	0.0401	0.1008	0.0053	0.0002		
現代日本	0.2803	0.4859	0.6629	0.1792	0.2632	0.2466	
近世アイヌ	0.0770	0.0120	0.0090	0.1471	0.0863	0.0962	0.6511

女性	北村	北海道縄文	東北縄文	関東縄文	東海縄文	山陽縄文	現代日本
北海道縄文	0.4423						
東北縄文	0.6328	0.0170					
関東縄文	0.0470	0.2009	0.3348				
東海縄文	0.2683	0.0216	0.0770	0.0907			
山陽縄文	0.2574	0.0248	0.0830	0.0844	0.0001		
現代日本	0.0774	0.8901	1.1530	0.2452	0.6342	0.6174	
近世アイヌ	0.1259	0.0962	0.1941	0.0190	0.0266	0.0232	0.4010

表52 歯冠計測値16項目にもとづくペンローズの大きさ距離 (Size Distances)

れた。これらの間の距離は、縄文時代人と現代日本人との距離に匹敵するほど大きなものであった。

この結果を多次元尺度法によって2次元に展開したものが図211である。北村人は東海地方の縄文時代人にもっとも近いものの、縄文時代人全体のまとまりからはやや離れる傾向がある。

集団間の歯の全体的な大きさの関係をみるために、大きさ距離の行列を同じく多次元尺度法によって1次元に展開したものが図212である。軸の左(マイナス方向)には歯が小さい集団がプロットされ、右(プラス方向)に向かうほど歯が大きいことを表している。男性では、縄文時代人集団や近世アイヌは、現代日本人にくらべて歯が小さい。縄文時代人の中では、北村人の歯の大きさは関東地方および東海地方の縄文時代人とほぼ一致している。ただし、女性ではわずかに異なる傾向が示され、北村人がやや大きめである。いずれにしても、小さな歯をもつ北海道や東北地方の縄文時代人とは異なる集団であることは明らかである。

カ 歯の特徴のまとめ

歯の大きさは現代日本人より小さく、スダント的な特徴を示している点で他の縄文時代人と変らな

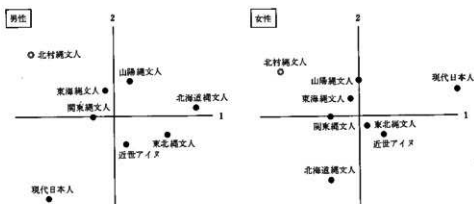


図211 ベンローズの形態距離(Shape Distance)にもとづく2次元展開図
北村人は他の縄文集団とはやや離れている。

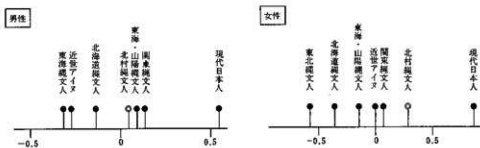


図212 ベンローズの大きさ距離(Size Distance)にもとづく1次元展開図
男性では、関東縄文人や東海縄文人に近い。男女とも北村人は東北や北海道の縄文人とは離れている。

い。しかし、計測値をまとめて考えると、北村人は他の地域の縄文人から若干はなれる傾向がしめされた。この違いは、男性では特に下顎の第1大臼歯がかなり小さいことが反映しているものと考えられる。また女性においては全体的に臼歯部の頬舌径が大きいことにもとづくものと思われる。

比較した縄文人は大部分が海岸地域の貝塚縄文人であり、山間部に位置する北村遺跡の縄文人とは食生活をはじめとする環境はかなり異なっていたものと考えられる。特に最近の食性分析(南川;1990)によって北村人は貝塚縄文人よりもはるかに多く植物資源にたよっていたことが明らかにされており、海産の魚貝類を多く摂取する海岸地域の縄文人はもとより、海獣類に大きく依存する北海道縄文人とは食性が大きく異なっていたことが指摘されている。この関係は今回の歯にもとづく形態距離と矛盾するものではなく興味深い。

全体的に他の一般的な後・晩期の縄文人から離れるものの、比較した5地域のなかでは東海地方縄文人にもっとも近く、ついで関東地方縄文人に近いことが男女とも一致して示されたが、北村遺跡との地理的位置関係からみれば、もっともな結果であるといえる。

(3) 四肢骨に関する特徴

ア 上肢骨 (表66・67、図213~216)

鎖骨・肩甲骨：男性では、鎖骨最大長は現代人より大きく、肩幅が広がったことを示している。中央部の矢状径も大きく、全体に現代人よりも頑丈な鎖骨である。津雲人と最大長は変わらないが、北村人の方がやや中央周が大きい。肩甲骨の関節面は現代人より長さが大きく幅が小さいが、この傾向は津雲人と同じである。

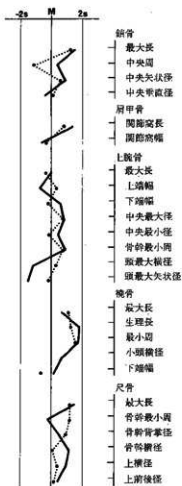


図213 男性の上肢骨計測値の偏差折線
 M：現代関東人男性の平均値
 s：標準偏差
 実線が北村人男性の平均値
 点と点線が津雲貝塚人男性の平均値
 (図215・217・219も共通)

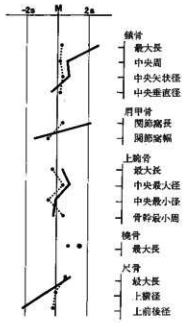


図214 女性の上肢骨計測値の偏差折線
 M：現代関東人女性の平均値
 s：標準偏差
 大きな点と実線が北村人女性の平均値
 小さな点と点線が津雲貝塚人女性の平均値
 (図216・218・220も共通)

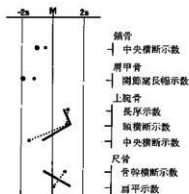


図215 男性の上肢骨に関する示数の偏差折線
 大きな点と実線が北村人男性の平均値
 小さな点と点線が津雲貝塚人男性の平均値

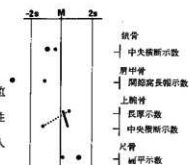


図216 女性の上肢骨に関する示数の偏差折線
 大きな点と実線が北村人女性の平均値
 小さな点と点線が津雲貝塚人女性の平均値

一方、女性でも鎖骨の最大長は大きく、頑丈である点は変わらない。ただし中央垂直径は男・女ともに現代人よりやや小さい。肩甲骨の関節窩は男性と同じく現代人と比べると長さが大きく幅が小さい。この点は津雲人女性とも同じ傾向である。

上腕骨・橈骨・尺骨：男性では、三角筋粗面などの発達が良いことによって中央部が頑丈である。全体としてみると、上腕骨骨頭部がやや小さめであるが津雲人とは大差ない。やや年齢が進んだ個体で骨幹遠位の外側線がよく発達している例がみられた。上腕骨の長厚示数などは現代人よりかなり頑丈である。尺度は骨幹の最小周が小さい。横断示数が小さい点や、扁平示数が高い点などは津雲人とはやや異なっている。北村人の尺骨の方がより扁平である。

女性では、現代人と比べて上腕骨の中央部がやや頑丈でやや扁平であるという一般的な縄文時代後・晩期人としての特徴を示している。計測値の偏差折線は津雲人とほとんど違いはない。橈骨に関してはとくに記載することはない。尺骨の前後径は現代人と比べてもやや小さめである。

イ 下肢骨 (表68・69、図217～220)

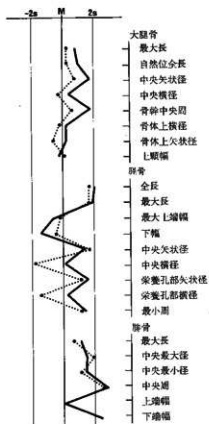


図217 男性の下肢骨計測値の偏差折線

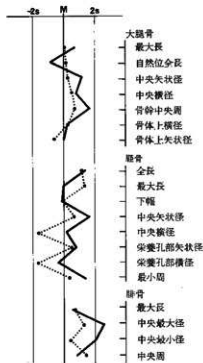


図218 女性の下肢骨計測値の偏差折線

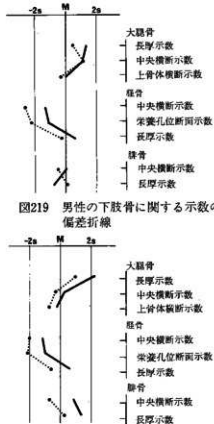


図219 男性の下肢骨に関する示数の偏差折線

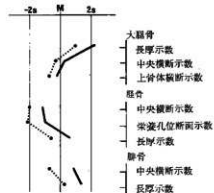


図220 女性の下肢骨に関する示数の偏差折線

大腿骨：大腿骨は現代人よりかなり頑丈である。とくに中央部の前後径が粗線の発達の関係で大きい。この傾向は男・女ともうかがうことができる。男性の長厚示数は津雲人よりもかなり大きい。女性では偏差折線のパターンは津雲人と同じであるが全体に大きく右に偏している。中央横断示数と上骨体横断示数とはどちらも骨体の横径で矢状径を除いて求めているものであり、数値が大きいということは扁平性が弱いということである。北村人は津雲人よりも大腿骨の扁平性が弱い、現代人より扁平である。とくに、骨幹の上部が扁平な大腿骨が多い。上骨体横断示数は男性で81.9、女性で80.0である。津雲人は男性で79.5、女性では76.6である。この値は小さいほど扁平度が高いことになるので、北村人の方が扁平度は高くない。北村人は男女ともむしろ現代関東人(82.16、81.24)に近いといえる。女性の上骨体横断示数が現代人に近いのは、殿筋隆起が発達し横幅は大きくなっているものの、その影響として大腿骨前面上部に稜状の高まりができるためと考えられる。中央の断面示数は115.4と109.7で、津雲人(114.6、103.9)よりも扁平度は北村人の方が低いが、現代関東人(105.72、107.56)と比べると男性は津雲人に近く、女性は現代人との中間に位置する。

殿筋隆起は大腿骨の骨幹上部外側にみられる構造で、ネアンデルタール人など古人類によくみられる。殿筋の発達などに対応した形質である。北村人では、殿筋隆起はむしろきゃしゃな大腿骨に頻度が高く見られ、女性での出現率が高い。この原因は今のところ特定できるものではないが、女性の大腿骨が全体的に細いにもかかわらず筋の発達がよい点がポイントと考えられる。扁平脛骨が細い脛骨の激しい労働に対する適応として説明されたり、あるいは成長期の栄養不良が原因であると説明されたりすることが多い〔森本：1981〕が、北村人女性の場合の殿筋隆起の発達は同様の問題を抱えている。北村人では若い個体でもすでに殿筋隆起がよく発達している(例：SH1168・1229)。

脛骨・腓骨：脛骨は扁平なものが少なく、中央付近の断面はヘリチカのIV型が多い。後面の鉛直線の発達 は全体によく、骨幹の遠位部にまで及んでいるものが多い。すなわち、森本の分類のA型(図193)である。後脛骨筋などの発達が非常によかったものと考えられる。少なくとも現代人などとは労働量が異なっていたであろうことは明瞭である。扁平脛骨はさきに述べたようにその原因がいろいろ考えられているが、北村人は歯のエナメル質減形成にみられるように成長期に栄養不良などのストレスをかなり受けている。しかし、脛骨は津雲人ほどには扁平ではない。

脛骨の計測値の偏差折線は男女とも津雲人とよく似ているが、骨体の中央横径と栄養孔部横径が津雲人でかなり小さい。これは津雲人は扁平な脛骨をしているということを示している。言い換えれば、北村人は津雲人より脛骨は扁平ではないということである。また、男女ともに示数の偏差折線は津雲人とよく似たパターンを示しているがどちらも北村人の方が大きいほうに偏位している。

腓骨は現代人よりはかなり頑丈で、中央部の頑丈さが目立つ。よく発達した橈状の腓骨が認められるが、保存状態が悪いので腓骨のように細い骨はとくに観察ができないものが多かった。

歯の項でも述べたが、成長阻害などは長骨の近位端あるいは遠位端にハリス線として確認できることがある。成長にともなって消失することもあるが、成長の様子を調べるには重要な指標である。しかし、北村人では確認できなかった。X線による長骨の近位端あるいは遠位端の検査では、土が骨内に入るなど保存状態が影響するので確認できなかったのである。今後の検討課題である。

ウ 上半身と下半身の頑丈さの違い

具体的な数値には表せなかったが、下半身が頑丈であるにもかかわらず上半身がきゃしゃな個体が多くみられた。例えば、SH607やSH608の例がある。とくに女性でその例が多い。どのように確認していくかは今後の課題であろうが、北村人のように、明らかに山に依存した生活をする人々の特徴と考えられる。北村遺跡の立地は、遺跡のすぐ後ろにかなり急勾配の山がそびえており、一方は少しの距離をおいて犀川の流れがある。女性は木の実の採集などのため急な山の登り下りに必要な筋がよく発達していたと考えられる。例えば大脳四頭筋のような膝を伸ばす筋がよく発達していたであろうし、さきに述べた殿筋隆起の発達などに関係した殿筋も発達していたであろう。このことは採集活動が主に足を使っていたために上半身よりも下半身が頑丈になった理由であろう。

(4) 墓坑の広さと埋葬人骨との関係(表53)

北村遺跡の墓坑の面積を計算した。墓坑の深さは考慮していない。この面積を計算するにあたって、火葬骨の墓坑やごく一部しか出土していない成人の墓坑は除外した。

0歳から3歳までの乳幼児の墓坑を計測した結果は0.32㎡であった。この結果から、10歳を過ぎると墓坑の面積は成人のものほとんど変わらない広さを必要とするようになってしていると判断できる。

これらを考えると、0.37㎡ぐらいの大きさのものはほとんどが3歳ぐらいまでの乳幼児と考えてよいことになる。これにもとづいて考えると、10歳から20歳までの墓坑の最小値0.37㎡を下回る墓坑の数は55個

埋葬されていた人	墓坑の平均面積	最大値	最小値
0歳から10歳	0.54㎡	0.81㎡	0.26㎡
10歳から20歳	0.71㎡	1.14㎡	0.37㎡
20歳以上の成人	0.86㎡	2.26㎡	0.42㎡
(仲屋葬)	1.33㎡		
(屈葬)	0.84㎡		

である。これは計測した348個の墓坑の15.8%に相当している。出土して観察された個体としては6歳以下のものでも全体の3.3%に過ぎなかったのだから、乳幼児で死亡した個体がかなり多かったことになる。

表53 埋葬人骨の年齢と墓坑底面積

2 北村集団としてのまとめ

(1) 身長 (表70)

身長は一般的な縄文時代人とさして変わらない。藤井 (1960) の身長推定式によって計算された身長は、男性の身長の平均値157.9cm (個体数22、最大167.1cm、最小145.8cm)、女性の身長の平均値は151.2cm (個体数21、最大156.2cm、最小144cm) である。男性の平均値は平本 (1977) の報告している縄文時代男性の平均値159.11cmよりも1.21cm小さく、女性の平均値148.05cmよりも3.15cm大きい。身長の変異の幅は男性で21.3cmであり、女性で12.2cmである。あきらかに女性の方が小さい。北村人は、一般の縄文時代集団と比べて、成人の身長の男女差が小さいということになる。

(2) 性比 (表54・55・70)

北村遺跡から出土した人骨は人と確認できた個体数が190体であった。そのうち性別の判定できたものは122例である。これらのうち成人のものは105例であった (表54・70)。

男 性：51例 (26.8%)

女 性：71例 (37.4%)

不 明：68例 (35.8%)

骨の保存状態の悪いこともあって性別の判定が出来ない例が約36%と多かったが、男性26.8%、女性37.4%であり、やや女性が多い。性別のわかった個体での男女の割合は、男性41.8%、女性58.2%であった。この比率も一般的な縄文時代遺跡の出土率とやや異なって女性が高い傾向を示している。

乳児期		幼児期		少年少女期		思春期		青年期		壮年期		熟年期		老年期		成人 (詳細不明)	年齢不明			
0-1歳		1-6歳		6-12歳		12-20歳		20-30歳		30-40歳		40-60歳		60歳-		約20歳-				
男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明	男	女	不明
0	0	1	1	1	1	1	5	4	9	6	8	12	1	12	7	1	16	23	1	2
1例			3例			7例			19例			21例			20例			40例		7例
0.8%			2.5%			5.9%			16.1%			17.8%			16.9%			33.9%		5.9%
																31例	41例			

表54 年齢段階別個体数

出土総数 (調査総数) は190体である。

思春期等の用語を用いるなど現代人の年齢段階を用いる点に問題はあると思うが、適当な年齢区分がないのでこれを用いた。少年少女期と思春期との間にまたがるものは思春期に入れている。青年期以降は人類学で一般的に用いられる年齢区分である。

各年齢段階の頻度は年齢の推定できた個体118体に対する割合である。

	♂	♀	文 庫
北村遺跡	51 (41.8%)	71 (58.2%)	122例
成人のみ	45 (42.9%)	60 (57.1%)	105例
モヨロ貝塚	53 (76.8%)	16 (23.2%)	児玉作左衛門 (1948) 計測分
大田貝塚	24 (57.1%)	18 (42.9%)	今道四方 (1933) 計測分
稲荷山貝塚	36 (69.2%)	16 (30.8%)	大倉辰雄 (1940) 計測分
吉岡貝塚	78 (53.4%)	68 (46.6%)	金高勲夫 (1928) 計測分
蝦島貝塚	18 (41.9%)	25 (58.1%)	山口 敏 (1963) 成人
縄文時代	120 (56.9%)	91 (43.1%)	小林和正 (1979) 15歳以上

表55 縄文時代貝塚から出土した人骨の男女の出土数

これらは実際の出土数ではなく計測に用いられた個体数である。

(3) 死亡年齢 (表56)

死亡年齢は、北村人の場合頭蓋骨の縫合は観察しにくく、さらに恥骨結合面などの観察はできなかった。したがってこの年齢は歯の萌出年齢と咬耗から推定したものである。出土した個体の推定年齢区分を先の表54に示した。それぞれをまとめると表56ようになる。

成人としかわからないものや不明のものを除くと、118体となる。出土したものは比較的高齢のものが多く、熟

新生児 0-2	幼児 1-6	少年・少女 6-12	思春期 12-20	青年 20-30	壮年 30-40	熟年 40-60	老年 60-	成人	不明
1	3	7	19	21	20	40	7	31	41

表56 年齢段階ごとの人数

年と老年をあわせて47例で約40%となる。これに対して20歳以下の若い個体は30例で25.3%である。縄文遺跡で年齢分析が詳しく知られている例はない。また、若い個体は骨もきゃしゃで残りにくいので厳密な意味での比較はできにくい。高齢比率が高いのは、成人でも人骨の保存状態が悪く消失している部分が多いので、骨の成長が不十分な若い個体の人骨がより多く失われていったからと考えるのが正しいのかもしれない。しかし、それだけとは考えられないのは、骨が完成している青年や壮年の例数が比較的高齢のものよりもむしろ少ないからである。

この時代の平均年齢は20歳前後と言われているが、比較的高齢者が多い点は北村遺跡の大きな特徴である。この点は成長期の栄養疾患などのストレス（エナメル質減形成など）が多いことを考えると注目される点である。南川〔1990〕の食性分析からも判断されるように動物タンパクはむしろ少なく、植物食が中心であった遺跡であるために、狩猟で死亡したりすることが少なかったのかもしれない。また、植物食の方が長生きできるのかもしれない。

(4) 抜歯に関する考察

抜歯があるいは外傷性の脱落かは不明だが、生前に歯が脱落していると思われるような前歯部（切歯から犬歯部）の歯の脱落はつぎの10個体である。

SB557	下顎左中切歯	(青年・女性)
SH558	下顎左犬歯・第1小臼歯	(成人・性不明)
SH659	下顎左右中切歯	(熟年・男性)
SH855	下顎右中切歯・側切歯	(熟年・女性)
SH859	上顎左側切歯	(青年・男性)
SH1129	下顎左右犬歯	(高齢な成人・女性)
SH1144	上顎左右犬歯・第1小臼歯・下顎左側切歯	(熟年・女性)
SH1158	下顎の切歯	(熟年・女性)
SH1163A	上顎左右犬歯	(青年・男性)
SH1172	上顎右側切歯	(成人・不明)

これらのうち、SH1129は下顎の切歯部が破損しているので確定的なことはいえないが、上顎の中切歯が十分に咬耗して残っており臼歯も脱落しているほどの高齢なので、抜歯でない可能性の方が高い。また、SH1158は下顎体高も低く自然脱落の可能性が否定できない。SH1163Aはまだ20歳前後の女性で小さな歯槽が残っているが乳歯の可能性も考えられるものである。

抜歯がみられるような前歯部にすべての歯（6本）が植立している、あるいは植立していたと確認できる個体は上顎で44例、下顎で60例である。他の個体は前歯部の一部、あるいは全部が破損していたりして観察できない。この結果に上記の個体を加えると、上顎の前歯部（一部に第1小臼歯を含むが、単独の脱落はない）に脱落歯がみられた頻度は8.2%（49個体中4例）であり、下顎は10.4%（67個体中7例）である。抜歯された歯槽に一定の法則性はみられず、ばらばらである。

このような点を考えると、北村遺跡には抜歯はなかったと考えてよからう。少なくとも風習的な抜歯はみられない。また、これらが仮にすべて抜歯であったとしても、いずれも比較的高齢者である。青年や壮

年にはごく少ないので、抜歯風習はなかったと考えてよからう。

長野県内の遺跡で抜歯に関する報告があるのはごく少数である。これらをまとめたものとして西沢〔1982〕の報告がある。西沢によれば、1950年に藤沢宗平によって木曾郡の芝垣外遺跡で報告されたものが最初である。抜歯がみられたのは次の8つの遺跡である。

宮遺跡（上水内郡：縄文時代後期）、深町遺跡（小県郡：縄文時代後期）、大明神遺跡（木曾郡：縄文時代後・晩期）、野口墳墓遺跡（伊那市：縄文時代晩期中葉）、保地遺跡（埴科郡：縄文時代晩期前半）、芝垣外遺跡（木曾郡：縄文時代後・晩期）、月明沢遺跡（佐久市：弥生時代）、生仁遺跡（更埴市：弥生時代後期）。

抜歯は縄文時代晩期にその最盛期を迎え、東海地方ではかなりの高頻度で抜歯が実施されていたことが確認されている。例えば、晩期の吉胡貝塚ではじつに90%を超える頻度で抜歯されている（清野：1929）。北村遺跡はこれより前の時代になる。北村遺跡とほぼ同時代であり、かつ犀川水系に属している宮遺跡（中条村）では2体の出土骨のうちの片方に抜歯が認められている。宮遺跡の場合は抜歯の形式は、上下顎の大歯4本と上顎右側の偶切歯が抜歯されている。明らかに抜歯の一般的なものである。このようにほぼ同じ時代でしかも比較的距離も近い遺跡で抜歯風習に違いがみられた点は興味深い。とくに、北村遺跡が比較的独立した状態にあった可能性もあり今後の研究課題であろう。なお、北村遺跡とやはりほぼ同時代の深町遺跡では出土個体数に対して抜歯例が少ないが、観察可能な個体数が記載されていないので正確に比較はできない。また、宮遺跡の例は少数であるため風習的な抜歯であったと言い切れるだけの資料ではない点が残念である。

(5) 出産の年齢

16～20歳と推測される女性の骨盤に出産痕が確認された。初産の年齢は遅く見積もっても20歳前後ということになる。女性の骨盤に妊娠痕が観察された例はいくつかあったが、保存のいい骨盤がほとんど出土しなかったので詳細な出産に関するデータは取れなかった。

(6) 離乳時期、あるいは母乳から独立する時期

栄養の比較的安定して供給される母体内か、あるいは母乳を飲んでいる時期に歯冠が形成される乳歯にはエナメル質減形成は認められない。北村人の場合、2歳ぐらいに形成されたと考えられる減形成が比較的多く観察される（この時期は正確に2歳と判定されるわけではなく2歳前後と考えたほうがよい性質のものである）。乳歯が生え揃うのは生後遅くとも1年半ぐらいの時期であるから、この時期を離乳期と考えるのは現代と比較するとやや遅すぎるかも知れない。しかし、もし母乳による栄養補給ができなくなる時期であるとするとこの時期にいろいろなストレスがかかってくるのが理解でき、この頃には比較的独立した（母乳から離れた）食生活を送るようになったと推測される。

(7) 健康状態（病変）

骨の保存状態が悪いことも影響しているが、病変はほとんどみられていない。保存状態が悪くて見逃す可能性が高い疾患には椎骨の骨棘、変形性関節症などがあり、保存状態が悪くても見逃す可能性が低いものには骨折、外耳道骨腫、エナメル質減形成などがある。骨折がみられないのは不思議である。この点は、さきに述べたように北村人は狩猟による死亡や外傷が少なかったのかもしれない。

骨に関係した病変では、外耳道骨腫がみられた（SH958）（後述）。

また、寛骨の寛骨臼窩に穿孔がみられた個体もある（SH587）。加齢変化として椎骨体に棘の形成（リップング：SH543）や上腕骨の外側縁のはり出しが認められた個体もある（SH1202）。

歯および歯の植立する歯槽骨に関係した疾患は何例か観察された。歯石の沈着がみられた個体もある(例: SH1144, SH1156)が、例数は多くはない。また、歯槽が退縮した歯槽膿瘍と考えられるような例はみられる(例: SH1198)が、いずれも高齢の個体である。歯槽の根尖部に穿孔の開く歯根嚢胞がみられた(SH743)。このような歯科の疾患は認められるが例数はいずれも少ない

(8) むし歯(齲蝕)(図221、表57・71~74)

齲蝕は少ない(表71~74)。縄文時代の齲蝕に関しては清野・金高(1929)、小金井(1934)、佐倉(1964)、酒井・池田(1981)などの研究がある。

比較的歯の保存のよい下顎歯列63個体474本(1個体の平均残存歯数7.5本)、上顎歯列57個体443本(1個体平均残存歯数7.8本)、計67個体917本(1個体平均残存歯数13.7本)を調査した。第3大臼歯の萌出していない個体や高齢の個体は除いてある。その結果、齲蝕は下顎の5例(SH573・979・1156B・1195A・1204)の7本だけであった。咬合面の齲蝕が3例、頬側面の齲蝕が2例、舌側面の齲蝕が1例で、縄文時代人に多いといわれる隣接面の齲蝕は1例だけであった。熟年以下の場合でも壮年以下の場合でも、残存する全歯における齲蝕率は1%以下であり、縄文時代人で最も少ない太田貝塚の2.2%(酒井・池田:1981)の%程度である。また、第3大臼歯の萌出する前の18歳以下の個体には齲蝕はまったくみられないし、乳歯にもみられない。

佐倉(1964)の提唱する「一人平均齲蝕数推定値」を求めると全歯および臼歯で0.16本となり、吉胡貝塚などの他の縄文時代人と比べると非常に低い値となる。縄文時代人では太田貝塚人の一人平均齲蝕数推定値が最も少なく、0.5本であるが(表57)、北村人ではそれよりはるかに少ない齲蝕の数である。

佐倉の図中に北村遺跡の値を示したのが図221である。

また、年齢が進んで歯数が減少すると齲蝕が脱落して出現率が減少する傾向があるので、熟年(40~60歳)を除いても調査した(表73・74)。その結果でもやはり一人平均齲蝕数推定値は全歯で0.20本、臼歯でも0.20本となりやはり太田貝塚人よりも圧倒的に少ない齲蝕の数である。

北村人は日本の古代史で報告されているある程度以上の大きさの集団では最も齲蝕の少ない集団である。

	調査 個体数	調査歯	齲蝕 有病者率	現在歯における 齲蝕率		一人平均齲蝕数		一人平均齲蝕数 推定値		報告者	
				全歯	臼歯	全歯	臼歯	全歯	臼歯		
北村(熟年以下)	67	917	7.5	0.76	0.95	0.10	0.10	0.16	0.16	5例7本	
(壮年以下)	41	624	9.8	0.96	1.19	0.15	0.15	0.20	0.20	4例6本	
縄 文	吉胡	62	750	—	—	14.0	—	1.7	—	2.5	清野・金高(1929)
	津雲	—	664	—	—	5.3	—	—	—	1.1	清野・金高(1929)
	稲荷山	42	339	14.3	3.8	4.6	0.3	0.3	0.7	0.7	大倉(1939)
	太田	24	358	20.8	2.2	3.1	0.3	0.3	0.5	0.5	酒井(1979)
弥生	土井ヶ浜	82	1205	72.0	19.7	25.3	2.8	2.3	6.5	5.2	酒井(1960)
古墳		21	539	19.4	3.1	4.0	0.6	0.5	0.9	0.6	小金井(1934)
鎌倉	材木座	162	2669	49.4	5.5	8.3	0.9	0.9	2.1	2.0	佐倉(1964)
江戸	運光院	124	638	87.1	19.3	20.7	1.0	1.0	3.9	3.7	佐倉(1964)
現代人(1975)	14406	300325	85.5	35.4	49.4	7.4	5.7	12.6	10.4	厚生省(1977)	

表57 齲蝕罹患率

第3大臼歯が萌出している個体から熟年まで、あるいは壮年までの調査である。
比較データは酒井・池田(1981)の表から引用した。

この原因は、海岸部の縄文時代人との食性の違いにも求められるであろう。1個体平均の調査可能な歯の残存数が13.7本と多いのは北村人の咬耗の少なさにも関係していると考えられる。

(9) 外耳道骨腫

北村人では外耳道骨腫は1例(写真10)にみられたに過ぎない。北海道や東北地方の海岸部の縄文時代遺跡から出土した人骨にはかなりの頻度で外耳道骨腫が認められている〔百々:1972〕。外耳道骨腫の原因は、遺伝的な要素も考えられないではないが、おもに冷水刺激によって形成されると考えられており、現代では潜水を職業とする人々によくみられる。北村遺跡は厚川に面した段丘に位置しており、食料残滓としての魚骨は出土していないが、当然食料とされていたと考えられる。しかし、職業的に潜水作業を必要とするような漁ではなかったであろう。

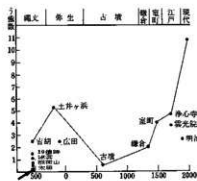


図221 時代毎の歯の数の変化
矢印が北村人

3 長野県の他の遺跡との関係

長野県の縄文時代遺跡は非常に多く、その出土遺物も量が多い。しかし、人骨の出土例はごく少ない。また出土していても報告されていないか、あるいは不完全なものが多いが、北部の湯倉洞窟(縄文時代早期)や南佐久郡の栃原岩陰遺跡(縄文時代早期)からの人骨が知られている。また、中期から晩期の人骨は、西沢の報告例がある。栃原岩陰遺跡から出土した人骨については正式な報告はなく、森本(1986)が湯倉洞穴から出土した人骨の報告の中で触れているだけである(表61・67・69)。

湯倉洞穴から出土した人骨は女性人骨で、頭蓋骨最大長が169mmであり、栃原岩陰遺跡から出土した女性人骨は頭蓋骨最大長が184mmと湯倉より大きい。北村人の女性の頭蓋骨最大長の平均値は166.5mmとこれらの遺跡から出土したものよりも小さい。北村人の女性の場合、頭蓋の幅が計測できなかったが復元した頭蓋骨(SH1162)からの推測では頭蓋長幅示数は約85となり、湯倉の81.1、栃原の75.0よりも大きく、過短頭から短頭に属している。復元個体に前後方向への土圧があったとしても短頭であることは間違いない。最小前頭幅は94.3mmで、99mmの湯倉と93mmの栃原の中間の値である。一方、上顔幅は108.2mmで湯倉と栃原の103mmよりも大きい。

下顎骨の長さを示す下顎長は、縄文時代中期以降に増加してくる傾向を示す(池田:1985)と言っているが、後期に属する北村人骨では74.8mmで、湯倉の63mm、栃原の70.5mmよりもかなり大きくなっており、この一般的な傾向を示している。下顎の関節突起幅は117.7mmで湯倉の117mm、栃原の118.0mmとほとんど変わっていない。オトガイ高は30.6mmで、湯倉の29mm、栃原の33mmの中間である。下顎枝の高さに対する幅の割合を示す下顎枝示数は54.7で、湯倉の64.8、栃原の57.0よりも小さい。すなわち下顎枝の幅は相対的に小さいということである。北村人骨は早・前期人よりも恵まれた食環境にあったのかもしれない。

四肢骨では、上腕骨の最大長が277.4mmで湯倉の261mm(全長であるがそれを割り引いても)よりも長い。中央の横断示数は72.5で、湯倉の72.2、栃原の76.4とほとんど変わらないかやや小さい。長厚示数は20.1で、湯倉の18.4よりは大きく、やや頑丈である。

大腿骨は最大長が395.1mmで、湯倉の384.0mmや栃原の389.5mmよりも大きい。長厚示数は21.9で、湯倉の19.7や栃原の19.9よりも大きく頑丈であることを示している。中央横断示数は109.9で、湯倉の126.2や栃原の112.9よりも小さい。上骨体横断示数は79.8で、湯倉の86.3や栃原の82.6よりも小さい。これらの数値は北村人女性の方が、大腿骨がより扁平であることを示している。

脛骨は最大長が321.1mmで、桡原の344mmよりも小さい。しかし、最小周(71.8)は桡原の64.7よりも大きく、したがって長厚示数は22.9と桡原の19.2よりもかなり大きく、全体に頑丈であることを示している。

北村人の女性の推定身長は151.2cmであった。湯倉の女性人骨の推定身長は147.7cm、桡原の女性人骨の推定身長は148.6cmで、平本(1977)の報告する縄文時代女性の平均値(148.05cm)と大差ないが、北村人女性の推定身長はこれらより大きく、両遺跡の女性よりも身長が高い。

一般に縄文時代早・前期人は全体にきゃしゃであり、湯倉洞穴人や桡原人はこの時代の全国的な形態を反映しているものと考えられている(森本:1986)。これに対して、時代のより新しい北村人はそれらよりも身長が高く、頑丈である。とくに下肢骨が頑丈である。

いずれにせよ、長野県内の縄文時代人骨は報告例が少なく、保存状態もよくないので、詳細な比較検討は今後の課題となろう。

4 山の縄文時代人と海の縄文時代人

池田(1985)は「縄文早期の人骨がきゃしゃといわれているのは、早期人骨が山間部の洞穴遺跡から発掘されることが多いためで、海岸部の早期人骨は比較的頑丈で、この差は時代的な差ではない」と述べた。このような問題を解決するためには、山間部から多くの人骨が発掘される必要があった。海岸部の貝の多い、人骨が残りやすい遺跡環境とは異なって、山間部の遺跡は貝塚ではないので縄文中期以降の人骨が数多く発掘されてはなかった。今回、北村遺跡から出土した人骨は、保存状態は悪いが、その答えを模索するうえで出発点となる非常に重要なものとなった。

北村人は、顔面部などやや異なった点もあるが、形態的にはこの時代の他の遺跡の人骨と大差ない。これだけの集団が生活することができ、しかも比較的高齢の人々が多いということは、生活条件は比較的安定していたと考えられる。ただし、栄養失調などのストレスによるエナメル質減形成が高頻度でみられることから、やはり海岸部の縄文人よりは生活状態が厳しかった可能性がある。

千葉県縄文時代早期の城ノ台南貝塚から出土した人骨3体のうち早期中葉の2体は一般の山間部の縄文時代早期の人骨と同じくきゃしゃであった(茂原:印刷中)。したがって、早期人骨がきゃしゃであったのは山間部のものだけであるということはなく、必ずしも山間部と海岸部という環境の問題だけにその原因をあてはめることはできないことが示唆された。北村人骨の場合も、頑丈さや体形などは一般的な縄文時代後期人と大差がないので、この両者の環境のちがいは大きな影響を与えていないことが明らかになった。むしろこのような環境は、食物が植物食中心となっていることや、その影響でエナメル質減形成が著しかったり、齧歯が少なかったりすること、あるいは生活環境の違いによって上半身と下半身の発達状態がアンバランスであることや外耳道骨腫がほとんどないことなどの違いとして現れてきている。

5 北村人の形態的な特徴のまとめ

北村人は一般的な形質では短頭であり、顔面も比較的頑丈で一般的な縄文時代人と大差ないが、次のような点で他の集団とは異なっている。

①生活条件が海岸部の縄文時代人に比べてかなり厳しかったこと。

最近よく言われているように、縄文時代人は自然と調和したすばらしい生活を享受していたわけではない。凶作、あるいは台風などで木の実が落ちたりするときめんに栄養不良に陥った可能性がある。北村遺跡の場合、動物遺存体の出土が人骨の出土に比べて非常に少ない。またコラーゲン分析でも動物に依存する割り合いが小さいことが指摘されている。動物タンパクは限られていたのではない。エナメル質減形成では、山本(1988)の分類のうちの線状の溝にまでは達していないが、エナメ

ル質の表面の荒れとか石灰化の不十分な斑痕、あるいは成長線に沿った浅い線状の溝などを含めればほとんどの個体になんらかのストレスがみられるほどの状態であった。それにもかかわらずこのような大きな遺跡を形成したことは、なんらかの利点があったことを考えねばならない。

②縄文時代後期という時代にもかかわらず抜歯がほとんどみられないこと。

東海地方でのこの時代の抜歯の頻度に比べると、ほとんどないと言ってもいいくらいである。東海地方などの抜歯の風習を持った集団との文化的な交流が少なかったことを想像させる。

③男女比が女性に高く出たこと。

縄文時代の遺跡から発掘される人骨は一般に男性の方が多い。北村遺跡の人骨の場合には、保存の悪さによって性判定を誤る可能性も高くなっているが、たとえその危険率を見込んで女性の方が多い。かなり広い場所が発掘されたので場所の偏りとは考えにくい。

④女性の大腿骨の殿筋隆起の発達が著しいこと。

大殿筋が発達していたこともあろうが、殿筋隆起を形成することによって筋肉の付着面積を十分確保するという意味合いが大きいと考える。この現象は胫骨の後面の鉛直線の発達による扁平胫骨化と同一の現象であろう。遺跡の後ろにそびえる急峻な山の登り下りが関係しているかもしれない。

⑥咬耗が海岸部の縄文時代人より少ない。

植物食による歯の磨耗は植物に含まれる珪素などにより著しいものとされているが、海岸部の縄文時代人は砂混じりの貝類を多く食料としているため歯の磨耗が著しい。

⑦歯の偏磨耗がごく少ないこと。

咬合面は切歯から第3大臼歯まで平面化している。皮なめしなどを歯で行ってはいなかったなどの推測ができる。

⑧齧歯が非常に少ないこと。

他の縄文時代人と比べて圧倒的に齧歯が少ない。植物性の食料によって歯が磨かれて齧蝕が少なくなった可能性がある。とくに、外傷による歯の損傷はごく少ない。

6 北村人の占める位置

北村人は、頭蓋骨はややきゃしゃであり、顔面の形にわずかの違いがあるものの、短頭であったり、鼻根部がくびれていたたり、あるいはつまみ鼻であったり、四肢骨が比較的扁平であったりする点など、一般的な縄文時代後期人とさほど大きく違わないといえる（写真17）。歯の大きさのデータからは、東海地方や関東地方の縄文時代との関係の強さが示唆された。もちろん関東地方との関係が深いのは文化的な側面からも示唆されている。このような関係にもかかわらず、北村人にほとんど抜歯が見られないのは集団の文化的な関係性を示しており、興味深い。他の地方からかなり独立した集団であった可能性がある。

食性が海岸部の貝塚人と異なっていたことは、歯の咬耗の度合いやエナメル質減形成などに影響を与えているが、それ以上に歯への影響はなく、齧歯は非常に少なかった。現代人の糖分の多い食生活とはかけ離れたものであったろうが、死亡年齢は一般の縄文時代人に比べて低いとはいえず、むしろ熟年の多さが目立っている。

北村人骨はその食性の特異性によって、今までよく知られていた海岸部の縄文時代人と異なった、山間部の縄文時代人の生活史の一端を垣間見せてくれた。今後保存状態のよい山間部の縄文時代人が発掘され研究されることが期待されるとともに、調査の方法などの検討も必要であろう。

付 謝 辞

この研究をまとめるにあたり、研究の機会を与えて下さった勸長野果埋蔵文化財センターの方々、明治大学の戸沢充則先生、東京大学の赤沢威先生、この研究の機会を与えて下さった国立科学博物館の馬場悠男博士に心からの感謝をいたします。人骨を取り上げた後の整理を補助して下さった明治大学考古学教室の方々や、人骨の取り上げに協力して下さった塩尻市の調査補助員の方々、獨協医科大学での人骨の取り上げに協力して下さった元獨協医科大学解剖学教室員の荒井淑子さん、京都大学大学院生の五十嵐由理子さん、宇都宮大学の広木友子さん（現鳥山保健所）、大阿久絵理子さん（現足利保健所）、栗原仁恵さん、笹沼恵子さん（現黒磯中学校教諭）、田中智子さん（現4年生）、他の多くのアルバイトの学生さんたちに感謝いたします。

膨大な資料に多くの時間をさいたり、広いスペースを使用することをお許し下さった解剖学教室元教授の江藤盛治先生、現教授の芹澤雅夫先生に厚く感謝いたします。また、当教室教室員の阿部修二さんと櫻井秀雄さんには資料の整理や写真の撮影、あるいは資料の運搬などで多大の迷惑をお掛けしてしまいました。心から御礼申し上げます。他に、エナメル質減形成に関する御教示を賜った山本（現鈴木）美代子さん、歯の統計を助けていただいた国立科学博物館の人類部門松村博文さん、書類の整理をして下さった第一解剖学教室員の赤羽根澄恵さんにも心から感謝いたします。

この他に、作業の進行中には勸長野果埋蔵文化財センターの方々いろいろなご迷惑をお掛けしてしまいました。長野調査事務所長、前松塩塚事務所長、小林秀夫調査部長、宮沢恒之前調査部長、青沼博之前調査課長、他にここににお名前を列挙しませんが実に多くの方々のお世話になりました。心から感謝いたします。

最後に、遺跡に関するいろいろな質問に快く答えて下さり、原稿にも日を通していただいで適切なアドバイスをして下さったりして、本当にお世話になった勸長野果埋蔵文化財センターの平林彰さんの協力なくしてはこの研究はありえなかったことを思い、改めて心から感謝をする次第です。

なお、当方の不手際で整理事業中に地下室に大量の雨が流れ込んで、コンテナが水没し、観察が不能になってしまった個体がある。貴重な資料を失ってしまったことを心からお詫びする次第である。

参考文献

- 百々幸雄 (1972)：北海道の古人骨にみられる外耳道骨腫。人類学雑誌、80(1)：11-22
- 嶋名忠次郎 (1951)：日本人前腕骨の人類学的研究 其の1、桡骨、其の2、尺骨。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集第5輯、(其の1)：1-28、(其の2)：1-30
- 遠藤萬里・北條暉幸・木村賛 (1967)：四肢骨。「増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体」東京大学出版会、275-404
- 藤井 明 (1960)：四肢長骨の長さとの関係に就て。順天堂体育学部紀要、3：49-61
- 藤田恒太郎 (1949)：歯の計測規準について。人類学雑誌、61：1-6
- 藤田恒太郎 (1976)：「歯の解剖学（第21版）」、金原出版、東京：Pp. 187
- 權田和良 (1959)：歯の大きさの性差について。人類学雑誌、43(1)：151-163
- 平本嘉助 (1972)：縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化。人類学雑誌、80(3)：221-236
- 平本嘉助 (1977)：日本人身長時代の時代的変化。自然科学と博物館、44(4)：169-172
- 北條春光・小林宏志・牧角三郎・三上芳雄・太田伸一郎・世良完了・須山弘文・友水得郎・城野男 (1958)：「法医学」、金原出版、東京、京都
- 保志 宏 (1988)：ヒトの成長と老化。人間科学金書2、てらべいあ：Pp. 262
- 福田 佐 (1961)：関東地方人骨の人類学的研究（計測編）。慈恵会医科大学雑誌76（1、別冊）：1-21
- 池田次郎 (1985)：海と山の縄文人——形態の地域差と時代差。「日本史の黎明」、六興出版：29-56
- 今道四方 (1933)：太田貝塚人々骨の人類学的研究。第一部、頭蓋骨の研究。人類学雑誌、48（2号附録）：1

-128

- 木村邦彦 (1979) : 発育、人類学講座第8巻「成長」、雄山閣：61-180
- 石川梧朗・秋吉正豊 (1978) : 口腔病理学 (1)、永末書店、東京、563Pp.
- 遠藤萬里・北條暉幸・木村賛 (1967) : 四肢骨。「壇上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体」東京大学出版会、275-404
- 城一郎 (1938) : 古墳時代日本人骨の人類学的研究。人類学輯報、1 : 1-333
- 金高勲次 (1928) : 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究、第一部 頭蓋骨の研究。人類学雑誌、43 (6 ; 附録) : 49-5-736
- 河越逸行 (1957) : 湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究 (其の1計測篇、其の2形態篇)。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 第16輯、1-18、P. 7
- 清野謙次・宮本博人 (1925) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第二部、頭蓋骨の研究；人類学雑誌41 (3、4) : 1-104
- 清野謙次・平井隆 (1928 a) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第三部、上肢骨の研究；人類学雑誌43 (3附) : 177-301
- 清野謙次・平井隆 (1928 b) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究。第四部、下肢骨の研究其1。大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て；人類学雑誌43 (4附) : 303-390
- 清野謙次・金高勲次 (1929) : 三河国吉胡貝塚人の技術及び歯牙変形の風習に就て。史前学雑誌、1 : 43-68.
- 小林和正 (1979) : 人口人類学、人類学講座第11巻「人口」(小林和正編) 雄山閣：63-129
- 児玉作左衛門 (1948) : モヨロ貝塚。北海道原始文化研究会出版部、Pp.112
- 小金井良精 (1934) : 齲齒の統計について。人類学雑誌、49 : 331-353
- Lovejoy, C.O. (1985) : Dental Wear in the Libben Population: Its Functional Pattern and role in the Determination of Adult Skeletal Age at Death. Amer. J. Phys. Anthrop., 68 : 47-56
- 馬 朝茂 (1949) : 日本人の歯における形態的及び數的異常の統計的觀察。齒科学雑誌、6 : 248-256
- Massler, M., I. Schour & H. G. Poncher (1941) : Developmental pattern of the child as reflected in the calcification pattern of the teeth. Amer. J. Dis. Child., 62 : 33-67
- Matsumura, H. (1989) : Geographical variation of dental measurements in the Jomon population. J. Anthrop. Soc. Nippon, 97 : 493-512
- Miles, A. E. W. (1963) : The Dentition in the Assessment of Individual Age in Skeletal Material. in "Dental Anthropology", edit by D. R. Brothwell, Pergamon Press : 191-209
- 南川雅男 (1990) : アイソトープ食性解析からみる先史モンゴロイドの食生態。モンゴロイド、6 : 24-29
- 宮本博人 (1927) : 現代日本人ノ人類学的研究 第3部 骨盤ノ研究。人類学雑誌、42 (6、7) : 1-58
- Mizoguchi, Y. (1991) : Mandibular Torus in the Okhotsk People from the Omisaki Site, Northern Hokkaido. Mem. Natl. Sci. Mus, No. 24 : 155-168
- Molnar, S. (1971) : Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. Amer. J. Phys. Anthrop., 34 : 175-190
- 森本岩太郎 (1981) : 日本古人骨の形態学的変異——眉平眉骨と踵断面。人類学講座第5巻「日本人I」、雄山閣：157-188
- 森本岩太郎・高橋謙 (1986) : 長野県湯倉洞穴出土の縄文早期人骨。聖マリヤンナ医科大学雑誌、14 : 29-37
- 森田 茂 (1950) : 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究。慈恵会医科大学解剖学教室業績集 3 : 1-59
- 中村光雄 (1957) : 日本人の下部大臼歯歯冠の形態に関する研究。解剖学雑誌、32 : 510-528
- 西原四良 (1953) : 関東地方人上肢骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 9 : 1-63
- 西沢寿晃 (1982) : 中部高地踏遺跡出土の技術人骨。「中部高地の考古学II」、長野県考古学会：33-46
- Nowell, G. W. (1978) : An Evaluation of the Miles Method of Ageing Using the Tepe Hissar Dental Sample. Amer. J. Phys. Anthrop., 49 : 271-276
- 小方彦彦 (1981) : 日本古人骨の疾患と損傷。人類学講座第5巻「日本人I」(小方保編)、雄山閣：189-228
- 小方 保 (1973) : 縄文人の形質序説。どるめん、1 : 22-33
- 小方 保 (1981) : 縄文時代人骨。人類学講座第5巻「日本人I」(小方保編)、雄山閣：27-55

- 大場信次 (1959) : 関東地方人頭骨の人類学的研究 (計測編)。慈恵会医科大学解剖学教室業績集 3 : 1-44
- 大倉辰雄 (1939) : 三河国稻荷山貝塚人ノ牙齒及ビ齒牙變形ノ風習ニ就テ。京都医学雑誌、36(8) : 820-828
- 酒井啄朗・池田次郎 (1981) : 古代人の歯牙について。人類学講座第5巻「日本人I」(小方保編)、葦山閣 : 229-242
- 佐倉 朔 (1964) : 日本人における齶歯傾度の時代的推移。人類学雑誌、71(4) : 153-177
- 讚井善治 (1960) : 山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人歯牙の人類学的研究。人類学研究 7 : 861-885
- 瀬田季茂・吉野峰生 (1940) : 白骨死体の鑑定。令文社、Pp. 478
- Schour, I. & Massier, M. (1940) : Studies in tooth development : The growth pattern of human teeth, part 2. J. Amer. Dent. Ass., 27 : 1918-1931
- Stewart, T. D. (1979) : Burned Bones. in "Essentials of Forensic Anthropology", Charles C. Thomas, Springfield : 59-68
- 杉山乗也 (1969) : 日本人乳歯の計測法による形態学的研究。愛知学院大学歯学会誌 7 (2, 3) : 149-178
- 住谷 靖 (1959) : 日本人における歯の異常の統計的観察。人類学雑誌67 : 215-233
- 鈴木 尚・林都志夫・田辺義一・佐倉朔 (1956) : 頭骨の形質。日本人類学会編「鎌倉村木塚発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店 : 75-148
- 鈴木信夫 (1961) : 関東地方人頭骨の人類学的研究 (計測編)。慈恵会医科大学雑誌75 : 2638-2678
- 鈴木隆雄 (1988) : 古病理的所見。「三貫地貝塚」、福島県立博物館調査報告第17集 : 481-492
- 高野元昭 (1958 a) : 関東地方人肩甲骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 18 : 1-44
- 高野元昭 (1958 b) : 関東地方人鎖骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 18 : 1-24
- Taylor, R. M. S. (1963) : Cause and Effect of Wear of Teeth. Acta anat., 53 : 97-157
- Turner, C. G. II (1989) : Teeth and Prehistory in Asia. Scientific American, Feb, 70-77 (歯が語るアジア民族の移動。サイエンス、4月号 : 96-103、埴原和郎訳)
- 分部哲秋 (1985) : 福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代幼小児骨。小郡市文化財調査報告書第27集 : 47-58、図版46-48
- 山口 敏 (1983) : 岩手県花泉町蝦島(貝島)貝塚出土縄文時代人骨の体幹体肢骨について。国立博物館専報、16 : 201-223
- 山本美代子 (1988) : 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成。人類学雑誌、96(4) : 417-433
- 米須清一 (1952) : 日本人寛骨の人類学的研究。慈恵会医科大学解剖学教室業績集、6 : 1-123

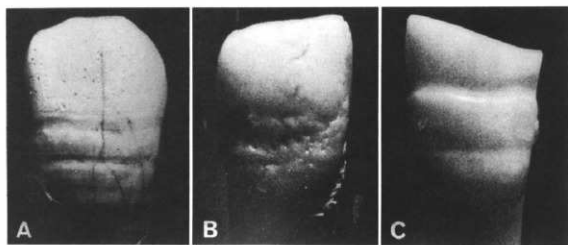


写真1：山本（1988）によるエナメル質形成の各段階
A：線状、B：小高状、C：溝状（山本；1988より転載）

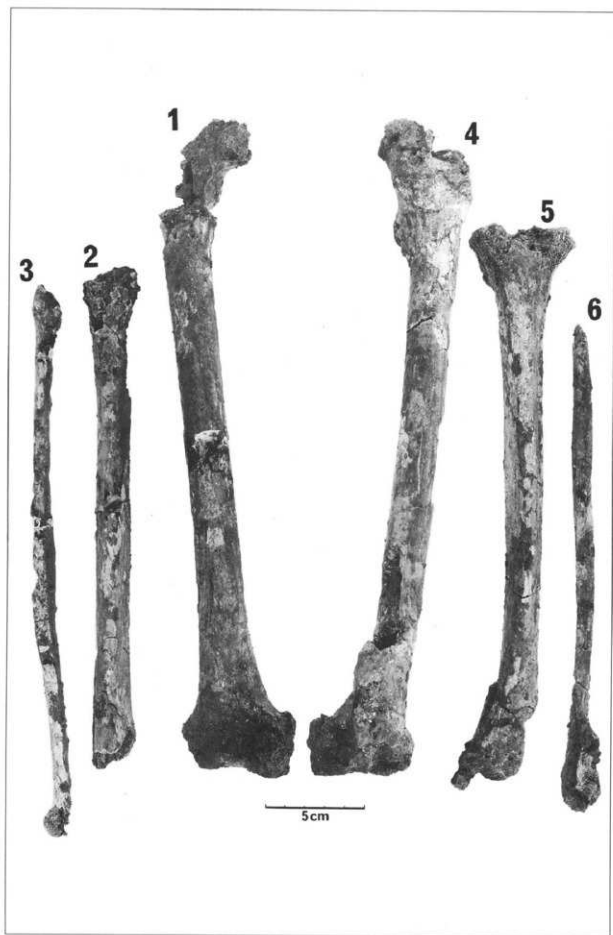


写真2：SH507から出土した壮年男性の下肢骨

1：右大腿骨前面、2：右脛骨前面、3：右腓骨前面、4：左大腿骨前面、5：左脛骨前面、6：左腓骨前面

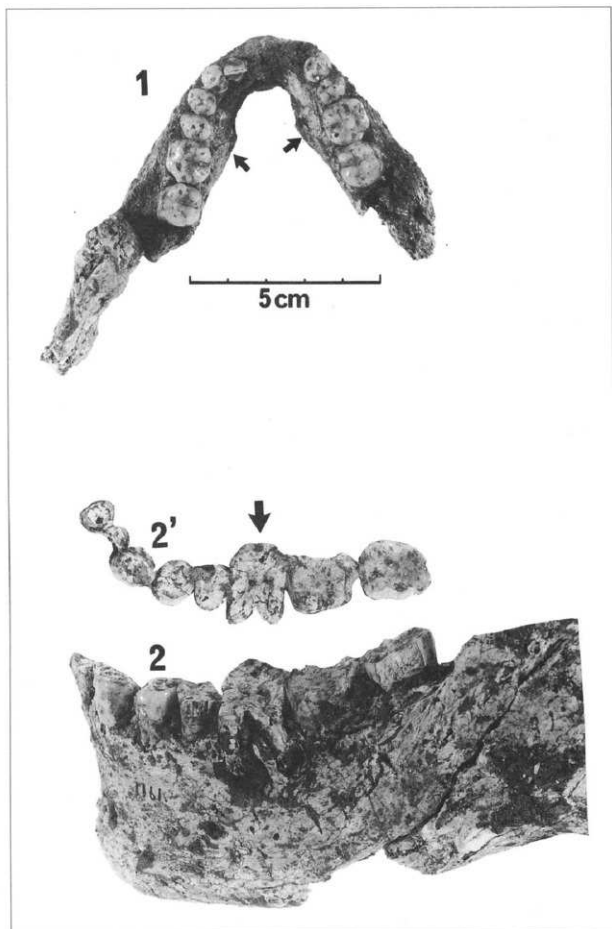


写真3：下顎骨と下顎歯（1）

1：左右内側面に顕著なふくらみ=下顎隆起（矢印）がみられる（SH512）、2：下顎左第1大臼歯（矢印）の顕著な斜め磨耗（SH1161）、2'：咬合面観

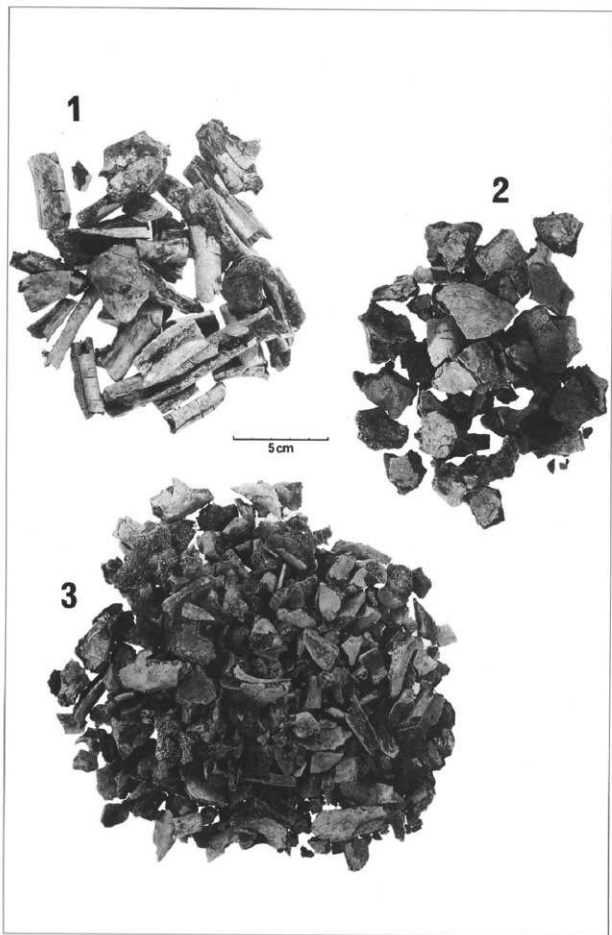


写真4：SH522から出土した火葬骨（1）

1：四肢骨骨幹片、2：頭蓋骨片、3：その他の骨片

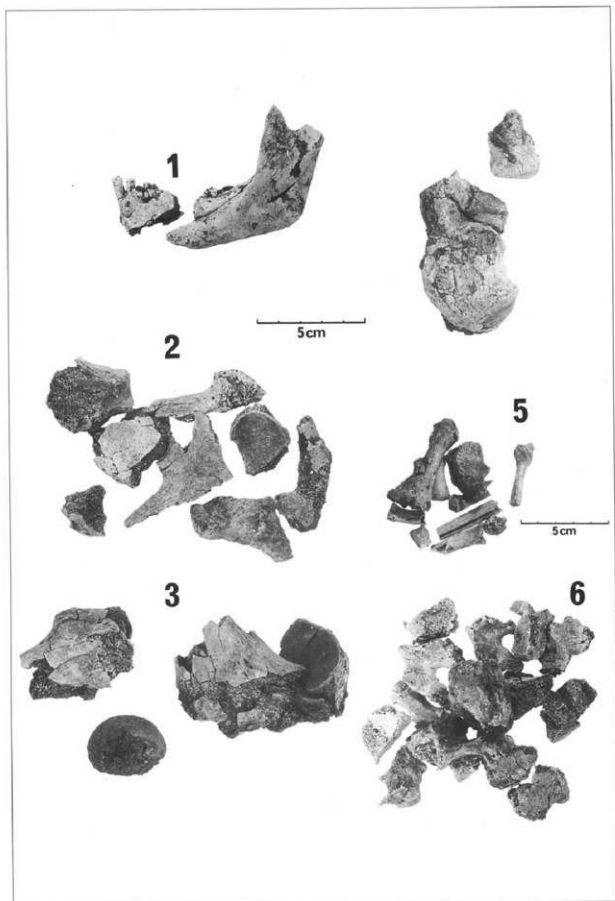


写真5：SH522から出土した火葬骨（2）

1：左下顎骨側面、2：寛骨片、3：大腿骨片、4：踵骨片、5：指骨片（これだけ倍率が異なる）、
6：椎骨片

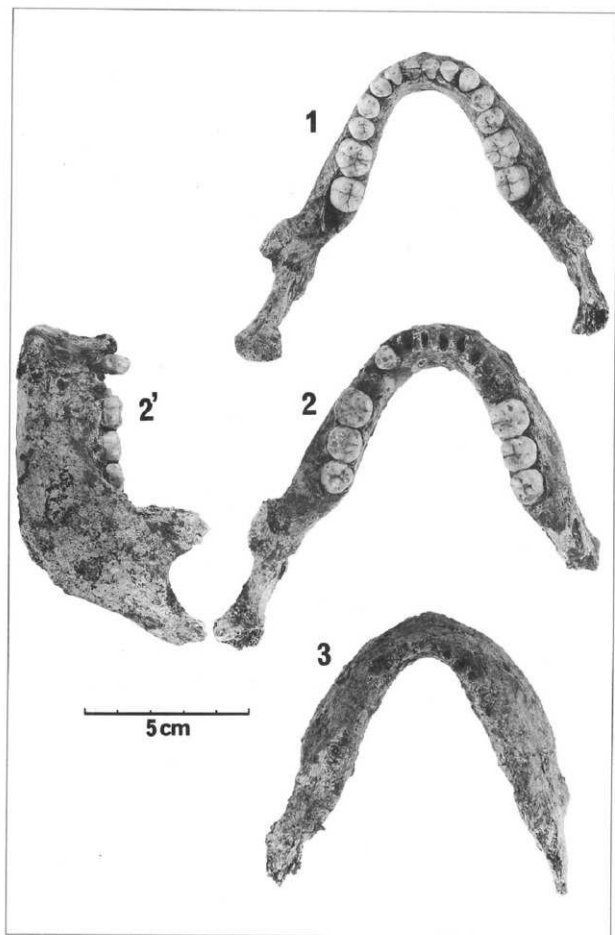


写真6：下顎骨と下顎歯(2)

1：13・14歳の女性下顎骨と下顎歯。う歯の1本もないきれいな下顎骨である (SH692) 2・2'：成人男性の下顎骨上面観と左側面観 (SH1202A)、角前切痕はない 3：老齢な女性の下顎骨咬合面観。白歯はほとんど脱落している (SH1188)

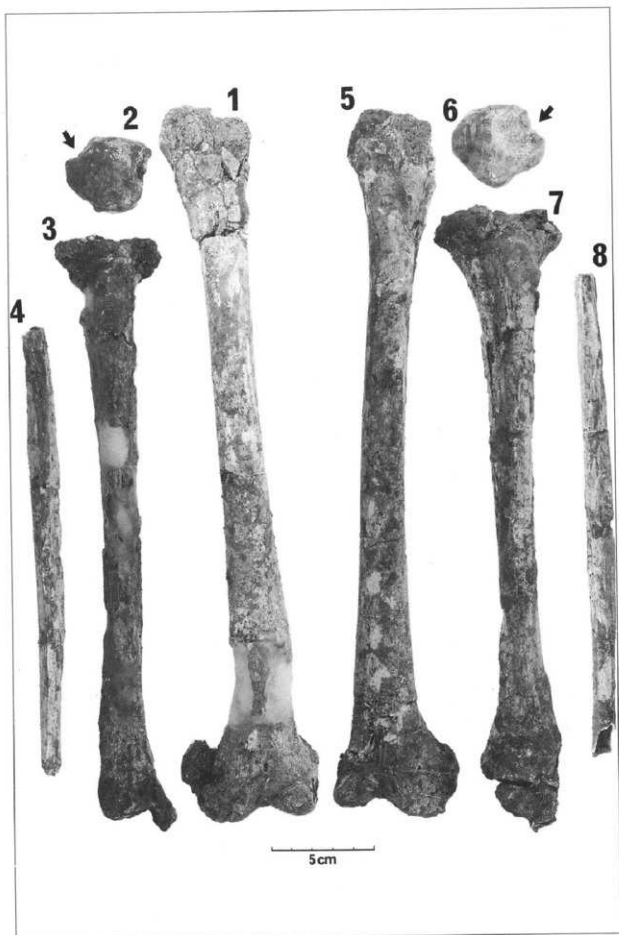


写真7：SH803から出土した青年男性の下肢骨

1：右大腿骨前面、2：右膝蓋骨前面（矢印は広筋切痕）、3：右脛骨前面、4：右腓骨前面、5：左大腿骨前面、6：左膝蓋骨前面（矢印は広筋切痕）、7：左脛骨前面、8：左腓骨前面

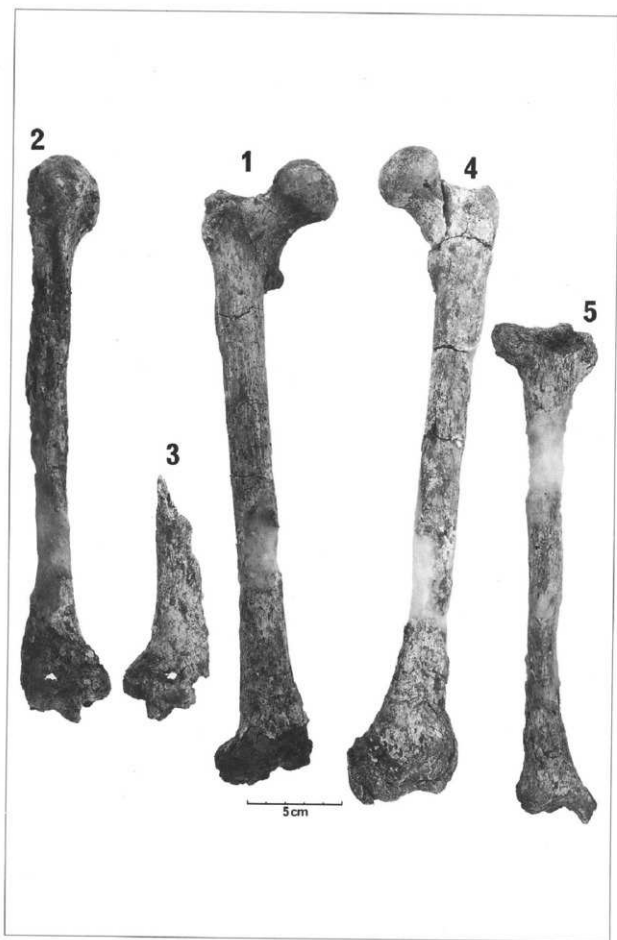


写真 8 : SH859から出土した青年男性の四肢骨

1 : 右大腸骨前面、2 : 右上腕骨前面、3 : 左上腕骨前面、4 : 左大腸骨前面、5 : 左肘骨前面

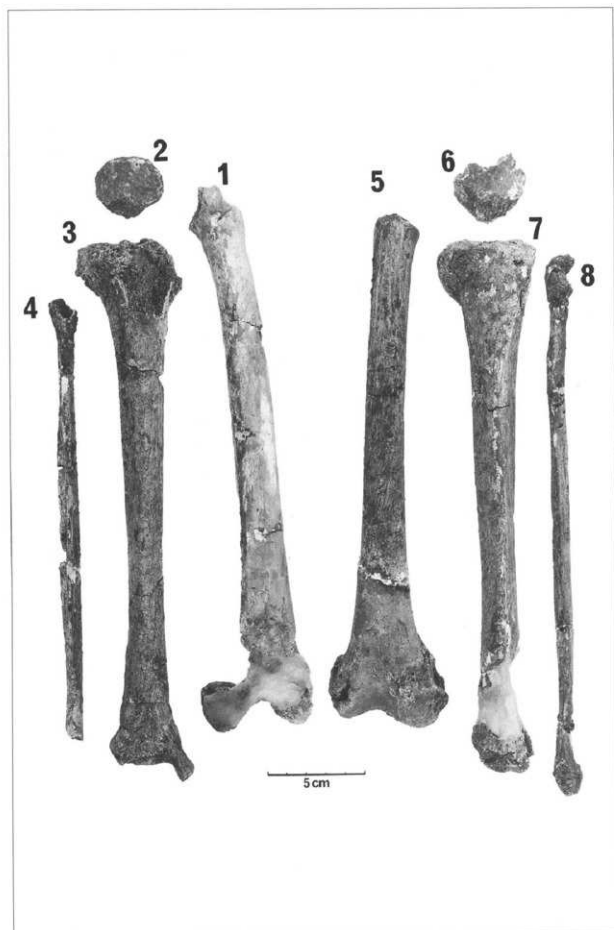


写真9：SH864から出土した成人男性の下肢骨

- 1：右大腿骨前面、2：右膝蓋骨関節面、3：右脛骨前面、4：右腓骨前面、5：左大腿骨前面、
6：左膝蓋骨関節面、7：左脛骨前面、8：左腓骨前面

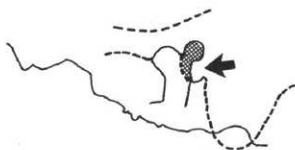


写真10：外耳道骨腫（左側頭部、SH958）

矢印＝外耳道骨腫、下図のシャドウ部＝外耳道、点線＝破損する以前の孔様突起と頬骨弓の基部

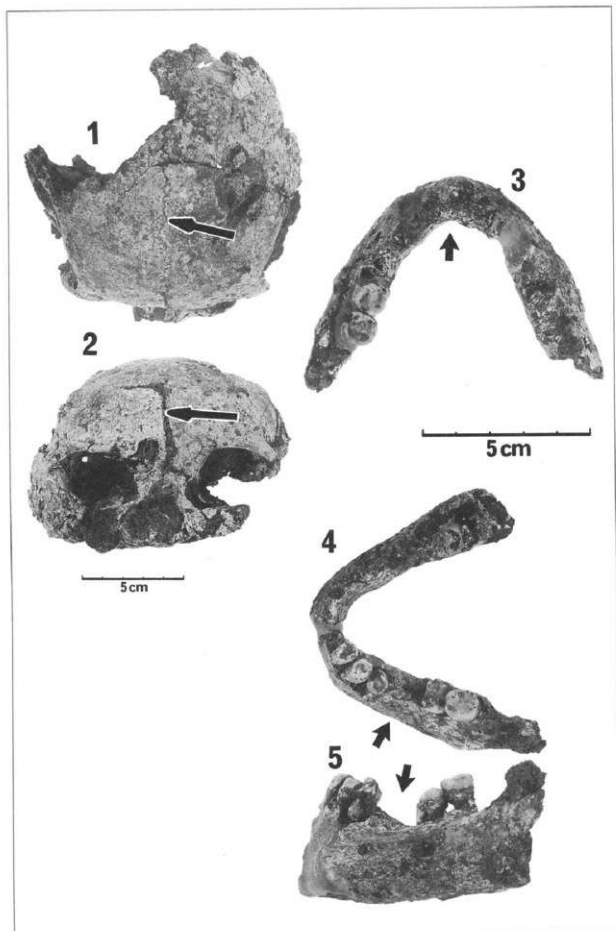


写真11：変異や病変

1：SH1158出土の熟年女性頭蓋骨にみられた前頭縫合遺残（メトビズム；矢印） 上面、2：同じSH1158の前面観。3：抜歯を思わせる下顎切歯部（矢印）、4・5：SH1186出土の熟年女性の下顎骨にみられた歯槽膿漏によると思われる歯の脱落部（左第1臼歯部、矢印）第2・第3大臼歯の歯根も露出している

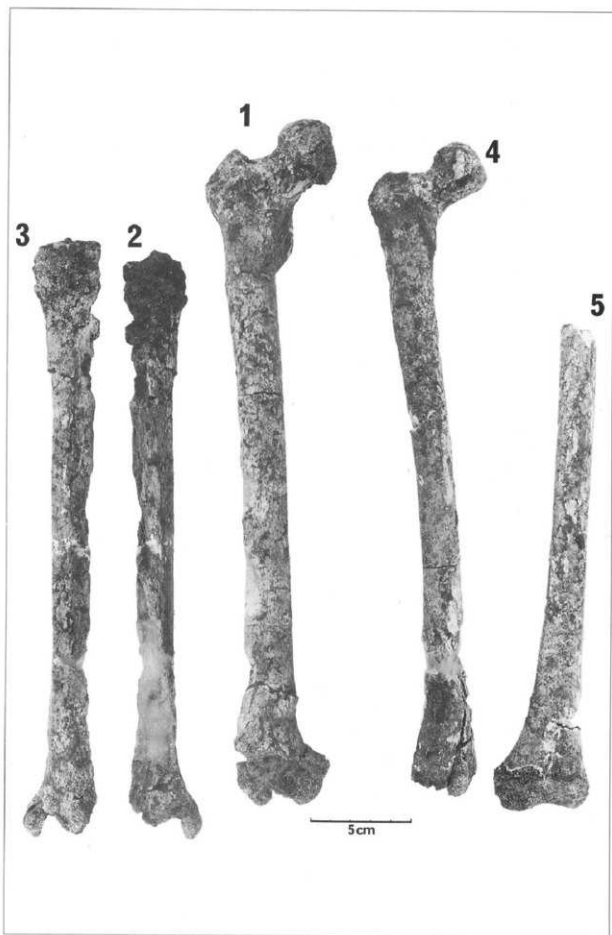


写真12：SH1161（男性、1～3）およびSH1190（女性、4・5）から出土した下肢骨
1：右大腿骨前面、2：右脛骨前面、3：左脛骨前面、4：右大腿骨前面、5：左大腿骨前面

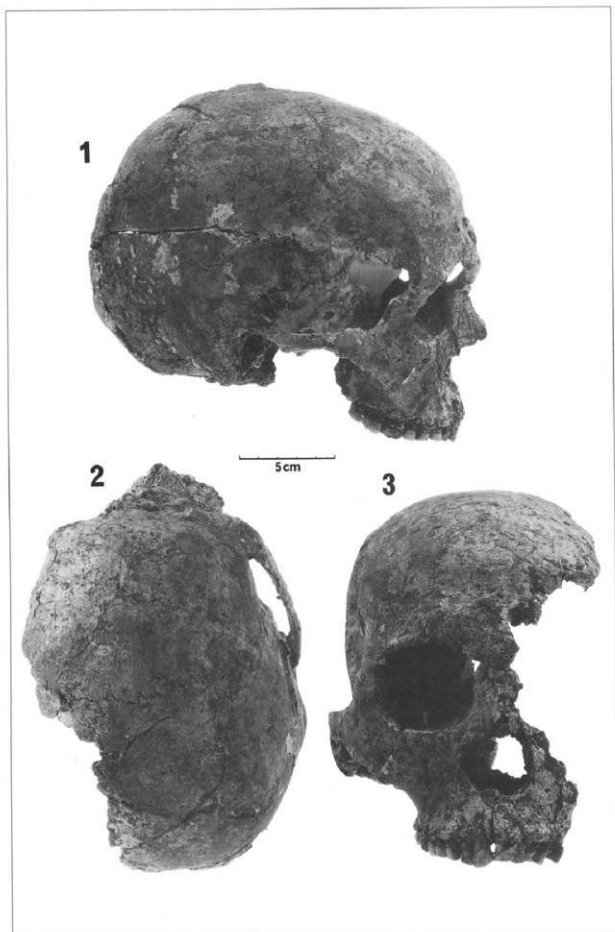


写真13：SH1162から出土した熟年男性の頭蓋骨
1：右側面、2：上面、3：正面



写真14：SH1163から出土した頭丈な青年男性の四肢骨

1：右大腿骨前面、2：左大腿骨前面、3：右上腕骨前面（矢印は三角筋粗面部）

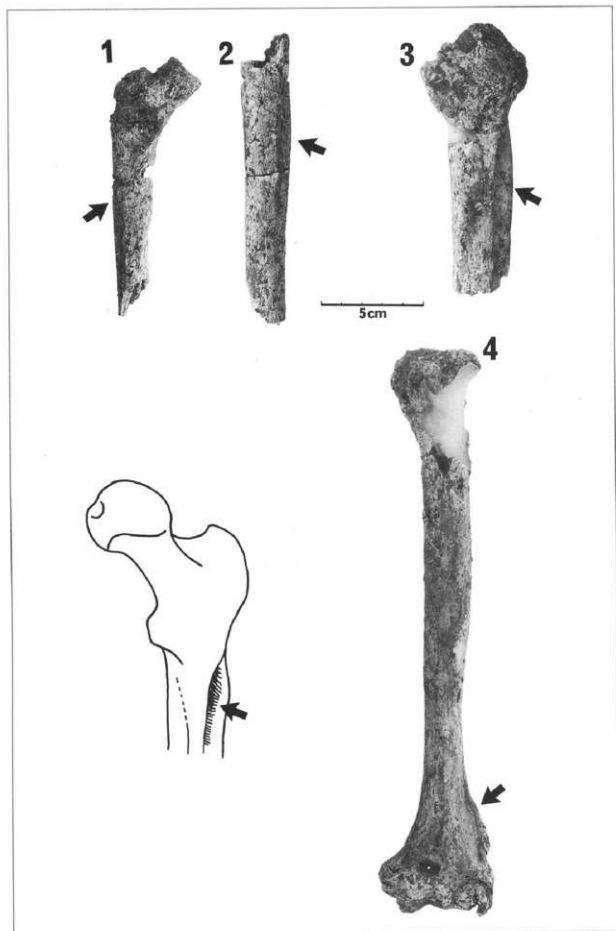


写真15：大腿骨にみられる殿筋隆起と上腕骨の骨枝。

1・2：若い個体の殿筋隆起 (SK2029, SH1168)。3：成人の殿筋隆起 (SH1204)。4：上腕骨外側縁にみられる骨枝の発達。図は右大腿骨近位部を後面からみたもので矢印が写真に示した殿筋隆起と溝状の転子下窩を示している (SH1202)

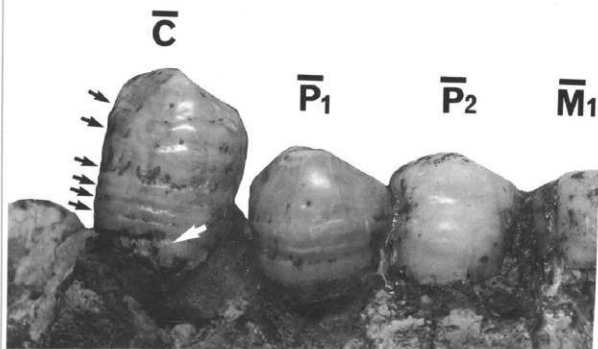


写真16: 下顎歯にみられたエナメル質形成

C̄: 犬歯, P̄1: 第1小臼歯, P̄2: 第2小臼歯, M̄1: 第1大臼歯 どの歯にもエナメル質形成が認められるが、写真では犬歯のものを矢印で示した。7本の石灰化不十分の線状のエナメル質形成がみられる。